

荒砥上ノ坊遺跡Ⅱ

昭和57年度県営圃場整備事業荒砥北部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

歴史時代前半期の調査

《本文・図版編》

1 9 9 6

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

資料	(財)群馬県埋蔵文化財	01-353
	調査専門団保管	592
No. ⁹⁶⁻ 3843	平成9年1月10日	1/6 (6)

荒砥上ノ坊遺跡 II

昭和57年度県営圃場整備事業荒砥北部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

歴史時代前半期の調査

《本文・図版編》

1 9 9 6

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



3区6号住居出土鉄塊系遺物(M31)



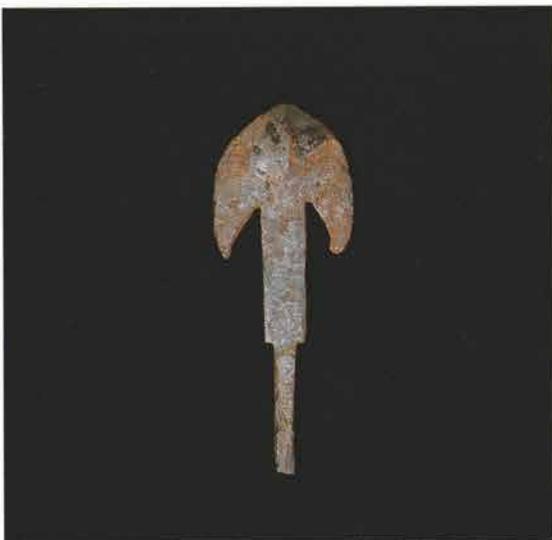
同 左 羽口



同 上 鍛造薄片



3区6号住居全景



同 上 鉄鏃(M30)

3区6号住居は鉄生産遺構をもつ8世紀後半の住居である。炉の形状は明確にできなかったが、床面をくぼめた火竈炉と推定される。住居内からは鉄塊系遺物や鉄滓・羽口・鍛造薄片などの鉄生産関連遺物と鉄鏃が出土した。

鉄塊・鉄滓の金属学的解析によれば、この住居内の炉では、砂鉄を使って銑鉄から鋼を精錬していたと推定されている。また、鍛造薄片の存在から鉄器生産も行われていたことがわかる。出土した鉄鏃は、砂鉄を使って精錬された鋼を素材としており、本住居で鋼精錬から鉄器生産まで一連の作業がおこなわれていた可能性も高い。

序

前橋市二之宮町、荒子町、大室町等で行われた県営圃場整備事業荒砥北部地区は広大な面積の農地が対象となりました。しかも対象となった地域は、群馬県においても有数の埋蔵文化財包蔵地の豊庫であったため、永年にわたって埋蔵文化財の発掘調査が行われ、記録保存されました。

ここに報告する「荒砥上ノ坊遺跡」も昭和57年度に調査された広大な遺跡です。諸般の事情で発掘報告がおくれていましたが、平成6年度より報告書刊行のための整理業務に着手し、同年度に第1冊目の報告書を刊行、続いて今年度第2冊目の報告書を刊行することになりました。

本書には、奈良・平安時代の竪穴住居跡86軒、土坑14、井戸2基、溝1条の遺構・遺物が報告されています。本書の遺跡は赤城山の南麓にありますが、遺跡地に弥生時代終末期から集落が定着し、やがて開析谷の水田耕作が始まり、以後歴史時代にも継続して集落が営まれたことを如実にしめしてくれています。本報告書の刊行により赤城山南麓の古代における農耕集落の解明が大いに進むものと存じます。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、群馬県農政部、前橋土木改良事務所、荒砥北部土地改良事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者等には大変お世話になりました。これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し序とします。

平成8年3月25日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

1. 本書は、昭和57年度県営圃場整備事業荒砥北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の3集『荒砥上ノ坊遺跡II』である。荒砥上ノ坊遺跡は荒砥北部圃場整備事業区域内の遺跡群のひとつで、昭和57年度に発掘調査された、縄文時代から中世の複合遺跡である。報告書は、時期別に全4分冊で構成した。本書第II分冊では、歴史時代前半期(概ね奈良時代から平安時代初期)の遺構・遺物を報告する。既に縄文時代から古墳時代の遺構・遺物については第I分冊で報告した。今後は、第III分冊で歴史時代後半期、第IV分冊で中世以降と時期不明の遺構・遺物を順次報告する予定である。

なお、遺跡内に存在した「女堀」についても調査を実施したが、他の各調査地点とともに昭和59年3月に刊行された『県営ほ場整備事業荒砥南部・北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 女堀』で既に報告している。

2. 荒砥上ノ坊遺跡は、群馬県前橋市二之宮町406・408・409番地他、荒子町750・758・1080番地他に所在する。遺跡名は、遺跡のある地域の旧村名である「荒砥(あらと)」に、発掘区内で最も広い小字である「上ノ坊(かみのぼう)」を付した。発掘調査当時は、「うえのぼう」と呼称していたが、その後の調査で「かみのぼう」であることが判明したので、報告書刊行を契機に訂正した。
3. 発掘調査は、群馬県農政部・前橋土地改良事務所・群馬県教育委員会の委託により、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。発掘調査の期間・体制は次の通りである。

期 間 昭和57年7月1日～昭和58年1月25日

事務担当 小林起久治、白石保三郎、松本浩一、細野雅男、近藤平志、国定 均、笠原秀樹、山本朋子、吉田有光、柳岡良宏 ((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団職員)
野島のぶ江、吉田恵子、吉田笑子、並木綾子、今井もと子 (同 補助員)

調査担当 鹿田雄三、小島敦子、斎藤利昭 (同 調査研究員)

遺構測量委託 株式会社測研

4. 発掘資料の整理および報告書の作成は、群馬県教育委員会の委託により、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理・報告書作成の期間・体制は次の通りである。

期 間 平成7年4月1日～平成8年3月31日

事 務 中村英一、近藤 功、蜂須 実、神保侑史、小淵 淳、佐藤明人、国定 均、笠原英樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、高橋定義 ((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団職員)、大沢友治 (同 嘱託)、吉田恵子、松井美智代、内山圭子、星野美智子、羽鳥京子、菅原淑子 (同 補助員)

編 集 小島敦子 (同 専門員)

本文執筆 小島敦子

遺構写真 鹿田雄三 (現 県立太田西女子高校教諭)、小島敦子、斎藤利昭 ((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団主任調査研究員)

遺物写真 佐藤元彦 (同 主任技師)

遺物観察 小島敦子

金属器保存処理 関邦一 (同 主任技師)、土橋まり子 (同 非常勤嘱託)、小材浩一、小沼恵子 (同 整理補助員)

遺物および図面整理 光安文子、下境マサ江、高橋優子、高梨房江、増田政子、羽鳥望東子、田子弘子、佐子昭子、木原幸子、((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団整理補助員)

出土鉄分析研究委託 (財)岩手県文化振興事業団

5. 出土鉄器および鉄生産関連遺物については、赤沼英男氏(岩手県立博物館)に玉稿を賜った。また、石材同定については、飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)の手を煩わせた。
6. 発掘調査および本書の作成にあたり、下記の諸氏よりご助言、ご協力を得た。記して感謝の意を表したい。(敬称略・五十音順)
赤沼英男、前原 豊
7. 出土遺物は一括して群馬県埋蔵文化財センターおよび(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が保管している。

凡 例

1. 本調査の記録に用いたグリッドは5m四方で、北西交点をその呼称としている。調査当時、グリッド杭は各調査区のほ場整備工事用の杭を基準に打っており、調査区ごとの関係は不明であった。そこで整理時に、国家座標値を調査し、各調査区の絶対的位置を確認した。工事用杭を基準にしたグリッドの南北ラインは、1~10区が西へ1°4'16"、11区が西へ4°偏っている。なお、座標は第IX系にある。
2. 本書における遺構番号は、調査時に付されたものをそのまま使用している。このため欠番が生じている。
3. 遺構図中の北方位は座標北を示す。
4. 遺構図で使用したスクリーン・トーンは以下のとおりである。部分的に異なる場合があるが、その際は、その旨凡例を示した。

 地山  浅間C軽石  浅間Bテフラ  焼土・灰

6. 本書で使用した遺物の番号は、種類毎の通し番号であり、種類の略号は以下の通りである。平面図に付した番号は、遺物実測図に付した番号に対応している。

土器(略号無し) 石器 S 金属器 M

7. 遺構図・遺物図の縮尺は、原則として以下の通りである。縮尺の異なるものが併載される場合は、それぞれにスケールを付した。

遺構図 1:80

遺物図 1:4 (鉄器および小形遺物に1:2のものがある。)

8. 遺物実測図中で使用したスクリーン・トーンは以下のとおりである。

土器  黒色処理  スス付着部分
石器  磨り面

9. 遺物写真図版の倍率は、土器・木器は原則として1/4、大型品は1/6に近づけるようにした。石器は、原則として礫は1/4、剥片石器は1/2、石鏃などの小型のものは1/1に近づけるようにした。また、部分的に特徴のある遺物については、近接写真を撮影した。

10. 本文は以下のような点に留意して記述した。

- 1) 「第1章 調査の経過と遺跡の概要」は、すでに『荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ』で述べているが、本書でも略述した。
- 2) 各遺構の記述にあたっては下記に留意した。

住居 位置は、その遺構が含まれるグリッドをすべて記載した。重複は、重複する遺構とその新旧関係を述べた。形状は、方形・長方形・隅丸方形・隅丸長方形にほぼ分類して記載した。規模は、遺構確認面での上場で計測した。なお、竈付設住居では竈の部分を含んでいない。面積は、床の面積と考え、住居の下場でプランメーターの3回平均値を計測した。方位は、北方向に最も近い壁の方向を計測した。床面は、傾斜や凹凸の有無、硬化面の残存状況を記述した。埋没土は、埋没土の全体的傾向や特徴的な埋没土について記述した。炉・竈は、それぞれの位置と規模を記載し、遺存状態を述べた。周溝・柱穴・貯蔵穴等の住居施設については、検出された位置・規模・遺存状態を記述した。遺物は、住居全体の遺物の出土状態と、特徴的な遺物について記述した。所見では、各住居の調査から考えられることがらがあれば記述した。時期は出土遺物・重複関係等から、遺構の時期を記載した。

土坑 住居に準じる。

目 次

口 絵
序
例 言
凡 例

第1章 調査の経過と遺跡の概要

1. 調査に至る経過…………… 1
2. 遺跡周辺の地形と遺跡分布…………… 3
3. 発掘調査の方法と経過…………… 8

第2章 古墳時代の遺構と遺物

(第1分冊補遺) ……10

第3章 歴史時代前半期の遺構と遺物

1. 概 要……………12
2. 1・2区の遺構……………15
3. 3区の遺構 ……110
4. 5区の遺構 ……121
5. 6区の遺構 ……127
6. 7区の遺構 ……135
7. 8区の遺構 ……142
8. 9区の遺構 ……146
9. 10区の遺構 ……148

第4章 調査の成果

1. 調査の成果と課題 ……155
荒砥上ノ坊遺跡出土鉄製遺物の
金属学的解析 赤沼英男 ……159

写真図版

報告書抄録

既 刊

荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ 縄文時代～古墳時代の調査

続 刊

荒砥上ノ坊遺跡Ⅲ 歴史時代後半期の調査

荒砥上ノ坊遺跡Ⅳ 中世・その他の調査

挿 図 目 次

第 1 図 群馬県中央部の地勢と遺跡の位置 …………… 1	第 39 図 1 区61号住居出土遺物 ……………44
第 2 図 ほ場整備地域(上)と昭和57年度調査区 …… 2	第 40 図 1 区63号住居と出土遺物 ……………45
第 3 図 群馬県中央部の地形と荒砥上ノ坊遺跡 …… 3	第 41 図 1 区64号住居と出土遺物 ……………46
第 4 図 荒砥上ノ坊遺跡周辺の地形 …………… 4	第 42 図 1 区69号住居 ……………47
第 5 図 荒砥地域の歴史時代の遺跡分布 …………… 6	第 43 図 1 区69号住居出土遺物 ……………48
第 6 図 荒砥上ノ坊遺跡の発掘区 …………… 9	第 44 図 1 区75号住居と出土遺物 ……………49
第 7 図 1 区40号住居と出土遺物 ……………10	第 45 図 1 区 8 号・ 9 号・ 34号・ 60号土坑と出土 遺物 ……………51
第 8 図 1 区71号住居と出土遺物 ……………11	第 46 図 1 区35号土坑 ……………52
第 9 図 歴史時代前半期の遺構分布 ……………13	第 47 図 1 区35号土坑出土遺物 ……………53
第 10 図 1 区 1 号住居 ……………15	第 48 図 1 区36号土坑と出土遺物 ……………54
第 11 図 1 区 1 号住居出土遺物 ……………16	第 49 図 1 区37号土坑と出土遺物 ……………55
第 12 図 1 区 2 号住居と出土遺物 ……………17	第 50 図 1 区38号土坑と出土遺物 ……………56
第 13 図 1 区 6 号住居 ……………18	第 51 図 1 区45号土坑と出土遺物 ……………57
第 14 図 1 区 6 号住居出土遺物 ……………19	第 52 図 1 区52号土坑と出土遺物 ……………58
第 15 図 1 区 7 号住居と出土遺物 ……………20	第 53 図 1 区17号・ 32号土坑と出土遺物 ……………59
第 16 図 1 区13号住居 ……………21	第 54 図 1 区41号土坑 ……………60
第 17 図 1 区13号住居出土遺物 ……………22	第 55 図 1 区41号土坑出土遺物 ……………61
第 18 図 1 区20号住居と出土遺物 ……………23	第 56 図 1 区44号土坑と出土遺物 ……………62
第 19 図 1 区23号住居と出土遺物 ……………24	第 57 図 1 区47号土坑(井戸)と出土遺物 ……………62
第 20 図 1 区25号住居と出土遺物 ……………25	第 58 図 1 区48号土坑(井戸)と出土遺物 ……………63
第 21 図 1 区27号住居 ……………26	第 59 図 2 区 6 号住居 ……………65
第 22 図 1 区29号住居 ……………27	第 60 図 2 区 6 号住居出土遺物 ……………66
第 23 図 1 区29号住居出土遺物 ……………28	第 61 図 2 区17号住居 ……………67
第 24 図 1 区30号住居 ……………29	第 62 図 2 区17号住居出土遺物 ……………68
第 25 図 1 区30号住居出土遺物 ……………30	第 63 図 2 区22号住居と出土遺物 ……………69
第 26 図 1 区34号住居と出土遺物 ……………31	第 64 図 2 区23号住居と出土遺物(1) ……………70
第 27 図 1 区44号住居 ……………32	第 65 図 2 区23号住居出土遺物(2) ……………71
第 28 図 1 区44号住居出土遺物 ……………33	第 66 図 2 区24号住居と出土遺物 ……………72
第 29 図 1 区47号住居と出土遺物 ……………34	第 67 図 2 区26号住居と出土遺物 ……………73
第 30 図 1 区49号住居と出土遺物 ……………35	第 68 図 2 区30号住居 ……………74
第 31 図 1 区52号住居と出土遺物 ……………36	第 69 図 2 区30号住居出土遺物 ……………75
第 32 図 1 区55号住居と出土遺物 ……………37	第 70 図 2 区31号住居出土遺物 ……………75
第 33 図 1 区58号住居土層断面A-A' ……………38	第 71 図 2 区31号住居 ……………76
第 34 図 1 区58号住居 ……………39	第 72 図 2 区34号住居と出土遺物 ……………77
第 35 図 1 区58号住居出土遺物(1) ……………40	第 73 図 2 区38号住居 ……………78
第 36 図 1 区58号住居出土遺物(2) ……………41	第 74 図 2 区38号住居出土遺物(1) ……………79
第 37 図 1 区57号住居と出土遺物 ……………42	第 75 図 2 区38号住居出土遺物(2) ……………80
第 38 図 1 区61号住居 ……………43	

第76図	2区39号住居と出土遺物(1)	81	第118図	5区2号住居と出土遺物	121
第77図	2区39号住居出土遺物(2)	82	第119図	5区3号住居と出土遺物	122
第78図	2区41号住居と出土遺物	83	第120図	5区4号住居	123
第79図	2区45号住居と出土遺物(1)	84	第121図	5区5号住居	124
第80図	2区45号住居出土遺物(2)	85	第122図	5区8号住居と出土遺物(1)	125
第81図	2区53号住居	85	第123図	5区8号住居出土遺物(2)	126
第82図	2区53号住居出土遺物	86	第124図	5区10号住居	126
第83図	2区54号住居	87	第125図	6区1号住居と出土遺物	127
第84図	2区54号住居出土遺物	88	第126図	6区4号住居と出土遺物	128
第85図	2区56号住居と出土遺物	89	第127図	6区5号住居と出土遺物	129
第86図	2区62号住居と出土遺物	90	第128図	6区6号住居と出土遺物	130
第87図	2区63号住居と出土遺物	91	第129図	6区7号住居と出土遺物	131
第88図	2区68号住居と出土遺物	92	第130図	6区11号住居出土遺物	132
第89図	2区69号住居と出土遺物	93	第131図	6区11号住居	133
第90図	2区79号住居	94	第132図	6区13号住居と出土遺物	134
第91図	2区79号住居出土遺物	95	第133図	7区3号住居と出土遺物	135
第92図	2区82号住居と出土遺物	96	第134図	7区4号住居と出土遺物	136
第93図	2区88号住居	97	第135図	7区6号住居	137
第94図	2区88号住居出土遺物	98	第136図	7区6号住居出土遺物	139
第95図	2区97号住居	98	第137図	7区7号住居と出土遺物	140
第96図	2区97号住居出土遺物	99	第138図	7区8号住居	141
第97図	2区104号住居と出土遺物(1)	100	第139図	8区4号住居と出土遺物	142
第98図	2区104号住居出土遺物(2)	101	第140図	8区5号住居	143
第99図	2区105号住居と出土遺物	102	第141図	8区5号住居出土遺物	144
第100図	2区106号住居と出土遺物	103	第142図	8区6号住居と出土遺物	145
第101図	2区107号住居	104	第143図	8区13号住居と出土遺物	146
第102図	2区107号住居出土遺物	105	第144図	9区3号住居と出土遺物	147
第103図	2区108号住居と出土遺物	106	第145図	10区1号住居と出土遺物	148
第104図	2区110号住居と出土遺物	107	第146図	10区2号住居出土遺物	149
第105図	2区111号住居と出土遺物	108	第147図	10区2号住居	150
第106図	2区8号土坑と出土遺物	109	第148図	10区3号住居	151
第107図	3区1号住居	110	第149図	10区3号住居出土遺物	152
第108図	3区1号住居出土遺物	111	第150図	歴史時代前半期の遺構の位置	153
第109図	3区3号住居と出土遺物	112	第151図	1・2区の遺構分布の変化	157
第110図	3区5号住居	113	第152図	8区の地割れ	158
第111図	3区5号住居出土遺物	114			
第112図	3区6号住居	116			
第113図	3区6号住居出土遺物	117			
第114図	3区7号住居	118			
第115図	3区7号住居出土遺物	119			
第116図	3区8号住居と出土遺物	119			
第117図	3区5号溝と出土遺物	120			

第4章

図1. 分析を行った鉄器の外観 ……………160	図6. No.3鉄塊系遺物の外観と組織観察結果 ……………165
図2. 鉄器から抽出した試料片の組織観察結果 ……………162	図7. 分析を行った鉄滓の外観と組織観察結果 ……………167
図3. No.8 鑿から抽出した試料片に見いだされた非 金属介在物のE PMAによる分析結果 ……………163	図8. No.5鉄滓のE PMAによる分析結果 ……………168
図4. No.1 刀子から抽出した試料片に見いだされた 非金属介在物のE PMAによる分析結果 ……………164	図9. 推定される鋼の製造法 ……………171
図5. No.2鉄鏃から抽出した試料片に見いだされた 非金属介在物のE PMAによる分析結果 ……………164	図10. 3区6号住居跡から検出された 鍛造薄片の外観 ……………171
	図11. 日本列島・中国・朝鮮半島に分布する 主な鉄鉱山 ……………173

表 目 次

第1表 荒砥上ノ坊遺跡の古墳時代遺構一覧表……………12	第4章表1 分析を行った資料の概要 ……………159
第2表 歴史時代前半期の土坑一覧表……………14	表2 鉄器の分析結果 ……………161
第3表 荒砥上ノ坊遺跡の歴史時代前半期 遺構一覧表 ……………155	表3 鉄塊系遺物の化学組成(%) ……………166
	表4 鉄滓の化学分析 ……………166

写真図版目次

P L 1. 1. 1区1号住居全景(西から)	5. 同 貯蔵穴土層断面(西から)
2. 同 遺物出土状態(S91・西から)	6. 同 遺物出土状態(左945・右944)
3. 同 遺物出土状態(936・西から)	P L 4. 1. 1区13号住居出土遺物
4. 同 出土遺物	2. 1区20号住居全景(西から)
5. 1区2号住居全景(西から)	3. 同 遺物出土状態(1242・西から)
6. 同 竈全景(西から)	4. 同 遺物出土状態(S124)
P L 2. 1. 1区2号住居遺物出土状態(1208)	5. 同 遺物出土状態(M7)
2. 1区6号住居全景(西から)	6. 同 出土遺物
3. 1区2号・6号住居出土遺物	P L 5. 1. 1区23号住居全景(南西から)
4. 1区6号住居竈全景(西から)	2. 同 竈全景(南西から)
5. 同 遺物出土状態	3. 同 出土遺物
6. 1区7号住居全景(北西から)	4. 1区25号住居出土遺物
7. 同 竈全景(西から)	5. 同 全景(西から)
P L 3. 1. 1区7号住居遺物出土状態(S96)	6. 同 土層断面A-A'(西から)
2. 同 出土遺物	7. 1区27号住居全景(北西から)
3. 1区13号住居全景(西から)	8. 同 竈全景(北西から)
4. 同 竈・貯蔵穴全景(西から)	P L 6. 1. 1区29号住居全景(西から)

2. 同 竈全景(西から)
 3. 同 竈遺物出土状態(463~467)
 4. 同 出土遺物
 5. 1区30号住居全景(西から)
 6. 同 土層断面A-A'(南から)
- PL7. 1. 1区30号住居竈全景(西から)
 2. 同 出土遺物
 3. 1区34号住居全景(西から)
 4. 同 竈全景(西から)
 5. 同 出土遺物
- PL8. 1. 1区44号住居全景(西から)
 2. 同 竈全景(西から)
 3. 同 遺物出土状態(西から)
 4. 同 竈遺物出土状態(762・763)
 5. 同 遺物出土状態(765)
 6. 同 出土遺物
- PL9. 1. 1区全景(東から)
 2. 1区52号住居全景(北西から)
 3. 同 出土遺物
 4. 1区47号住居全景(南西から)
 5. 同 竈全景(南西から)
 6. 同 遺物出土状態(967・西から)
 7. 同 遺物出土状態(970)
 8. 同 遺物出土状態(968)
- PL10. 1. 1区47号住居出土遺物
 2. 1区49号住居全景(西から)
 3. 1区55号住居全景(西から)
 4. 同 土層断面(西から)
 5. 同 竈全景(西から)
 6. 同 遺物出土状態(1258・1261)
- PL11. 1. 1区55号住居出土遺物
 2. 1区57号住居全景(西から)
 3. 1区58号住居全景(西から)
 4. 同 土層断面A-A'(西から)
 5. 同 竈全景(西から)
 6. 同 遺物出土状態(807・825)
- PL12. 1. 1区58号住居遺物出土状態
 2. 同 遺物出土状態(806)
 3. 同 出土遺物
- PL13. 1. 1区61号住居全景(西から)
 2. 同 竈全景(西から)
 3. 同 遺物出土状態(1272・1273)
4. 同 遺物出土状態(1274)
 5. 同 遺物出土状態(1266)
 6. 同 出土遺物
- PL14. 1. 1区69号住居全景(西から)
 2. 同 遺物出土状態(974・984)
 3. 同 遺物出土状態(976・979・980)
 4. 同 遺物出土状態(982)
 5. 同 出土遺物
- PL15. 1. 1区63号住居全景(西から)
 2. 1区63号・64号住居出土遺物
 3. 1区64号住居全景(西から)
 4. 1区60号土坑全景(西から)
 5. 同 出土遺物
 6. 1区71号住居・60号土坑土層断面A-A'
 7. 1区75号住居全景(西から)
- PL16. 1. 1区8号土坑全景(西から)
 2. 同 土層断面A-A'(西から)
 3. 1区9号土坑全景(南から)
 4. 同 土層断面A-A'(南から)
 5. 1区34号土坑全景(南から)
 6. 同 土層断面A-A'(南から)
 7. 1区35号土坑全景
 8. 同 土層断面A-A'(西から)
- PL17. 1. 1区36号土坑(東から)
 2. 同 土層断面A-A'(西から)
 3. 1区37号土坑全景(東から)
 4. 1区38号土坑と50号住居(西から)
 5. 1区38号土坑全景(北東から)
- PL18. 1. 1区35号・36号・45号土坑出土遺物
- PL19. 1. 1区45号土坑全景(南東から)
 2. 同 土層断面A-A'(南東から)
 3. 1区52号土坑全景(西から)
 4. 同 土層断面A-A'(西から)
 5. 1区17号・32号土坑全景(南から)
 6. 1区41号土坑全景(西から)
 7. 同 土層断面A-A'(南から)
 8. 同 出土遺物
- PL20. 1. 1区44号土坑全景
 2. 同 土層断面(南から)
 3. 1区44号・52号土坑出土遺物
 4. 1区47号土坑(井戸)全景(北から)
 5. 1区48号土坑(井戸)全景(南から)

6. 同 土層断面A—A'(南から)
7. 同 石積みの状況(西から)
8. 1区調査風景(北西から)
- PL21. 1. 2区6号住居全景(西から)
2. 同 土層断面A—A'(南から)
3. 同 竈全景(西から)
4. 同 遺物出土状態(998)
5. 同 出土遺物
- PL22. 1. 2区17号住居全景(西から)
2. 同 竈全景(西から)
3. 同 遺物出土状態
4. 同 遺物出土状態(左1010・右1000)
5. 同 出土遺物
- PL23. 1. 2区22号住居全景(西から)
2. 同 遺物出土状態(1012)
3. 同 遺物出土状態(S109・西から)
4. 同 出土遺物
5. 2区24号住居全景(西から)
6. 同 出土遺物
7. 2区26号住居全景(西から)
8. 同 竈全景(西から)
- PL24. 1. 2区23号住居全景(西から)
2. 同 竈全景(西から)
3. 同 遺物出土状態(1020)
4. 同 竈遺物出土状態(南から)
5. 同 竈遺物出土状態(東から)
6. 同 出土遺物
- PL25. 1. 2区30号住居全景(西から)
2. 同 竈全景(西から)
3. 同 貯蔵穴全景(西から)
4. 同 遺物出土状態(1031)
5. 同 出土遺物
6. 2区31号住居全景(西から)
7. 同 竈全景(西から)
8. 同 出土遺物
- PL26. 1. 2区34号住居全景(南西から)
2. 同 竈全景(南西から)
3. 同 出土遺物
4. 2区38号住居全景(西から)
5. 同 竈全景(西から)
6. 同 竈遺物出土状態(659~664・666)
7. 同 出土遺物(1)
- PL27. 1. 2区38号住居出土遺物(2)
2. 2区39号住居全景(南西から)
3. 同 竈全景(南西から)
- PL28. 1. 2区39号住居出土遺物
2. 2区41号住居出土遺物
3. 同 遺物出土状態(1290)
4. 同 全景(北西から)
5. 同 土層断面A—A'(南東から)
6. 同 竈全景(北西から)
7. 同 遺物出土状態(1289)
- PL29. 1. 2区45号住居全景(南西から)
2. 同 竈全景(南西から)
3. 同 出土遺物
4. 2区53号住居全景(西から)
5. 同 竈全景(西から)
6. 同 出土遺物
- PL30. 1. 2区54号住居全景(西から)
2. 同 土層断面A—A'(南から)
3. 同 竈全景(西から)
4. 同 遺物出土状態(北から)
5. 同 遺物出土状態(699)
6. 同 遺物出土状態(左700・右701)
7. 同 出土遺物
- PL31. 1. 2区56号住居全景(西から)
2. 同 竈全景(西から)
3. 同 遺物出土状態
4. 2区62号住居全景(西から)
5. 同 竈全景(西から)
6. 2区63号住居全景(南西から)
7. 同 竈全景(南西から)
8. 同 出土遺物
- PL32. 1. 2区68号住居全景(南西から)
2. 同 竈全景(南西から)
3. 2区69号住居全景(南西から)
4. 同 竈全景(南西から)
5. 2区69号・79号住居出土遺物
6. 2区79号住居全景(西から)
7. 同 土層断面A—A'(西から)
- PL33. 1. 2区82号住居全景(西から)
2. 同 土層断面B—B'(南東から)
3. 同 竈全景(西から)
4. 同 遺物出土状態(1054)

5. 2区88号住居全景(西から)
6. 同 竈全景(西から)
7. 2区88号・97号住居出土遺物
- PL34. 1. 2区97号住居全景(南西から)
2. 同 竈全景(南西から)
3. 2区104号・105号住居全景(南西から)
4. 2区104号住居竈全景(南西から)
5. 同 出土遺物
6. 2区105号住居土層断面A-A'(南から)
- PL35. 1. 2区106号住居全景(西から)
2. 同 竈全景(西から)
3. 2区107号住居全景(南西から)
4. 同 竈全景(南西から)
5. 同 遺物出土状態(1320・1322)
6. 同 出土遺物
7. 2区108号住居全景(南西から)
- PL36. 1. 2区110号住居全景(西から)
2. 同 土層断面A-A'(南西から)
3. 同 周辺遺物出土状態(1328)
4. 2区110号住居周辺・2区8号土坑出土遺物
5. 2区111号住居全景(西から)
6. 同 竈全景(西から)
7. 同 出土遺物
- PL37. 1. 2区8号土坑全景
2. 同 土層断面A-A'(南東から)
3. 2区調査風景(東から)
4. 2区調査前の状況
5. 2区北東部調査風景(東から)
- PL38. 1. 3区1号住居全景(西から)
2. 同 土層断面A-A'(南東から)
3. 同 竈全景(西から)
4. 同 遺物出土状態(1331)
5. 同 出土遺物
6. 3区3号住居全景(西から)
7. 同 土層断面A-A'(東から)
8. 同 竈全景(西から)
9. 同 出土遺物
- PL39. 1. 3区5号住居全景(西から)
2. 同 竈全景(西から)
3. 同 北竈全景(西から)
4. 同 南竈全景(西から)
5. 同 出土遺物
6. 3区6号住居全景(西から)
7. 同 竈全景(西から)
- PL40. 1. 3区6号住居遺物出土状態(1098・北から)
2. 同 遺物出土状態(1093・北から)
3. 同 出土遺物
- PL41. 1. 3区7号住居全景(西から)
2. 同 土層断面A-A'(東から)
3. 同 竈全景(西から)
4. 同 出土遺物
5. 3区8号住居全景(北から)
6. 3区5号溝出土遺物
7. 同 全景(北から)
8. 3区全景(南から)
- PL42. 1. 5区2号住居全景(西から)
2. 同 土層断面(南から)
3. 同 竈全景(西から)
4. 同 遺物出土状態(1358)
5. 同 遺物出土状態(1357)
6. 5区4号住居全景(西から)
7. 5区2～4号住居全景(西から)
8. 5区3号住居全景(西から)
- PL43. 1. 5区3号住居土層断面A-A'(南西から)
2. 同 竈全景(西から)
3. 5区5号住居全景(西から)
4. 同 竈全景(西から)
5. 5区8号住居全景(南西から)
6. 同 竈全景(南西から).
7. 同 遺物出土状態(1423)
8. 同 遺物出土状態(1420)
- PL44. 1. 5区8号住居遺物出土状態(1422)
2. 同 遺物出土状態
3. 同 出土遺物
4. 5区10号住居全景(西から)
5. 5区全景(南西から)
6. 5区調査風景
7. 5区から赤城山を望む
- PL45. 1. 6区1号住居全景(南から)
2. 同 竈全景(南から)
3. 6区4号住居全景(西から)
4. 同 竈全景(西から)
5. 同 遺物出土状態(1366)
6. 同 遺物出土状態(1366・1367)

7. 同 遺物出土状態(1365)
 8. 同 出土遺物
- PL46. 1. 6区5号住居全景(西から)
 2. 同 竈全景(西から)
 3. 6区6号住居全景(西から)
 4. 6区5号・6号住居土層断面A-A'
 5. 6区7号住居全景(西から)
 6. 同 土層断面A-A'(東から)
 7. 同 竈全景(西から)
 8. 6区11号住居全景(西から)
- PL47. 1. 6区11号住居土層断面A-A'(南西から)
 2. 同 竈全景(西から)
 3. 同 出土遺物
 4. 6区13号住居出土遺物
 5. 同 全景(西から)
 6. 同 竈全景(西から)
 7. 同 遺物出土状態(1115・1116・北西から)
 8. 6区調査風景
- PL48. 1. 7区(南半)全景
 2. 7区3号住居全景(西から)
 3. 7区4号住居全景(西から)
 4. 7区6号住居全景(西から)
 5. 同 土層断面A-A'・B-B'・C-C'
 6. 同 遺物出土状態(1119・1122・西から)
 7. 同 出土遺物
- PL49. 1. 7区7号住居全景(西から)
 2. 同 出土遺物
 3. 7区8号住居全景(西から)
4. 8区4号住居全景(西から)
 5. 同 竈全景(西から)
 6. 8区4号・5号住居出土遺物
 7. 8区5号住居全景(西から)
 8. 同 竈全景(西から)
- PL50. 1. 8区6号住居全景(西から)
 2. 同 竈全景(西から)
 3. 同 竈・貯蔵穴全景(南西から)
 4. 同 貯蔵穴全景(北から)
 5. 8区13号住居全景(西から)
 6. 同 竈全景(西から)
 7. 8区を縦断する地割れ(北から)
- PL51. 1. 9区3号住居全景(西から)
 2. 同 竈全景(西から)
 3. 9区3号・10区2号住居出土遺物
 4. 9区全景(北から)
 5. 10区調査風景
 6. 10区2号住居全景(西から)
 7. 同 竈全景(西から)
 8. 同 遺物出土状態(1144)
- PL52. 1. 10区1号住居全景(西から)
 2. 同 竈全景(西から)
 3. 10区3号住居全景(西から)
 4. 同 竈全景(西から)
 5. 同 遺物出土状態(1148・1150)
 6. 同 遺物出土状態(1150)
 7. 同 遺物出土状態(1147)
 8. 同 出土遺物

第1章 調査の経過と遺跡の概要

1. 調査に至る経過

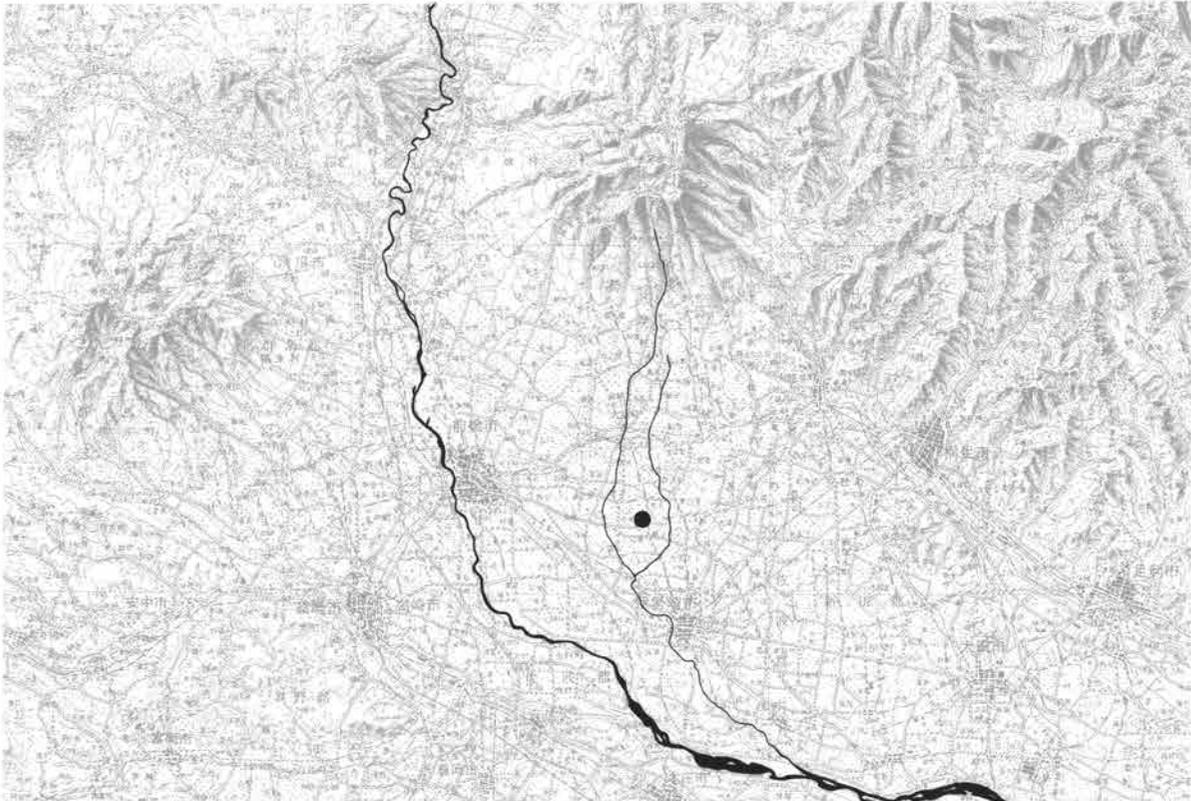
荒砥上ノ坊遺跡は、県営ほ場整備事業荒砥北部地区に伴って発掘調査された遺跡群の1つである。

ほ場整備事業の行なわれた荒砥地域は、群馬県のほぼ中央部、前橋市の東端部にある農業地帯である。関東平野の北西の隅にあたり、上越の山から流れ出る利根川の左岸の地域である。北側には赤城山があり、南に大きく裾野を広げている。本地域は、この赤城山南麓の丘陵性台地の末端にあたり、山麓を流下する荒砥川と神沢川に挟まれた地域である。周辺には、これらの主要河川以外にも、小河川が山麓を開析して形成された帯状沖積地が発達していて、起伏に富んだ地形となっている。このような地域の中で実施するほ場整備事業は、土砂の切り盛りが著し

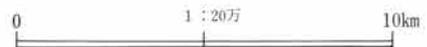
く、工事は多量の土砂を移動する計画となった。

しかし、この地域には、群馬県内でも有数の大形前方後円墳が集中する大室古墳群をはじめとして、原始・古代の多くの遺跡が分布する。したがって、ほ場整備事業が開始されるにあたっては、埋蔵文化財の保護が大きな課題となった。そこで、群馬県農政部と群馬県教育委員会は、埋蔵文化財の保護を前提にした協議をおこない、工事によって破壊される切り土部分と道水路部分について、事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施することが確認されたのである。

荒砥地区のほ場整備事業は、国道50号線で南北2地区に分けて実施された。昭和49年から56年にかけての荒砥南部地区と、昭和56年から平成3年にかけての荒砥北部地区である。大規模なその対象地域



第1図 群馬県中央部の地勢と遺跡の位置



第1章 調査の経過と遺跡の概要

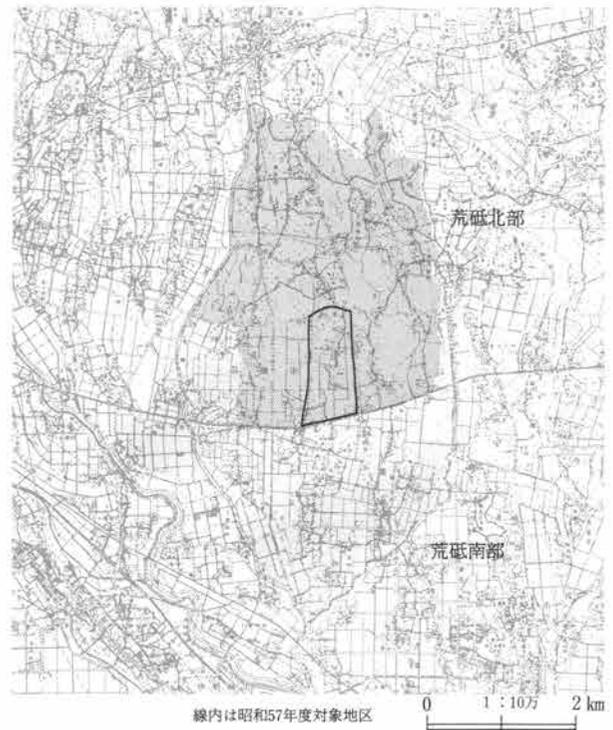
は、群馬県前橋市東端部の旧荒砥村域で、現在の笈井町・今井町・二之宮町・飯土井町・東大室町・荒子町・下大屋町・泉沢町にまたがる広大な地域である。

発掘調査は、昭和49年から52年まで県教育委員会の直営で実施されたが、昭和53年7月の(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の設立に伴って、昭和53年度から(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を受託することとなった。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団は、県農政部の委託を受けて、荒砥南部地区のほ場整備事業が終了する昭和59年度までの7年間に13遺跡を調査した。

継続して(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団は、昭和56年度から荒砥北部地区の発掘調査を受託し、昭和59年度まで調査を実施した。相前後して昭和59年度以降の発掘調査は、県教育委員会と荒砥北部遺跡群調査会に引き継がれ、平成3年度で終了した。

荒砥上ノ坊遺跡を調査した昭和57年度は、県営ほ場整備事業荒砥北部地区の六工区が事業対象地域であった。(第2図上)発掘調査を開始するにあたり工事計画との調整を重ね、5・6月に遺跡分布調査を実施して、発掘調査面積を確定した。この分布調査によって、荒砥上ノ坊遺跡のほかに、荒砥中屋敷遺跡・荒砥下押切遺跡・荒砥舞台西遺跡・荒砥新屋遺跡が発掘調査されることとなった。(第2図下)本書で報告する荒砥上ノ坊遺跡は、縄文時代から中世までの複合集落遺跡である。切り土部分・道水路部分あわせて42000㎡を調査し、調査区は11区にわたった。

発掘資料の整理事業は、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が県教育委員会から受託し、昭和57年から実施している。本年度は、県営ほ場整備事業荒砥北部地区関連の出土品整理事業の3年次にあたる。荒砥上ノ坊遺跡の資料整理は2年次目であり、平成6年度に『荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ—縄文～古墳時代の調査—』を刊行した。分布調査の内容と発掘区の設定および調査体制については、『荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ』第1章を参照願いたい。



第2図 ほ場整備地域(上)と昭和57年度調査区

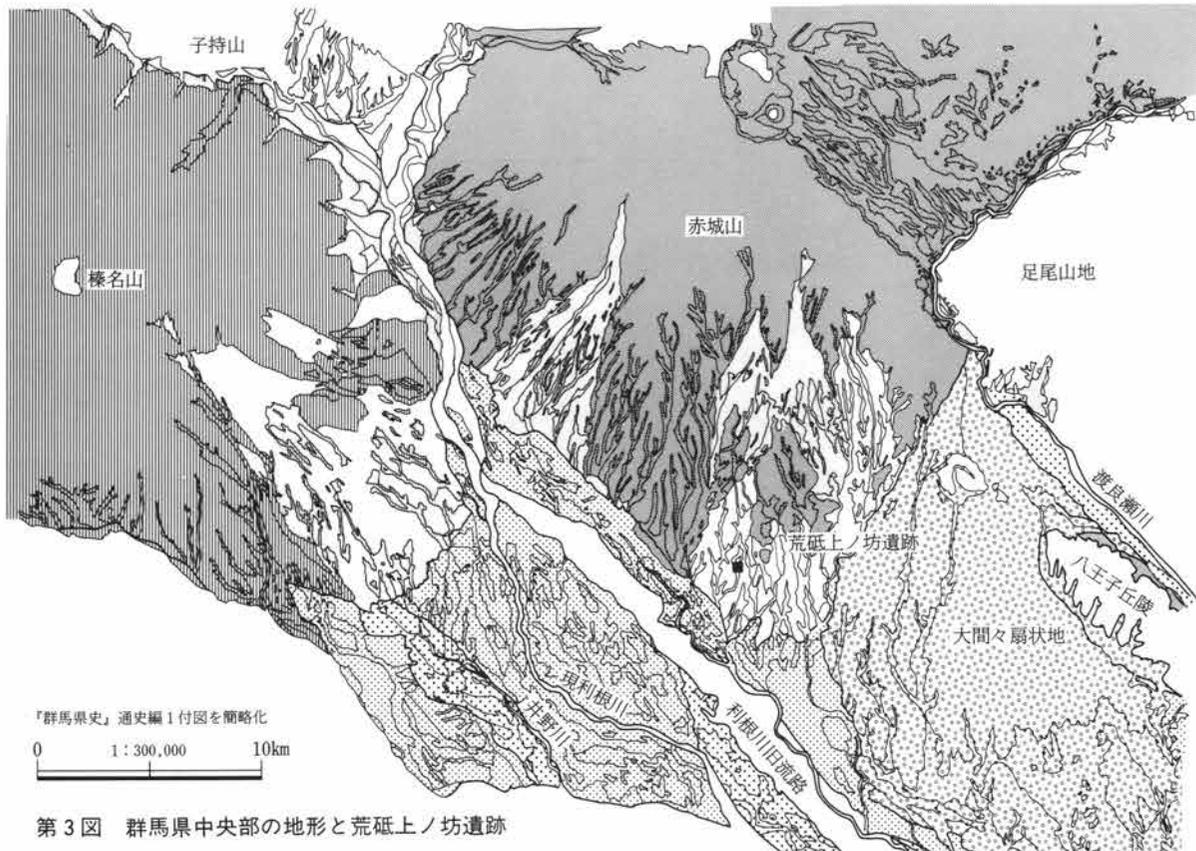
2. 遺跡周辺の地形と遺跡分布

群馬県中央部の地形 荒砥上ノ坊遺跡がある地域は、県北の山地と南東部の平野部が接する群馬県中央部に当たる。県央地域には、榛名・赤城両火山があり、その裾野には台地が広がっている。その台地上は小河川によって谷地が開析され、平野部は自然堤防・後背湿地が発達している。このように県央部は様々な地形が入り組んでおり、地形環境が遺跡の立地にも大きく関係していると考えられる。

また、群馬県では、各地の発掘調査から、火山災害が人間生活に大きな影響を与えたことが判明している。県内の火山のうち、西毛地域にある榛名山や浅間山は完新世にも大噴火し、火砕流が山麓の家屋を壊し、降下火山灰が県央部の田畠を埋没させたことが、発掘調査からわかっている。しかし、人々は火山災害に立ち向かい、田畠を復旧して、生活を継続させてきたのである。

一方、赤城山は40～50万年前から活動を始めた複合成層火山である。3.1～3.2万年前に大規模な軽石噴火をおこして中央火口丘群を形成した後、目立った火山活動はなく、現在まで火山山麓扇状地の形成期となっている。山麓には、山体を流下する小河川による開析作用によって、帯状に谷地が刻まれている。また、赤城白川・荒砥川・神沢川・粕川等の小河川沿いには、土砂が堆積して扇状地が形成されている。これらの河川作用は数万年の間繰り返されてきた。扇状地はさらに開析されて、樹枝状の低地が発達した複雑な起伏の多い地形となっている。この間安定した時期には、関東ローム層が堆積して、台地地形を形成している。

遺跡周辺の地形 荒砥上ノ坊遺跡は、赤城山の南麓末端に近い、標高95～103mの緩斜面にある。遺跡周辺の地形は後期更新世前半に形成された山麓扇状地で、山麓に谷頭をもつ細長い低地とその支谷が樹枝状に入り込んだ様相を呈している。



第3図 群馬県中央部の地形と荒砥上ノ坊遺跡

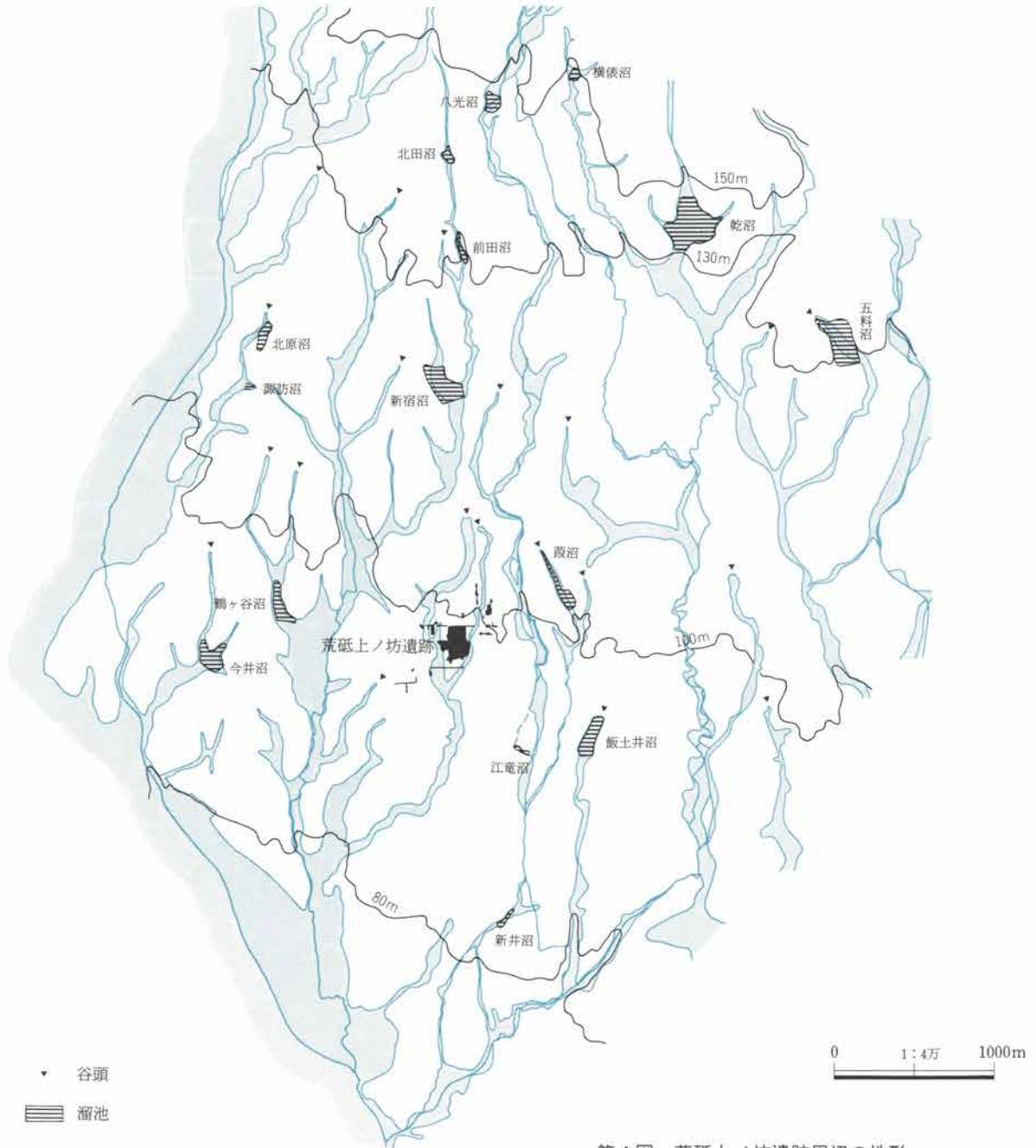
第1章 調査の経過と遺跡の概要

これらの低地は、内部に河川が流れていて比較的長いものと、主要河川がなく小規模なものに分けられる。遺跡周辺に流れる主な河川は、西から荒砥川・宮川・江竜川・神沢川・桂川等があるが、このうち荒砥川・神沢川・桂川は標高200m以上に水源をもつ流域面積の長い河川である。一方、宮川・江竜川は、他の河川の無い低地の多くと同様で、標高150m以下に水源をもつ、比較的短い小河川である。

これらの低地に広がる沖積地は小規模で、それぞれ

は幅も狭く短い。しかし、合流地点では複数の沖積地が合わさって、幅が広がっている。宮川の中流域では幅が200m近くになる地点があり、主要河川に伴う沖積地と変わらない広さの沖積地が広がっている。

また、荒砥地域には溜池・溜井が多く分布し、農業用水源として使われている。溜池は谷頭に堤をつくり湧水を堰止めた池であるが、いつ頃造られたものかは不明なものも多い。溜井は、人工的に掘った



第4図 荒砥上ノ坊遺跡周辺の地形

井戸で、これに水路を付設して農業用水として利用したものである。宮川下流域の荒砥天之宮遺跡では、古墳時代後期以降の溜井が検出されている。

このように、荒砥上ノ坊遺跡周辺は山麓扇状地であり、欠水性の地域であるが、樹枝状に発達した低地をうまく利用し、農耕集落を営む風土が生まれたものと考えられる。

荒砥上ノ坊遺跡の地形 荒砥上ノ坊遺跡は、このような台地を開析した樹枝状の低地に区切られた低台地のひとつに立地する。標高105m前後に谷頭のある2本の低地が遺跡の南側で合流する。発掘調査では、この合流点の北にある中央の低台地と、その東西の台地上に発掘区を設定した。東西の沖積地の一部もトレンチ調査をおこなった。

この中央の低台地は、ローム層の堆積が無く、黄灰褐色の砂壤土が厚く堆積している。この土層上面で、縄文時代前期諸磯期の住居が確認できるので、それ以前に堆積した地層と考えられる。この土層については、発掘調査時にテフラ等の検出による層位の確認および地層の分布について調査をしていないので、関東ローム層との関係等は不明である。東側台地の一部にも、この砂壤土の堆積が見られた。西側台地は関東ローム層の堆積する台地である。

赤城山南麓地域では、河川作用による砂壤土性の微高地がローム台地に付随して形成されている地点が多い。これらの微高地は赤城山の山体崩落土砂が山麓端部に再堆積することにより形成されたと考えられている。周辺では類似する土層堆積があり、飯土井二本松遺跡では砂壤土下で縄文時代早期の遺物包含層が検出されている。これらの調査から、この砂壤土・砂層の堆積は縄文時代早期から前期の中で漸次進行したと考えられている。

東西両側の低地には、地表下60～80cmのところは浅間Bテフラが、地表下2mのところは浅間C軽石がほぼ水平堆積していた。浅間C軽石の下層には一部で灰白色砂の堆積があるが、それ以降は、安定した沖積土が堆積する環境であったと考えられる。

周辺の歴史時代の遺跡分布 第5図は、西・南の荒

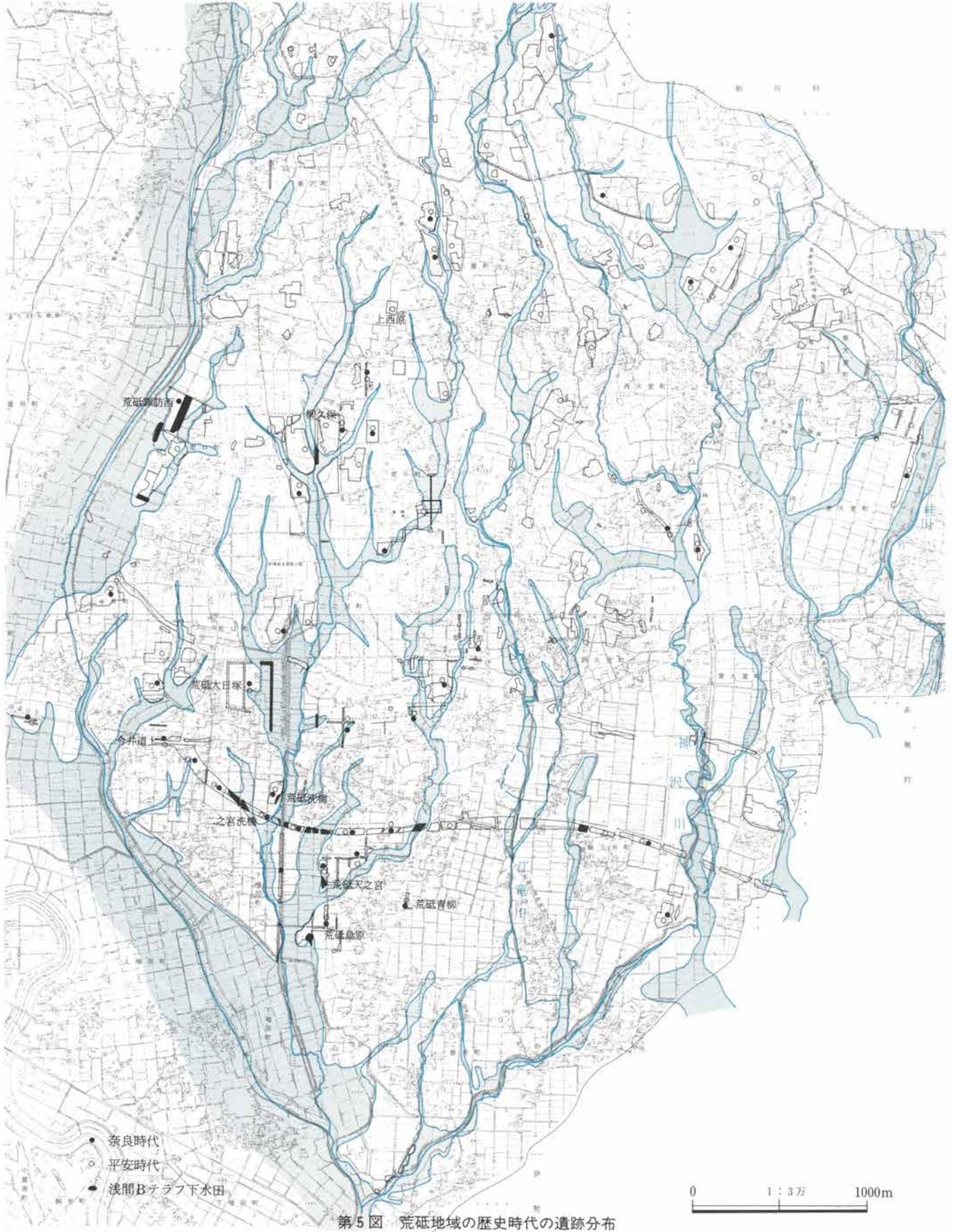
砥川、東の神沢川・桂川で区切られた地域（旧村名から荒砥地域と呼ぶ）の奈良・平安時代の遺跡分布図である。資料は、主に前橋市域の発掘調査成果であるので、遺跡を網羅しているものではないが、傾向は把握できるものとする。

遺跡分布図のスクリーントーン部分は、実体視鏡による空中写真判読によって「本来の沖積地」を示したもので、地形改変を受けない原地形といえるものである。白抜き部分は、微高地・台地を含んでいる。「本来の沖積地」は水利や土壌のある水田可耕地である。さらにこれらの条件を整えば、白抜きにした微高地部分にも水田耕作地が及ぶ可能性がある。なお、河川は、現河道を示した。

分布図を見ると、荒砥地域の奈良・平安時代の遺跡は中央部やや西側に集中しているように見える。しかし、本図は発掘調査された遺跡のみの分布図であるので、これは実態ではない。この偏在は、東側に比較して西側の方が発掘調査地点の多いことに起因していると考えられる。発掘調査がおこなわれれば、東側にも歴史時代の遺構が検出されることは、発掘調査が進んでいる西側に遺跡が多いことから推定できる。ただ偏在について一つ指摘しておきたいことは、古墳時代の遺跡との関連性である。『荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ』でみたように、荒砥地域の6世紀以降の古墳は江竜川以東に偏在している。この偏在と歴史時代の遺跡の分布状況に関連があるかどうかは、検証する必要があるだろう。

粗密の偏りがある発掘調査の成果で、全体的な傾向を述べることはできないので、比較的発掘調査の進んでいる宮川流域の状況をみておこう。宮川流域は弥生時代中期後半に農耕集落が成立し、古墳時代前期には、流域の台地縁辺に一定間隔をもって、遺跡が並ぶように分布する。古墳時代後期には、人工的な農業用水確保によって、それまで遺跡のなかった地点にも集落が検出されるようになる。（『荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ』第7・8図）

奈良・平安時代の遺跡は、それ以前からの遺跡にほぼ重複する。荒砥島原遺跡や荒砥天之宮遺跡・荒



第5図 荒砥地域の歴史時代の遺跡分布

砥大日塚遺跡・柳久保遺跡等ほとんどの遺跡がそうである。農民たちは、宮川沖積地に開発された水田耕作地を保持・拡大してきたのであろう。また、荒砥青柳遺跡のような台地中央部に住居が検出される

遺跡もある。歴史時代になると、水田耕作地の拡大によって、居住域が台地縁辺から内部に遷移する傾向がみられるようになるのである。このような遺跡の変遷は、他の小河川流域でも同様である。

検 索 文 献

二之宮遺跡群緊急発掘調査概報（荒砥南部土地改良事業に伴う第2年次調査）	1976	群馬県教委・姉群埋文
荒砥上川久保遺跡 昭和50、51年度県営圃場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書	1982	群馬県教委・姉群埋文
荒砥前原遺跡・赤石城址 昭和51年度県営圃場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書	1985	群馬県教委・姉群埋文
荒砥東原遺跡 昭和53年度県営圃場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書	1979	姉群埋文
荒砥島原遺跡 昭和55年度県営圃場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書	1984	姉群埋文
荒砥二之堰遺跡 昭和55年度県営圃場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書	1985	姉群埋文
荒砥天之宮遺跡 昭和55年度県営圃場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書	1988	群馬県教委・姉群埋文
荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡 昭和55年度県営圃場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書	1989	群馬県教委・姉群埋文
荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡 昭和56年度県営圃場整備事業荒砥南部に係る埋蔵文化財発掘調査報告書	1986	群馬県教委・姉群埋文
荒砥北三木堂遺跡Ⅰ 昭和56年度県営圃場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書	1991	群馬県教委・姉群埋文
荒砥北三木堂遺跡Ⅱ 昭和56年度県営圃場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書	1994	群馬県教委・姉群埋文
昭和56年度県営圃場整備事業荒砥北部地区埋蔵文化財発掘調査概報 荒砥大日塚遺跡	1982	姉群埋文
昭和58年度事業概要県営圃場整備事業荒砥北部地区埋蔵文化財発掘調査 荒砥荒子遺跡・荒砥宮田遺跡・荒砥諏訪西遺跡・荒砥諏訪遺跡	1985	姉群埋文
昭和58年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報	1984	群馬県教委
提東遺跡	1985	群馬県教委
昭和59年度事業概要県営圃場整備事業荒砥北部地区埋蔵文化財発掘調査 試掘・泉沢谷津遺跡・荒砥上西原遺跡	1985	姉群埋文
昭和59年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報	1984	群馬県教委
昭和60年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報	1986	群馬県教委・調査会
上西原・向原・谷津 昭和60年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告	1986	群馬県教委
昭和61年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報	1986	調査会・群馬県教委
丸山・北原 昭和61年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告	1987	群馬県教委
昭和62年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報	1988	調査会・群馬県教委
丸山・北田下・中畑・村主・中山B 昭和62年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告	1988	群馬県教委
阿弥陀井土道上・伊勢山・大道・山王・明神山 昭和63年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告	1989	群馬県教委
下境Ⅰ・天神 平成元年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告	1990	群馬県教委
舞台・西大室丸山 平成2年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告	1991	群馬県教委
富士山Ⅰ遺跡1号古墳 平成3年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告	1992	群馬県教委
昭和57年度実績報告 県営圃場整備事業荒砥北部地区埋蔵文化財発掘調査	1983	姉群埋文
飯土井二本松遺跡・下江田前遺跡 一般国道17号線（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	1991	建設省・群馬県教委・姉群埋文
二之宮宮東遺跡 一般国道17号線（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	1994	建設省・群馬県教委・姉群埋文
飯土井中央遺跡 一般国道17号線（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	1991	建設省・群馬県教委・姉群埋文
二之宮千足遺跡 一般国道17号線（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	1992	建設省・群馬県教委・姉群埋文
富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群 土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報	1980	前橋市教委
西大室遺跡群Ⅱ 土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報	1981	前橋市教委
富田遺跡群・西大室遺跡群 土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報	1982	前橋市教委
西大室遺跡群 土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報	1983	前橋市教委
富田遺跡群 土地改良事業実施地区ならびに新農業構造改善事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報	1981	前橋市教委
一般国道50号（東前橋拡幅）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 整理事業	1993	姉群埋文
県道今井前橋線地区内埋蔵文化財発掘調査報告書 荒砥上諏訪遺跡	1977	群馬県教委
県道今井前橋線地域内埋蔵文化財発掘調査報告書 荒砥五反田遺跡	1978	群馬県教委
地田栗田遺跡 市道246号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	1994	前橋市埋文発掘調査団
群馬県前橋市荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書	1990	前橋市教委・前橋市調査団
鶴谷遺跡群 前橋総合運動公園事業地区内埋蔵文化財発掘調査概報	1982	前橋市教委
鶴谷遺跡群 前橋総合運動公園事業地区内埋蔵文化財発掘調査概報	1982	前橋市教委
群馬県前橋市小稲荷遺跡発掘調査報告書	1987	前橋市教委・前橋市調査団
女堀一中世初期・農業用水址の発掘調査	1984	姉群埋文
柳久保遺跡群Ⅰ 1985 前橋市埋文発掘調査団	横俵遺跡群Ⅳ	1991 前橋市埋文発掘調査団
柳久保遺跡群Ⅲ 1986 山武考古学研究所	横俵遺跡群Ⅴ	1992 前橋市埋文発掘調査団
柳久保遺跡群Ⅳ 1987 前橋市教委・前橋市調査団	横俵遺跡群Ⅶ	1993 前橋市埋文発掘調査団
柳久保遺跡群Ⅴ 1988 前橋市埋文発掘調査団	内掘遺跡群	1988 前橋市埋文発掘調査団
柳久保遺跡群Ⅵ 1988 前橋市教委・前橋市調査団	内掘遺跡群Ⅱ	1989 前橋市埋文発掘調査団
柳久保遺跡群Ⅶ 1988 前橋市埋文発掘調査団	内掘遺跡群Ⅲ	1990 前橋市埋文発掘調査団
横俵遺跡群Ⅰ 1990 前橋市埋文発掘調査団	内掘遺跡群Ⅳ	1991 前橋市埋文発掘調査団
横俵遺跡群Ⅱ 1991 前橋市埋文発掘調査団	内掘遺跡群Ⅴ	1993 前橋市教委
横俵遺跡群Ⅲ 1991 前橋市埋文発掘調査団		

荒砥地域では、15地点の浅間Bテフラ埋没水田が検出されている。これらは1108年に浅間山が爆発する以前に開かれていた水田である。その多くはこの宮川流域で検出されているが、近年、赤城南麓を横断する上武道路に伴う調査では、樹枝状の谷地にもこの水田跡を検出した。また、荒砥諏訪西遺跡では、広大な微高地上の浅間Bテフラ下水田も検出されており、水田耕作地の拡大を示している。このことから、荒砥地域の可耕地は12世紀初頭には開発されていたことが理解されよう。

荒砥地域は律令期には勢多郡域にあり、東山道の通過ルートでもある。一般農耕集落以外の遺跡も検出されている。上西原遺跡では8世紀末から9世紀末まで存続した方形区画内の基壇建物が検出され、寺院もしくは郡衙と考えられている。今井道上・道下遺跡では8世紀後半以前の二重区画溝の中に大形掘立柱建物が検出された。また、宮川下流域の二之宮洗橋遺跡では「芳郷」、荒砥洗橋遺跡では「大郷長」の墨書土器が出土している。これらの文字資料から、周辺が勢多郡の「芳賀郷」あるいは「大□郷」にあたと推定されている。

3. 発掘調査の方法と経過

荒砥上ノ坊遺跡の発掘調査では、発掘調査に先立って実施した遺跡分布調査結果と工事設計とを照合し、遺構面を破壊する切り土部分をまず、発掘区とした。また、分布調査に基づいて道水路部分に大形掘削重機(バックフォア)による試掘トレンチを適宜設置し、遺構の有無の確認をおこなった。その結果、11区の発掘区を調査することとなった。

1・2区は、遺跡のほぼ中央を横断する「女堀」と、その南北に広がる中央の低台地の大部分である。工事工程との調整から、南側を1区、北側を2区とした。3区は西側の沖積地を隔てた対岸の台地の縁辺で切り土になる部分である。3区から東へは、中央低台地を貫いて道路が新設されるので、その部分へも試掘トレンチを設定した。4区も西の対岸の台地縁辺で、道路の試掘トレンチで遺構が検出されて

広げた発掘区である。5区は東側沖積地を隔てた対岸の台地で、これも道路の試掘トレンチで遺構が検出された。6区は中央低台地の突出部で、切り土部分である。7区は東側台地の縁辺で切り土部分と、周辺の道水路部分の試掘トレンチおよびその拡張区である。8～10区は中央台地の北部であるが、いずれも道路の試掘トレンチで遺構が検出されて広げた発掘区である。11区は西側台地のやや内部に位置している。ここも道水路部分の試掘トレンチと拡張部分である。

発掘区内には記録用の一辺5mのグリッドを設定した。グリッドの基準は、ほ場整備の工事用の杭を利用した。グリッド南北ラインの国家座標との偏角は、1～10区が西へ1°04'16"、11区が西へ4°である。すべての区の一辺5mの小グリッドは、北から南へアルファベット(a～u)を、西から東へ数字(0～19)を付した。また、女堀を含めた1・2区、4区、7区では、それぞれ個別の100m四方の大グリッドを設定し、杭の呼称を大グリッド(アルファベット)―小グリッド(アルファベット―数字)で表している。グリッドの呼称は、すべての区で北西隅の杭を用いている。

発掘区は幾つかの地形に分散しており、各区ごとに土層の堆積状況や遺構確認面が異なっている。

1・2・8・9・10区のある低台地は、現耕作土下に、20cmほどの暗燈褐色土、5～20cmの軽石混じりの黒色土が堆積している。この黒色土は地点によっては、削られて残っていないところもある。これらを除去した暗灰褐色土上面で遺構が検出された。6区も基本的に同様の土層堆積を示していた。

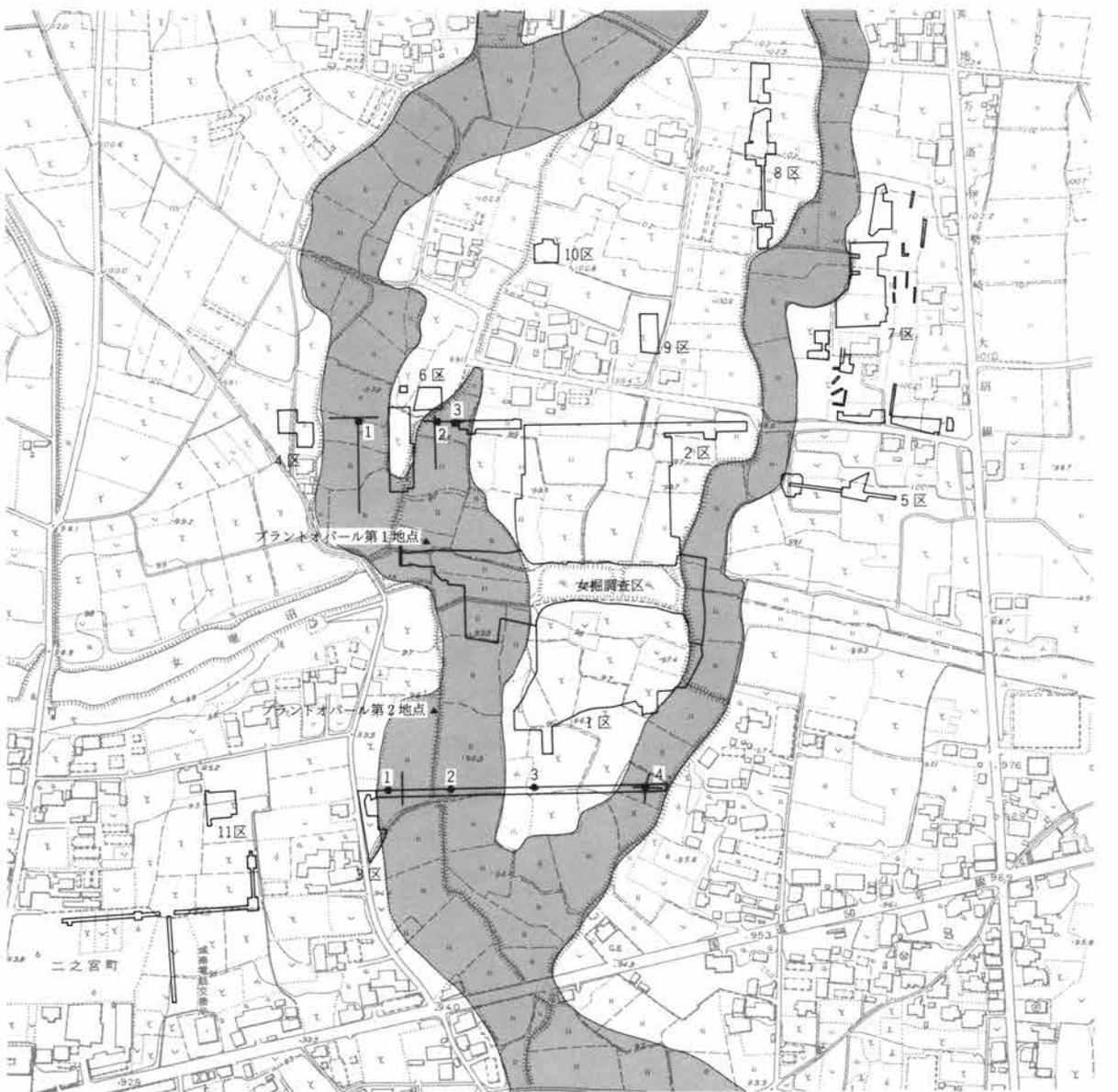
3・4・11区のある西側台地と5・8区のある東側台地は、現耕作土下の暗褐色土を除去すると、ローム層上面となり遺構が確認される。

低地部の土層は、沖積地を横断して新設される道水路部分に設定した試掘トレンチで観察した。西側の沖積地に設定したトレンチのほぼ全域で浅間Bテフラが確認された。浅間Bテフラの下層はやや粘質の黒褐色土で、下層にいくにしたがって植物遺存体

が多く含まれるようになる。浅間C軽石はトレンチの一部で深掘りした地点で確認できた。そこは沖積地の中央部で、浅間C軽石を確認したのは地表下2mのところである。浅間Bテフラ・浅間C軽石両テフラ直下の水田の有無については、調査時には確定できなかった。

荒砥上ノ坊遺跡の調査は、6月19日から女堀の発掘が始まった。1～11区の発掘調査は、女堀の調査が終了間近の9月17日から、女堀の両岸の微高地

にある1・2区の表土掘削作業から開始した。その後、工事工程との調整と体制の強化を図りながら、調査を実施した。そして、荒砥上ノ坊遺跡の発掘調査は1月25日に完全に終了した。24日には一部の体制で、K工事の下押切遺跡の低地部分の調査に移行し、25日には全体制が下押切遺跡に移った。なお、荒砥上ノ坊遺跡の調査で記録した図面・写真の基本整理・遺物の洗浄・注記作業は、下押切遺跡の調査が終了した2月5日から3月5日まで実施した。



第6図 荒砥上ノ坊遺跡の発掘区

0 1 : 5000 200m

第2章 古墳時代の遺構と遺物 (第1分冊補遺)

古墳時代(7世紀を含む)と確定できる遺構は、既刊の『荒砥上ノ坊遺跡I』で報告したが、これに漏れたものが判明したので、ここで補っておきたい。

I区40号住居

位置 Ih・i-8グリッド

重複 北側のほとんどを女堀に切られている。

形状 東西壁をほぼ南北方向にする方形を呈すると推定されるが、北側が切られているので、全体形状は不明である。周壁はほぼ直線的に掘られており、隅は丸い。南壁ほぼ中央に長軸0.88m、短軸0.60mの半円形の張り出し部が検出されたが、住居にともなうものかどうかは特定できなかった。規模は東西長5.05mである。

面積 測定不可 南壁方位 N-76°-E

床面 遺構確認面から14cm掘り込んで床面とな

る。床面は、小さな凹凸はあるが全体には平坦である。

炉 出土遺物の時期からすれば、炉が付設されていたと考えられるが、残存する範囲では検出されなかった。

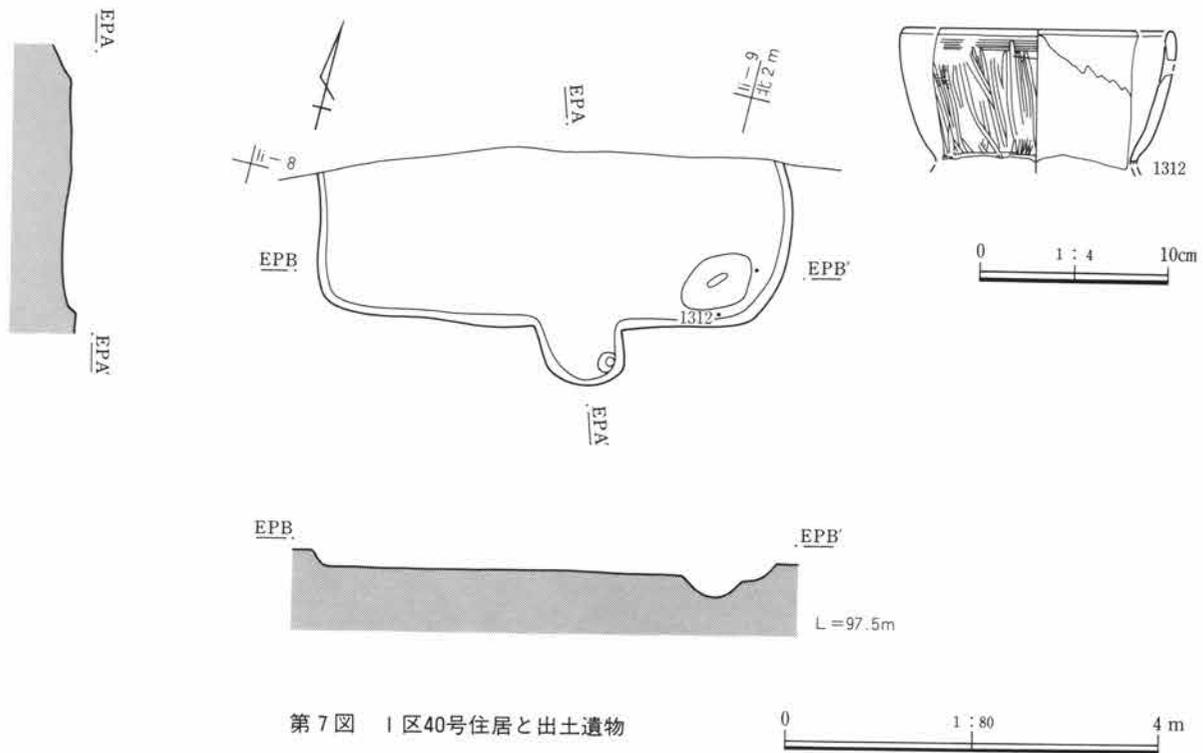
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅の壁沿いに長径0.68m、短径0.57m、深さ0.24mの楕円形の貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。

遺物 23点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。図示した土師器埴形土器(1312)は貯蔵穴脇、南壁沿いに床面直上で出土した。(遺物観察表:1頁)

所見 出土遺物から、4~5世紀の住居と考えられる。



第7図 I区40号住居と出土遺物

Ⅰ区71号住居

位置 Jb-10・11グリッド 写真 PL15
 重複 西壁を46号土坑に切られている。また、西半部に60号土坑が掘り込まれており、本住居床面まで達している。

形状 短軸をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁は直線的に掘られ、隅は丸い。規模は長軸3.72m、短軸3.08mである。

面積 計測不可 方位 N-109°-E
 床面 遺構確認面から25cm掘り込んで床面となる。床面は、中央部でやや凹凸があり、炭化材や炭化物が床面に広がっていた。また、中央部に直径40cmほどに焼土化した床面があり、炉の可能性が高い。
 埋没土 黄褐色土塊や焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

炉 住居中央やや北東部に、直径40cmほどの範囲で、床面が焼土化していた。炉と考えられるが、顕著な窪みや支脚等の施設は検出されなかった。

周溝 検出されなかった。

柱穴 主柱穴は検出できなかったが、北壁中央よ



Ⅰ区71号住居全景（西から）

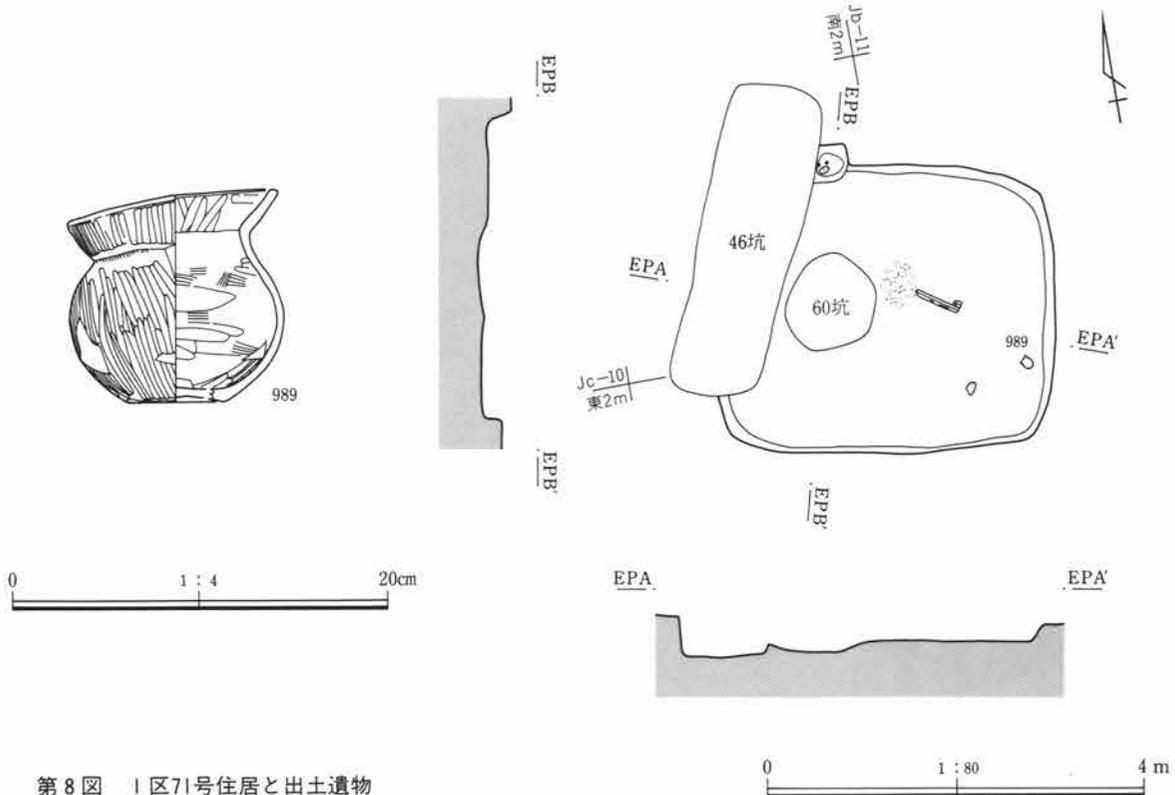
り西側に直径40cm、深さ9cmの小ピットが検出された。数点の土器と礫が出土したが、本住居に伴うと断定できなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 60号土坑とあわせて、580点余りの遺物が出土している。床面に近い遺物は、東壁際で倒立して出土した土師器甕形土器(989)のみである。

(遺物観察表：1頁)

所見 出土遺物から、4世紀代の住居と考えられる。



第8図 Ⅰ区71号住居と出土遺物

第3章 歴史時代前半期の遺構と遺物

1. 概要

荒砥上ノ坊遺跡は、古墳時代初頭からこの地点に定着した農耕集落遺跡である。縄文時代前期の住居が3軒検出されているが、それ以降、古墳時代初頭までの遺構は、発掘調査では検出されていない。

『荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ』で報告した通り、荒砥上ノ坊遺跡の古墳時代の住居跡は61軒である。これらの住居跡の時期は、第1表のように、3世紀後半から4世紀初頭と、6世紀後半から7世紀に中心があり、その間は、5世紀前半の住居が3軒検出されたのみである。検出された住居跡には断絶があるが、水田耕作地は継続していると考えられることから、この間の時期を埋める住居跡が発掘区以外に存在すると考えられる。

これらの古墳時代の住居跡の分布には大きな変化が看取された。3世紀後半から4世紀初頭の住居跡群は、中央低台地の西縁に、遺跡の西側低地を囲むような位置に分布し、その周辺に畠作耕地、低地を隔てた西台地に墓域としての方形周溝墓が検出された。(『荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ』第9図) これに対して、6世紀後半以降の住居は、中央低台地の東半にも分布域が広がり、西台地や東台地にも7世紀後半になると住居がつくられるようになるのである。(『荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ』第90図)

これらに続く奈良時代以降の住居は、8世紀初頭から11世紀まで、合計191軒が検出された。これらの住居跡は4区を除く10カ所の発掘区に分布しており、基本的には古墳時代後期の居住域の占地傾向を継続している。そして、さらに周辺地区に住居の分布が広がるようになるのが特徴である。

本書では、この奈良時代以降の住居のうち8世紀から9世紀前半までの86軒について掲載した。また、その他の遺構は、確実にこの時期と断定できるもののみ報告した。内訳は土坑14基、井戸2基、溝1条である。

古墳時代を通じて、居住域であった中央低台地の1・2区では、歴史時代前半期の住居が全体に分布し、古墳時代中・後期の遺構分布を踏襲している。しかし、歴史時代前半期の方が時間的には短いにもかかわらず、全体の遺構検出密度は高くなっている。特に8世紀前半の遺構の数が多く、低台地の全域に分布している。しかし、8世紀後半には住居数は半減し、8世紀後半は低台地東半、9世紀前半は西半に偏在するようになる。これらの遺構分布については後に第4章で詳述したい。

井戸と断定できる遺構は1区で2基検出した。直径0.8~1.0mの筒形の井戸である。遺物は8世紀前半の遺物を中心に出土している。また、1・2区で特徴的な土坑が集中的に検出された。1・2区で検

第1表 荒砥上ノ坊遺跡の古墳時代遺構一覧表

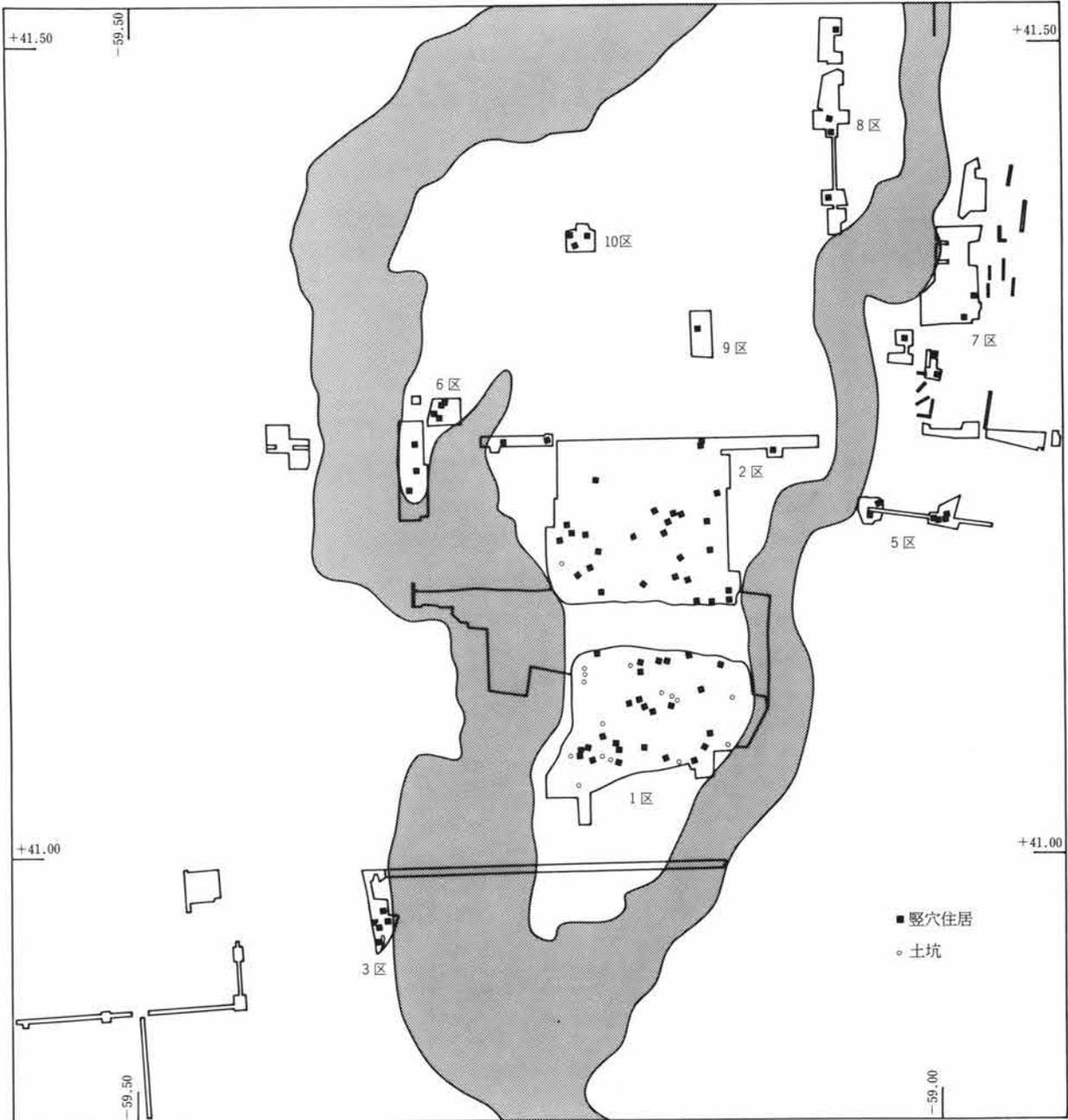
地形単位	発掘区	3世紀		4世紀		5世紀		6世紀		7世紀	
		前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半
中央低台地	8区									1軒	1軒
	9区		As-C埋没品								
	10区										
	1・2区		住居29軒		3軒			1軒	1軒	17軒	
	6区		住居3軒								
西台地	4区		周溝墓6墓								
	3区							1軒			2軒
	11区										
東台地	7区										1軒
	5区										1軒

1. 概 要

出された14基の土坑は、第2表(P. 14)のように3タイプに分けられる。これらの土坑では、8世紀から9世紀の土器が出土している。円形・フラスコ状断面を呈する土坑は、1区で4基検出された。これらは中央低台地の東部に偏在する。大形円形・すり鉢状断面の土坑は、1区で6基、2区で1基検出された。これらは低台地西縁辺に偏在する。残りの4基は不定形である。調査では、前2タイプの特徴的な土坑の機能を確定するにはいたらなかった。

また、古墳時代後期に居住域になった8区でも、継続して住居が検出された。古墳時代後期に住居が検出されなかった6・9・10区には、8世紀を中心にした住居が検出された。台地の縁辺だけでなく、広い台地の内部も居住域になっていることがわかる。

西側台地では、東縁辺の3区に、古墳時代後期から継続して8世紀の住居が検出された。また、西側台地中央部の11区のトレンチ調査では、9世紀前半



第9図 歴史時代前半期の遺構分布

第2表 歴史時代前半期の土坑一覧表(規模m)

土坑 No	平面形	断面形	長軸×短軸×深さ
1区8号土坑	円形	フラスコ形	1.70×1.51×0.71
1区9号土坑	円形	フラスコ形	1.55×1.49×0.59
1区34号土坑	円形	フラスコ形	1.51×1.38×0.90
1区60号土坑	円形	?	1.16×0.92×0.07
1区35号土坑	大形円形	すり鉢状	2.71×2.59×1.70
1区36号土坑	大形円形	すり鉢状	2.75×2.65×1.66
1区37号土坑	大形円形	すり鉢状	3.22×3.20×2.02
1区38号土坑	大形不正円形	すり鉢状	4.47×4.07×1.71
1区45号土坑	大形楕円形	すり鉢状	4.06×3.76×1.50
1区52号土坑	大形楕円形	すり鉢状	2.55×2.45×1.35
1区17号土坑	不定形	箱形	1.78×1.20×0.39
1区32号土坑	不定形	不定形	1.40×1.15×0.60
1区41号土坑	不正楕円形	不定形	6.15×4.15×0.60
1区44号土坑	楕円形	箱形	1.01×0.92×0.44
2区8号土坑	大形円形	すり鉢状	4.37×4.33×1.78

までの住居は確認されなかった。しかし、9・10区
の状況をみれば、トレンチ外に歴史時代前半期の居
住域が存在する可能性は高いだろう。

東側台地は縁辺の状況しか判明しないが、5区お
よび7区南端の地点は、古墳時代後期の遺構分布を
同じ地点で住居が検出された。7区北部の地点では、
古墳時代後期に遺構のなかった地点に住居が検出さ
れたが、その分布は散在的である。

低地の調査は、第1章でも述べたように、浅間B
テフラ・浅間C軽石を試掘トレンチで確認したにと
どまった。したがって、調査では両テフラ直下の水
田を確認することはできなかった。平成六年度に実
施したテフラ下の土壌採取とそのプラントオパール
分析では、西側低地内で浅間Bテフラ直下およびそ
の下層からそれぞれ8600個/g、6200～9100/gの
多量のイネのプラントオパールが検出された。この
分析結果や居住域の継続性を考えれば、本遺跡周辺
の低地では、浅間Bテフラ降下以前に水田耕作がお
こなわれていたことが推定できる。ただし、今回の
調査では開田時期を明らかにすることはできなかった。

出土遺物は、土器・石器・鉄器が出土した。これ
らは、一般的な農耕集落の住居内から出土するもの
と基本的には同様である。土器は在地の土師器・須
恵器等に加え、畿内産土師器を模倣した杯形土器や
ロクロ土師器の鉢形土器等が出土している。灰釉陶
器の明確な共伴はない。本遺跡出土土器は、県内の

他地域に比べるとやや古い型式の土師器が残存する
傾向が看取できる。これらをふまえた歴史時代土器
の分類と編年については、9世紀後半以降の整理作
業を経た上で、詳述したい。また、土製紡錘車と土
錘が出土している。

石器は、砥石・紡錘車と棒状礫を用いた敲石・磨
石が出土している。棒状礫は、敲打や摩擦等の明確
な使用痕がある場合は図化した。使用痕が観察でき
ないものについては図化しなかったが、重さおよび
石材のデータ化をおこなった。9世紀後半以降の資
料も含めて、その傾向を後に詳述したい。

鉄器は、8世紀から9世紀前半の遺構から6点が
出土した。形態が明確なものには、鉄鏃や刀子・鋳
があるが、形態不明の鉄片も出土している。また後
述するように、鉄生産に関連する遺物を出土した住
居もあった。そこで、整理作業にともなって、出土
した鉄器および鉄生産関連遺物の金属学的分析を実
施した。

分析結果から、3区3号住居(8世紀後半)で出土
した刀子は、銅含有量の高い鉄素材が使われている
ことが判明した。また、3区6号住居(8世紀後半)
から出土した鉄生産関連遺物の分析からは、銑鉄素
材を砂鉄を使って脱炭し、鋼をつくっていたことが
判明し、鉄生産の工程を具体的に復元する資料を得
ることができた。

3区6号住居からは、床面に焼土粒や炭化物粒が
散在し、多量の鉄滓や炉体・鞆羽口の破片が出土し
た。調査では鉄生産関連遺構が想定されたが、明確
な遺構としてとらえることはできなかった。しかし、
遺物整理の際、鉄滓等に混じって鉄塊系遺物と鍛造
剥片および鉄鏃が1点ずつ確認されて、一連の鉄生
産関連遺物の分析が可能となったのである。分析結
果の解析から、鉄塊系遺物・鉄滓と、製品としての
鉄鏃の成分は、一連のものとして矛盾がなく、素材
加工から製品生産まで、住居内でおこなっていた可
能性が高いことが判明した。この解析については、
第4章で詳述する。

2. 1・2区の遺構

1区1号住居

位置 IP-15グリッド 写真 PL1
重複 北壁を1号溝、東壁および南東隅を土坑に切られている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈するが、北壁は壊されており、全形は不明である。周壁は直線的に掘られているが、隅は丸い。規模は長軸3.10m以上、短軸2.83mである。

面積 計測不可 方位 N-82°-E

床面 遺構確認面から30cm掘り込んで床面となる。中央部が硬化していた。

埋没土 焼土粒や黄灰色土塊を含む黒褐色土で埋

まっていた。

竈 東壁ほぼ中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈と考えられるが、東壁を壊されているため、袖の先端基部と燃焼部底面の一部が残存しているのみである。

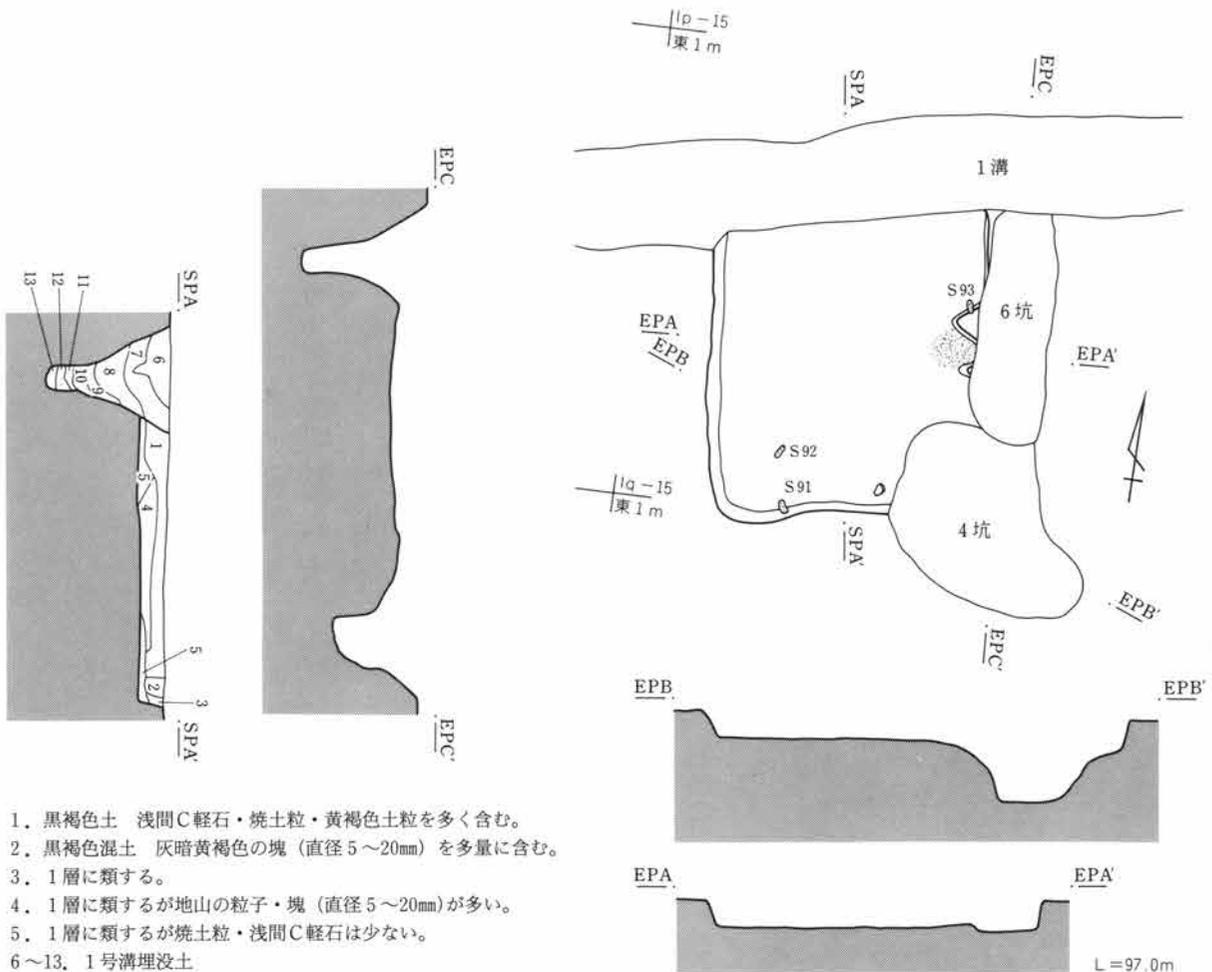
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

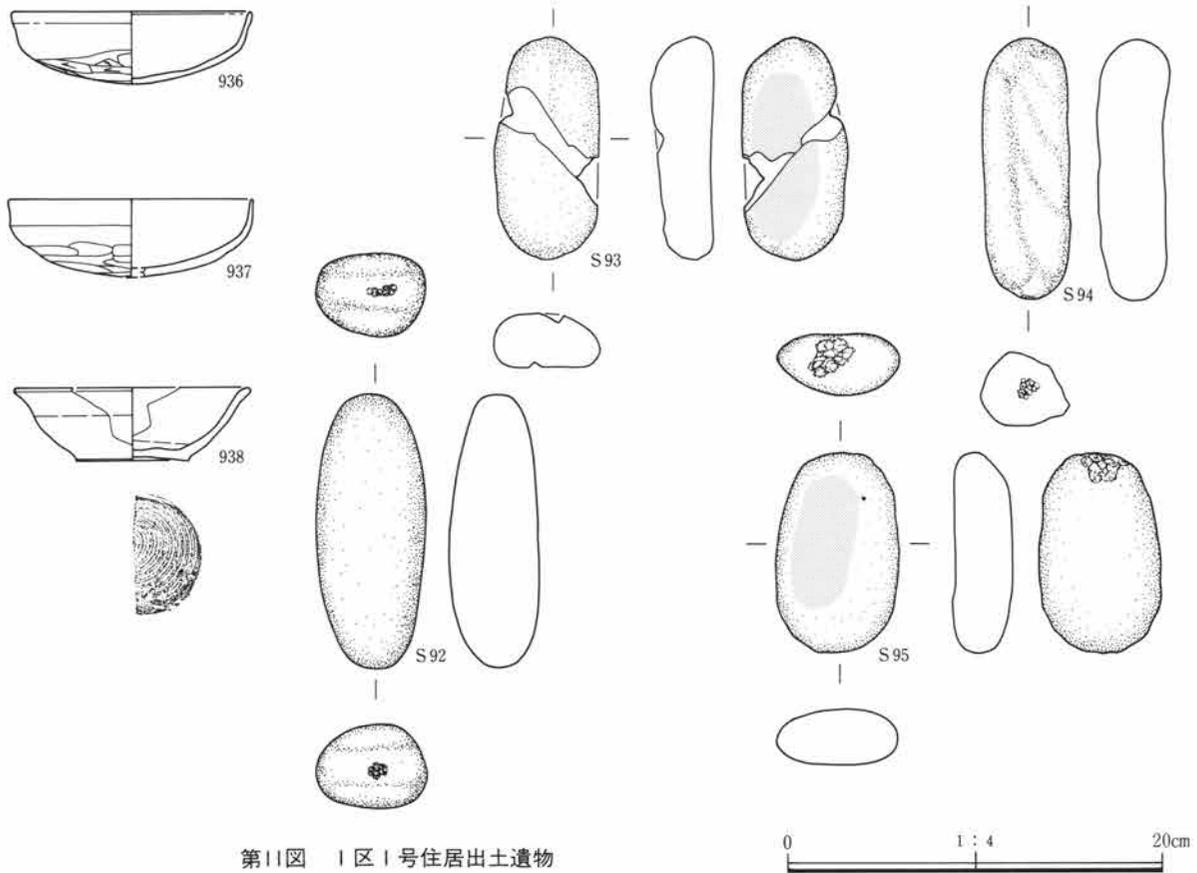
遺物 400点余りの遺物が出土しているが、床面近くから出土した遺物は竈左脇の礫(S93)と南西部の礫(S92)のみである。図示した土器は埋没土中から出土した。(遺物観察表：1頁)

所見 出土遺物から、8世紀後半の住居と考えられる。



第10図 1区1号住居

0 1:80 4m



第11図 1区1号住居出土遺物

1区2号住居

位置 It・Ja-14グリッド 写真 PL1・2
 重複 なし
 形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は直線的に掘られており、隅は丸い。規模は長軸4.60m、短軸3.30mである。
 面積 13.25㎡ 方位 N-96°-E
 床面 遺構確認面から54cm掘り込んで床面となる。竈前から中央部にかけては、著しく硬化していた。北および南壁沿いは硬化面がなかった。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が若干張り出す形態の竈で、向かって右側は25cm、左側も25cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は45cmである。燃烧部の壁は良く焼けて焼土化し、竈前には灰と焼土の互層が形成されていた。煙道部は壁から外へ95cm突出していた。燃烧部はやや窪み、壁のあたりで一段上がって

さらに煙道部へ斜めに傾斜している。

周溝 検出されなかった。

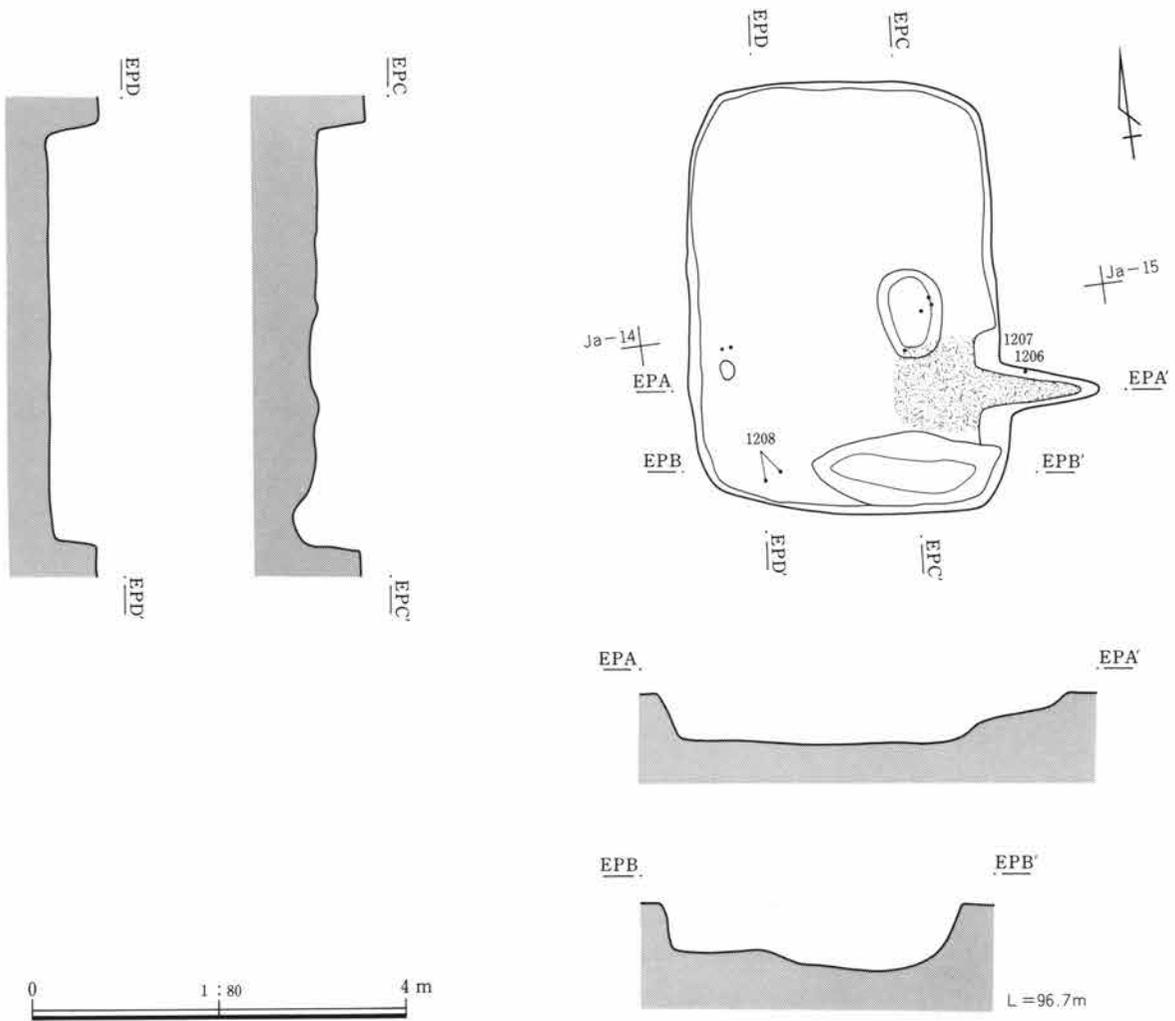
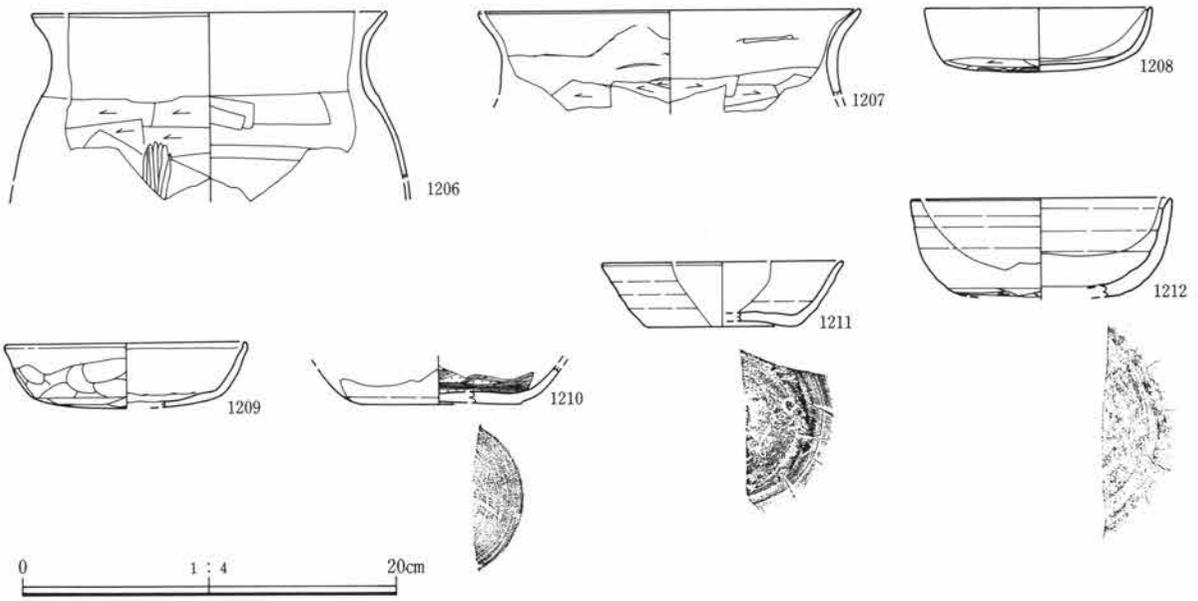
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 竈右脇が直径0.9mほどの円形に窪んでいたが、南壁にそって長さ2.0mの不定形な長楕円形になってしまい、定形的な貯蔵穴とは言いがたい。深さは0.27mである。

遺物 310点余りの遺物が出土している。埋没土中出土の遺物がほとんどである。竈前には床面直上の出土遺物もあったが、図示できない破片であった。図示した土師器杯形土器(1208)は南西部壁際の床面からやや上位で出土した。土師器甕形土器(1206・1207)は竈の煙道部壁から出土しており、竈構築あるいは使用にかかわった遺物である可能性が高い。(遺物観察表：1・2頁)

所見 出土遺物から、9世紀前半の住居と考えられる。

2. 1・2区の遺構



第12図 1区2号住居と出土遺物

1区6号住居

位置 Mb・c-0グリッド 写真 PL2
重複 竈煙道部の先端が9号住居に切られている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は直線的に掘られており、隅は丸い。規模は長軸3.95m、短軸3.87mである。

面積 12.35㎡ 方位 N-85°-E

床面 遺構確認面から56cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らで、中央部は硬化していた。住居掘削時に掘り窪められた中央部と掘り残された西壁沿いとの間には、5cmほどの段差ができていた。また、北壁際に直径1.2m、深さ0.35mの不整円形の土坑が検出されたが、住居の床面を切っていた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が若干張り出す形態の竈で、向かって右側は25cm、左側は25cm、袖の基部が

残存していた。焚口幅は30cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ55cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに傾斜し、煙道端部には平らな面ができていた。

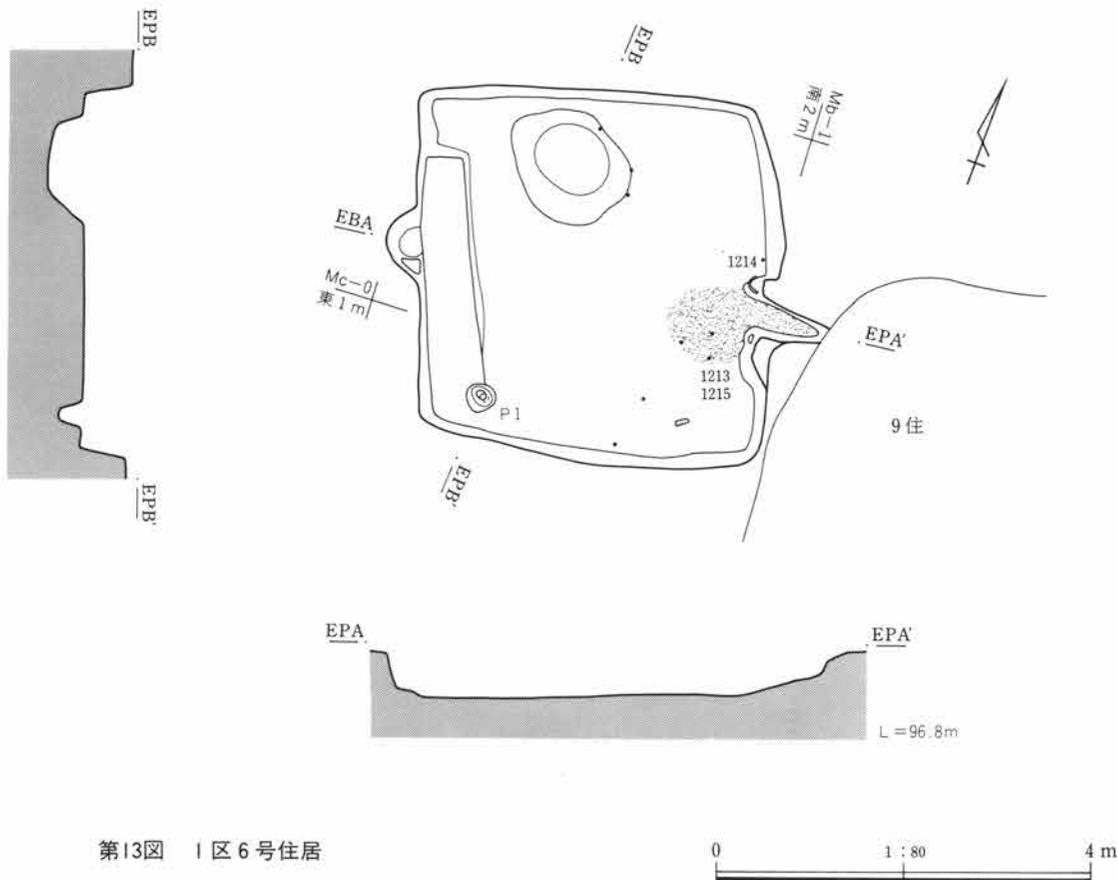
周溝 検出されなかった。

柱穴 1本の柱穴とも考えられる小ピット(P1)が、南西隅で検出された。柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:0.3×0.3×0.1cmである。

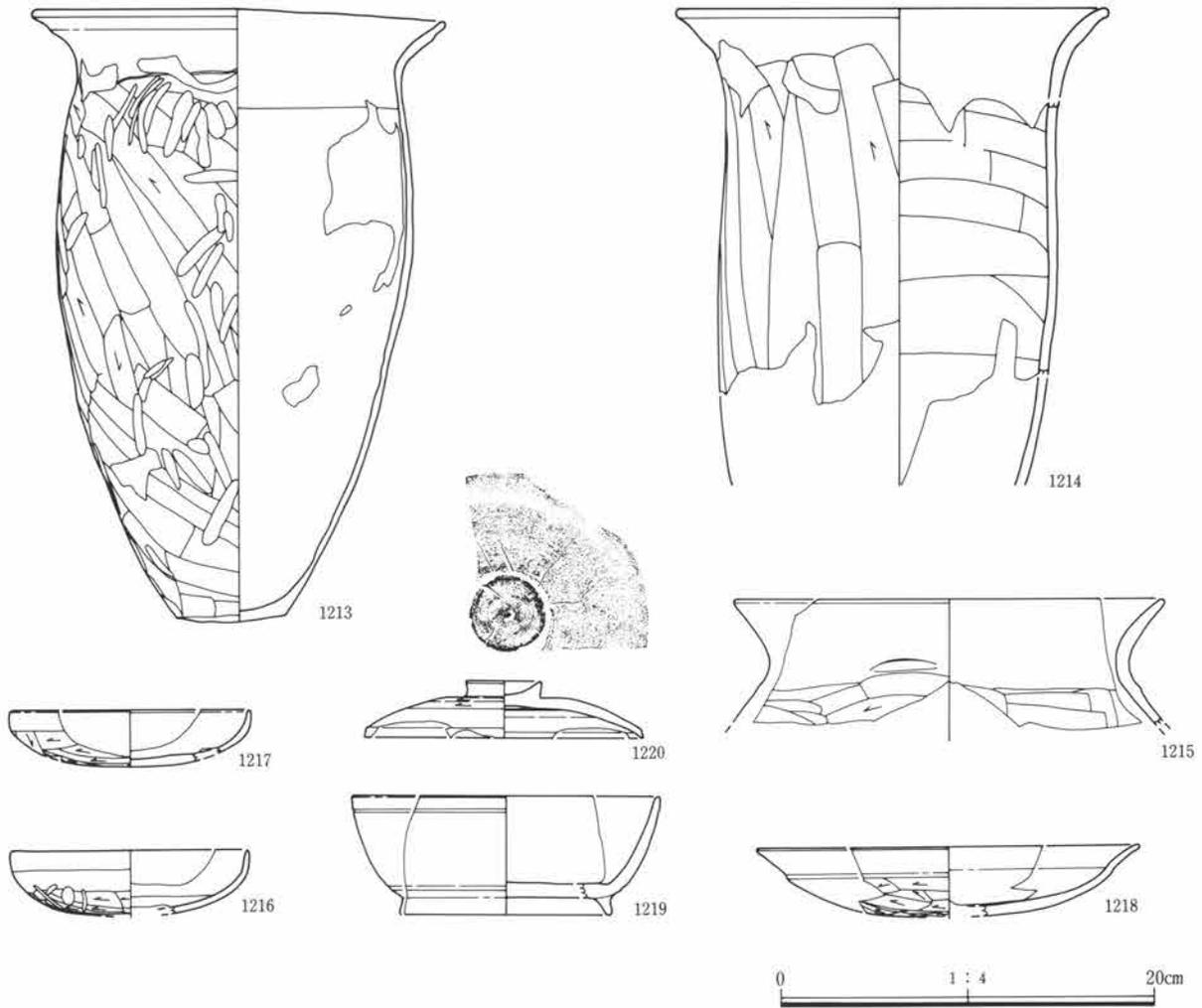
貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 130点余りの遺物が出土している。埋没土出土の遺物が多いが、床面に近い遺物は竈周辺に集中していた。図示した土師器甕形土器(1215)は竈前床面直上で出土した。また、甕形土器(1213・1214)は、竈袖部から出土しており、袖の芯材として使用されたと推定できる。(遺物観察表:2頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



第13図 1区6号住居



第14図 Ⅰ区6号住居出土遺物

Ⅰ区7号住居

位置 Lt・Ma-1・2グリッド

写真 PL2・3 重複なし

形状 対角線をほぼ南北方向にする正方形に近い長方形を呈する。周壁は東壁北半がやや膨らむほかは、直線的に掘られている。隅は丸い。規模は長軸3.44m、短軸3.12mである。

面積 9.03㎡ 方位 N-113°-E

床面 遺構確認面から26cm掘り込んで床面となる。竈周辺が硬化し、中央部はやや窪んでいた。

埋没土 下層は焼土粒を含む黄褐色土、上層は焼土粒・白色軽石を含む黒色土で埋まっていた。

竈 南東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、

向かって右側は28cm、左側は27cm、袖の基部が残存していた。竈の燃焼部はほぼ平らで良く焼けていた。煙道部は壁から外へ45cm突出していた。燃焼部の焚口幅は35cmで、竈前面の床面には掻き出された灰が残っていた。

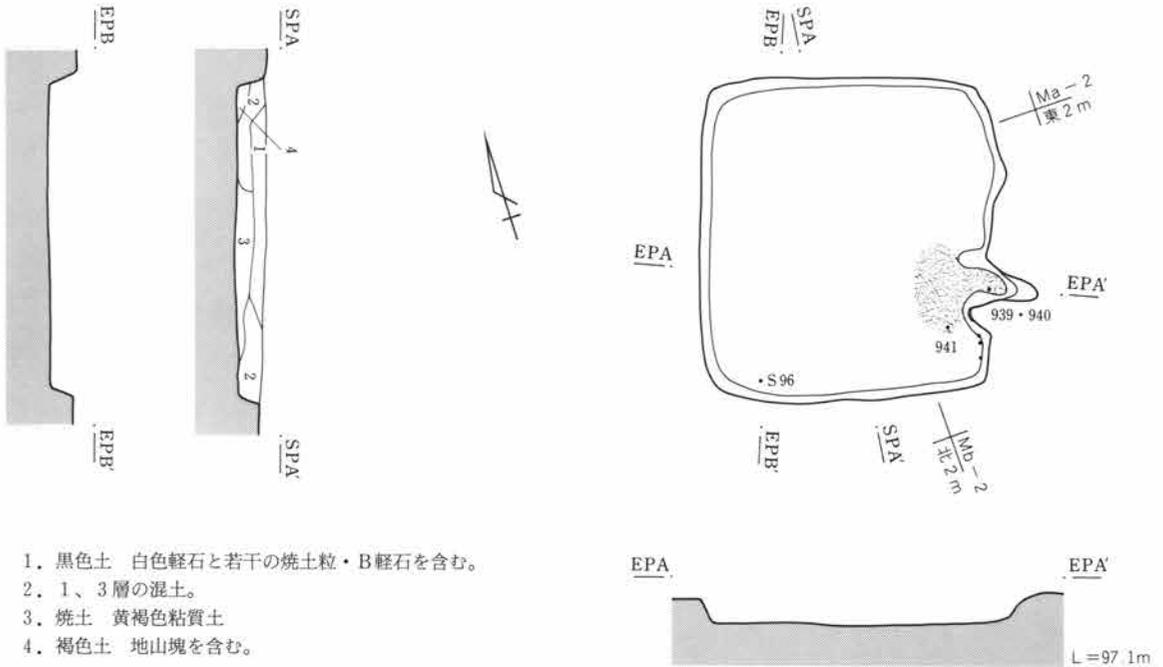
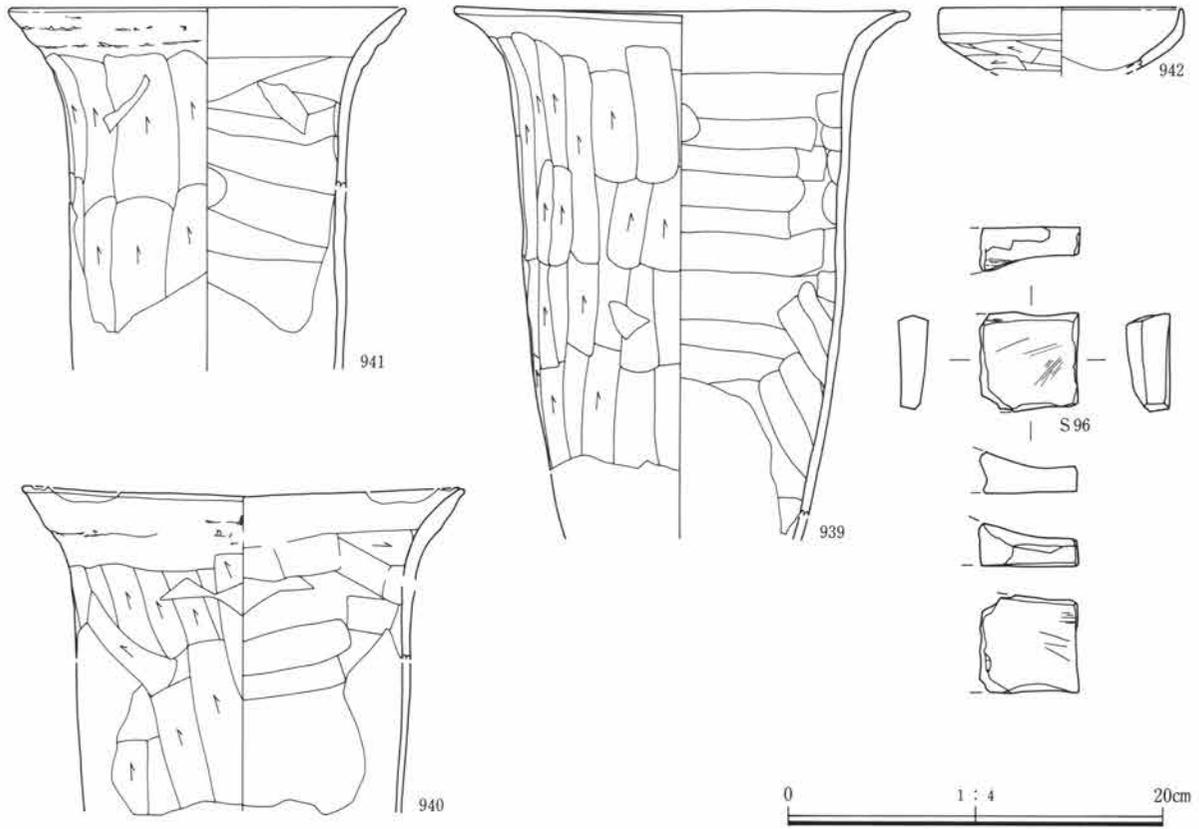
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 100点余りの遺物が出土している。床面近くから出土した土器はほとんどなく、図示した土師器甕形土器・杯形土器(939・940・941・942)も埋没土中の出土遺物である。(遺物観察表：2頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



第15図 Ⅰ区7号住居と出土遺物

1区13号住居

位置 Ls-2・3グリッド

写真 PL3・4 重複なし

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は直線的に掘られている。隅は南西隅が角張っているほかは、やや丸い。規模は長軸4.37m、短軸3.28mである。

面積 12.88㎡ 方位 N-90°-E

床面 遺構確認面から38cm掘り込んで床面となる。中央部は硬化しており、竈前面の床面には灰が広がっていた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は24cm、左側は25cm、袖の基部が残存していた。竈の燃焼部壁は良く焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ87cm突出していた。燃焼部の底面はほぼ平らで、煙道部まで緩やかに傾斜して

いた。焚口幅は80cmである。燃焼部中央灰層内で土師器杯形土器が出土した。

周溝 検出されなかった。

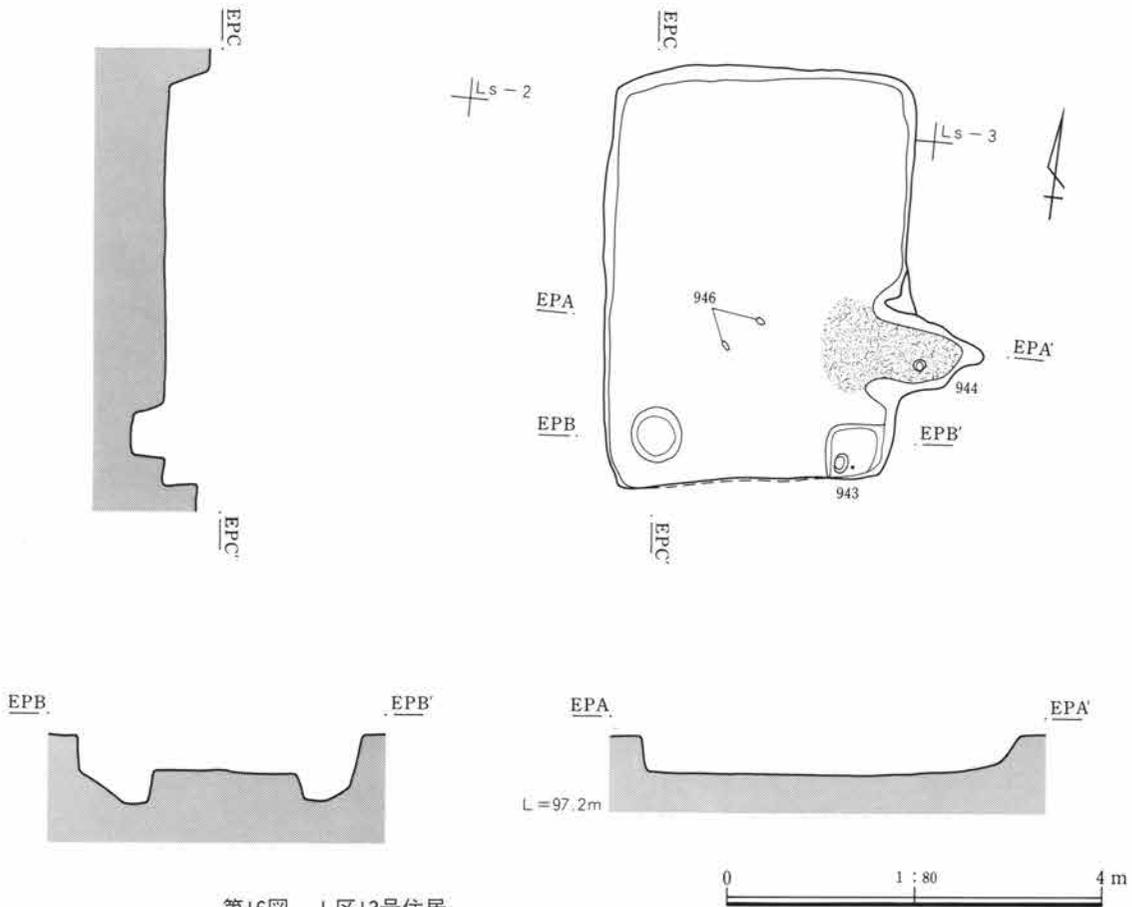
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 竈右側、住居南東隅で、長径0.66m、短径0.58m、深さ0.70mの隅丸方形の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴南西隅に土師器甕形土器(943)がほぼ完形で正立して出土した。また、住居南西隅に長径0.58m、短径0.54m、深さ0.34mの円形の土坑が検出された。

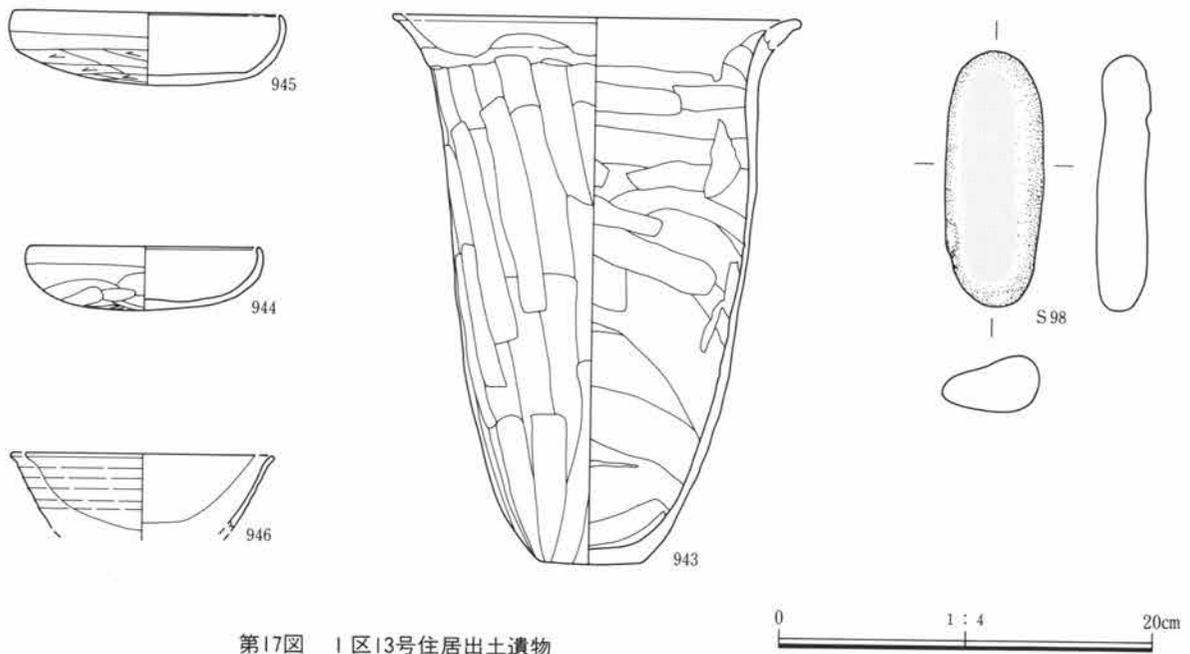
遺物 280点余りの遺物が出土している。図示した土師器甕形土器(943)は貯蔵穴底面直上、杯形土器(944)は竈灰面直上、945は中央部の床面直上で出土した。他の石器は埋没土中の出土である。

(遺物観察表：2・3頁)

所見 出土遺物から、8世紀後半の住居と考えられる。



第16図 1区13号住居



第17図 Ⅰ区13号住居出土遺物

Ⅰ区20号住居

位置 L・P-17グリッド 写真 PL4
重複 南部を1号溝が切っている。また、本住居の北東隅が16号土坑を切っている。

形状 長軸を南北方向にするほぼ長方形を呈する。南壁の両隅が東へやや偏っており、台形に近い長方形となっている。周壁は各壁の中央部がやや窪む傾向がある。隅はやや丸く掘られている。規模は長軸4.45m、短軸3.60mである。

面積 13.82㎡ 方位 N-102°-E
床面 遺構確認面から35cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らで、南部は比較的硬化していた。住居南部中央で、1号溝と重複して、長軸2.1m、短軸1.7m、深さ0.32mの楕円形の土坑が検出された。これは住居より新しく、住居に伴うものではない。

竈 検出されなかった。しかし、本遺跡の竪穴住居では、竈が東壁中央よりやや南側に付設されている例が圧倒的に多い。本住居のちょうどその位置には1号溝が重複しており、他の住居の例から推せば、本住居の竈は1号溝に切られた可能性が高い。

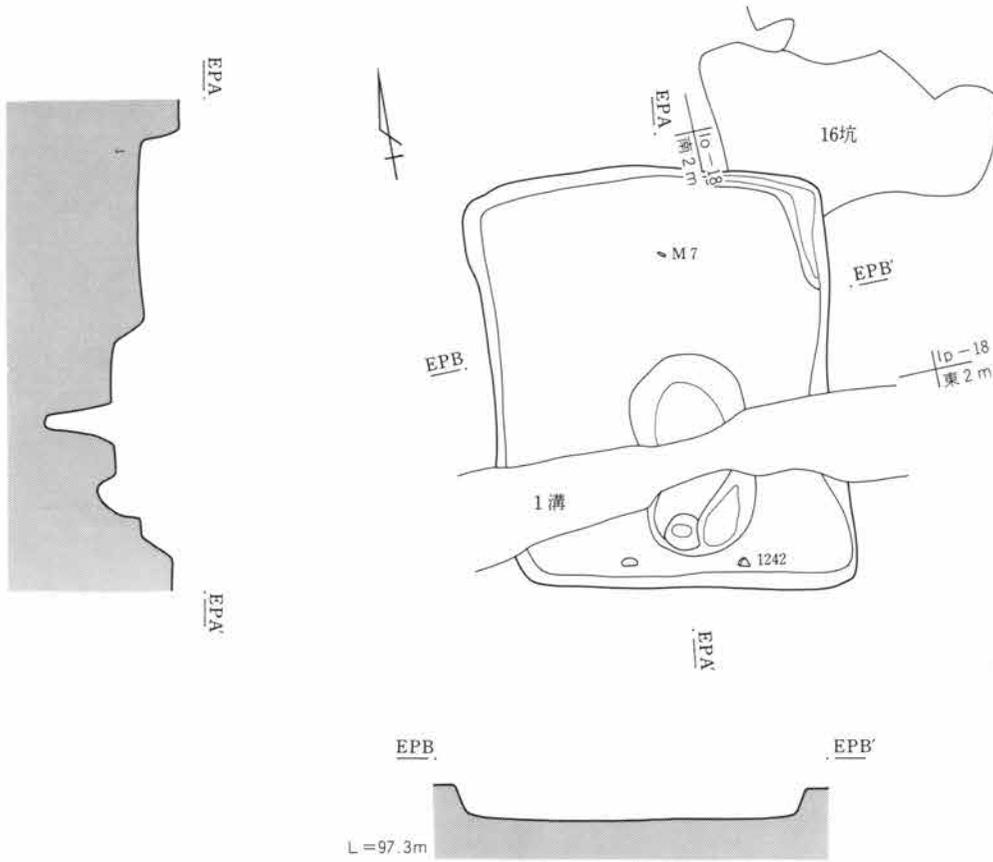
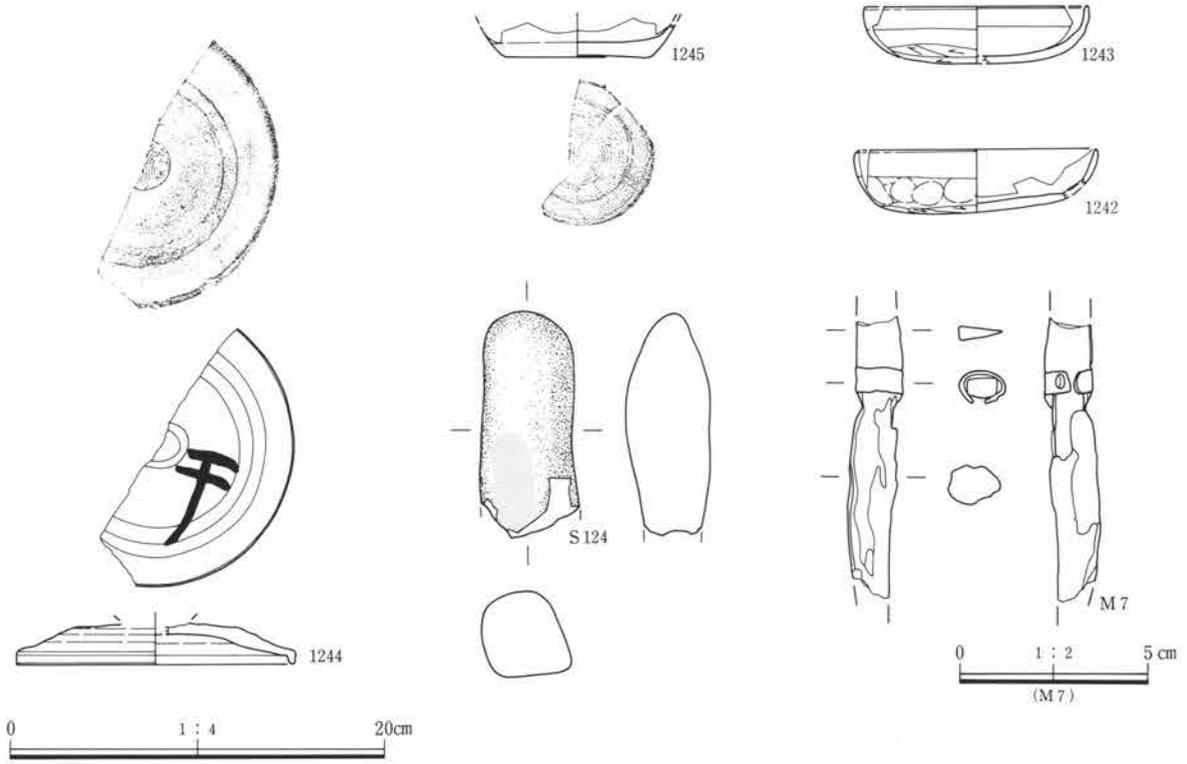
周溝 北東隅にのみ、L字形に幅20~30cm、深さ3~5cmの周溝状の小溝が検出されたが、いわゆる周溝かどうかは断定できない。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 180点余りの遺物が出土している。床面近くの遺物は少ない。埋没土中から土師器や須恵器の杯形土器が出土している。その中には墨書「千」の須恵器蓋形土器(1244)も含まれている。土師器杯形土器(1242)は南壁際で床面から7cm上で出土した。また住居北部の床面から7cmほど上で、鉄製刀子(M7)が出土している。この刀子は刃部のほとんどを欠損しているが、茎には柄の木質部や環状の金具も残存している。金属学的分析では銅の含有量の高い銚鉄を素材にしてつくられたことが判明した。棒状礫(S124)には磨り面が残るが、一端を欠損している。(遺物観察表：3頁)

所見 出土遺物から、9世紀前半の住居と考えられる。



第18図 I区20号住居と出土遺物

Ⅰ区 23号住居

位置 Jb-16・17グリッド 写真 PL5
重複 なし

形状 対角線をほぼ南北方向にする正方形を呈する。周壁は壁の中央部が膨らむように掘られている。隅は丸い。規模は長軸3.59m、短軸3.57mである。

面積 8.76㎡ 方位 N-79°-E

床面 遺構確認面から57cm掘り込んで床面となる。床面は、平らで硬化していた。

埋没土 下層は黄褐色土塊を多く含む褐色土、上層は焼土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は49cm、左側は36cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は50cmである。竈の燃焼部は良く焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ16cm突

出していたが、壁の延長線上では天井部の粘土および焼土が一部残存していた。燃焼部の底面はやや傾斜し、壁のあたりで急激に煙道部へ立ち上がる。竈内には遺物は出土しなかったが、燃焼部中央やや左よりに支脚の礫が残っていた。

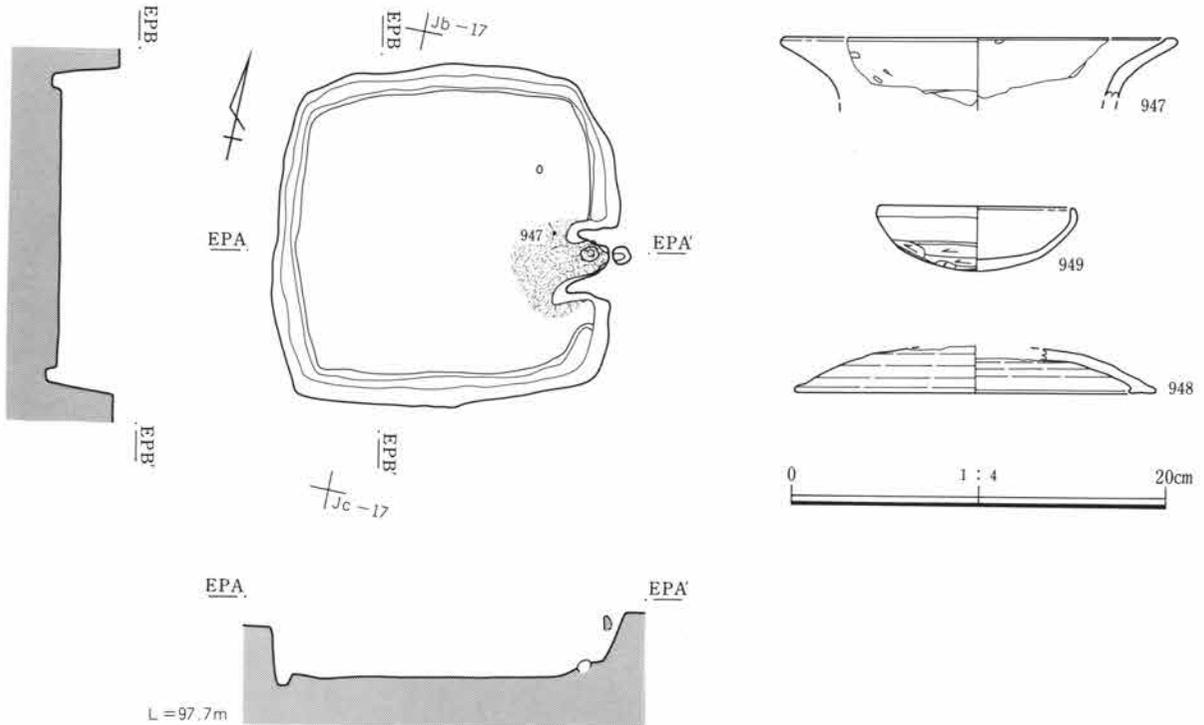
周溝 竈を除く、すべての壁沿いに幅12~15cmの周溝が検出された。

柱穴 検出されなかった。

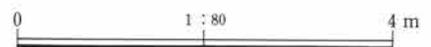
貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 100点ほどの遺物が出土している。土師器甕形土器(947)が竈前床面直上で出土している。図示した須恵器蓋形土器(948)、土師器杯形土器(949)は埋没土中から出土した。(遺物観察表：3頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



第19図 Ⅰ区23号住居と出土遺物



I区25号住居

位置 Lj・k-4グリッド 写真 PL5
重複 性格不明の土坑の上に、本住居はつくられている。

形状 東西壁を南北方向にする正方形を呈すると推定される。調査時に、住居に先行する土坑と重複した部分の住居の壁や床面がとらえられなかったため、土坑の底面まで掘ってしまった。したがって、本住居の形状は不定形になってしまった。残存している周壁はほぼ直線的に掘られている。隅はやや丸い。規模は東西2.92m、南北(2.84)mである。

面積 測定不可 北壁方位 N-95°-E
床面 遺構確認面から18cm掘り込んで床面となる。残存していた北壁沿いの床面は、ほぼ平坦で硬化していた。

竈 東壁南端に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖がほとんど張り出さない形態の竈で、焚口幅は52cmである。燃烧部から煙道部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ87cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで、緩やかに煙道部へ傾斜していた。

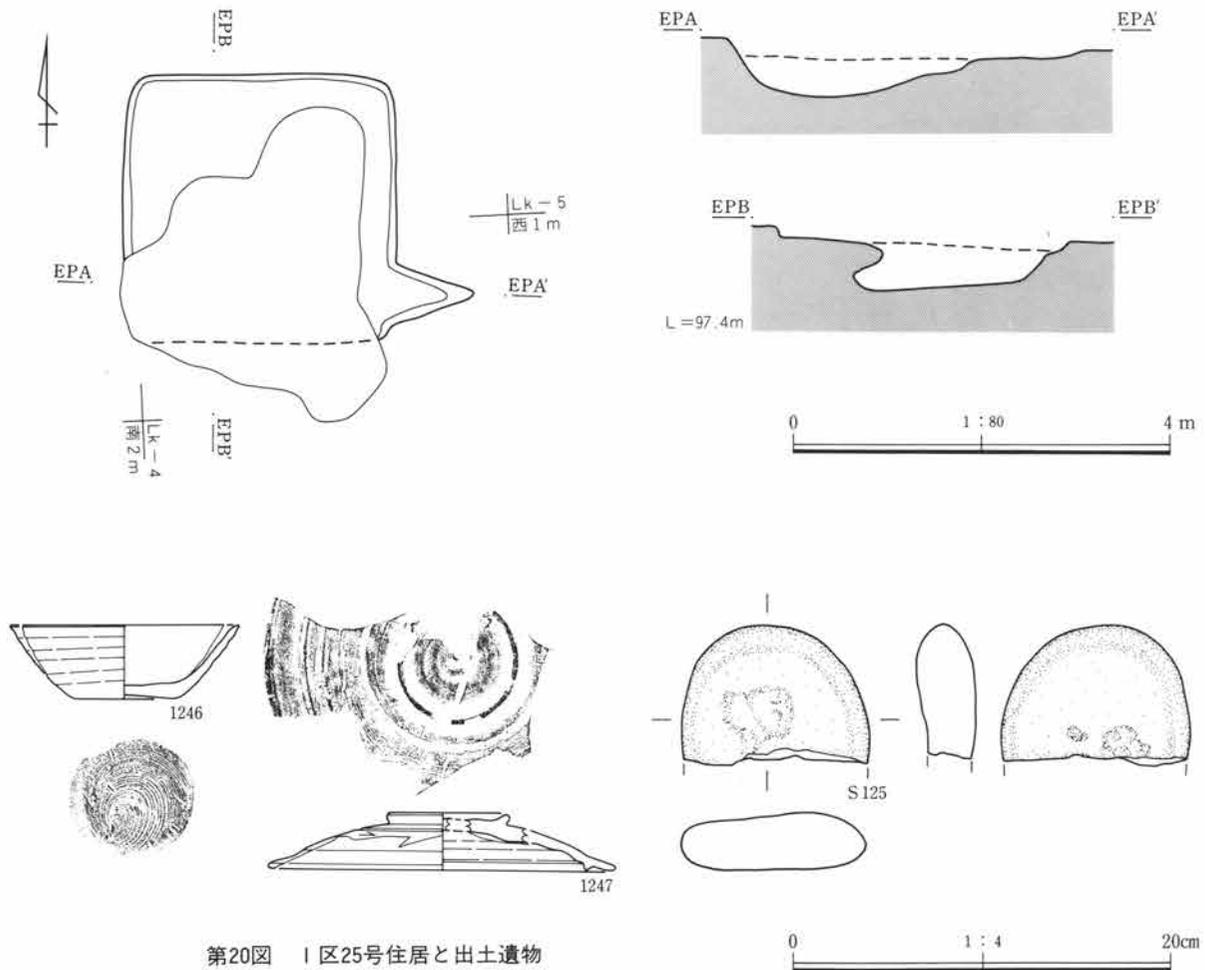
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 60点余りの遺物が出土している。床面出土の遺物はない。床下の土坑からも土器の破片が出土している。図示した遺物は、いずれも埋没土中の出土遺物である。(遺物観察表：3頁)

所見 埋没土中の出土遺物からではあるが、8世紀前半の住居と考えておきたい。



第20図 I区25号住居と出土遺物

I 区 27 号 住 居

位 置 I j-17グリッド 写 真 PL 5
重 複 なし

形 状 対角線をほぼ南北方向にする長方形を呈する。北東隅には、長さ1.4m、幅0.3~0.5mの台形の張り出し部がある。周壁はほぼ直線的に掘られている。隅は北西隅がやや角張っている他は、三隅は丸くなっている。規模は長軸3.10m、短軸2.43mである。

面 積 6.62㎡ 方 位 N-97°-E
床 面 残存壁高が低く、遺構確認面から5cm掘り込んで床面となる。竈前の床面は硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に、小形の竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は15cm、左側は24cm、袖の基

部が残存していた。焚口幅は32cmである。燃烧部の壁は左側を中心に焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ18cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに傾斜していた。遺物は出土していない。

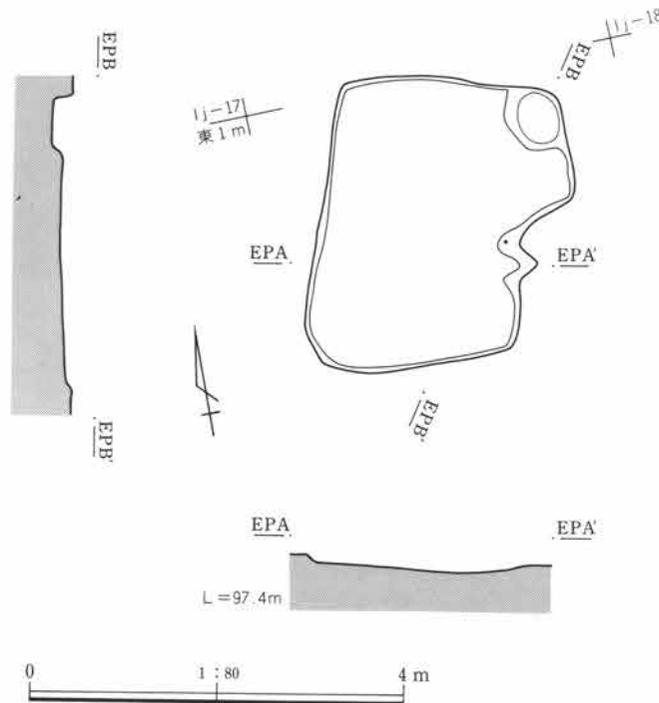
周 溝 検出されなかった。

柱 穴 検出されなかった。

貯蔵穴 北東隅の張り出し部に、長径0.74m、短径0.63m、深さ0.22mの楕円形の貯蔵穴が検出された。断面形は箱型で、底面は平らである。遺物は出土しなかった。

遺 物 150点余りの遺物が出土しているが、ほとんど埋没土中の遺物である。

所 見 埋没土の出土遺物からは、8世紀以降の住居と考えられる。



第21図 I 区27号住居

Ⅰ区29号住居

位置 Lm・n-1グリッド 写真 PL6
重複 なし

形状 長軸をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁は南壁を除き、ほぼ直線的に掘られている。南壁は東から0.6mほどのところから膨らんで検出された。隅は丸くない。規模は長軸3.29m、短軸3.00mである。

面積 7.53㎡ 方位 N-86°-E
床面 遺構確認面から35cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦で、中央部は硬化していた。竈前の床面はやや高まっている。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は40cm、左側は41cm、袖の基部が残存していた。両袖の先端には、体部中位以上の土師器甕形土器が逆位で出土した。竈袖の芯材として用いられたと考えられる。この甕形土器で挟まれた焚口幅は38cmである。さらに焚口部には、土師器甕形土

器が袖をつなぐように倒立して出土した。焚口天井部にも土器が芯として使用されていたと考えられる。燃烧部の壁は焼けて焼土化していたが、崩落が著しい。煙道部は壁から外へ42cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに傾斜し、煙道部の先端は上方へ立ち上がっていた。

周溝 検出されなかった。

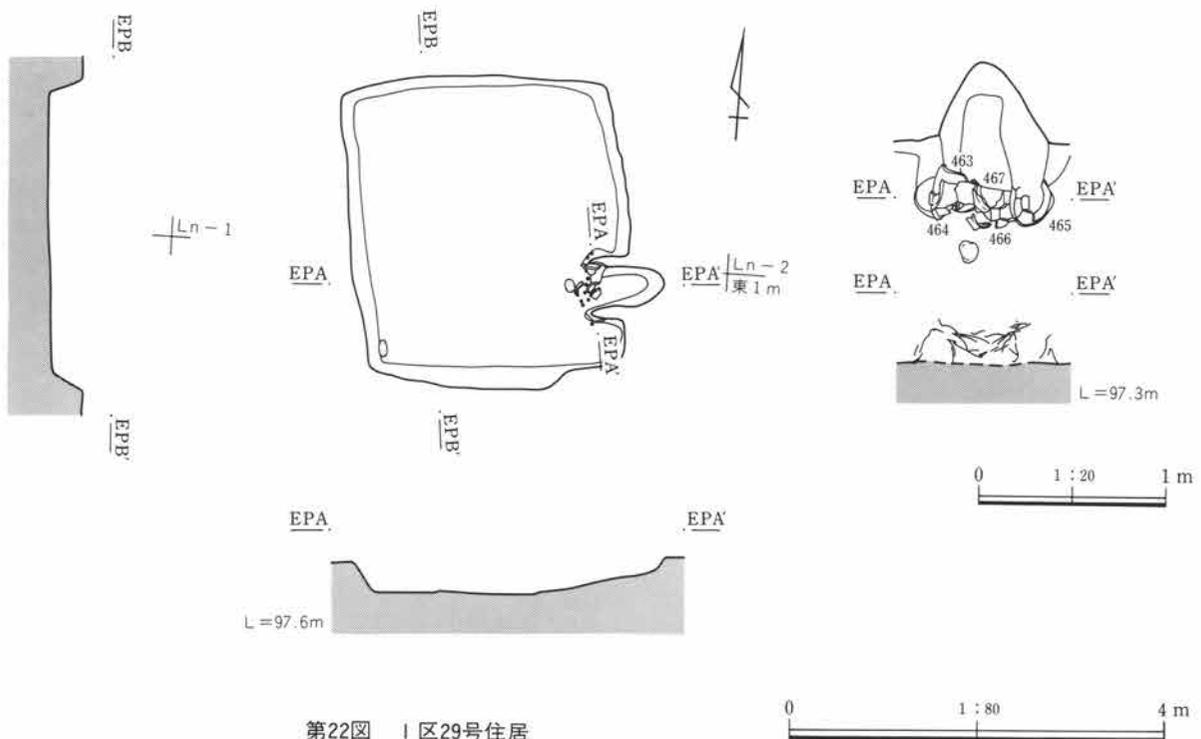
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

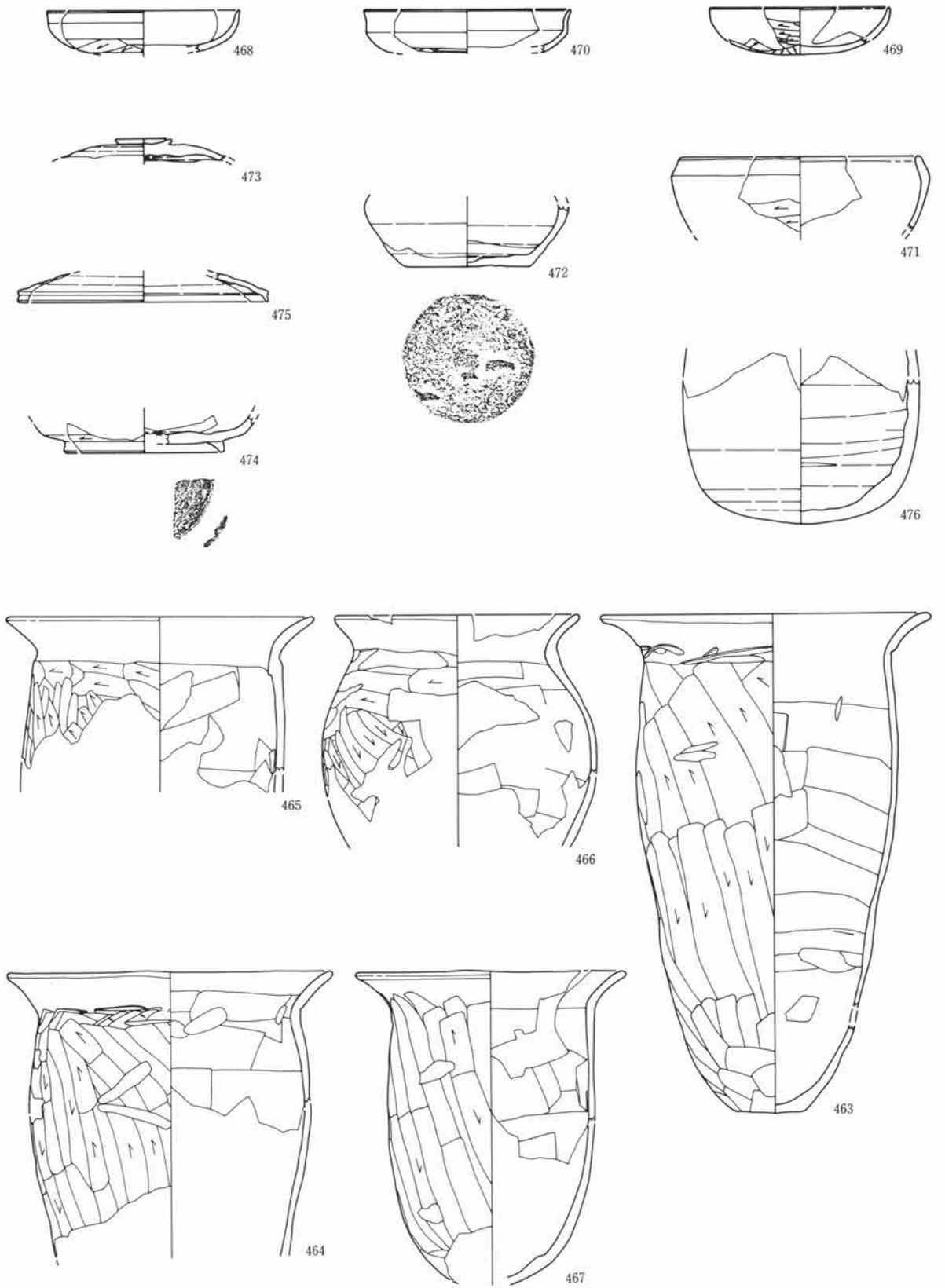
遺物 130点余りの遺物が出土している。竈周辺を除いて埋没土中の出土遺物が多い。竈の芯材として出土した土師器は、右袖が465、左袖が464、天井部が463・466・467の3個体を連結したものである。他に土師器杯形土器、須恵器杯形土器・壺形土器が出土したが、いずれも埋没土中からの出土である。

(遺物観察表：3・4頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



第22図 Ⅰ区29号住居



第23図 I区29号住居出土遺物

1区30号住居

位置 Li-0グリッド 写真 PL6・7
重複 南西壁を新しい土坑に、北西壁と北隅を女堀に切られている。

形状 北隅を切られているので全形は不明であるが、対角線を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られており、隅はやや角張っている。規模は長軸4.50m、短軸3.62mである。

面積 計測不可 方位 N-68°-E
床面 遺構確認面から39cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦で、竈の前は硬化していた。

埋没土 住居中央部の第一次埋没土は白色軽石や砂粒を含む黄褐色粘質土で特異である。上層は白色軽石や焼土粒を含む黒色土で埋まっていた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が少し張り出す形態の竈で、向かって右側は30cm、左側は12cm、袖の基部が

残存していた。焚口幅は43cmである。燃烧部および煙道部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ73cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで、緩やかに煙道部へ傾斜していた。燃烧部ほぼ中央に土師器杯形土器が出土している。

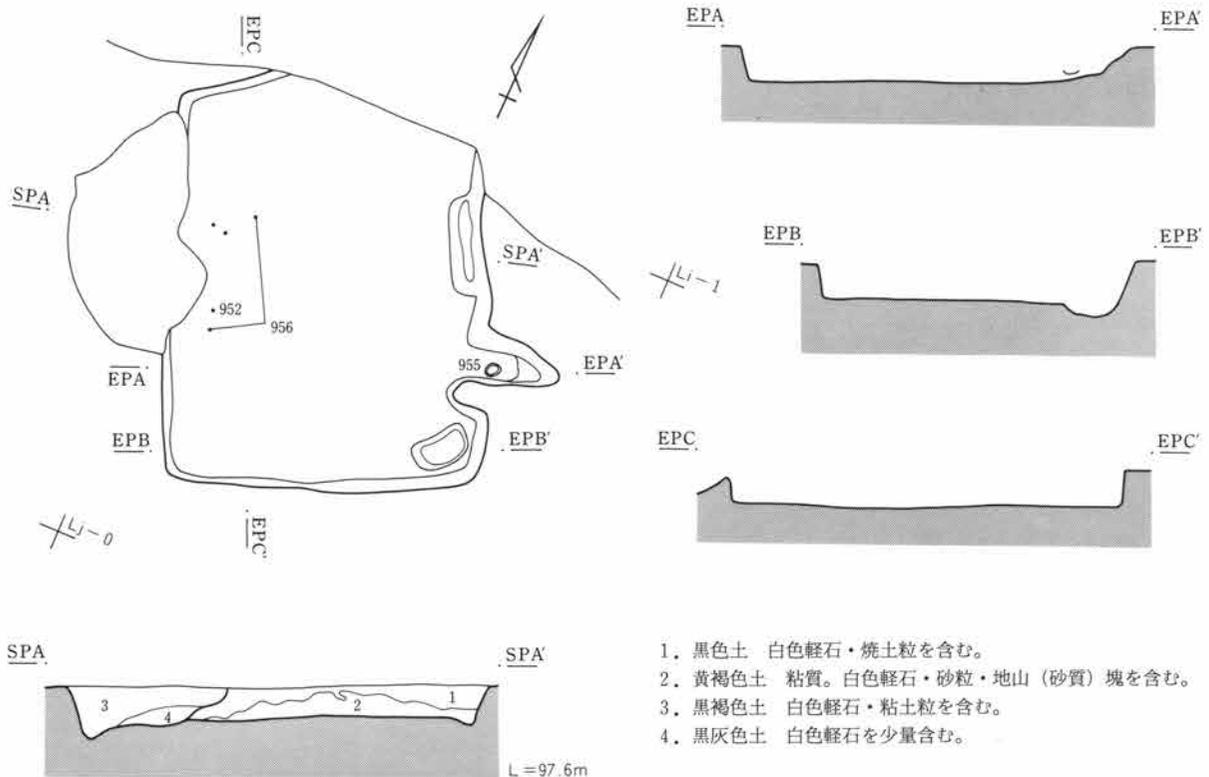
周溝 北東壁のほぼ中央、竈の左脇に、幅34cmの周溝状の溝が長さ1.1mのみ検出された。

柱穴 検出されなかった。

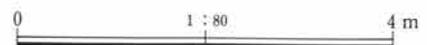
貯蔵穴 住居東隅、竈右側に、長径0.6m、短径0.44m、深さ0.15mの貯蔵穴が検出された。

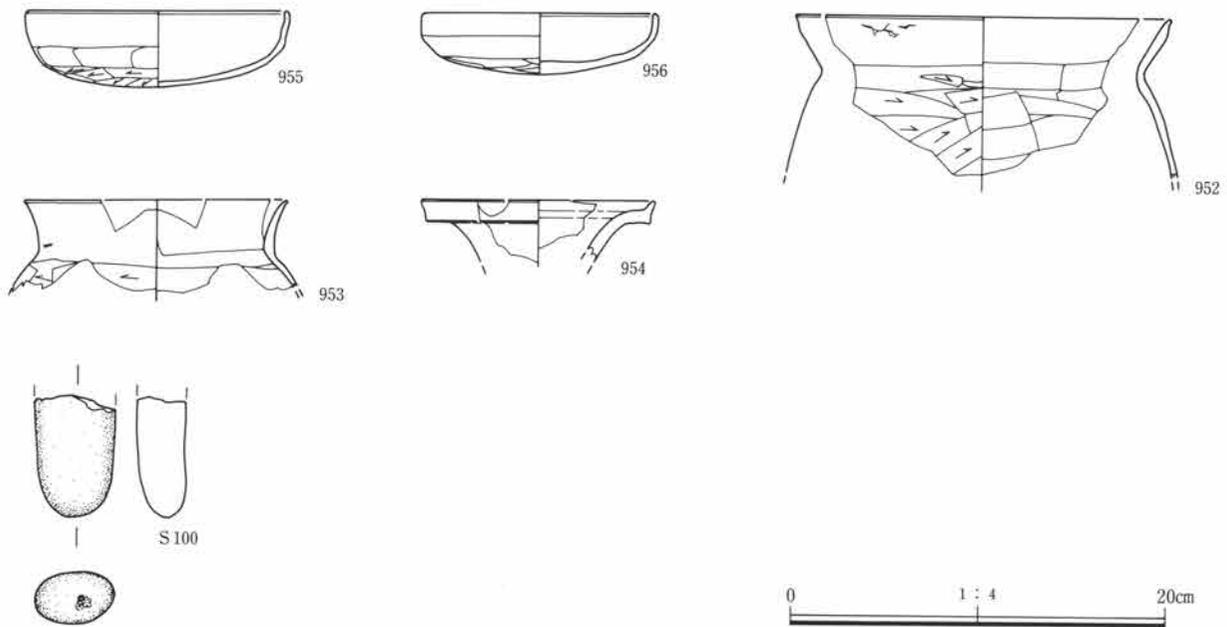
遺物 150点余りの遺物が出土している。床面近くから出土したのは、竈出土の土師器杯形土器(955)のみで、図示した杯形土器(956)、甕形土器(952・953・954)、石器(S100)は埋没土中からの出土である。(遺物観察表：4頁)

所見 出土遺物から、8世紀後半の住居と考えられる。



第24図 1区30号住居





第25図 I区30号住居出土遺物

I区34号住居

位置 I j-14グリッド 写真 PL7

重複 後出する35号住居と重複するが、本34号住居の方が深いので、住居の壁や床面は残っていた。
形状 ほぼ正方形を呈する。東壁が西壁より若干短く、やや台形に近い正方形である。周壁はほぼ直線的に掘られており、隅はやや丸い。規模は長軸3.70m、短軸3.65mである。

面積 11.41㎡ 方位 N-102°-E
床面 遺構確認面から34cm掘り込んで床面となる。

埋没土 壁際に軽石・粘土粒を含む黒色土、上層中央部に軽石・焼土粒を含む黒灰褐色土が堆積していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は75cm、左側は43cm、袖の基部が残存していた。比較的袖基部の残存が大きな竈である。焚口幅は42cmである。燃焼部から煙道部の壁は良く、焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ68cmと

比較的細長く突出していた。燃焼部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに傾斜していた。支脚等、竈の構造を示す遺物の出土はなかった。

周溝 検出されなかった。

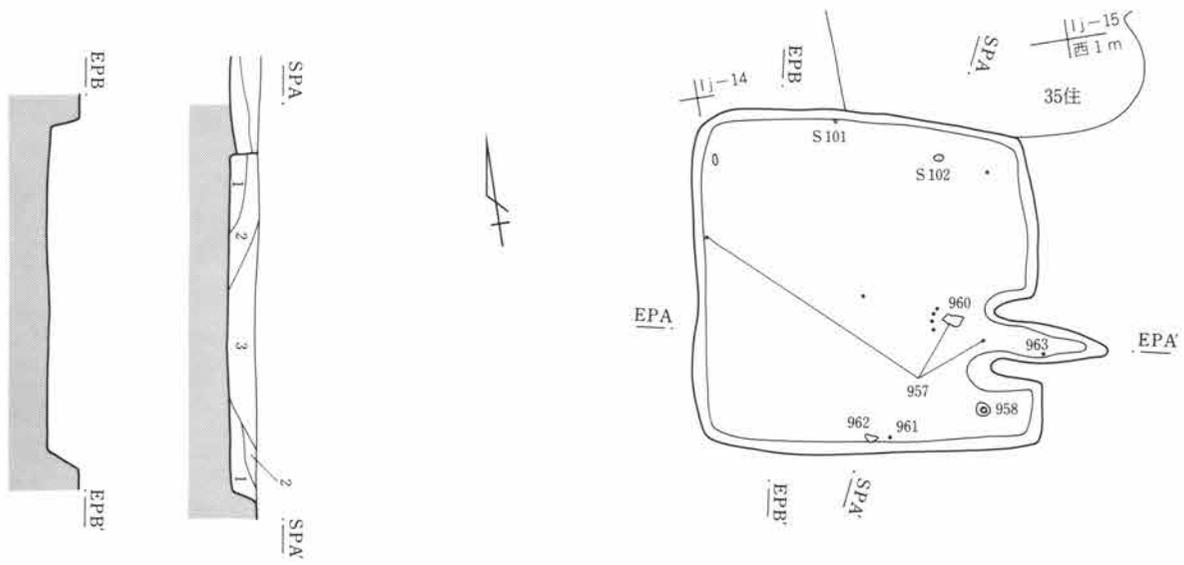
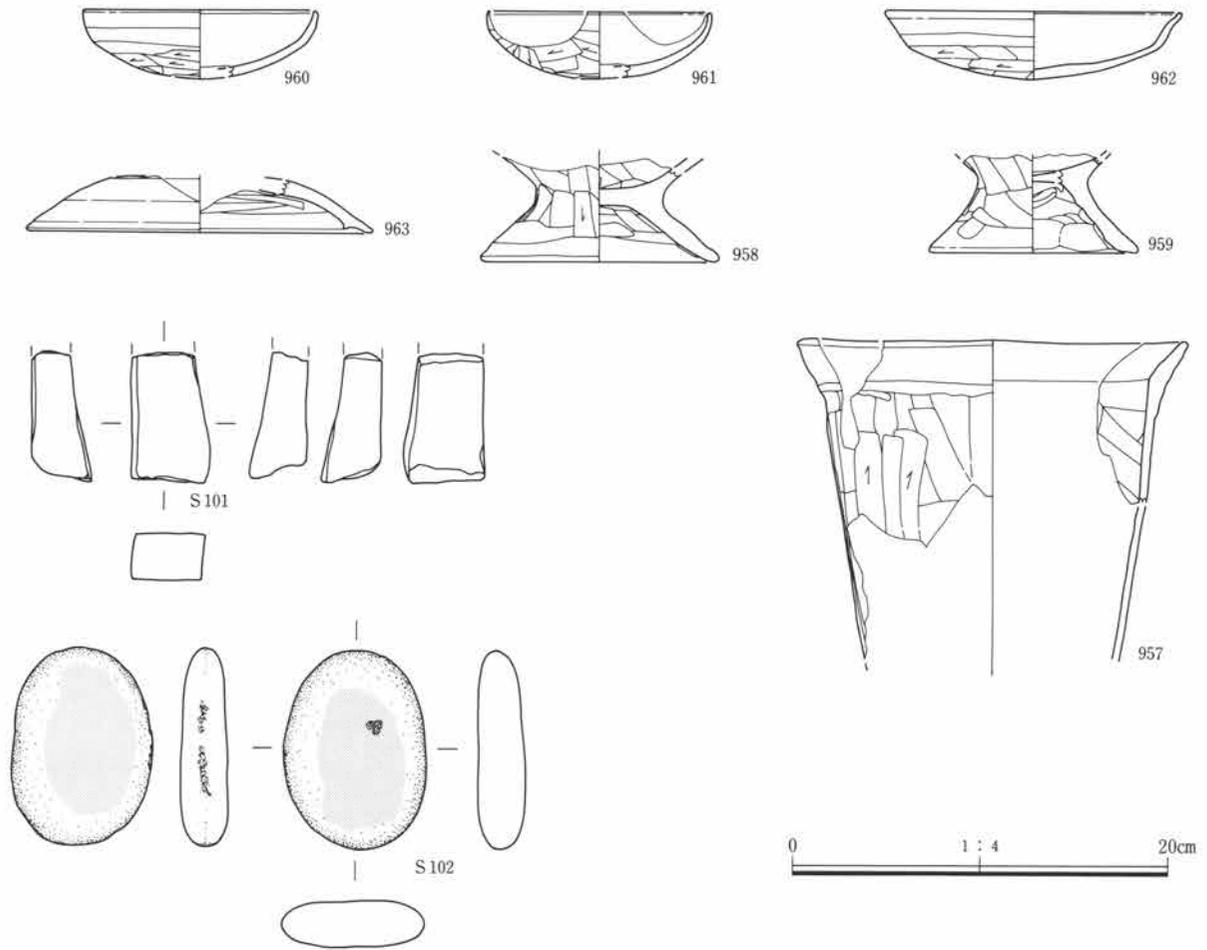
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 30点余りの遺物が出土している。比較的床面近くで出土した遺物が多い。竈では燃焼部から須恵器蓋形土器(963)、焚口部で土師器杯形土器(960)・甕形土器(957)が床面直上で出土している。また竈右袖脇で土師器台付甕形土器(958)が、南壁際で土師器杯形土器(961・962)が床面直上で出土している。土師器甕形土器(958)は、台部のみ残存していたが、正立しており、原位置を示す可能性が高いと考えられる。土師器甕形土器(957)は、竈前の破片と西壁沿いの破片が接合している。北壁際には砥石(S101)が床面直上で出土した。また、敲石(S102)も北部床面直上で出土した。(遺物観察表：5頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。

2. 1・2区の遺構



1. 黒色土 白色軽石・粘土粒を含む。
2. 黄褐色土 白色軽石・粘土粒を含む。
3. 灰黒褐色土 白色軽石・粘土粒を含む。

第26図 1区34号住居と出土遺物

Ⅰ区44号住居

位置 Ik-14グリッド 写真 PL8
重複 西壁ほぼ中央部を円形の土坑によって切られている。

形状 壁をほぼ南北方向にする正方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅はやや丸い。規模は長軸3.63m、短軸3.60mである。

面積 11.14㎡ 方位 N-89°-E
床面 遺構確認面から50cm掘り込んで床面となる。床面は柱穴を結んだ線より内部がやや高まっており、硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は30cm、左側は34cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は45cmである。燃烧部の壁はあまり顕著に焼けていなかった。煙道部は壁から外へ42cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに傾斜していた。燃烧部には土師器甕形土器が2個体倒立した状態で出土している。

周溝 検出されなかった。

柱穴 3本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規模（短径×長径×深さ）は、P1：15×23×23cm、

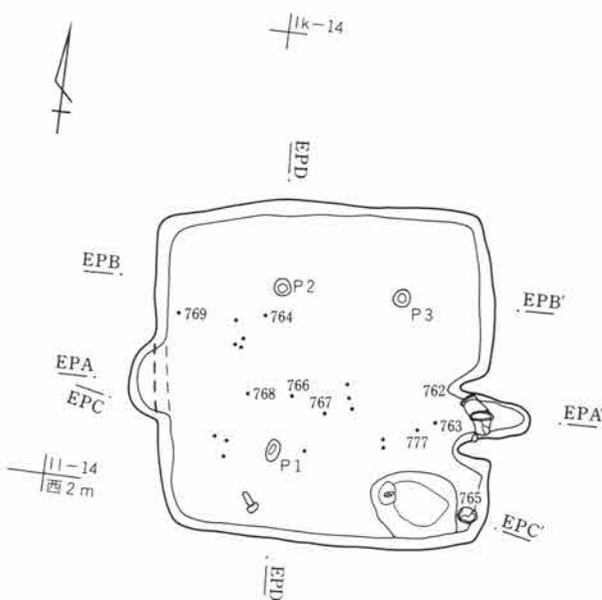
P2：18×18×11cm、P3：17×18×14cmである。主柱穴のうちP3は住居対角線上にのるが、P1・P2は対角線より東に寄った位置にある。柱穴配置の規格性からすれば、貯蔵穴北側に主柱穴があった可能性が高いが、調査では検出できなかった。貯蔵穴北側の主柱穴を想定するとすれば、各主柱穴を結んだ形は長方形を呈する。

貯蔵穴 竈右側、住居南東隅に長径0.91m、短径0.70m、深さ0.10mの楕円形の貯蔵穴が検出された。この貯蔵穴西端に小ピット（17×22×10cm）が検出されているが、貯蔵穴北側に想定できる主柱穴位置からはずれず。

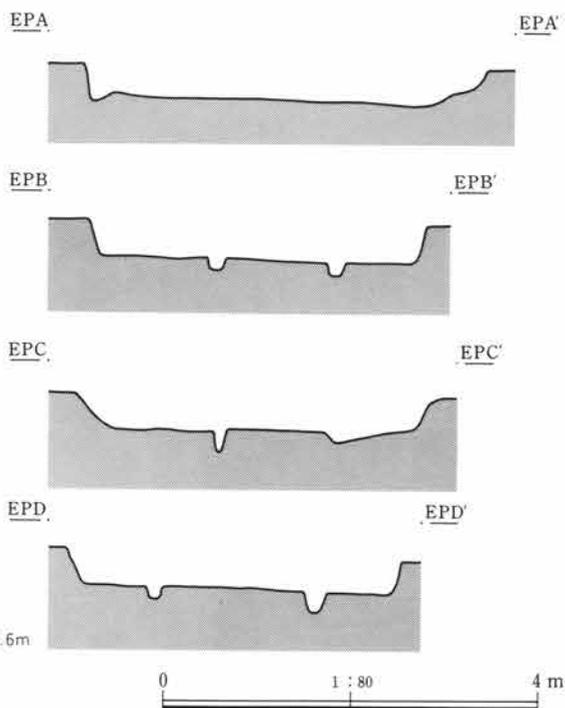
遺物 110点余りの遺物が出土している。竈周辺では、燃烧部から土師器甕形土器(762・763)が、右脇の壁際で土師器台付甕形土器(765)が床面直上で出土している。住居中央部で土師器杯形土器(766・768)、須恵器椀形土器(770・777)が出土しているが、いずれも床面から5～10cm上位で出土した。

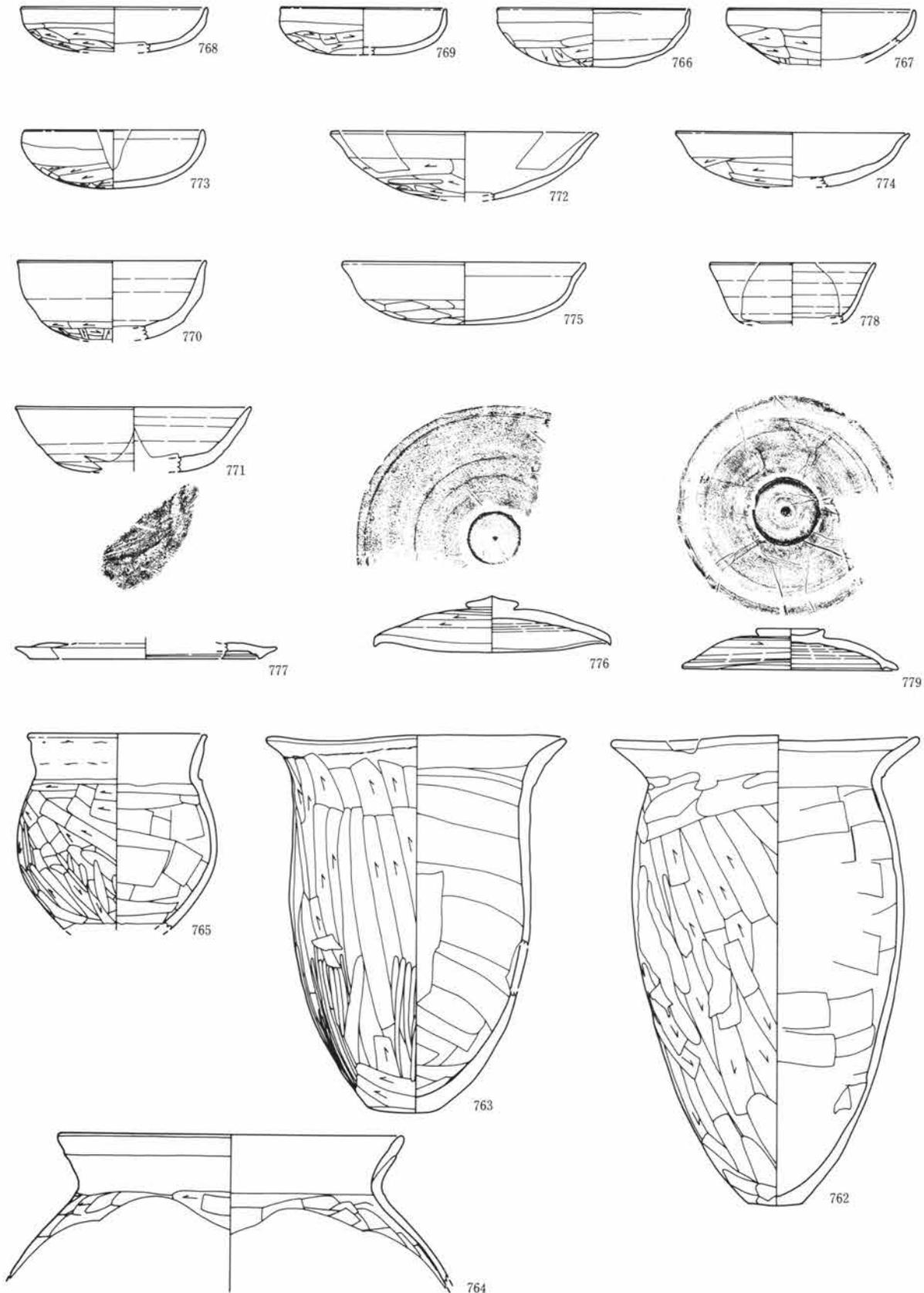
(遺物観察表：5・6頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



第27図 Ⅰ区44号住居





第28図 Ⅰ区44号住居出土遺物

Ⅰ区47号住居

位置 In・o-13・14グリッド

写真 PL9・10 重複なし

形状 対角線をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁は直線的に掘られており、隅は丸い。規模は長軸3.53m、短軸3.38mである。

面積 10.32m² 方位 N-74°-E

床面 遺構確認面から40cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦で、竈前の住居中央部は硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が大きく張り出す形態の竈で、向かって右側は57cm、左側は54cm、袖の基部が残存していた。また、崩落土に混じって、竈の天井部が一部残存していた。焚口幅は26cmである。燃烧部の壁はあまり焼けていなかった。煙道部は壁か

ら外へ25cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに傾斜していた。

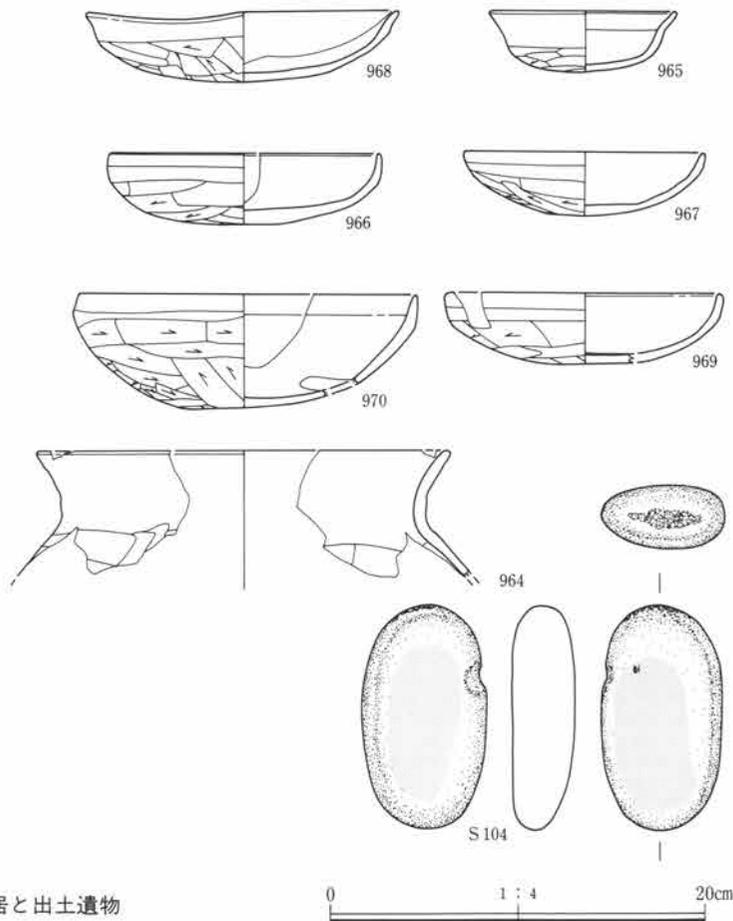
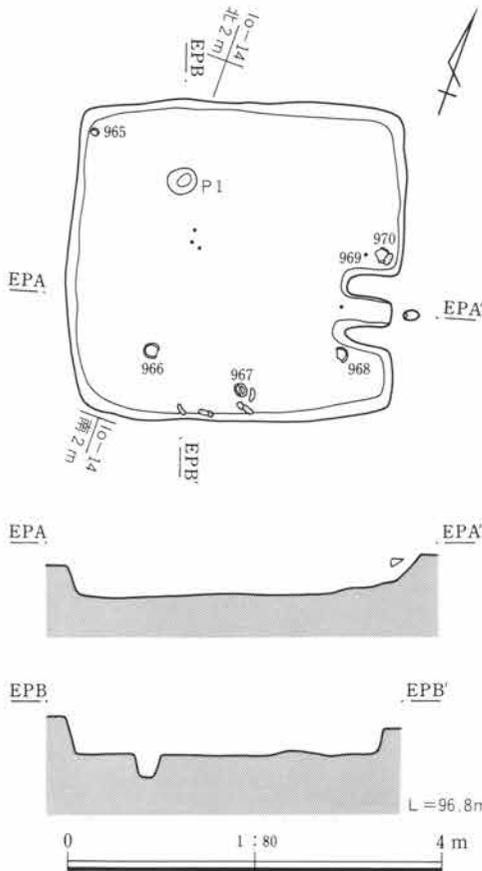
周溝 検出されなかった。

柱穴 1本のみ支柱穴と考えられるピットが検出されたが、他は検出することができなかった。規模(短径×長径×深さ)は、P1:30×30×24cmである。P1は住居対角線からやや北にずれた位置にある。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 430点余りの遺物が出土しているが、ほとんど埋没土中の遺物である。竈右脇の土師器杯形土器(968)は床面直上から出土したが、左脇の969・970は床面から10cmほど上位で出土した。また、北西隅の965は床面直上で出土した。(遺物観察表:6頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



第29図 Ⅰ区47号住居と出土遺物

Ⅰ区49号住居

位置 I 0-12グリッド 写真 PL10

重複 住居中央部を横断するような帯状の長方形土坑に切られている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は壁の中央がやや膨らむ弧状に掘られている。隅は北東隅が角張っているのを除き、丸く掘られている。規模は長軸4.40m、短軸4.04mである。

面積 14.42㎡ 方位 N-81°-E

床面 遺構確認面から21cm掘り込んで床面となる。北半部の床面はほぼ平坦であるが、南半の床面にはやや凹凸がある。

竈 東壁ほぼ中央に竈が付設されていたが、重複する土坑によって切られており、左袖が残るのみで大半は壊されている。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって左側の袖の基部が28cm残存していた。焚口部および燃焼部の状況は不明である。

周溝 住居南壁から西壁南半と北西隅に、幅

15~20cmの周溝が検出された。

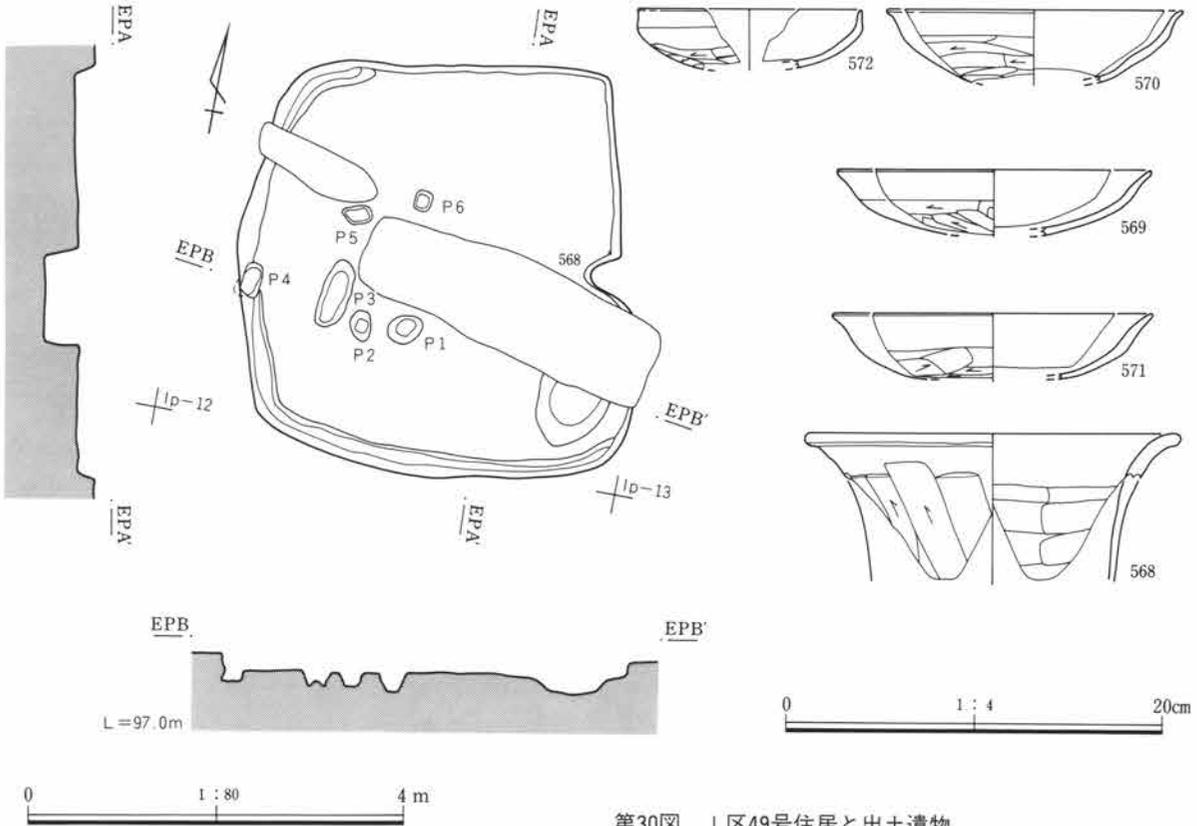
柱穴 主柱穴と考えられるピットは検出されなかったが、住居中央部やや西側に小ピットが5本と、西壁ほぼ中央に1本検出された。いずれも住居に伴うかどうかは確定できなかった。各ピットの規模(短径×長径×深さ)は、P1:31×32×20cm、P2:24×32×15cm、P3:30×72×17cm、P4:22×35×30cm、P5:18×32×13cm、P6:17×21×11cmである。

貯蔵穴 南東隅で、竈の右脇にあたる位置に貯蔵穴が検出されたが、北半分は土坑によって壊されていた。規模は長径0.7m以上、短径0.75m、深さ0.15mである。

遺物 120点余りの遺物が出土している。竈左脇で土師器甕形土器(568)が床面から5cm浮いて出土している他はほとんど埋没土中からの出土である。

(遺物観察表:6頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



第30図 Ⅰ区49号住居と出土遺物

I区52号住居

位置 Ij-16グリッド 写真 PL9

重複 南側の大半を46号住居に切られている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈すると考えられるが、全体形状は不明である。周壁は北壁がやや膨らみ、北東隅が丸く掘られている。規模は短軸3.2mで、長軸は不明である。

面積 測定不可 方位 N-84°-E

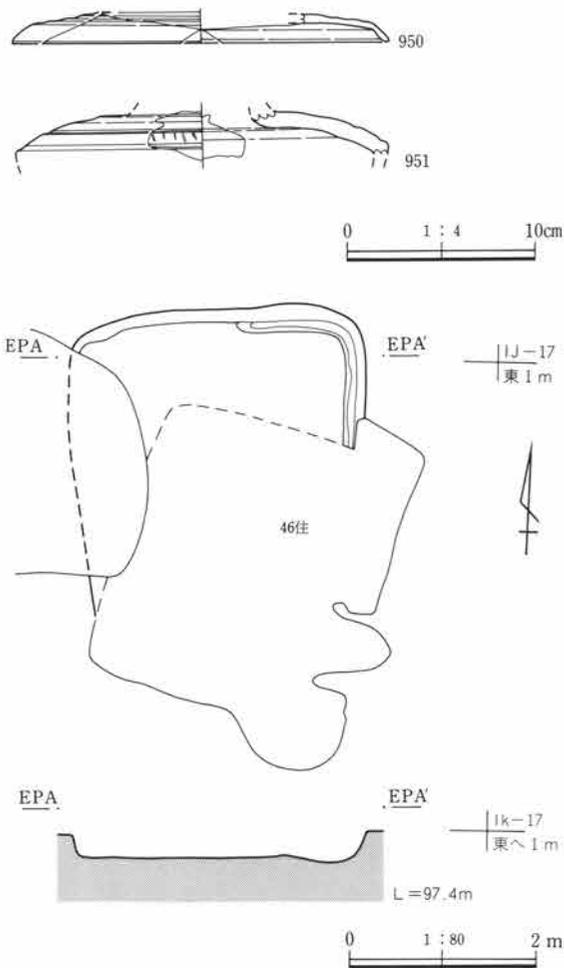
床面 遺構確認面から30cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦である。

竈 46号住居に切られており、竈は検出されなかった。

周溝 北東隅にのみ、幅20cmの周溝が検出された。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。



第31図 I区52号住居と出土遺物

遺物 出土遺物は少なく、20点余りの遺物が埋没土から出土したのみである。図示した須恵器蓋形土器(950)や壺形土器(951)も埋没土中の出土遺物である。(遺物観察表：7頁)

所見 出土遺物から、住居の時期を決めるのは困難であるが、埋没土中の土器の傾向からすると、8世紀代の住居と考えられる。

I区55号住居

位置 Is-9グリッド 写真 PL10・11

重複 南壁西端を、長径1.20m、短径1.08m、深さ1.06mの土坑が切っている。

形状 短軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は直線的に掘られており、隅も比較的角張っている。規模は長軸4.10m、短軸3.15mである。

面積 11.02㎡ 方位 N-84°-E

床面 遺構確認面から32cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、中央部は硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が若干張り出す形態の竈で、向かって右側は25cm、左側は5cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は40cmである。燃烧部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ85cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに傾斜していたが、煙道部東端は、20cmほど急に立ち上がる。

周溝 検出されなかった。

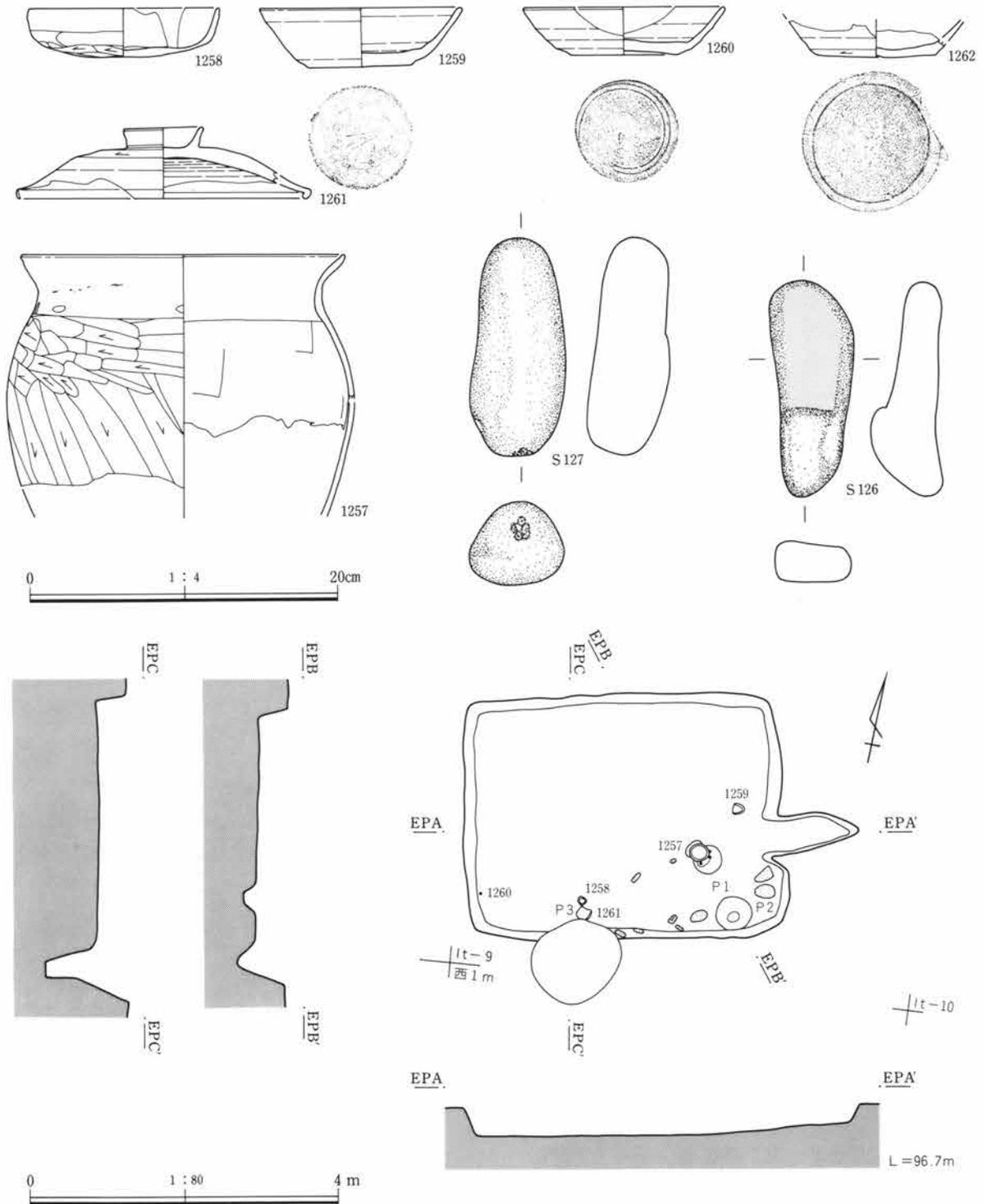
柱穴 2本の柱穴が検出されたが、いずれも支柱穴とは断定しがたい。各柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1：35×35×15cm、P2：40×47×22cmである。P1は、住居対角線にのる位置にあるが、P2は、南西隅からやや西に寄った位置にある。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 90点余りの遺物が出土している。床面直上で出土した遺物が多い。そのほとんどを図示した。土師器甕形土器(1257)はP1の北東縁にややかかるような位置で出土した。竈左前には須恵器杯形土器(1259)が床面直上で出土している。土師器杯形土器

(1258)や須恵器杯形土器(1260)・蓋形土器(1261)は南西部に集中して出土した。(遺物観察表：7頁)

所見出土遺物から、9世紀前半の住居と考えられる。



第32図 Ⅰ区55号住居と出土遺物

I 区 58 号 住居

位置 I t-10・11グリッド

写真 PL11・12 重複 南東部を57号住居に切られているが、本住居の方が深いので、壁および床面は残っていた。

形状 長軸を南北方向にする台形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。隅は比較的丸くない。南東隅は貯蔵穴と考えられる掘りこみがあって張り出しているの、不定形である。規模は長軸5.95m、短軸5.73mである。

面積 28.32㎡ 方位 N-105°-E

床面 遺構確認面から64cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦で、竈前から南東隅の貯蔵穴内まで、竈から掻き出した灰が広がっていた。

埋没土 軽石や焼土粒・黄褐色土粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 東壁ほぼ中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は46cm、左側は45cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は65cmである。燃焼部および煙道部の壁は良く焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ44cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに傾斜し、煙道部先端は10cmほど上方へ立ち上がっていた。

周溝 南壁の西半分から西壁・北壁沿いに、幅

10～14cmの周溝が検出された。

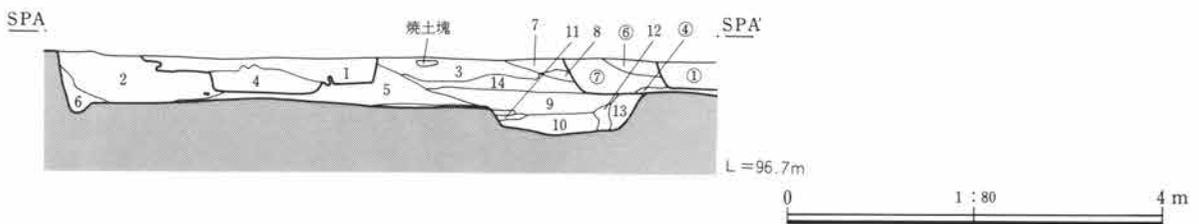
柱穴 4本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規模（短径×長径×深さ）は、P1：57×64×70cm、P2：65×74×83cm、P3：53×62×54cm、P4：64×68×79cmである。主柱穴のうちP2・P4は、住居対角線上にあるが、P1・P3は、台形の対角線より北東側にずれた位置にある。しかし、やや南西に膨らんだ南東隅の位置を、住居が長方形になるように北東に移動して考えると、P1・P3も対角線上に位置する。各主柱穴を結んだ形はほぼ正方形を呈する。

貯蔵穴 竈右脇、南東隅に、長径2.3m、短径0.8m、深さ0.2mの長楕円形の土坑が検出された。定形的な貯蔵穴ではないが、何等かの施設があったものと考えられる。

遺物 2000点弱の遺物が出土している。竈焚口部で土師器甕形土器(802・803・804・805・810)と杯形土器(808・812)が出土した。南東隅に土師器杯形土器(807・809)、須恵器蓋形土器(825)が床面から5～10cm上位で出土した。土師器甕形土器(806)は主柱穴P2縁に、須恵器盤形土器(868)は中央部で出土した。図示した他の土器は埋没土中から出土した。

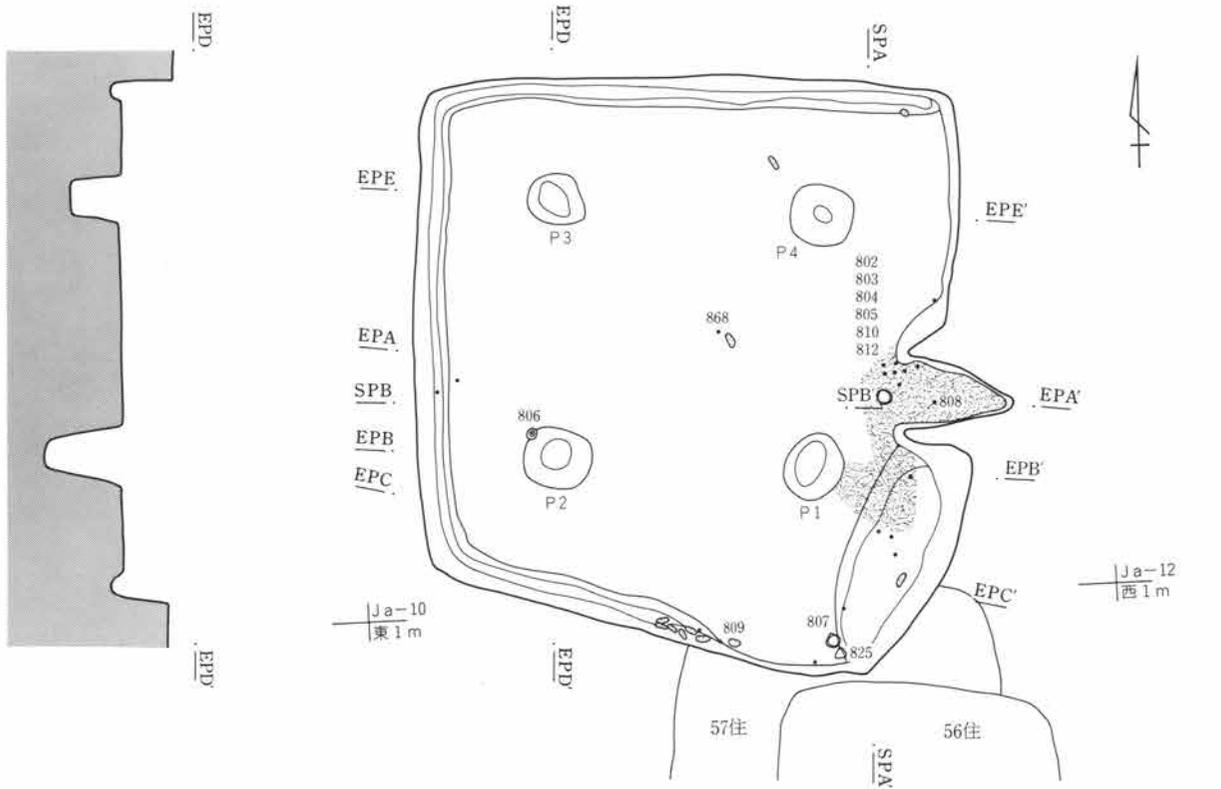
(遺物観察表：7～9頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。

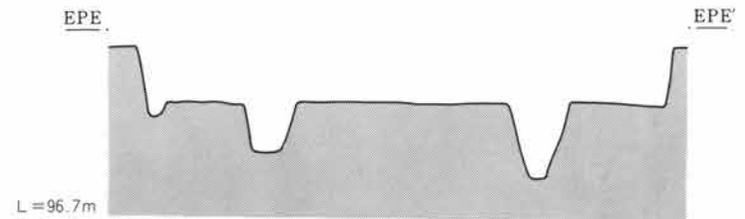
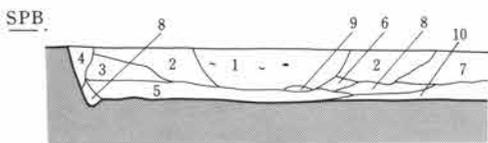
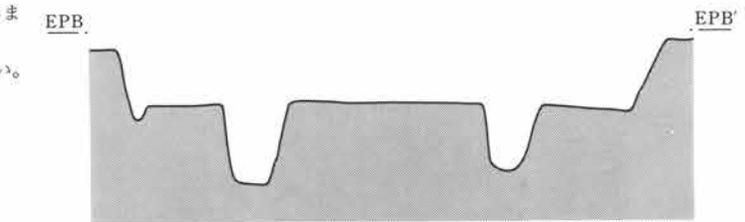
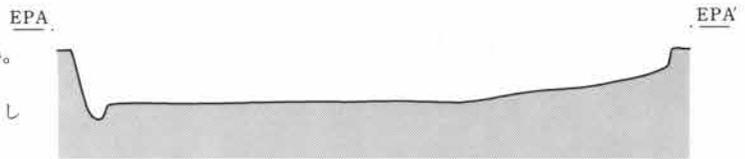


- | | |
|---|--|
| <p>1. 暗褐色土 軽石を多量に含む。焼土粒・黄褐色土粒を含む。しまり強い。</p> <p>2. 暗茶褐色土 軽石を多量に含む。焼土粒・黄褐色土粒をわずかに含む。しまりやや強い。</p> <p>3. 茶褐色土 軽石・焼土粒を多量に含む。しまり強い。</p> <p>4. 黒褐色土 黄褐色土粒・焼土粒わずかに含む。浅間B軽石混じりのサラサラした層に類似している。</p> <p>5. 黄茶褐色土 黄褐色土の中に焼土粒・炭化物含む。粘性強い。</p> <p>6. 暗黄褐色土 軽石・焼土粒・黄褐色土粒をわずかに含む。しまり弱く壁のくずれたもの。</p> | <p>7. 暗茶褐色土 軽石・焼土粒を含む。しまり強い。</p> <p>8. 暗茶褐色土 軽石・焼土粒を含む。しまりやや弱い。</p> <p>9. 茶褐色土 3層よりしまり弱い。</p> <p>10. 暗黄褐色土 黄褐色土塊主体。焼土粒・炭化物含む。しまり弱い。</p> <p>11. 黒茶褐色土 炭化物・焼土粒を含む。しまり弱く、粘性あり。</p> <p>12. 黒色土 ふかふかの層。</p> <p>13. 暗黄褐色土 黄褐色土塊を含むふかふかの層。</p> <p>14. 茶褐色土 9層よりやや黄色い。</p> |
|---|--|

第33図 I区58号住居土層断面A-A'



1. 暗茶褐色土 焼土・軽石を多量に含む。土器片炭化物含む。しまり強い。
2. 暗褐色土 軽石・焼土粒含む。しまりやや弱い。
3. 暗褐色土 軽石・焼土粒わずかに含む。しまり弱い。
4. 暗茶褐色土 1層同様
5. 暗灰褐色土 焼土・軽石・黄褐色土粒・塊を含む。しまりない。
6. 暗褐色土 焼土・黄褐色土粒を含む。しまり弱い。
7. 暗褐色土 軽石・焼土粒・黄褐色土粒・塊含む。しまり強い。
8. 暗黄褐色土 軽石・焼土粒わずかに含む。しまり弱い。黄褐色土粒・塊含む。
9. 黄褐色土塊
10. 竈崩落土

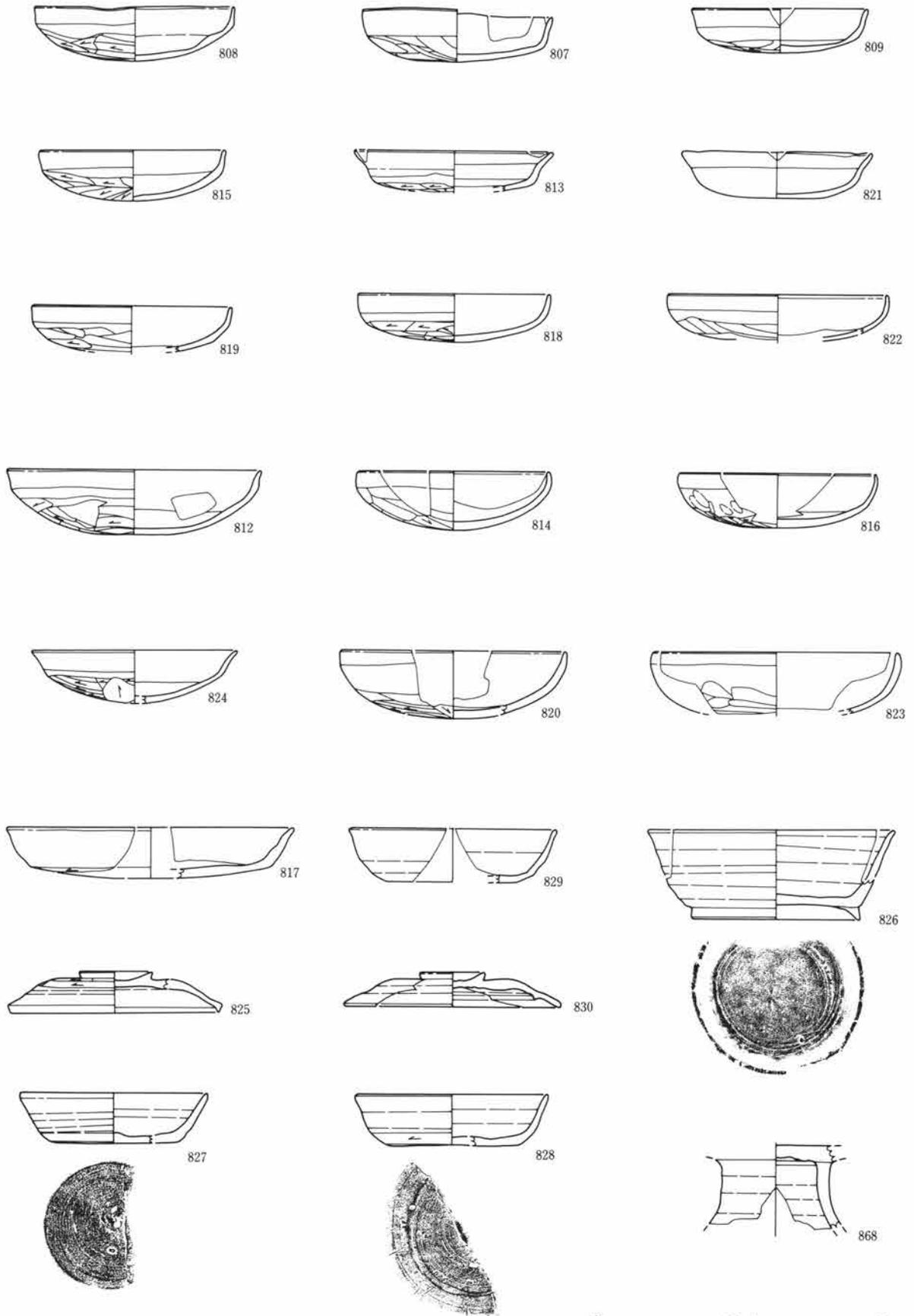


0 1:80 4 m

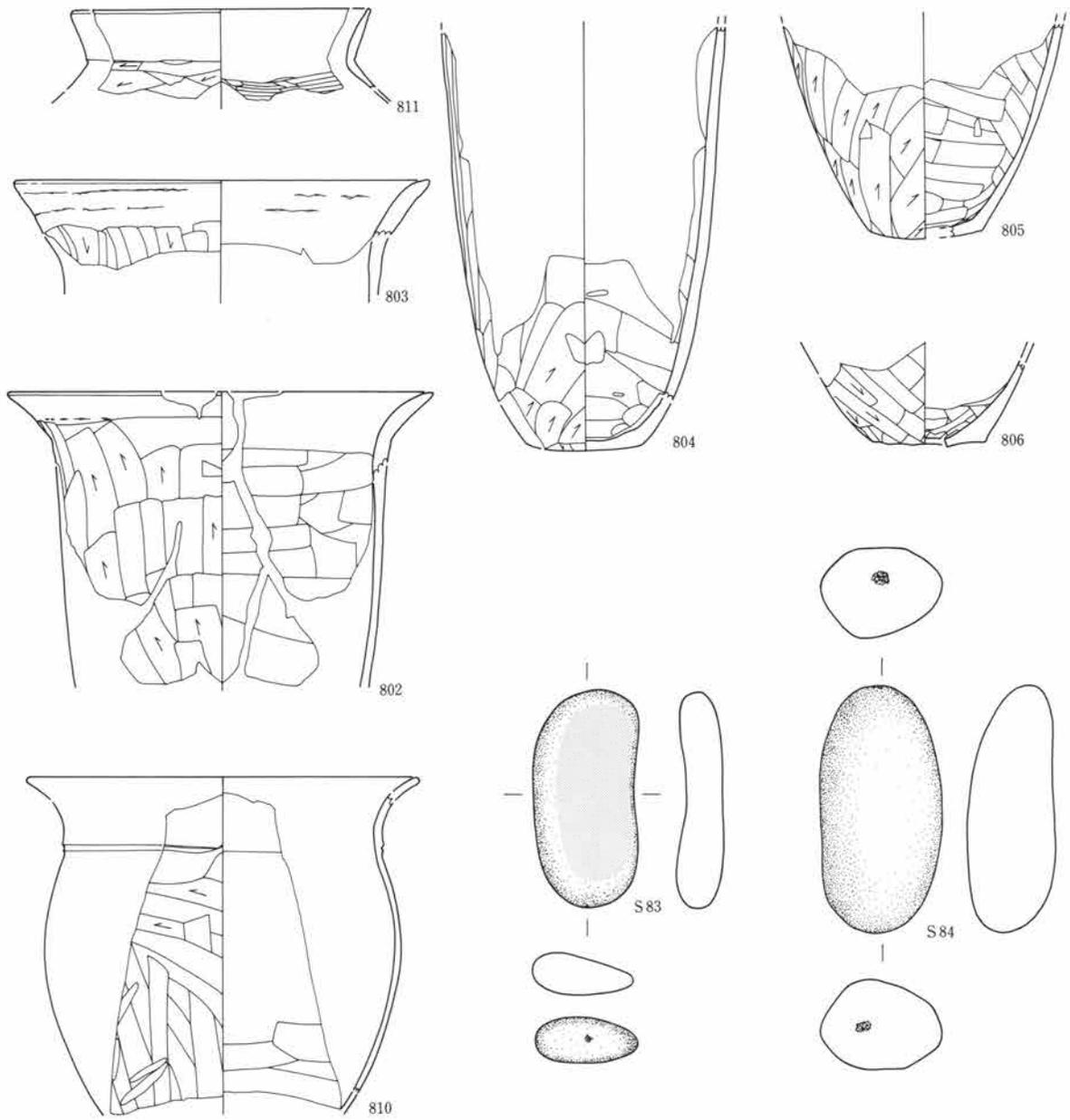
L=96.7m

第34図 1区58号住居

第3章 歴史時代前半期の遺構と遺物



第35図 Ⅰ区58号住居出土遺物(Ⅰ)



0 1 : 4 20cm

0 1 : 2 5 cm
(S77)

第36図 Ⅰ区58号住居出土遺物(2)

I 区 57号住居

位置 J a-11グリッド 写真 PL11

重複 北壁が58号住居を切っている。南東部の大半が、56号住居に切られている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られており、隅は丸い。規模は長軸4.0m、短軸3.5mである。

面積 12.67㎡ 北壁方位 N-90°-E

床面 遺構確認面から34cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦であった。後出する56号住居と重複する床面は、56号住居の床面とほぼ同レベルであった。

埋没土 軽石・焼土粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 東壁に竈が付設されていたと推定されるが、56号住居に南東部の大半が重複しており、竈は56号住居によって壊されたと考えられる。

周溝 西壁沿いにのみ、幅12~16cmの周溝が検出された。

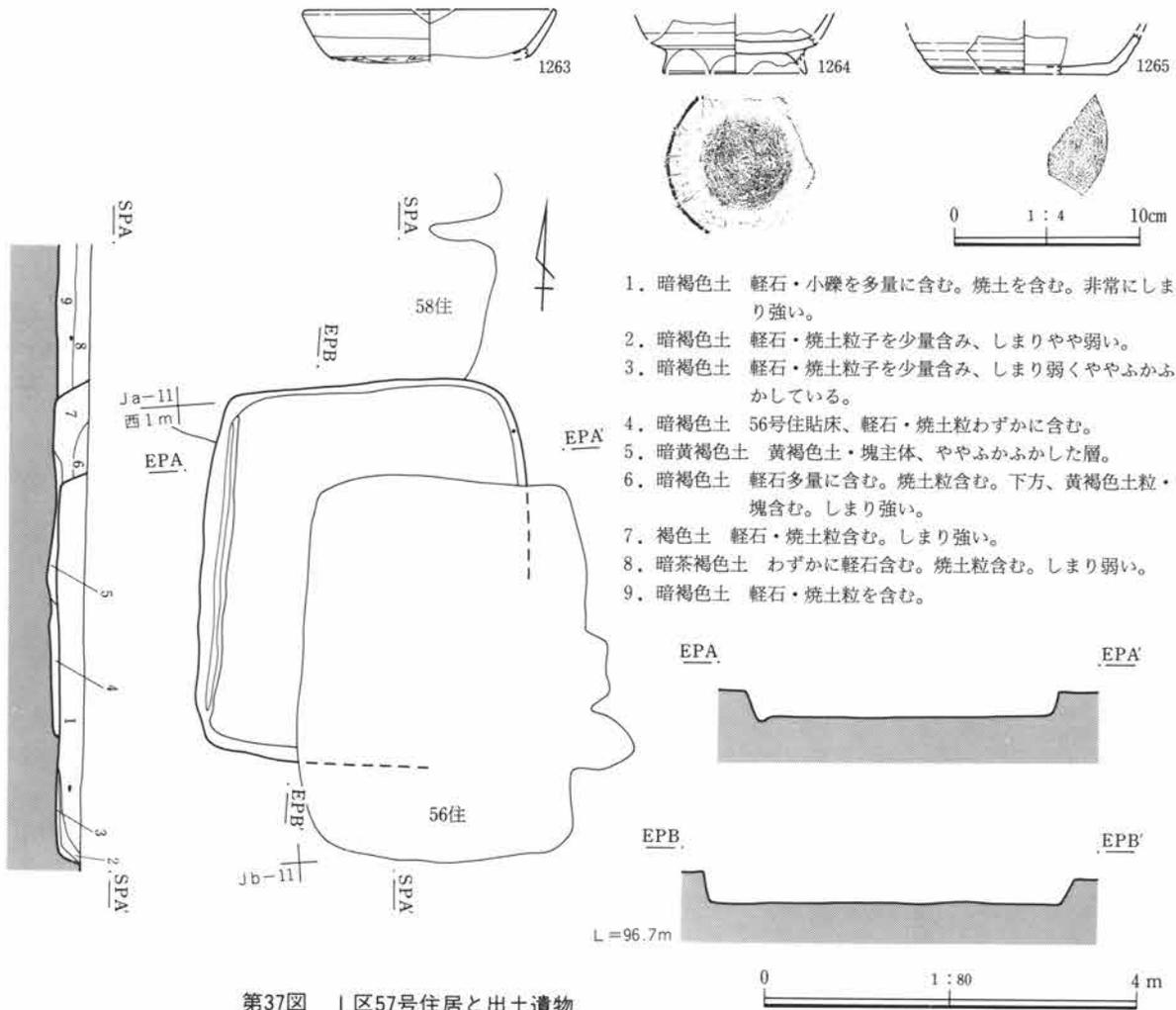
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 180点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。図示した土師器杯形土器(1263)は北東隅の壁沿いで出土した。

(遺物観察表：7頁)

所見 埋没土中の出土遺物からではあるが、重複する56号・58号住居の時期を考え合わせると、9世紀前半の住居と考えたい。



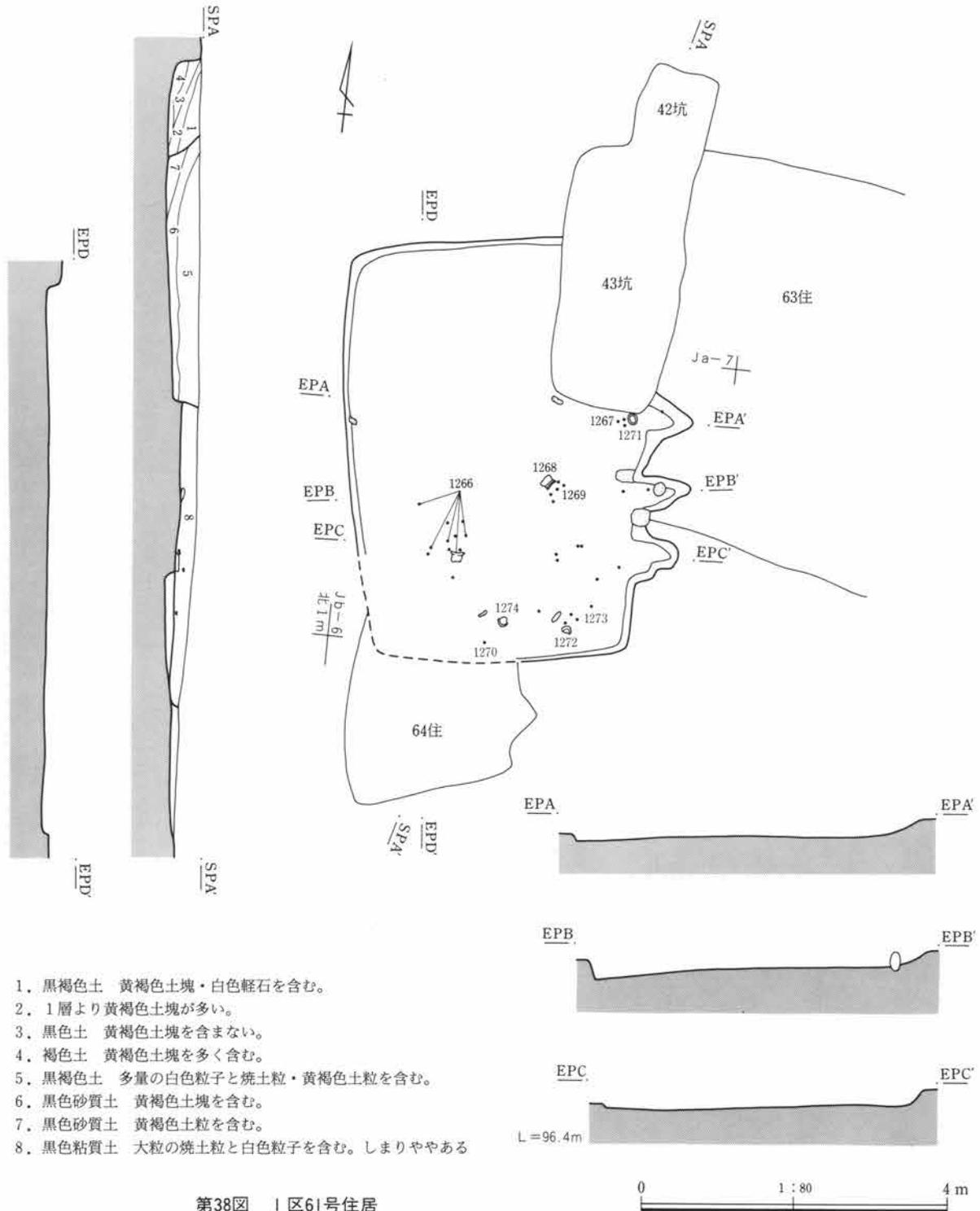
第37図 I 区57号住居と出土遺物

Ⅰ区61号住居

位置 It・Ja-6グリッド写真PL13
 重複 北東部が43号土坑に切られている。先行する63号住居の西壁と、64号住居の北壁を切っている。
 形状 長軸をほぼ南北方向にする長方形を呈する

と推定される。南西隅の壁は、先行する64号住居と重複するために明確にとらえられなかった。周壁は直線的に掘られ、隅も比較的角張っている。規模は長軸5.48m、短軸3.88mである。

面積 測定不可 方位 N-82°-E



1. 黒褐色土 黄褐色土塊・白色軽石を含む。
2. 1層より黄褐色土塊が多い。
3. 黒色土 黄褐色土塊を含まない。
4. 褐色土 黄褐色土塊を多く含む。
5. 黒褐色土 多量の白色粒子と焼土粒・黄褐色土粒を含む。
6. 黒色砂質土 黄褐色土塊を含む。
7. 黒色砂質土 黄褐色土粒を含む。
8. 黒色粘質土 大粒の焼土粒と白色粒子を含む。しまりややある

第38図 Ⅰ区61号住居

床 面 遺構確認面から14cm掘り込んで床面となる。床面には細かい凹凸があったが、中央部は硬化していた。

埋没土 大粒の焼土粒と白色軽石を含む、しまりのある黒色土で埋まっていた。

竈 東壁中央から南部にかけて、竈とその痕跡と考えられる遺構が合わせて3カ所検出された。中央の施設が埋没時の竈と考えられる。その竈は、住居壁より内側に竈袖が若干張り出す形態の竈で、向かって左側は20cmの袖の芯と考えられる礫が残存していた。焚口幅は30cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。燃焼部のほぼ中央やや左側に、円礫の支脚が立てられていた。煙道部は壁から外へ50cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに傾斜していた。北側・南側の竈痕跡は、それぞれ

焚口幅34cm・43cm、煙道長35cm・25cmの掘り方土坑として残されていた。

周 溝 検出されなかった。

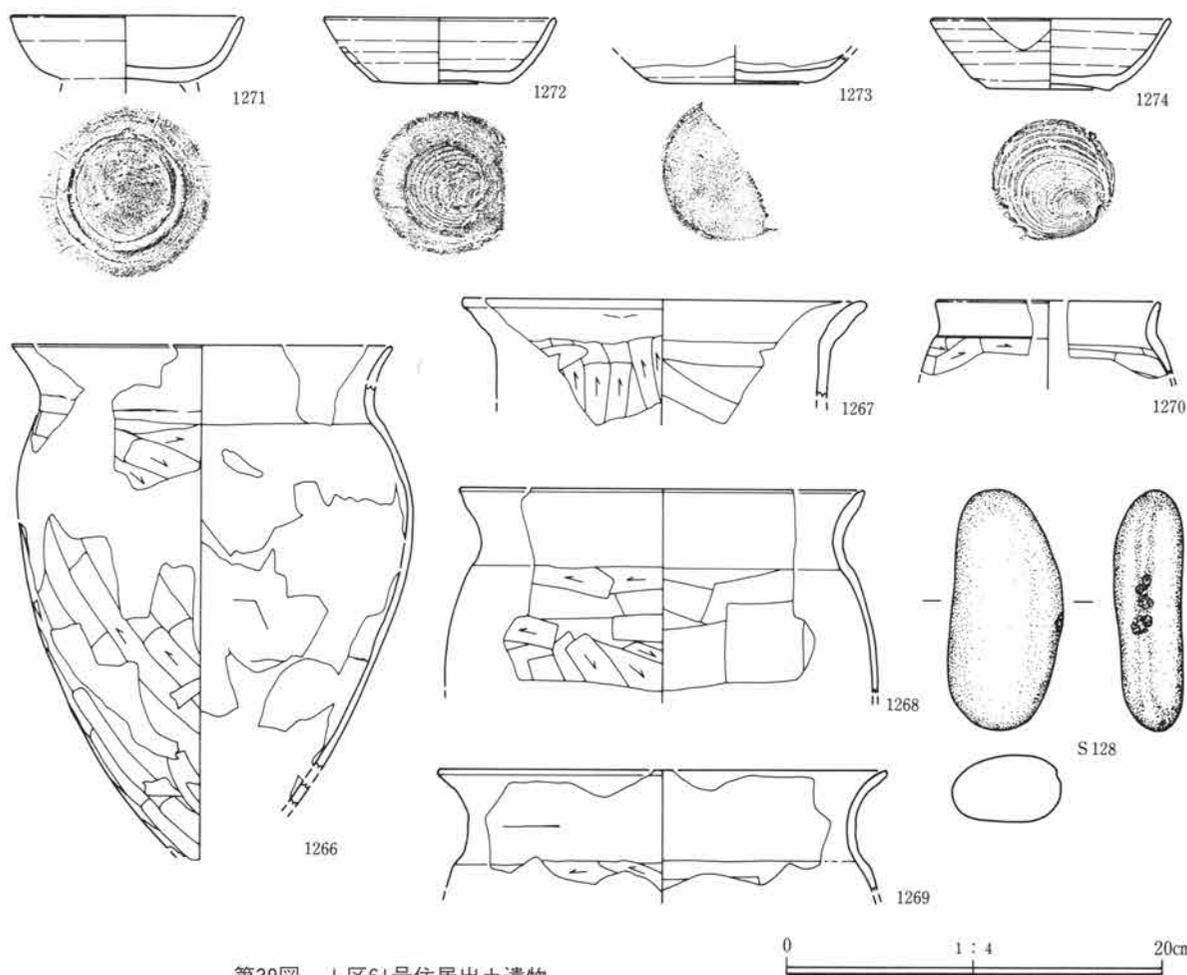
柱 穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺 物 290点余りの遺物が出土している。床面近くの遺物は少なかったが、完形に近い形で残っていたものが多い。土師器甕形土器は住居南部にいくつかに分かれて出土した。1267は北側の竈痕跡土坑内、1268・1269は竈前、1266・1270は南部の壁際で出土した。他に須恵器杯形土器(1271・1274)がそれぞれ竈前、南部壁近くの床面直上で出土した。

(遺物観察表：9頁)

所 見 出土遺物から、9世紀前半の住居と考えられる。



第39図 I区61号住居出土遺物

I区63号住居

位置 It・Ja-7グリッド 写真 PL15

重複 西壁を61号住居・43号土坑に、東壁の大半を62号住居に切られている。

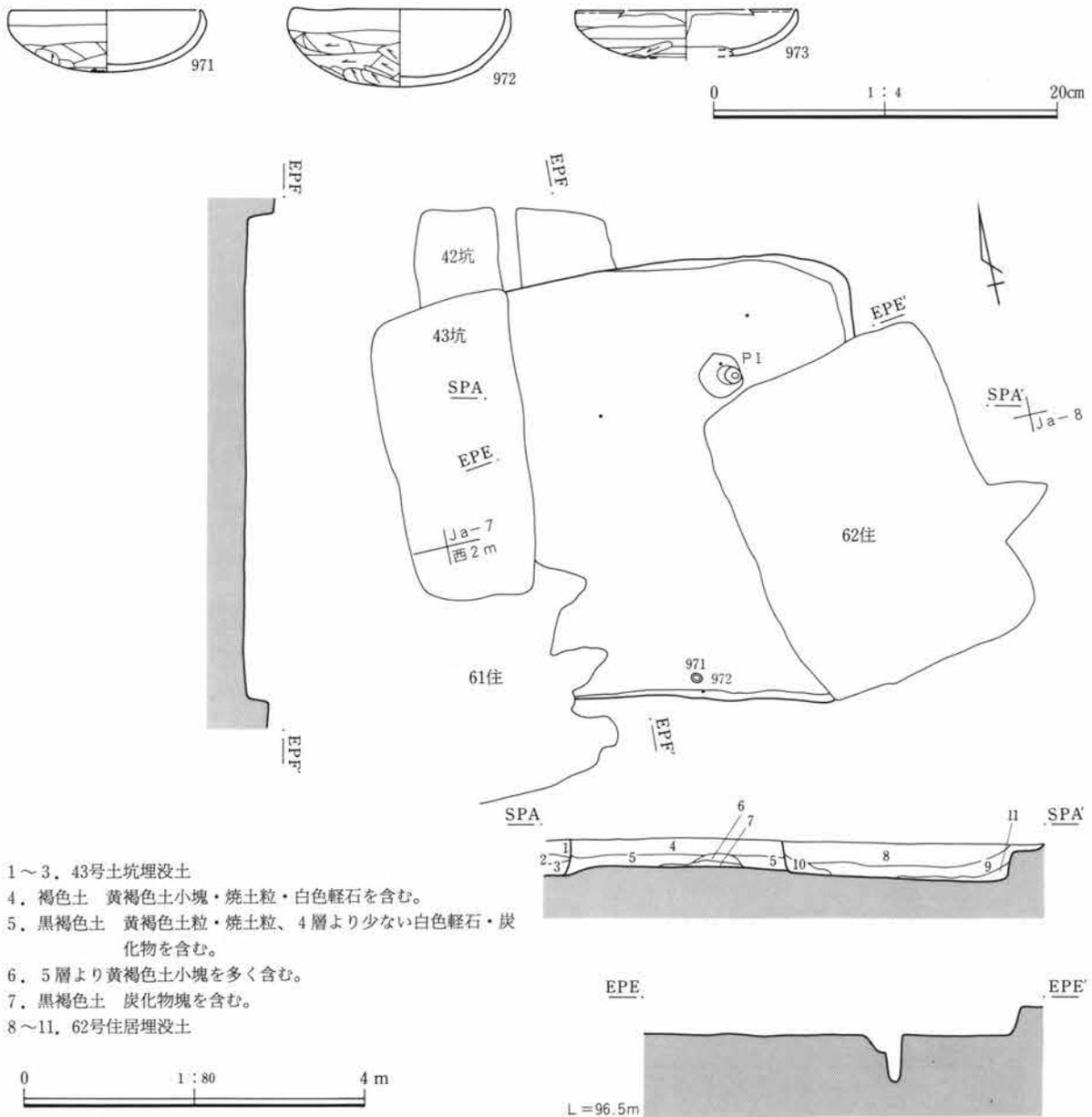
形状 北壁をほぼ東西方向にする方形を呈するが、東西壁を壊されているので全形は不明である。周壁はほぼ直線的に掘られている。隅は北東隅のみ残存していたが、丸く掘られている。規模は南北軸が5.10mで、東西方向の大きさは不明である。

面積 計測不可 北壁方位 N-103°-E

床面 遺構確認面から37cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦である。

埋没土 下層は一部に炭化物塊を含む黒褐色土が堆積し、焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色土が埋没していた。上層には軽石・焼土塊・黄色土塊を含む褐色土で埋まっていた。

竈 東壁に竈が付設されていたと推定されるが、62号住居に壊されている。



- 1～3. 43号土坑埋没土
- 4. 褐色土 黄褐色土小塊・焼土粒・白色軽石を含む。
- 5. 黒褐色土 黄褐色土粒・焼土粒、4層より少ない白色軽石・炭化物を含む。
- 6. 5層より黄褐色土小塊を多く含む。
- 7. 黒褐色土 炭化物塊を含む。
- 8～11. 62号住居埋没土

第40図 I区63号住居と出土遺物

周溝 検出されなかった。

柱穴 支柱穴と考えられるピットが1本検出された。規模(短径×長径×深さ)は、P1:50×52×54cmである。柱根は東側に偏っており、直径10cmほどである。他の支柱穴は検出できなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 170点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中から出土したが、南壁ほぼ中央で出土した土師器杯形土器(971・972)は床面より上位であったが、壁にへばりつくような位置で出土した。

(遺物観察表:9頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。

I区64号住居

位置 J a-6グリッド 写真 PL15

重複 北部を61号住居に切られているが、かろうじて床面と、わずかな壁が残っていた。

形状 長軸を南北方向にする不定長方形を呈する。周壁は、西壁がやや膨らんで掘られている他は、ほぼ直線的に掘られている。隅は北西隅が大きく丸

い。他の三隅は比較的角張って掘られていた。規模は長軸3.45m、短軸2.20mである。

面積 6.30m² 方位 N-85°-E

床面 遺構確認面から11cm掘り込んで床面となる。北部は61号住居に切られており、明確な床面はとらえられなかった。

竈 東壁南端に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は50cmである。燃焼部の壁はあまり焼けていなかった。わずかに焼土が残っていたのみである。煙道部は壁から外へ28cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで煙道部へ緩やかにつながっていた。

周溝 検出されなかった。

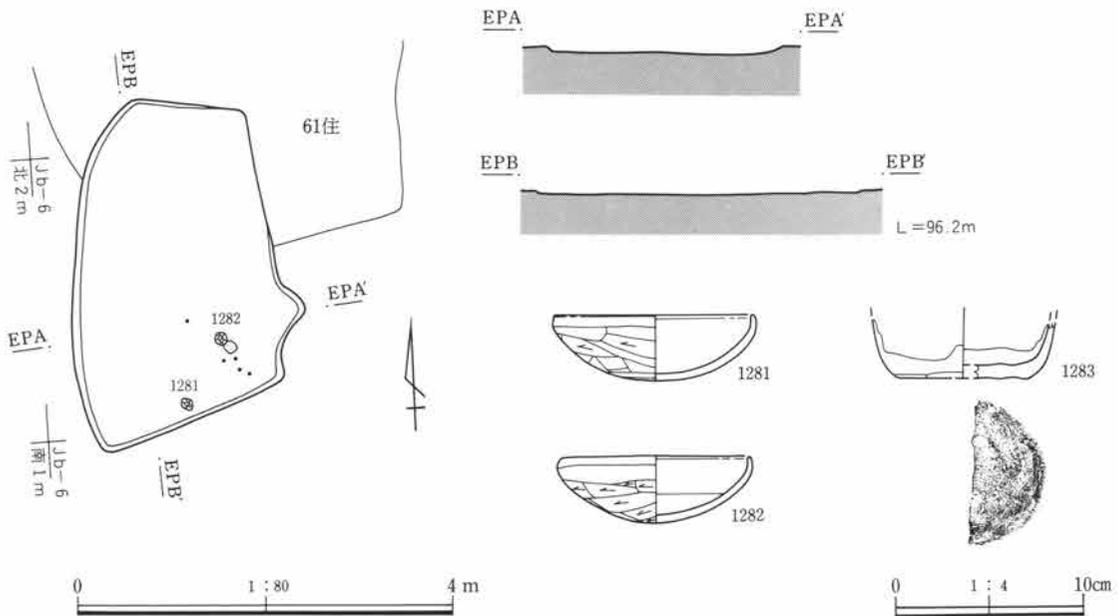
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 230点余りの遺物が出土しているが、床面近くの遺物は少ない。図示した土師器杯形土器(1281・1282)は住居南部の床面直上で出土した。

(遺物観察表:10頁)

所見 出土遺物から、7世紀末~8世紀初頭の住居と考えられる。



第41図 I区64号住居と出土遺物

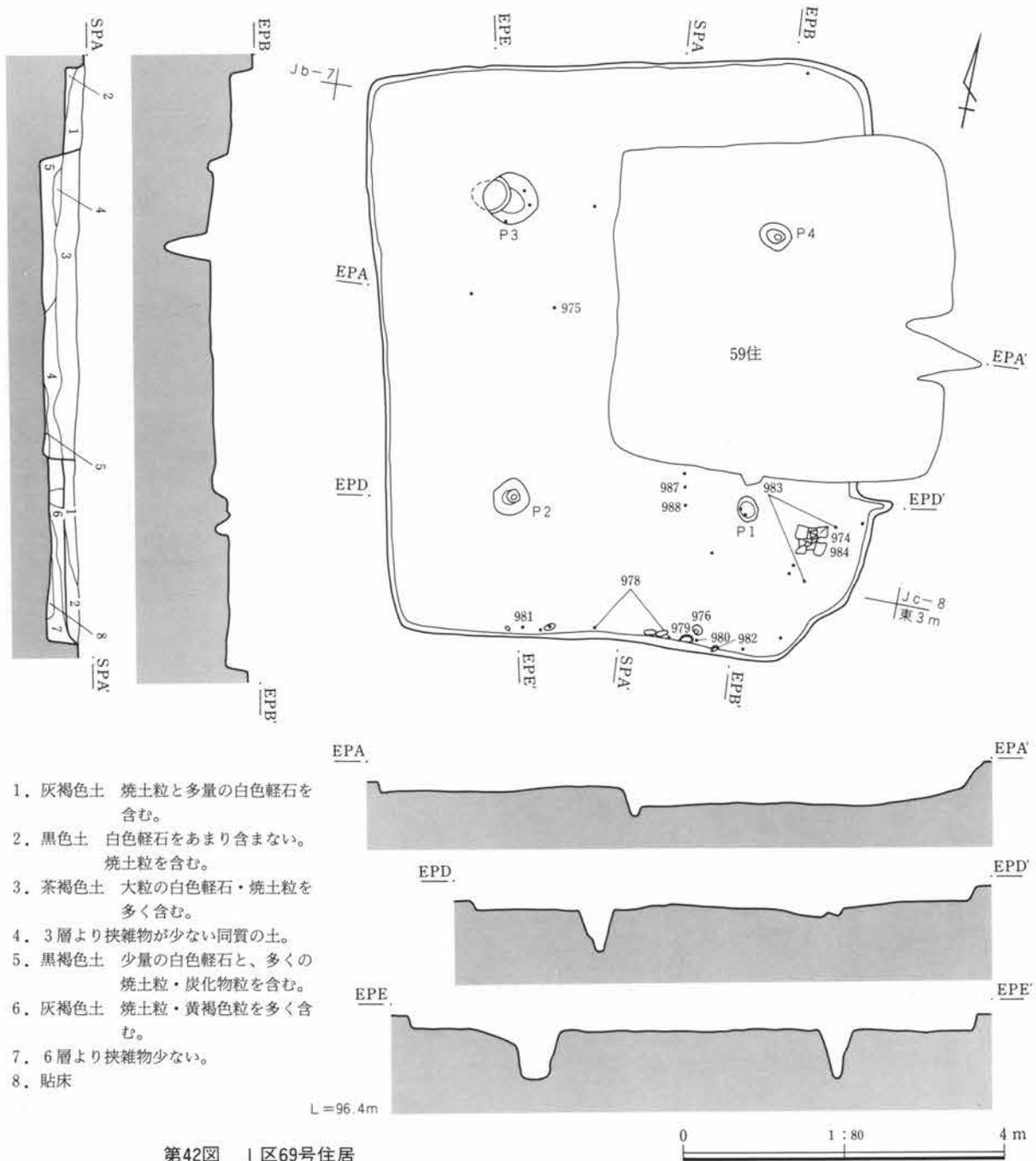
1区69号住居

位置 Jb-7・8グリッド 写真 PL14
 重複 東部を59号住居に切られている。また、東南部の床面下に70号住居がある。

形状 長軸をほぼ南北方向にする長方形を呈するが、南東隅は不定形である。周壁は東半分が膨らむ南壁を除き、直線的に掘られている。隅はやや丸い。規模は長軸7.12m、短軸6.05mである。

面積 41.82㎡ 方位 N-77°-E
 床面 遺構確認面から23cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦であるが、南壁沿いに凹凸がある。

埋没土 壁沿いの下層は焼土粒を含む黒色土、上層は焼土粒と多量の白色軽石を含む灰褐色土で埋まっていた。



1. 灰褐色土 焼土粒と多量の白色軽石を含む。
2. 黒色土 白色軽石をあまり含まない。焼土粒を含む。
3. 茶褐色土 大粒の白色軽石・焼土粒を多く含む。
4. 3層より挟雑物が少ない同質の土。
5. 黒褐色土 少量の白色軽石と、多くの焼土粒・炭化物粒を含む。
6. 灰褐色土 焼土粒・黄褐色粒を多く含む。
7. 6層より挟雑物少ない。
8. 貼床

L=96.4m

0 1.80 4 m

第42図 1区69号住居

竈 本住居を切っている59号住居の南壁と接する部分で、竈崩落土塊が検出されたが、竈と断定できなかった。

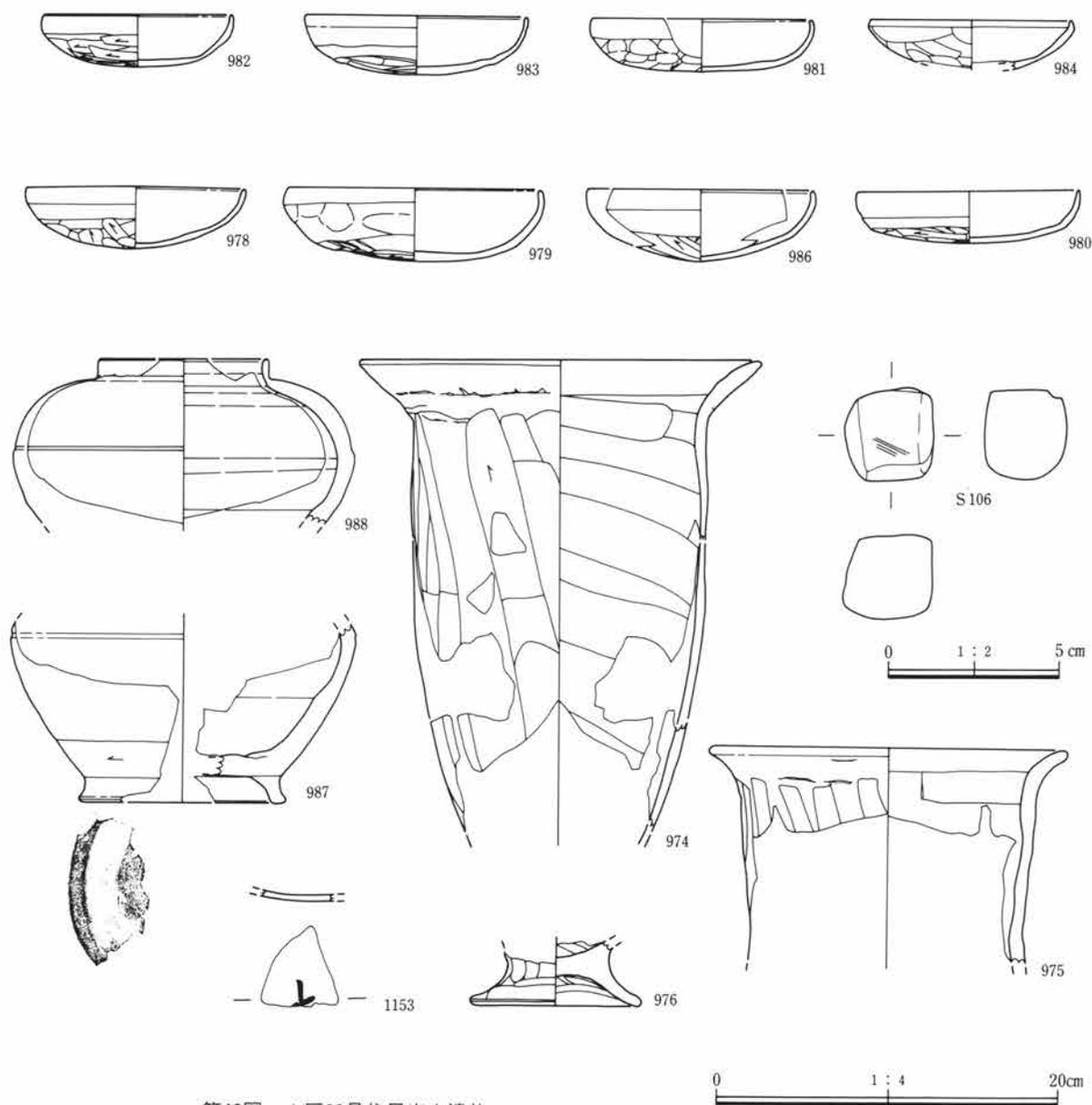
周溝 検出されなかった。

柱穴 4本の支柱穴が検出された。各支柱穴の規模（短径×長径×深さ）は、P1：27×30×16cm、P2：44×45×60cm、P3：61×70×63cm、P4：32×36×53cmである。支柱穴のうちP1・P2・P3は住居対角線上にのるが、P4はやや南側へずれている。各支柱穴を結んだ形は台形を呈する。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 660点余りの遺物が出土している。床面近くの出土遺物はあまり多くない。ほとんど埋没土中の遺物である。床面に近い遺物は、南壁沿いに集中していた。土師器甕形土器(974)や杯形土器(982)は南壁際の床面直上で出土した。また土師器杯形土器(983)、須恵器壺形土器(987・988)は支柱穴P1周辺の床面直上で出土した。（遺物観察表：10頁）

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



第43図 I区69号住居出土遺物

1区75号住居

位置 I 0-14グリッド 写真 PL15

重複 北壁東端を新しい土坑が切っている。

形状 東壁を南北方向にする方形を呈すると推定される。本住居の西部は削平が著しく、床面および壁がとらえられなかったため、全体形状は不明である。周壁はほぼ直線的に掘られている。隅は比較的角張っていた。規模は南北長3.20mである。

面積 測定不可 方位 N-89°-E

床面 遺構確認面から9cm掘り込んで床面となる。床面は小さな凹凸はあるが全体には平坦で、竈前面は硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈

で、焚口幅は40cmである。燃焼部は削平が著しく下部しか残っていなかったが、壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ42cm突出していた。燃焼部はややへこんで、煙道部へ緩やかに傾斜していた。周溝 検出されなかった。

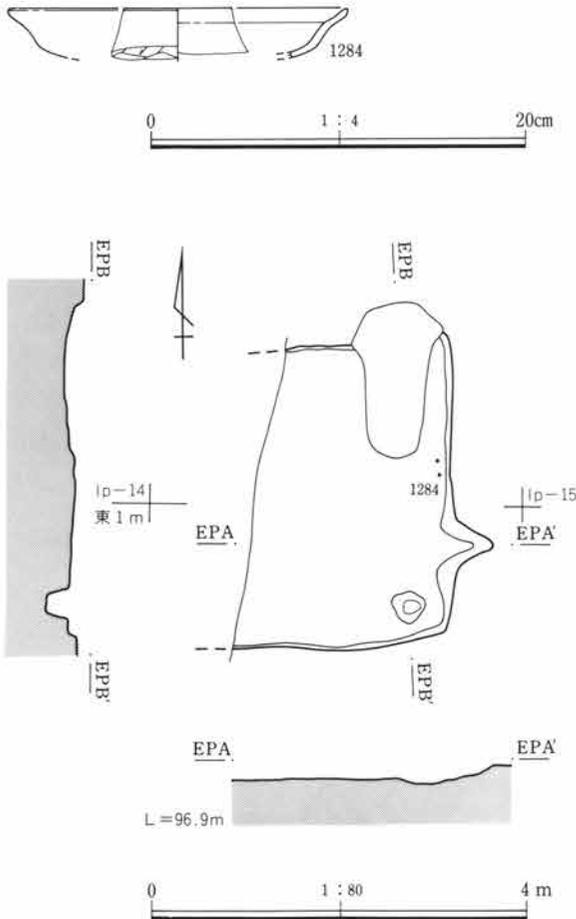
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 竈右側、住居南東隅に、長径0.35m、短径0.32m、深さ0.26mの円形のピットが検出されたが、形状は小さいが、位置は貯蔵穴と考えられる。

遺物 75点余りの遺物が出土している。埋没土中の遺物が多いが、図示した土師器杯形土器(1284)は竈左東壁沿いの床面直上で出土した。

(遺物観察表：10頁)

所見 出土遺物から、8世紀の住居と考えられる。



第44図 1区75号住居と出土遺物

1区8号土坑

位置 L 0-5グリッド 写真 PL16

形状 平面形は円形、断面形はフラスコ形を呈する。底面脇は20cmほど外側まで抉り掘られている。規模は長軸1.70m、短軸1.51mである。

底面 遺構確認面から71cm掘り込んで底面となる。底面はほぼ平らで、ピット状の掘り込みはない。埋没土 暗黄褐色土塊を多量に含んだ黒褐色土で埋まっていた。抉りの部分には黒色土が入り込んでいた。

遺物 埋没土中から30点余りの遺物が出土したが、8世紀の土器がほとんどである。図示したのは土師器杯形土器(1154・1155)で、1155には底部内面中央に刻書がある。(遺物観察表：11頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の土坑と考えられる。

Ⅰ区9号土坑

位置 Lt-4・5グリッド 写真 PL16
形状 平面形は円形、断面形はフラスコ形を呈する。底面脇は長いところで20cmほど奥へ抉り掘られていた。規模は長軸1.55m、短軸1.49mである。
底面 遺構確認面から59cm掘り込んで底面となる。底面にはやや凹凸があり、やや南側に長径70cm、短径56cmの楕円形の落ち込みがある。
埋没土 暗褐色土の塊を多量に含む黒褐色土で埋まっていた。
遺物 出土遺物はほとんど無く、図示した土師器杯形土器(1285)が埋没土中から出土したのみである。(遺物観察表：11頁)
所見 埋没土中の出土遺物からでは時期を決定することは困難であるが、形態的な類似性からⅠ区8号土坑と同様に8世紀前半の土坑と考えたい。

Ⅰ区34号土坑

位置 Jb-18グリッド 写真 PL16
形状 平面形は円形を、断面形はフラスコ形を呈する。底面の脇は20～30cm奥へ抉り掘られている。規模は長軸1.51m、短軸1.38mである。
底面 遺構確認面から90cm掘り込んで底面となる。底面は平らである。
埋没土 暗黄褐色土塊を多く含む黒褐色土で埋まっていた。
遺物 遺物は出土していない。
所見 遺物から土坑の時期は決められないが、形態的に8号土坑と類似していることから、8世紀前半の土坑と考えたい。

Ⅰ区60号土坑

位置 Jb-10グリッド 写真 PL15
形状 平面形は楕円形を、断面形は皿状を呈する。先行すると考えられる71号住居の床面で検出されたので、底面付近のみ確認したにとどまった。規模は長軸1.16m、短軸0.92mである。
底面 遺構確認面から7cm掘り込んで底面となる。底面はほぼ平らである。
遺物 ほぼ底面直上で、図示した遺物が出土している。出土した遺物は土師器杯形土器で、990・991・992は床面直上で、614・993は埋没土中の出土である。(遺物観察表：11頁)
所見 本土坑は、71号住居調査時に検出した。住居の確認面では平面形を確認することができなかったため、土坑の底面を辛うじて残す結果となった。しかし、土坑の全体形状を確認することはできなかった。土坑の時期は出土遺物から、8世紀前半と考えられる。

Ⅰ区8号土坑

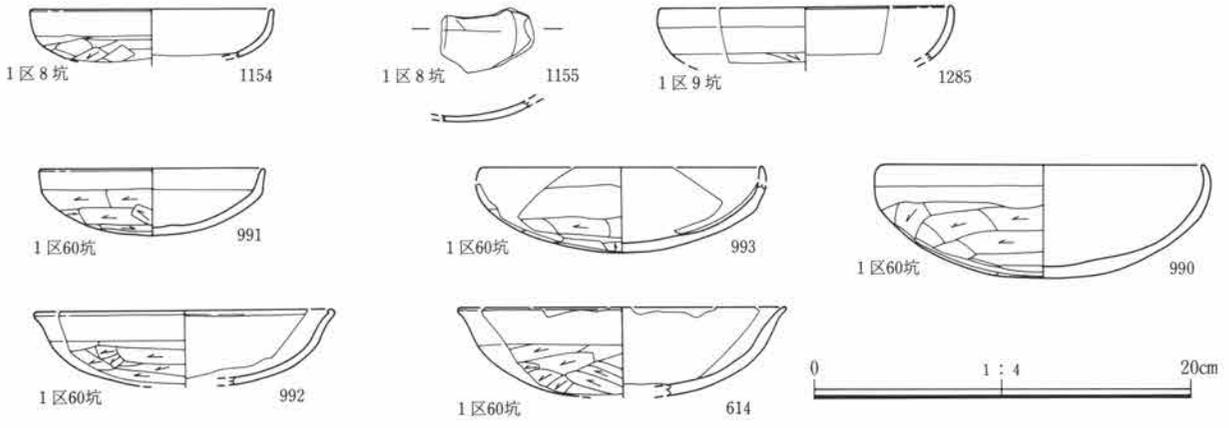
1. 黒褐色土 軽石を含む。暗黄褐色土塊(5～10mm大)を含む。
2. 暗黄黒褐色土 暗黄褐色の地山を多く含む。
3. 1に類するがやや粘質。
4. 2に類する。
5. 黒色土

Ⅰ区9号土坑

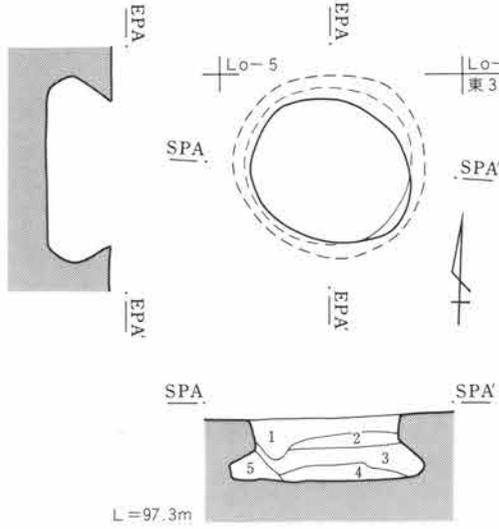
1. 表土
2. 暗黄黒褐色土 暗黄褐色土塊(1～3cm大)が多く入る焼土粒もわずかに入る。
3. 2に類するが暗黄褐色土塊がわずかに入る。
4. 2に類するが暗黄褐色土塊が極めて多い。
5. 黒褐色土 浅間C軽石・焼土粒をわずかに含む。
6. 2に類する。
7. 暗黄褐色土 2と地山の混土。

Ⅰ区34号土坑

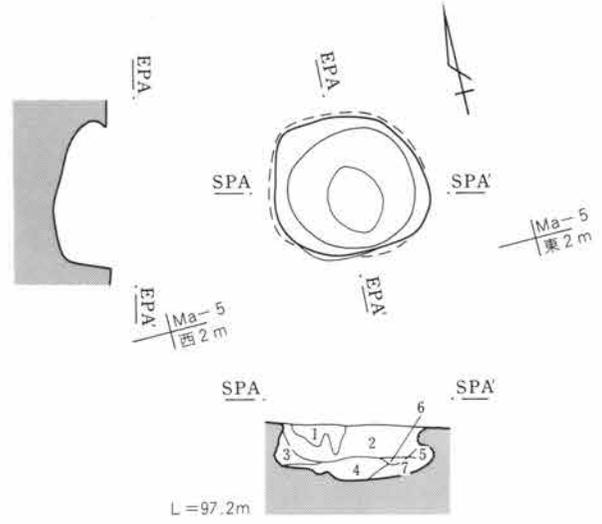
1. 黒褐色土 軽石粒・地山粒が多い。地山塊(暗黄褐色土・1～2cm)が入る。
2. 1に類するが、地山塊の量が多く大きい。
3. 暗黄褐色土 黒色土を少量混じる
4. 黒褐色土 黒褐色土に地山塊(1～4cm大)が入る。
5. 暗黄灰褐色粘質土 6との混じり。



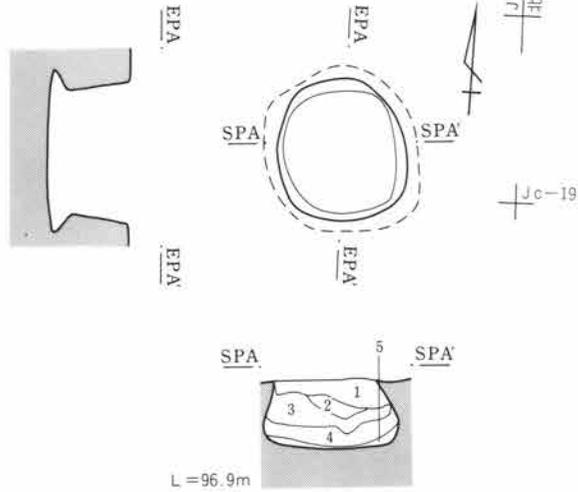
1区8号土坑



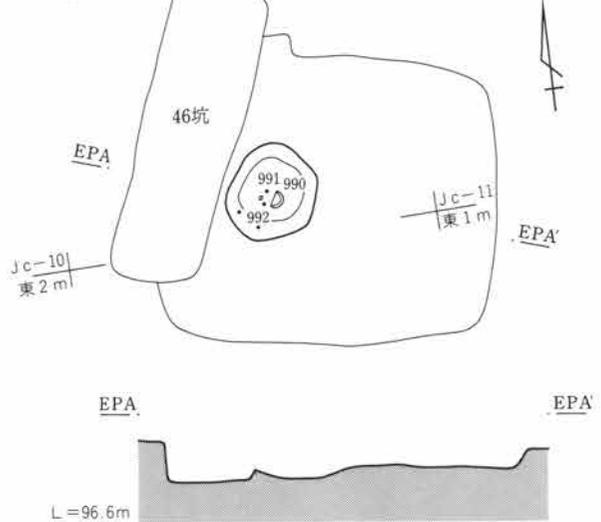
1区9号土坑



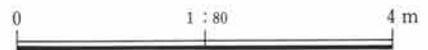
1区34号土坑



1区60号土坑



第45図 1区8号・9号・34号・60号土坑と出土遺物



I 区 35 号 土 坑

位 置 I j・k-6・7グリッド

写 真 PL16・18

形 状 平面形は大形の円形を呈し、断面形はすり鉢状を呈する。規模は長軸2.71m、短軸2.59mである。

底 面 遺構確認面から1.7m掘り込んで底面となる。底面は直径0.88mほどの円形で平らである。底面の東寄りには直径0.5m、深さ0.2mの円形のピットが検出された。

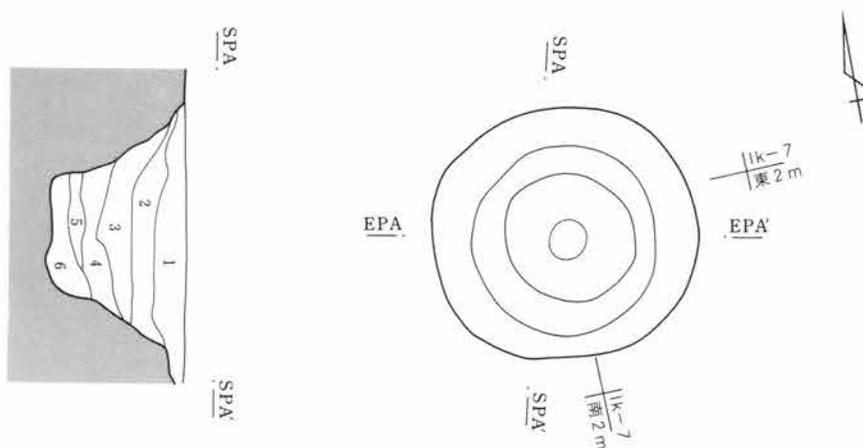
埋没土 軽石や暗褐色土粒、多量の暗褐色土塊を含む黒褐色土で埋まっていた。

遺 物 埋没土中から800点余りの多量の土器が出土した。破片が多かったが、半完形のものも多く、34点の土器を図示し得た。特に土師器杯形土器が多

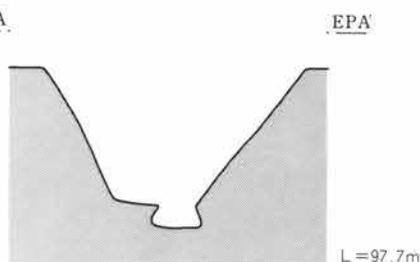
量に出土している。土師器杯形土器には、判読できないが墨痕のある1174や、内面に「☆」形の刻書のある小形の1173が含まれていた。同須恵器杯形土器も少量ながら出土している。また、形態の不明な鉄製品が出土したが、図示できなかった。

(遺物観察表：11・12頁)

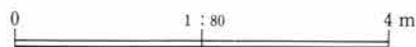
所 見 出土遺物から、8世紀前半の土坑と考えられる。本土坑は、形態的に類似する36号土坑・37号土坑と近接した位置にあり、これらの土坑は、台地の西縁に並んでいる。底面の小穴は湧水孔とも考えられるが、調査時には湧水はなかったし、埋没土中に砂礫の堆積も認められなかった。「☆」形の線刻のある土師器杯形土器破片は、この遺構が呪術的祭祀の対象であったことを示唆するが、調査では土坑の機能を明確にすることは明らかにできなかった。

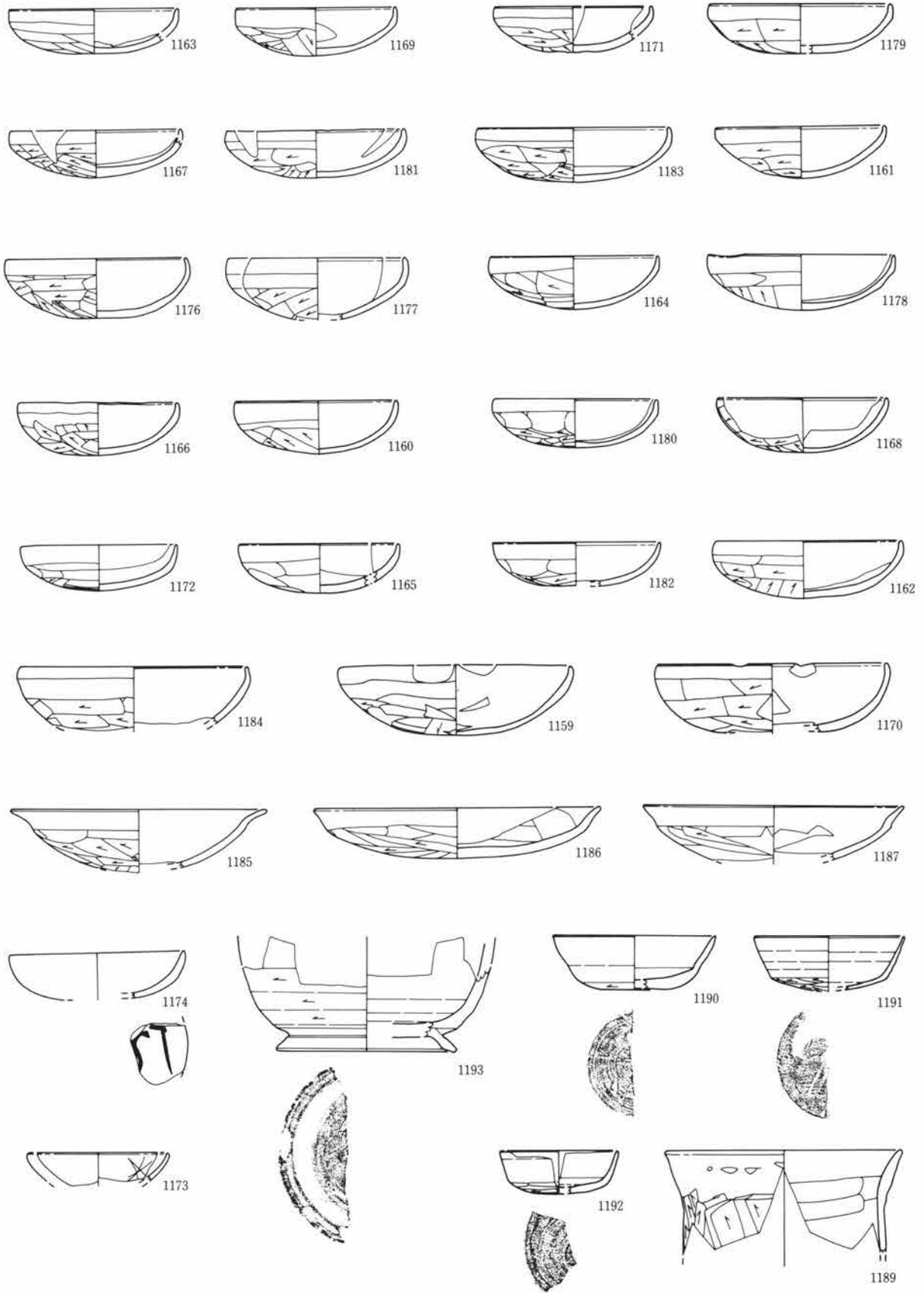


1. 黒褐色土 浅間C軽石・軽石粒・地山粒を多く含む。白色軽石も散見される。小石が入る。
2. 黒褐色土 浅間C軽石・軽石粒・地山粒を含むが1より少ない小石が入る。
3. 黒褐色土 軽石粒・地山粒が少量入る。暗褐色土塊（1～4cm大）が少し入る。小石が入る。
4. 黒褐色土 地山の微粒が多い。暗褐色土塊（1cm大）が少し入る。小石が入る。
5. 黒褐色土 4に類するが塊が少ない。小石が入る。
6. 黒色土 地山の微粒子が底部に多い。



第46図 I 区35号土坑





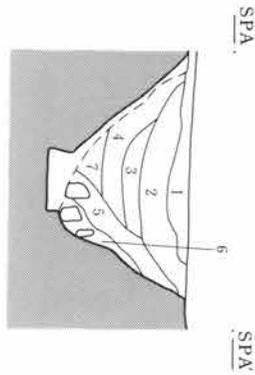
第47図 Ⅰ区35号土坑出土遺物

I 区 36 号 土 坑

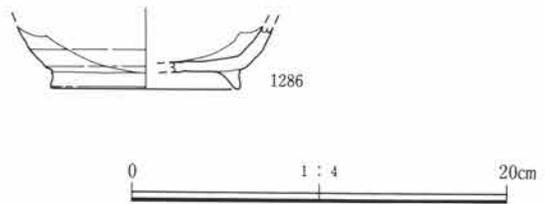
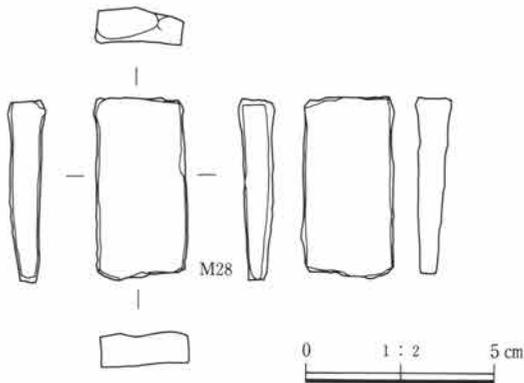
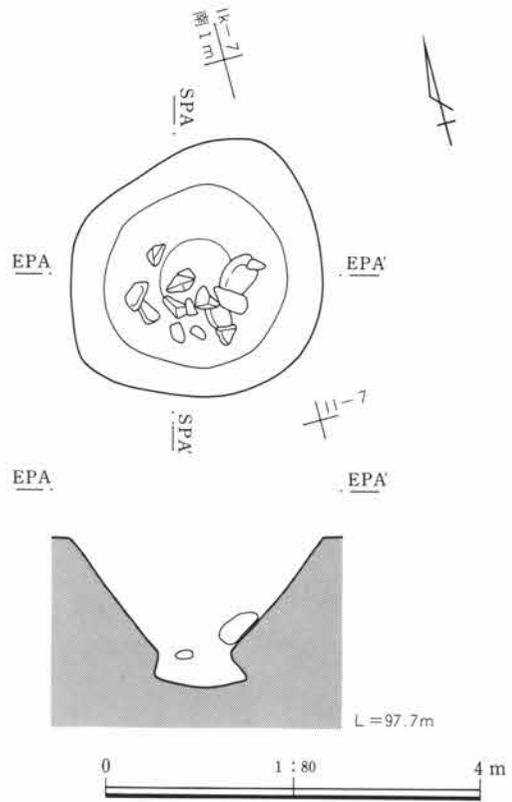
位置 Ik-6 グリッド 写真 PL17・18
 形状 平面形は大形の円形を、断面形はすり鉢状を呈する。規模は長軸2.75m、短軸2.65mである。
 底面 遺構確認面から1.66m掘り込んで底面となる。底面は直径0.8m、深さ0.26mほどのピット状になっており、下底は平らである。
 埋没土 軽石や多量の暗褐色土塊を含む黒褐色土で埋まっていた。下層には人頭大の角礫・円礫が合計

17個落ち込んでいた。

遺物 埋没土中から50点余りの遺物が出土しているが、破片が多い。図示し得た土器は須恵器高台付碗形土器(1286)のみである。また、鉄製の鑿(M28)が埋没土中から出土した。(遺物観察表：13頁)
 所見 出土遺物から、概ね8世紀代の土坑と考えられる。35号土坑との形態的類似性や、近接する位置から考えれば、35号土坑と近い時期で、同用途の遺構と考えたい。



1. 黒褐色土 浅間C軽石・軽石粒・地山粒を多く含む。白色軽石も散見される。小石が入る。
2. 黒褐色土 軽石粒・地山粒ともにわずかである。小石が入る。
3. 暗褐色土 2に暗褐色土塊(5~30mm大)が多く入る。小石が入る。
4. 黒褐色土 2よりさらに軽石粒・地山粒も少ない。小石が入る。
5. 4に類する。
6. 5と地山の混じり。
7. 4に類するがやや黒色が強い。



第48図 I 区36号土坑と出土遺物

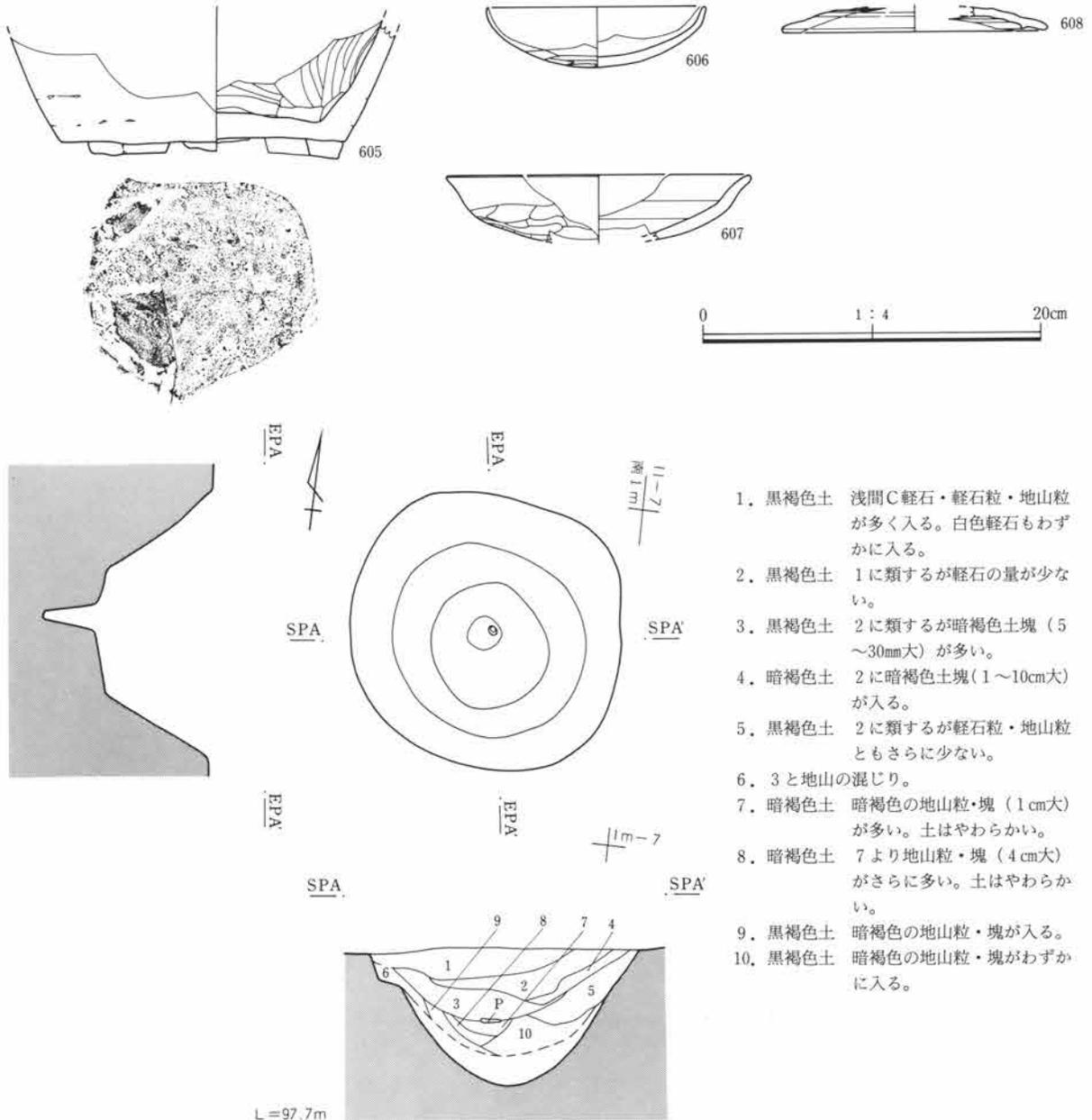
Ⅰ区 37号土坑

位置 I 1-6 グリッド 写真 PL17
 形状 平面形は大形円形を呈し、断面形はすり鉢状を呈する。規模は長軸3.22m、短軸3.20mである。
 底面 遺構確認面から2.02m掘り込んで底面となる。底面は直径1.48mの円形で平らであるが、底面やや北寄りに直径0.32m、深さ0.6mのピットが掘られている。

埋没土 軽石や多量の暗褐色土塊を含む黒褐色土で埋まっていた。

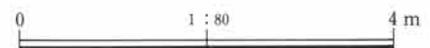
遺物 160点余りの遺物が埋没土中から出土している。土師器杯形土器の破片が多く、全体の6割を占めている。(遺物観察表：13頁)

所見 出土遺物と35号土坑との類似性から、8世紀前半の土坑と考えられる。



1. 黒褐色土 浅間C軽石・軽石粒・地山粒が多く入る。白色軽石もわずかに入る。
2. 黒褐色土 1に類するが軽石の量が少ない。
3. 黒褐色土 2に類するが暗褐色土塊(5~30mm大)が多い。
4. 暗褐色土 2に暗褐色土塊(1~10cm大)が入る。
5. 黒褐色土 2に類するが軽石粒・地山粒ともさらに少ない。
6. 3と地山の混じり。
7. 暗褐色土 暗褐色の地山粒・塊(1cm大)が多い。土はやわらかい。
8. 暗褐色土 7より地山粒・塊(4cm大)がさらに多い。土はやわらかい。
9. 黒褐色土 暗褐色の地山粒・塊が入る。
10. 黒褐色土 暗褐色の地山粒・塊がわずかに入る。

第49図 Ⅰ区37号土坑と出土遺物



I 区 38 号 土 坑

位置 I j-12グリッド 写真 PL17

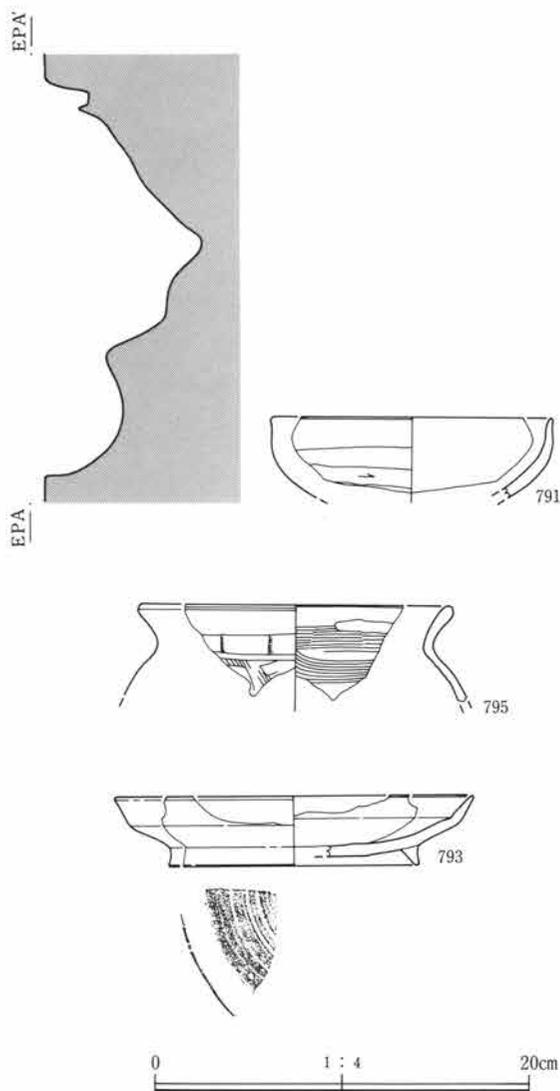
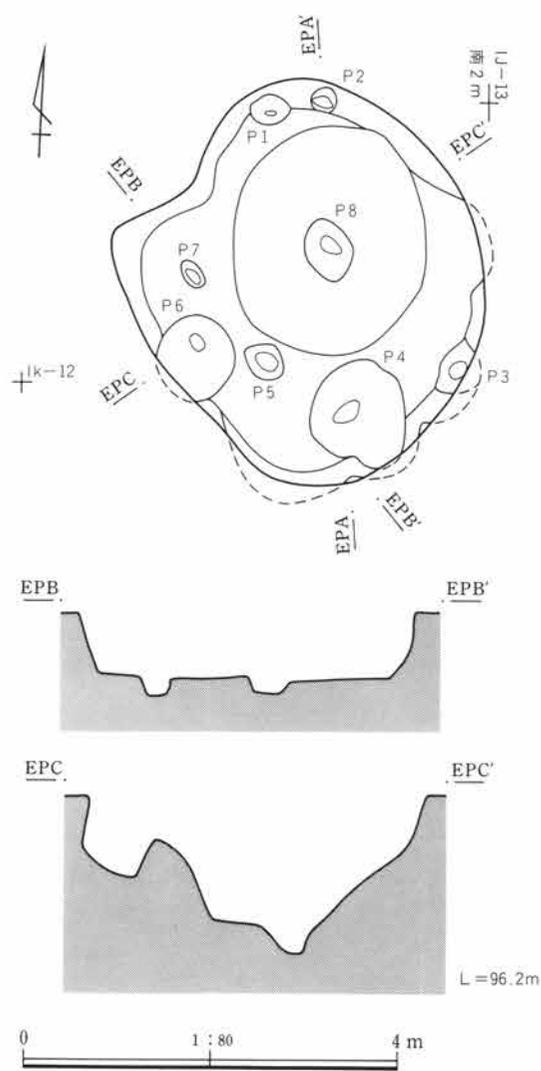
形状 平面形は大形の不整形円形を呈し、断面形はすり鉢状を呈する。規模は長軸4.47m、短軸4.07mである。

底面 遺構確認面から1.71m掘り込んで底面となる。掘り込みは二段になっている。上段の底面はほぼ平坦で、大小合わせて7本のピットが掘られている。各ピットの規模(短径×長径×深さ)は、P 1 : 33×44×16cm、P 2 : 23×25×32cm、P 3 : 42×52×16cm、P 4 : 100×102×22cm、P 5 : 37×40×25cm、

P 6 : 80×90×25cm、P 7 : 23×26×21cmで、各ピットの位置の規格性はない。下段の底面は南側は平坦で、北側はすり鉢状を呈する。ほぼ中央にP 8 (52×63×29cm)が掘られている。

遺物 130点余りの遺物が埋没土中から出土している。遺物は795のような古墳時代初頭の土器片も含まれていたが、多くは791・793の時期の土器である。(遺物観察表：13頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の土坑と考えられる。



第50図 I 区38号土坑と出土遺物

I区45号土坑

位置 Je-5・6グリッド

写真 PL18・19

形状 平面形は大形円形を呈し、断面形は台形を呈する。規模は長軸4.06m、短軸3.76mである。

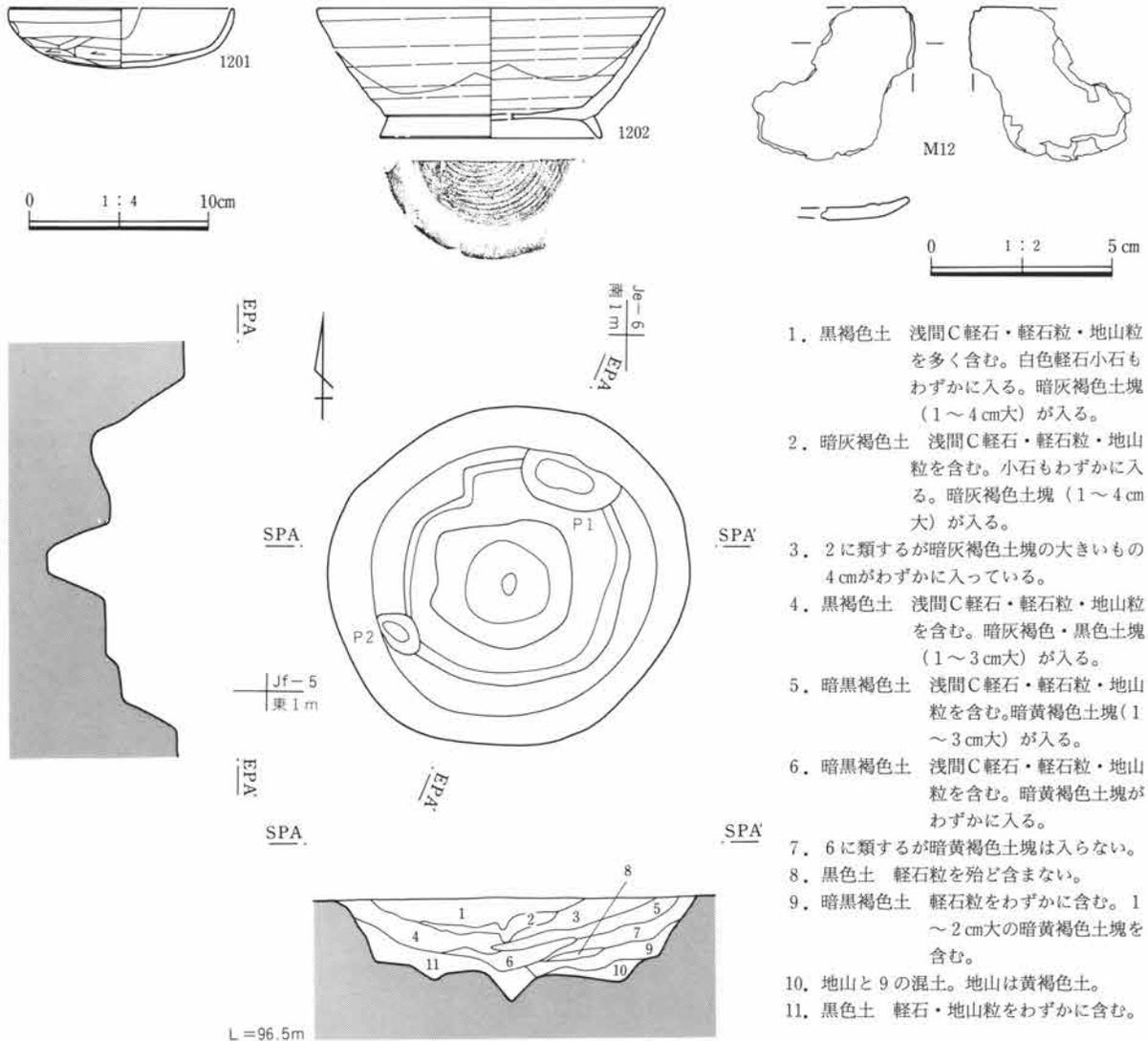
底面 遺構確認面から1.50m掘り込んで床面となる。二段の掘り込みがあり、上段の底面は狭い。平坦であるが、2本のピットが掘られている。各ピットの規模(短径×長径×深さ)はP1:57×112×35cm、P2:43×45×28cmである。下段の底面は直径2.2mほどの不正円形である。ほぼ平坦で、中央は直

径0.84m、深さ0.64mのピット状にさらに掘り込まれている。

埋没土 軽石と、暗褐色土・黄褐色土塊を含む黒褐色土で埋まっていた。

遺物 320点余りの遺物が埋没土から出土している。図示し得る遺物は少ないが、土師器杯形土器(1201)は完形に近い遺物である。また、埋没土中から方形になると考えられる形態不明の鉄製品が出土した。(遺物観察表:13頁)

所見 出土遺物から、8世紀後半の土坑と考えられる。



第51図 I区45号土坑と出土遺物

I 区 52 号 土 坑

位 置 J a-4 グリッド 写 真 P L 19・20

形 状 平面形は円形、断面形はすり鉢状を呈する。規模は長軸2.55m、短軸2.45mである。

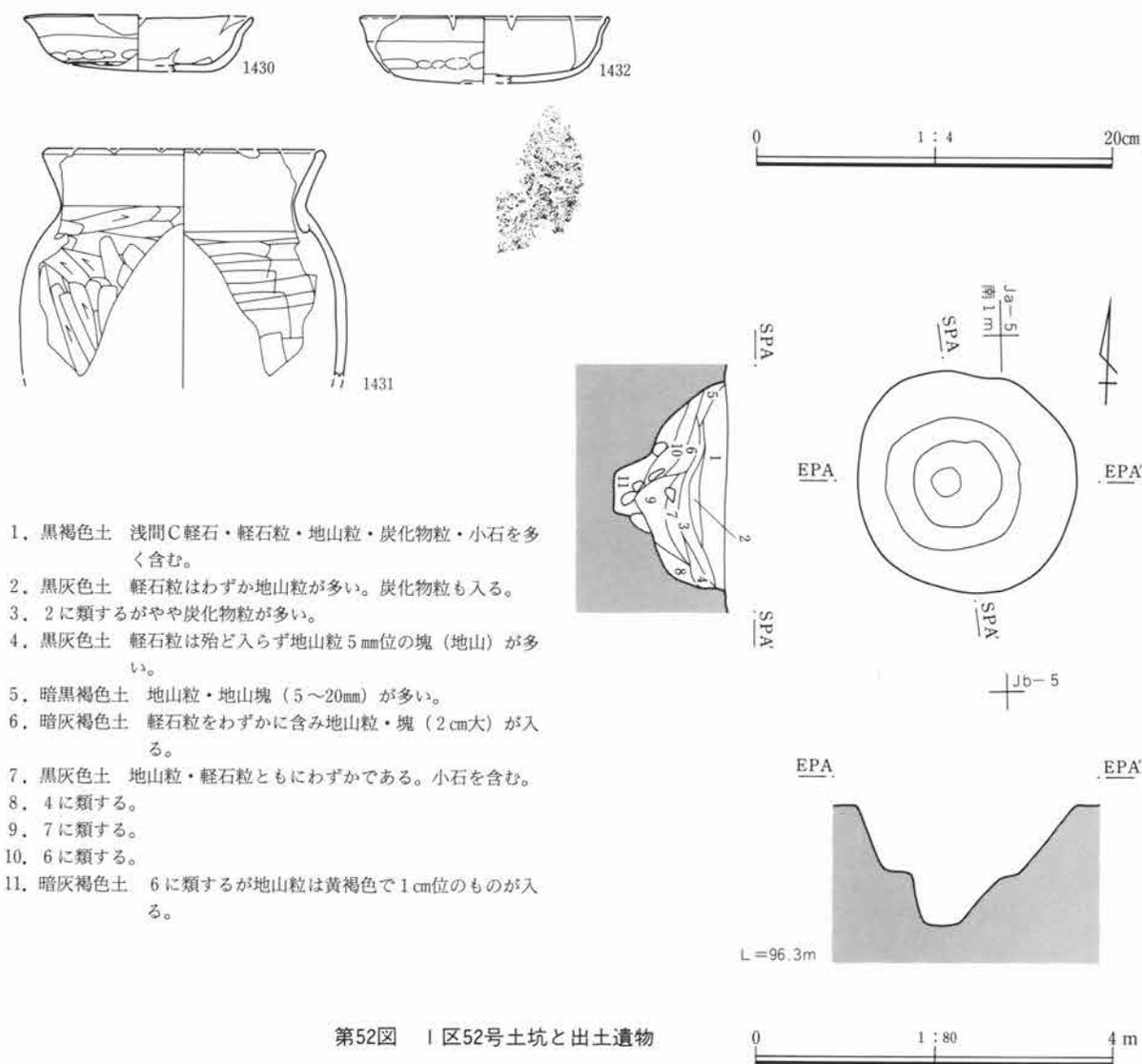
底 面 遺構確認面から1.35m掘り込んで底面となる。二段の掘り込みがあり、上段の底面は平坦であるが、幅0.3mほどで狭い。そこからさらに直径1.0m、深さ0.6mほどピット状に掘られている。下段の底面は直径0.32mほどである。

埋没土 軽石や暗灰褐色土塊を含む黒褐色土で埋まっていた。下層には人頭よりやや小さい石が入り込んでいた。

遺 物 埋没土中から60点余りの破片遺物が出土している。その中で図示した土師器杯形土器(1430)は完形に近い遺物である。また、甕形土器(1431)は埋没土から出土した中では大きな破片であった。

(遺物観察表：13頁)

所 見 出土遺物から、時期を決めるのは困難であるが、図示した杯形土器(1430・1432)は9世紀後半代の特徴を示していると考えられる。しかし、埋没土中には8世紀代の土器破片も含まれていた。また土坑の形態は、35号土坑等と類似している。したがって、本土坑の時期は8～9世紀にわたるものと考えたい。



第52図 I 区52号土坑と出土遺物

1区 17・32号土坑

位置 In-17・Io-18グリッド

写真 PL19 重複 32号土坑は16号土坑を切っているが、31号土坑との関係は不明である。

17号・30号土坑とも群在している。

形状 17号・32号土坑いずれも不定形を呈する。17号土坑は、長軸1.78m、短軸1.2mの不整楕円形で、深さは0.39mである。32号土坑は、長軸1.40m、短軸1.15mの不定形で、南東部が深くなっている。深さは0.60mである。

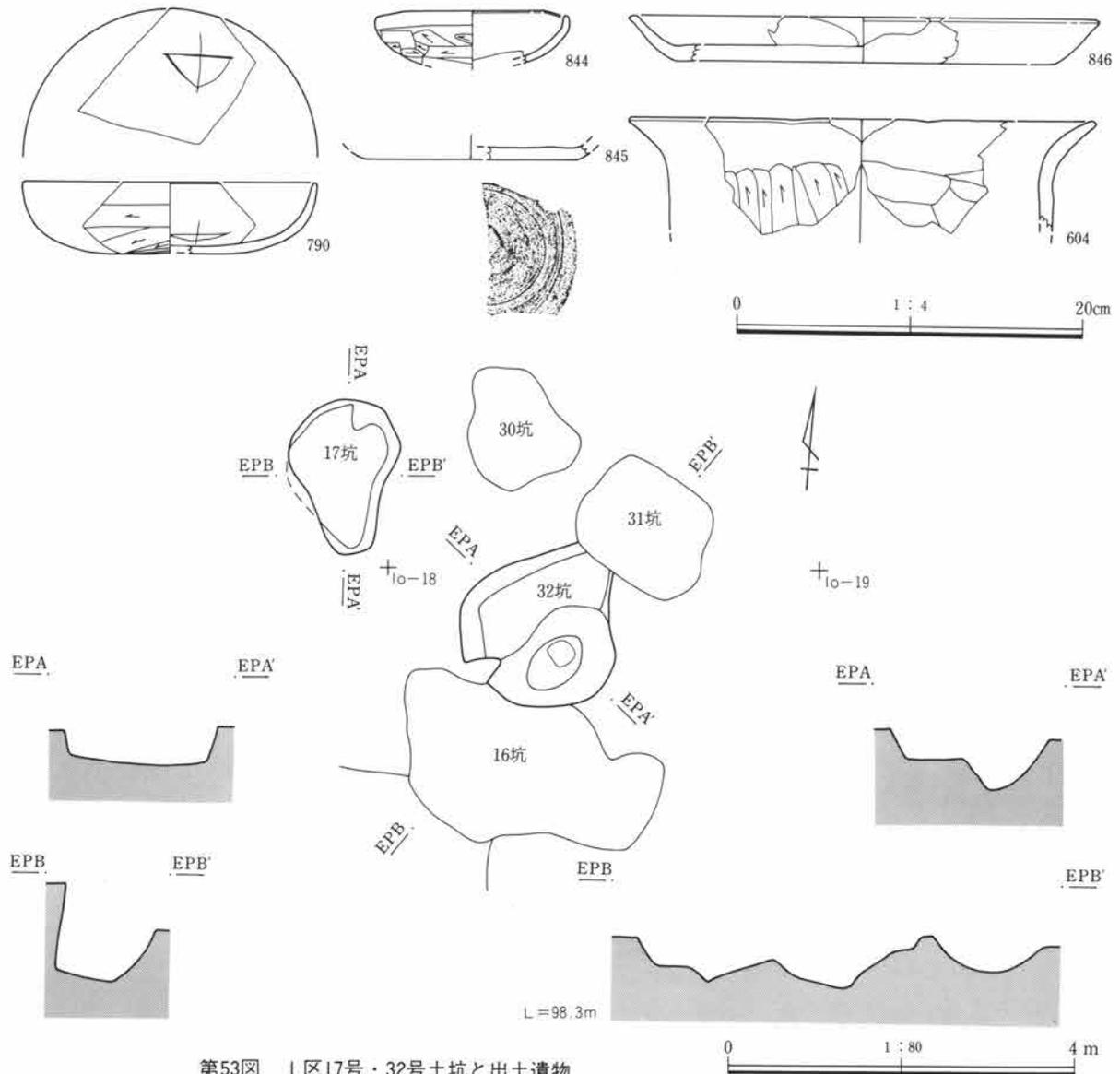
底面 17号土坑の底面は平坦で、断面形も箱形を

呈するのに対し、32号土坑の底面は西部は平らで、南東部がピット状に掘られている。

遺物 17号・32号土坑合わせて300点余りの遺物が出土しているが、破片がほとんどである。遺物の時期は8世紀初頭のものにままとまっている。

(遺物観察表：14頁)

所見 形態が不定形で、遺構としては考えにくい面もあるが、遺物の出土状態はままとまっている。したがって、17号・32号土坑を8世紀前半の土坑群の一部と考えておきたい。



第53図 1区17号・32号土坑と出土遺物

I 区 41 号 土 坑

位 置 I n-16・17グリッド 写 真 PL19

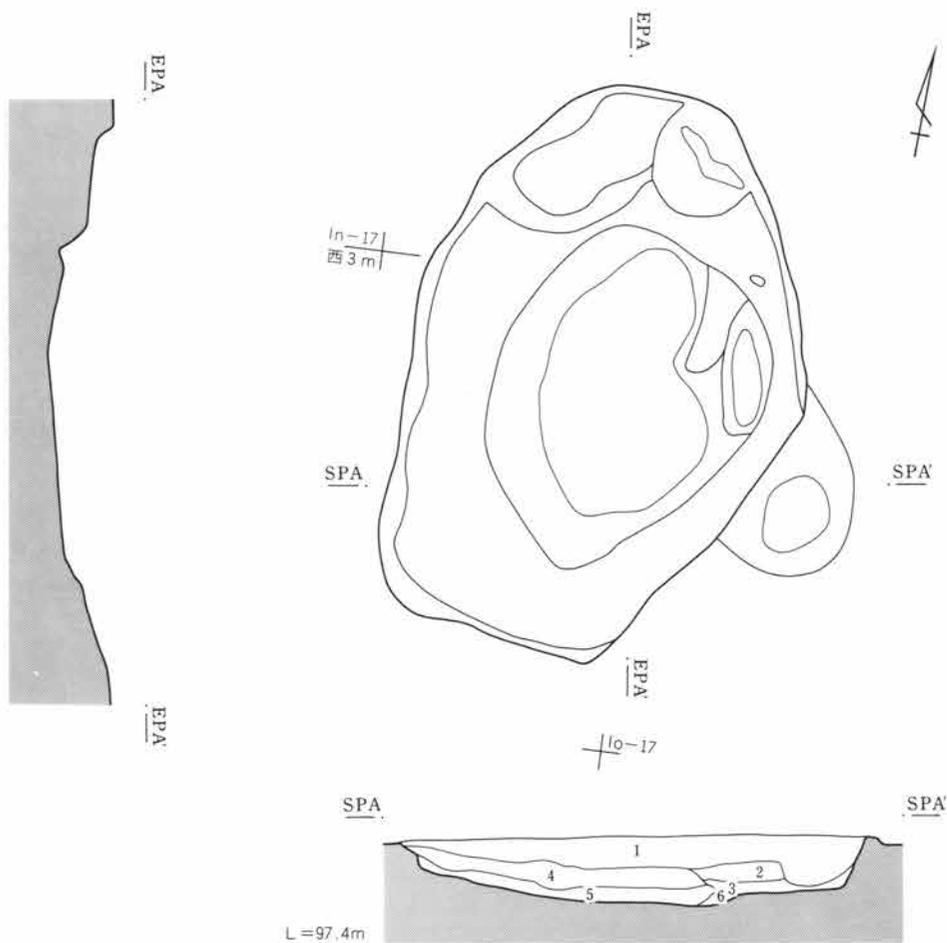
形 状 平面形は張り出しのある大きな楕円形を呈するが、定形的でない。断面形は緩やかな皿状を呈する。規模は長軸6.15m、短軸4.15mである。

底 面 遺構確認面から0.60m掘り込んで底面となる。底面には二段の掘り込みがある。上段は緩やかに中央に傾斜するが、ほぼ平坦である。下段は長径3.7m、短径2.9m、深さ0.28mに掘り込まれた楕円形である。底面はやや窪む。

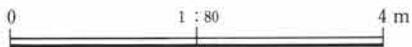
埋没土 軽石と黄褐色土塊を含む暗褐色土で埋まっていた。

遺 物 土師器を中心に240点余りの破片遺物が出土している。図示した遺物も、いずれも底面より上で出土していて、底面直上で出土した土器ではない。(遺物観察表：14頁)

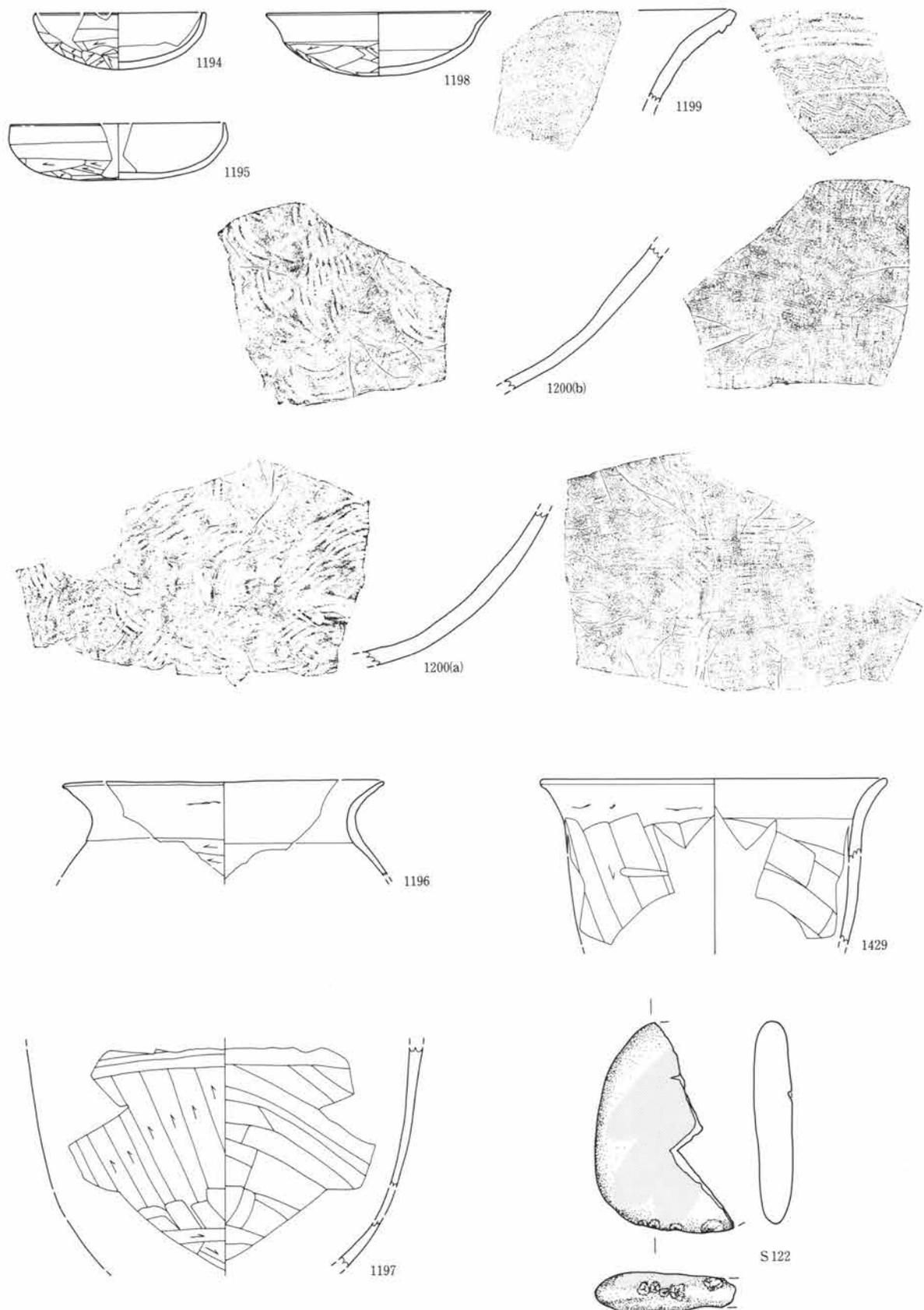
所 見 調査当初は住居と考えていたが、形態が不定形であるので土坑とした。出土遺物から、8世紀前半の遺構と考えられる。



1. 黒色土 焼土粒・白色軽石を含む。
2. 茶褐色土 白色軽石を含む。
3. 茶褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土塊を多く含む。焼土粒を含む。
4. 茶褐色土 黄褐色土塊・白色軽石を少量含む。
5. 黄茶褐色土 黄褐色土塊を含む。
6. 黄褐色土塊 茶褐色土を含む。

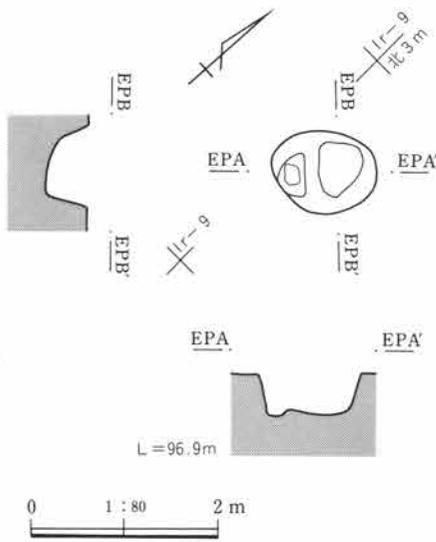


第54図 I 区41号土坑

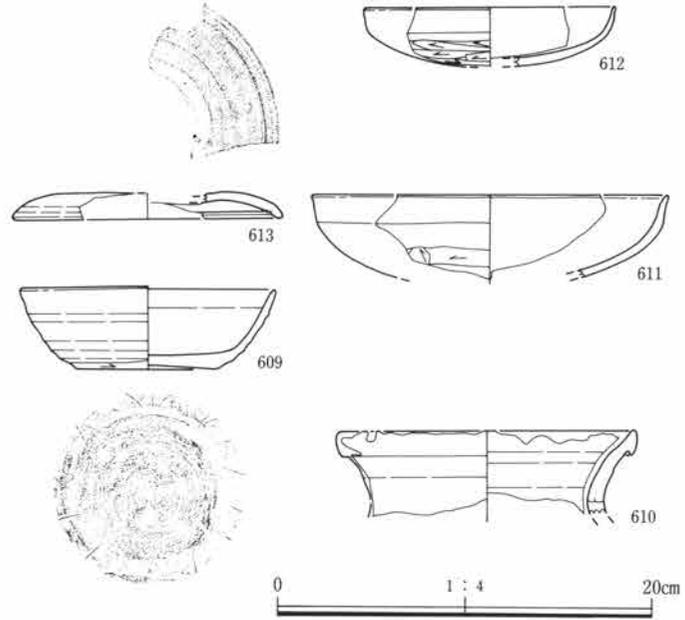


第55図 I区41号土坑出土遺物

0 1 : 4 20cm



第56図 I区44号土坑と出土遺物



I区44号土坑

位置 Iq-9グリッド 写真 PL20

形状 平面形は楕円形を、断面形は箱形を呈する。規模は長軸1.01m、短軸0.92mである。

底面 遺構確認面から0.44m掘り込んで底面となる。底面はほぼ平坦であるが、南端部は長径0.4m、短径0.3m、深さ0.1mのピット状に掘られている。

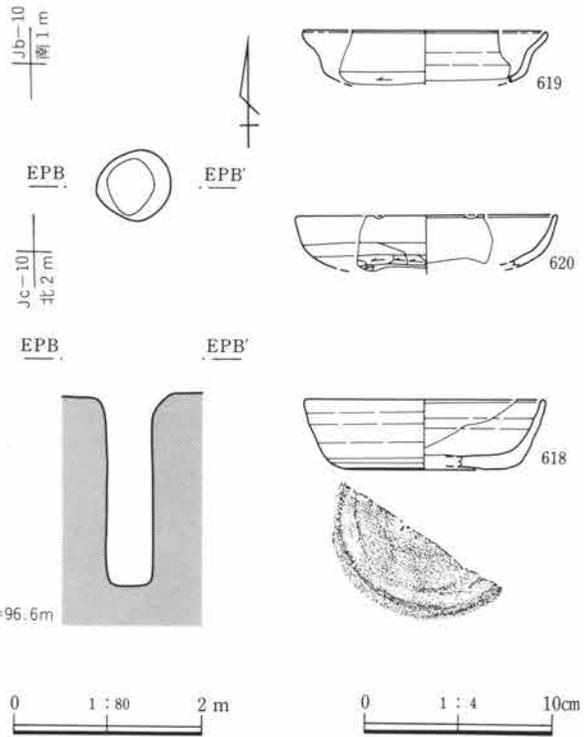
遺物 60点ほどの破片遺物が出土している。図示した土師器・須恵器も埋没土中から出土したが、須恵器杯形土器(609)は半完形で残されていた。

(遺物観察表：14・15頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の土坑と考えられる。

遺物 70点余りの遺物が埋没土中から出土している。(遺物観察表：15頁)

所見 出土遺物から遺構の時期を決めるのは困難であるが、8世紀前半の遺物がほとんどであることから、この時期の井戸と考えたい。



第57図 I区47号土坑(井戸)と出土遺物

I区47号土坑(井戸)

位置 Jb-10グリッド 写真 PL20

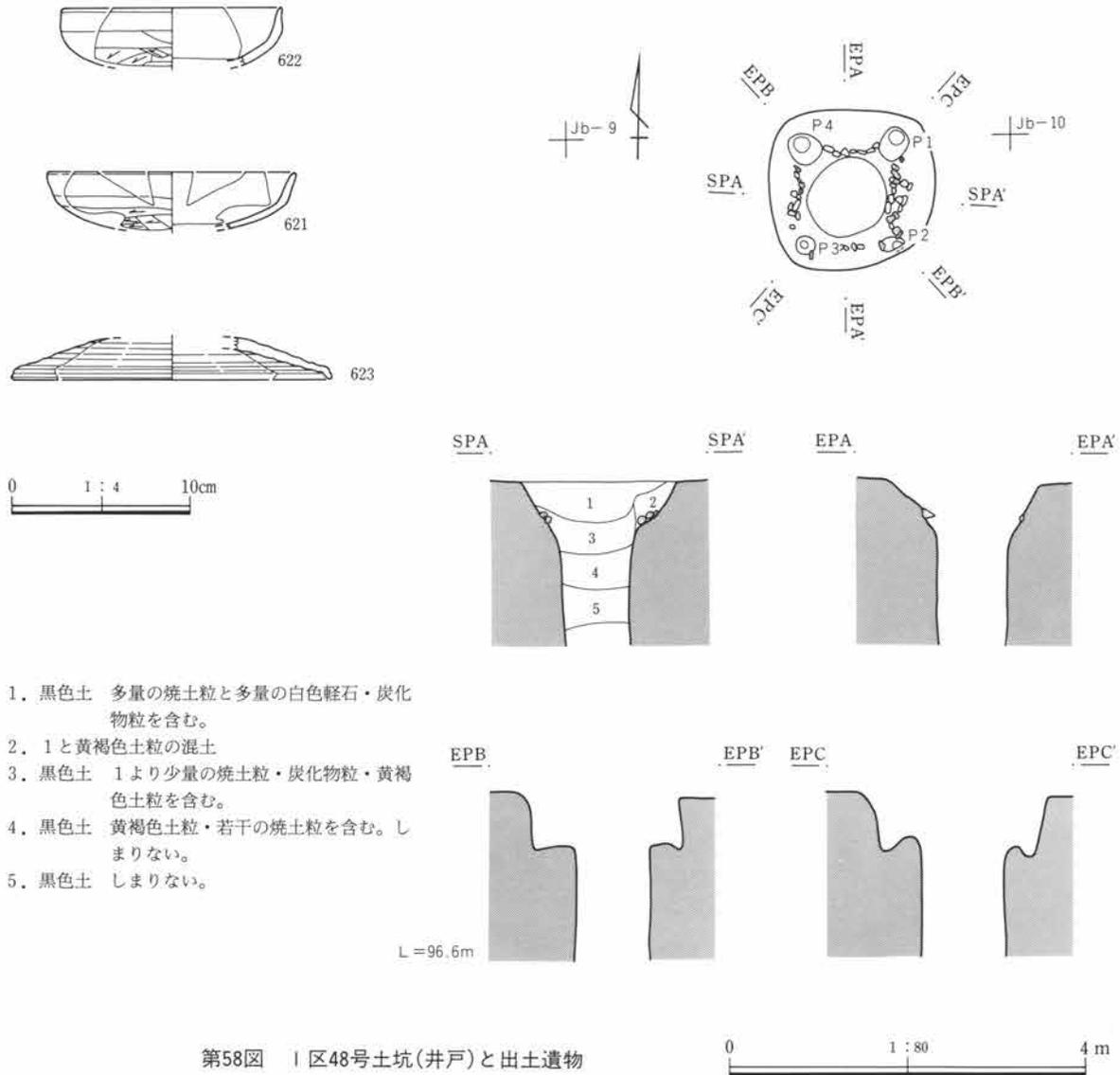
形状 平面形は円形を呈する。断面形は筒形で、底面は平坦である。規模は長軸0.80m、短軸0.74mである。

底面 遺構確認面から1.93m掘り込んで底面となる。底面の標高は94.32mである。

Ⅰ区48号土坑(井戸)

位置 Jb-9グリッド 写真 PL20
 形状 全体の平面形は隅丸正方形を呈するが、湧水部は円形である。断面形は湧水部は筒形であるが、上端部はラップ状に掘り広げられている。上端部の規模は、長軸1.80m、短軸1.78mである。ラップ状にひろがった上端部は、深さ0.6mほどのところで直径1.0mの筒形に狭くなっている。ここの四隅には円形のピットが掘られ、その間の四辺には小礫が貼り巡らされていた。各ピットの規模(短径×長径×深さ)は、P1:34×34×33cm、P2:15×25×40cm、

P3:21×23×28cm、P4:35×39×49cmである。底面 遺構確認面から1.9mまで調査したが、湧水が著しく、底面を確認することはできなかった。遺物 140点余りの破片遺物が埋没土中から出土している。図示した土師器杯形土器(621・622)や須恵器蓋形土器(623)も埋没土からの出土である。(遺物観察表:15頁) 所見 出土遺物から遺構の時期を決めるのは困難であるが、遺物が8世紀前半にまとまることから、この時期の井戸と考えたい。



第58図 Ⅰ区48号土坑(井戸)と出土遺物

2区6号住居

位置 I b-9・10グリッド 写真 PL21

重複 西壁が7号住居を切っている。北壁や南西隅には不定形の新しい掘り込みがあり、床面を壊している。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は東壁を除き、直線的に掘られている。東壁は中央部が弧状に膨らんでいる。隅は比較的丸くない。規模は長軸4.77m、短軸4.28mである。

面積 18.55㎡ 方位 N-89°-E

床面 遺構確認面から59cm掘り込んで床面となる。床面は竈前の住居南東部は平坦で硬化していたが、北西半は新しい掘り込みのため、明確な床面が確認できなかった。北壁沿いや南西隅は不定形な窪みが検出された。

埋没土 下層は黒褐色土塊を含む暗灰褐色土、上層は軽石・焼土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

竈 壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は32cm、左側は32cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は58cmである。燃焼部・煙道部の

壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ97cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに傾斜していた。

周溝 検出されなかった。

柱穴 2本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:42×48×15cm、P2:40×41×18cmである。P1・P2は、竈に向かい合う西壁の北端と南端に位置し、ほぼ住居対角線上にのっている。西壁際にはもう1本小ピット(P3:26×27×7cm)が検出されたが、柱穴とは確定できなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

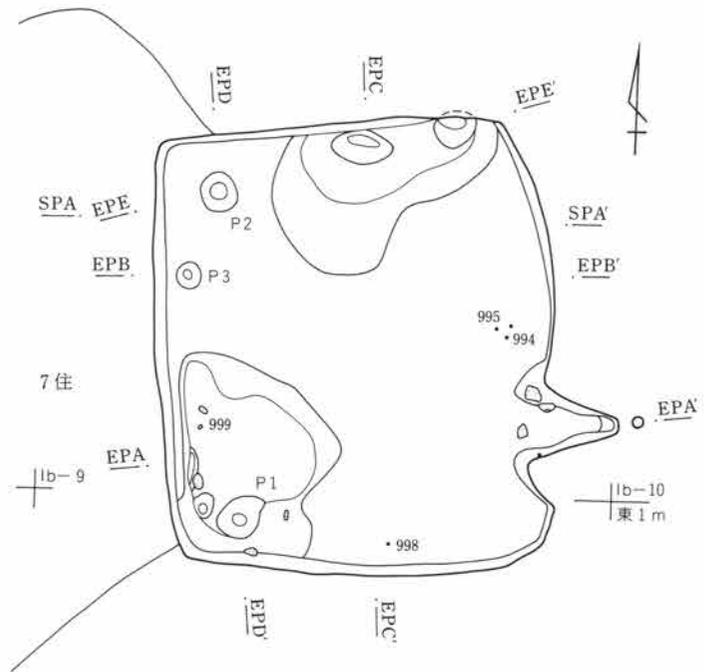
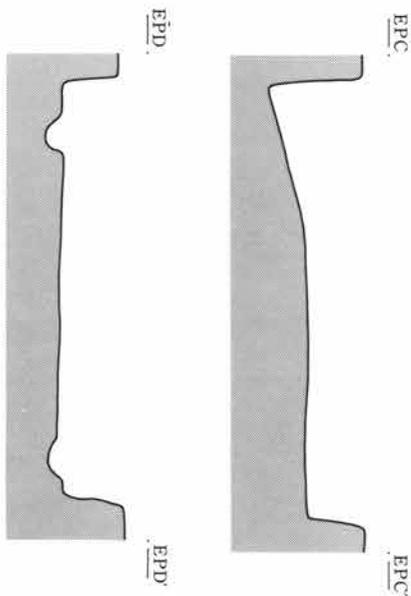
遺物 450点余りの遺物が出土しているが、床面近くの遺物は少ない。竈左前に出土した土師器甕形土器(994・995)は床面から25cmほど上位である。土師器杯形土器(998)は南壁際で床面から6.5cm上位で出土した。999の土錘は南西隅の窪みから出土した。

(遺物観察表:15頁)

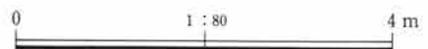
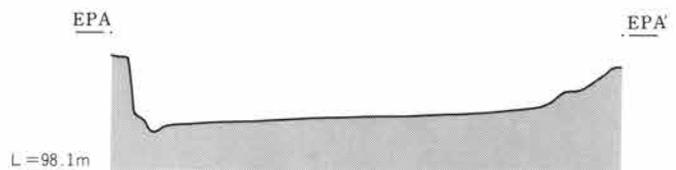
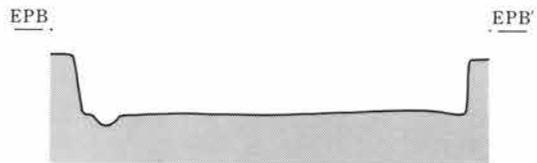
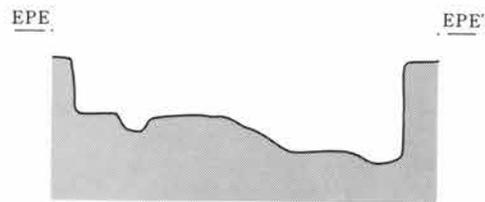
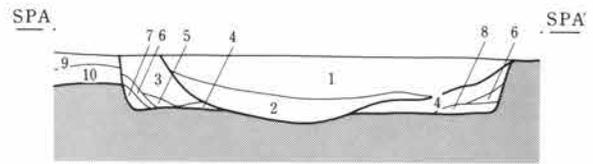
所見 出土遺物から、9世紀前半の住居と考えられる。



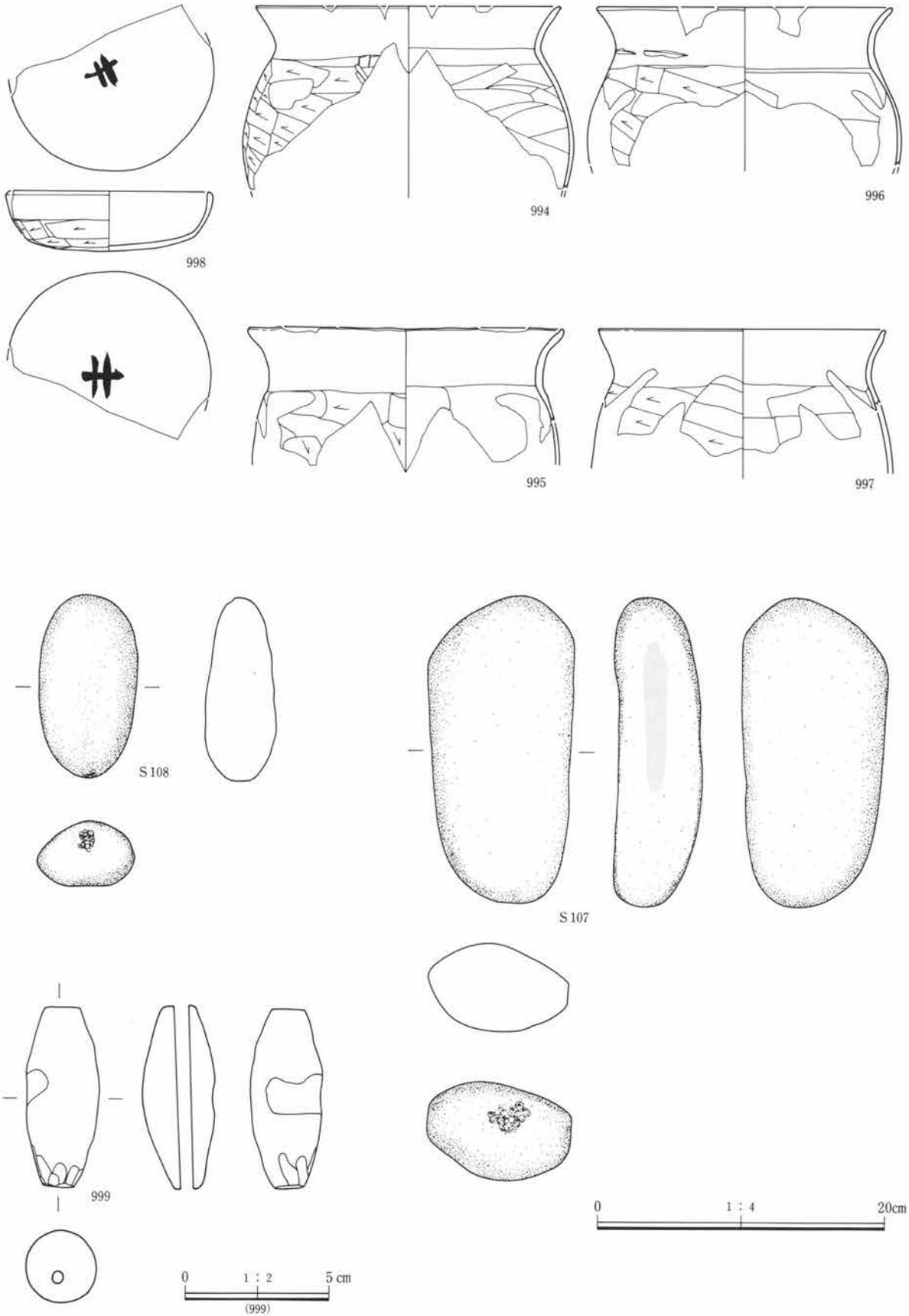
重複して検出された2区の住居群と、台地を分断する女堀を西方から望む。



1. 黒褐色土 軽石粒・小石・炭化物粒を含む。
2. 黒褐色土 1層に類するが、軽石が少ない。
3. 黒褐色土 5層に類するが、軽石・粒ともに少ない。焼土粒が入る。
4. 暗灰褐色土 黒褐色の塊(直径1cm)を含む。
5. 白黄褐色土 焼土粒を混じえる塊。
6. 黒色土 土はやわらかい。
7. 黒色土 土はやわらかい。焼土塊を含む。
8. 4層に類する。
9. 黒褐色土 軽石・軽石粒と小石が多い。
10. 黒褐色土 5層に類するが、軽石・粒ともに少ない。



第59図 2区6号住居



第60図 2区6号住居出土遺物

2区17号住居

位置 Ht・Ia-14・15グリッド

写真 PL22 重複 重複はないが、14号住居・32号住居が近接する。

形状 対角線をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁は直線的に掘られており、隅は角張っている。規模は長軸3.52m、短軸3.02mである。

面積 9.09m² 方位 N-114°-E

床面 遺構確認面から51cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で竈前を中心に硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈であった。焚口幅は42cmである。燃烧部および煙道部の壁はそれほど顕著に焼けていない。煙道部は壁から外へ68cm突出していた。燃烧部はやや窪み、煙道部へ斜め上方に傾斜していた。

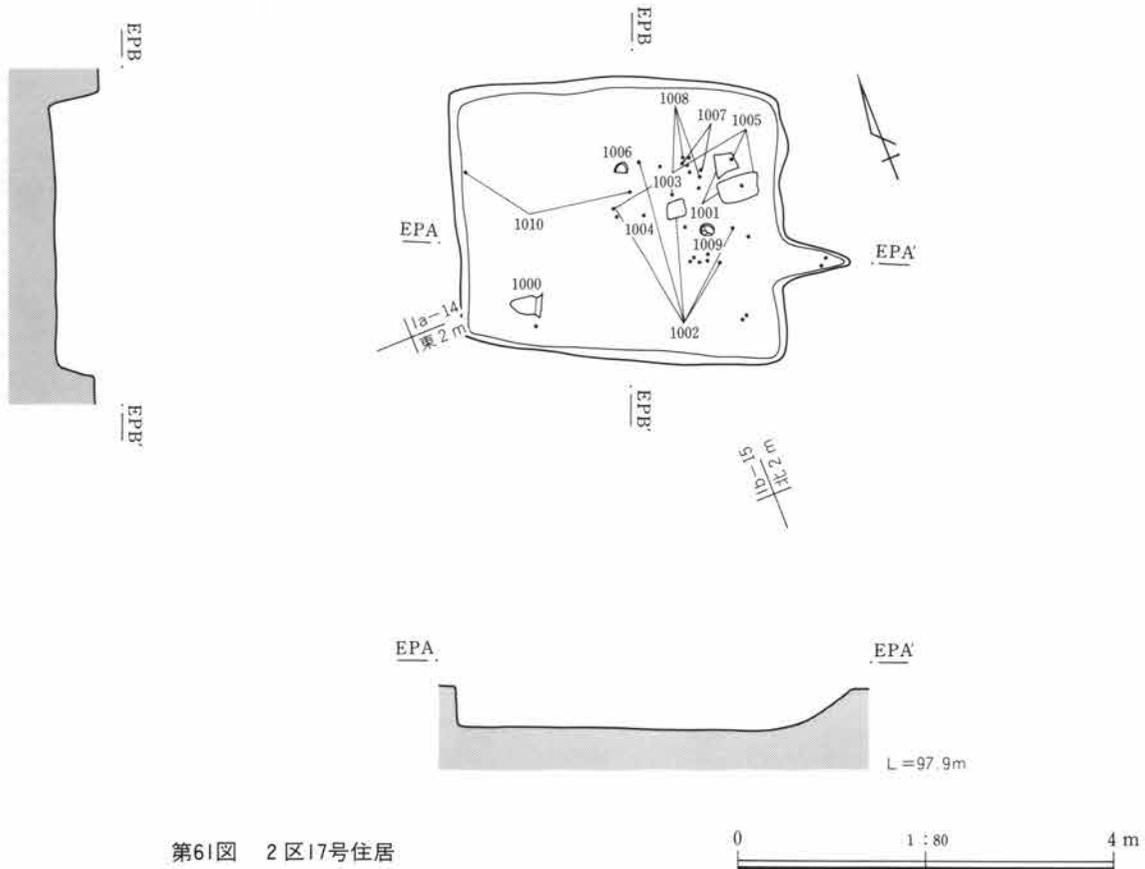
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

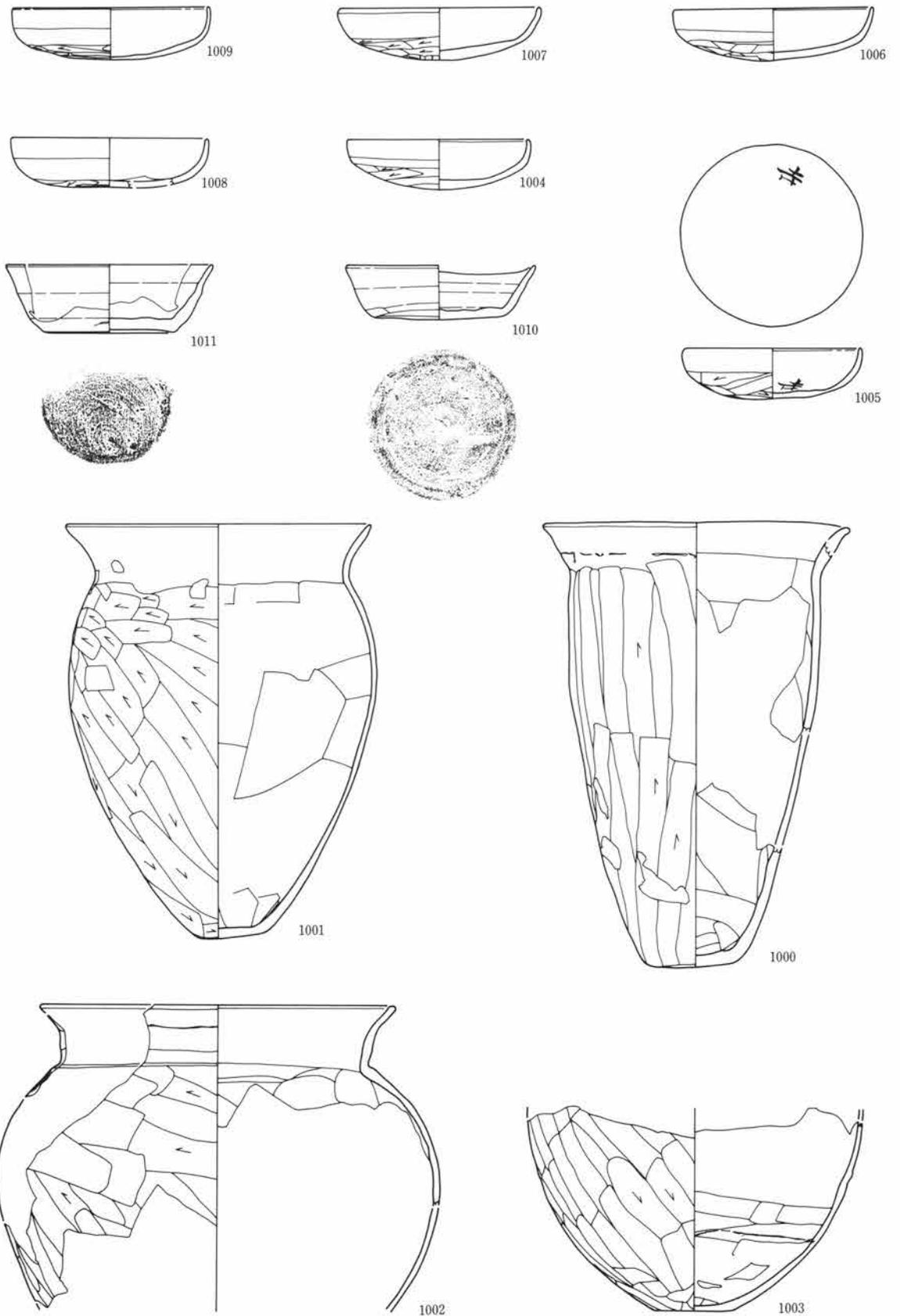
貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 110点余りの遺物が出土している。住居東半部の床面直上および床面近くの遺物が集中して出土した。土師器甕形土器(1000・1001・1002・1003)、土師器杯形土器(1004・1005・1006・1007・1008・1009)、須恵器杯形土器(1010)を図示した。甕形土器(1002)は、住居東半中央部に散らばっていた床面から数cm上の破片が接合されたものである。また、杯形土器(1005)は、床面直上で出土した甕形土器(1001)の上ののっていた破片と住居中央部の破片が接合した。甕形土器(1000)はほぼ完形で、南東隅床面直上・倒立で出土した。(遺物観察表：15・16頁)

所見 出土遺物から、8世紀後半の住居と考えられる。



第61図 2区17号住居



第62図 2区17号住居出土遺物

2区22号住居

位置 Lc-1グリッド 写真 PL23

重複 重複はないが、21号住居が近接する。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られているが、隅は丸い。規模は長軸4.22m以上、短軸3.87mである。

面積 推定14.59㎡ 方位 N-85°-E

床面 遺構確認面から24cm掘り込んで床面となる。床面は平坦であった。

竈 東壁ほぼ中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は25cm、左側は30cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は90cmである。燃烧部の壁は顕著に焼けていないが、煙道部の東端は焼土化していた。煙道部は

壁から外へ58cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで緩やかに煙道部へ傾斜していた。

周溝 検出されなかった。

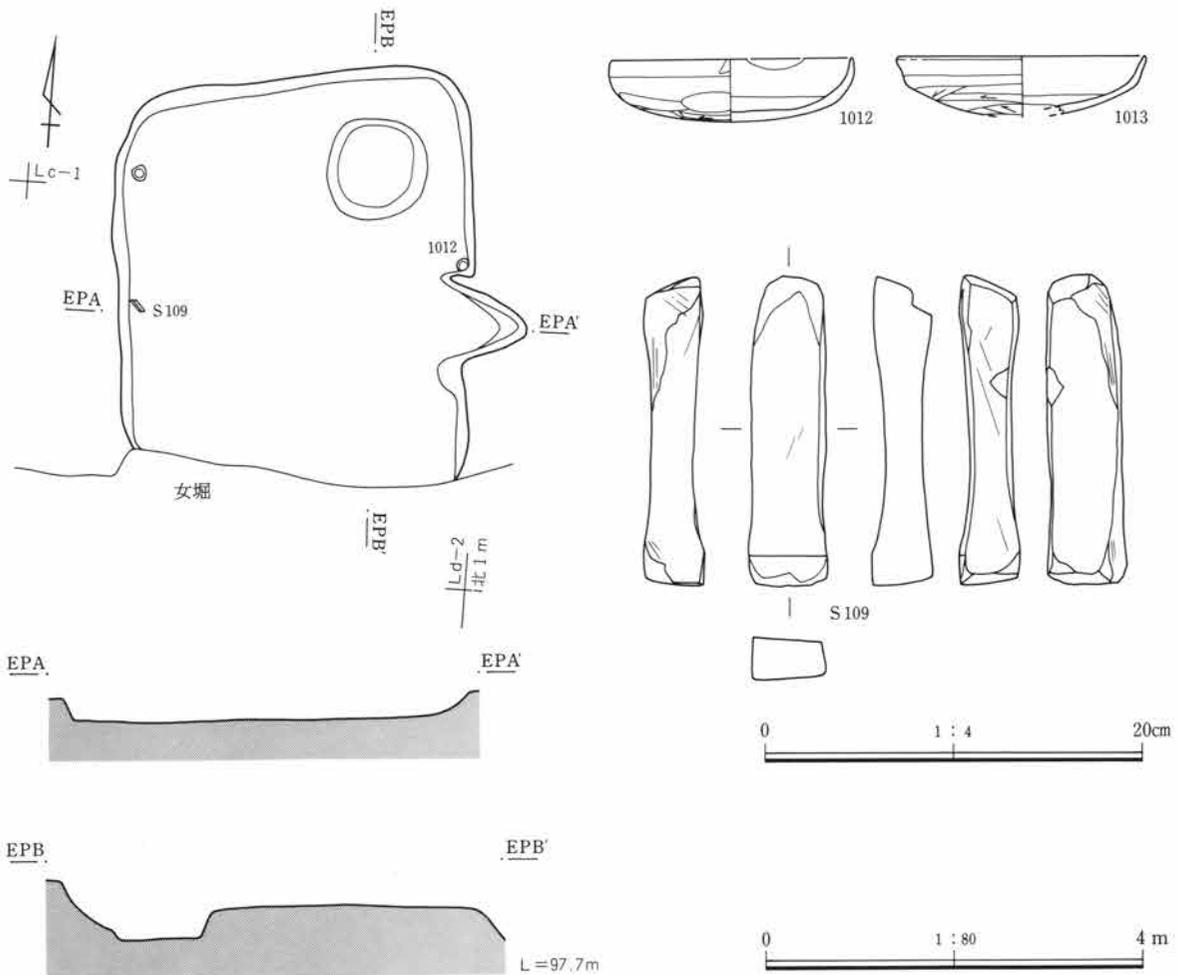
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 北東部に長軸1.10m、短軸1.05m、深さ0.30mの隅丸方形の土坑が検出された。他の住居の貯蔵穴の一般的な位置とは異なるが、土坑壁の方向が住居と一致していること等から貯蔵穴とした。

遺物 50点余りの遺物が出土している。図示した土師器杯形土器(1012)は竈左脇、砥石(S109)は西壁際中央で、それぞれ床面近くから出土した。

(遺物観察表：16頁)

所見 出土遺物から、8世紀後半の住居と考えられる。



第63図 2区22号住居と出土遺物

2区23号住居

位置 Kt-0グリッド 写真 PL24

重複 なし

形状 長軸をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的で、隅はやや角張って掘られているが、周溝の検出された南東隅は丸い。規模は長軸4.64m、短軸4.10mである。

面積 16.03㎡ 方位 N-79°-E

床面 遺構確認面から20cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦で、竈前面は硬化していた。北壁沿いに円形の窪みがあるが、住居に伴うかどうかは断定できなかった。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は62cm、左側は57cm、袖の基部が残存していた。右袖芯には土師器甕形土器(1017)が、左袖芯には甕形土器(1018)が倒立で使用されていた。これらの甕形土器に挟まれた焚口幅は64cmである。燃烧部の壁は一部が焼けて焼土化していた。煙道部

は壁から外へほとんど突出していなかった。燃烧部はほぼ平らで、壁近くで煙道部へ斜めに傾斜していた。

周溝 竈右脇から、南壁の西部まで幅20cmの周溝が検出された。南東隅周溝内から、土師器杯形土器(1021)が出土している。

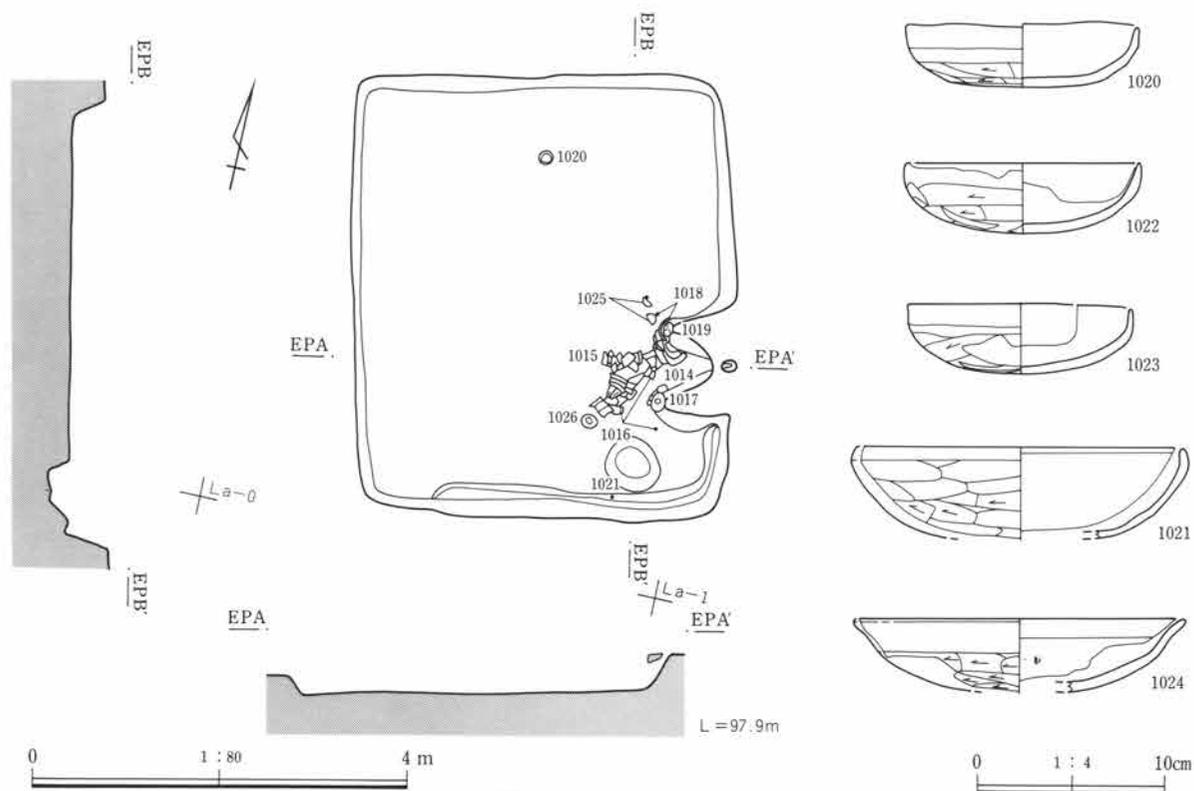
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅、竈右脇に長径0.6m、短径0.58m、深さ0.21mの円形の貯蔵穴が検出された。

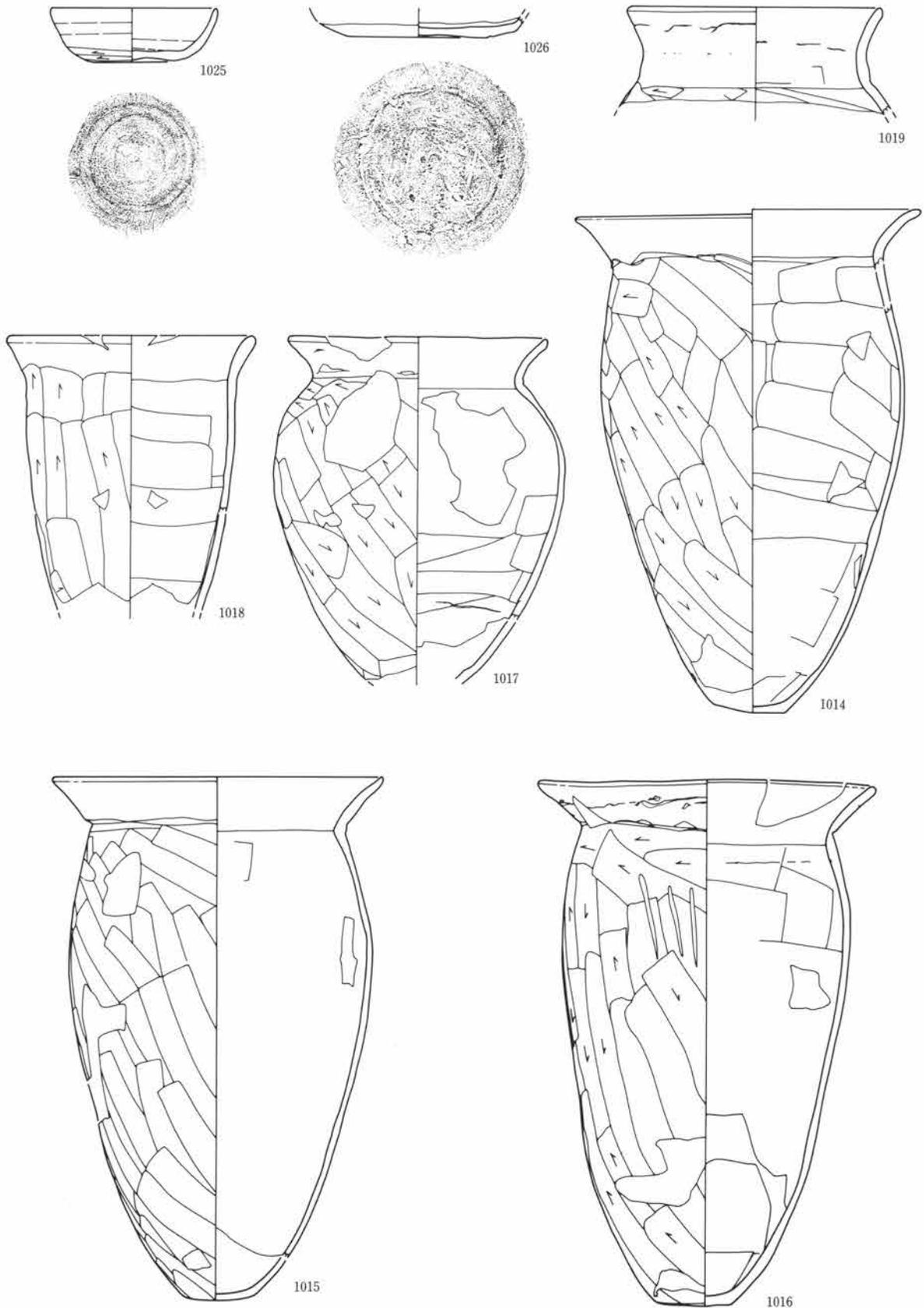
遺物 80点余りの遺物が出土している。床面直上からの出土遺物が多く、特に竈の周辺には袖に使われたもの以外に土師器甕形土器が4個体(1014・1015・1016・1019)出土し、須恵器杯形土器(1025・1026)も床面直上で出土している。また、北部の床面直上で土師器杯形土器(1020)が出土した。

(遺物観察表：16・17頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



第64図 2区23号住居と出土遺物(1)



第65図 2区23号住居出土遺物(2)

0 1:4 20cm

2区24号住居

位置 Lc-3グリッド 写真 PL23

重複 南半分を女堀に切られている。北壁際中央に直径1.06m、深さ0.47mの円形土坑があるが、住居に伴うかどうか断定できなかった。

形状 西壁をほぼ南北方向にする方形を呈するが、南半が欠れているので全形は不明である。周壁はほぼ直線的に掘られているが、隅は丸い。規模は東西3.6mで、南北の長さは計測できない。

面積 計測不能 方位 N-90°-E

床面 遺構確認面から25cm掘り込んで床面となる。床面は北がやや窪む傾向がある。

竈 東壁に竈が付設されていたが、女堀に切ら

れており、全形は不明である。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって左側の袖の基部が45cm残存していた。

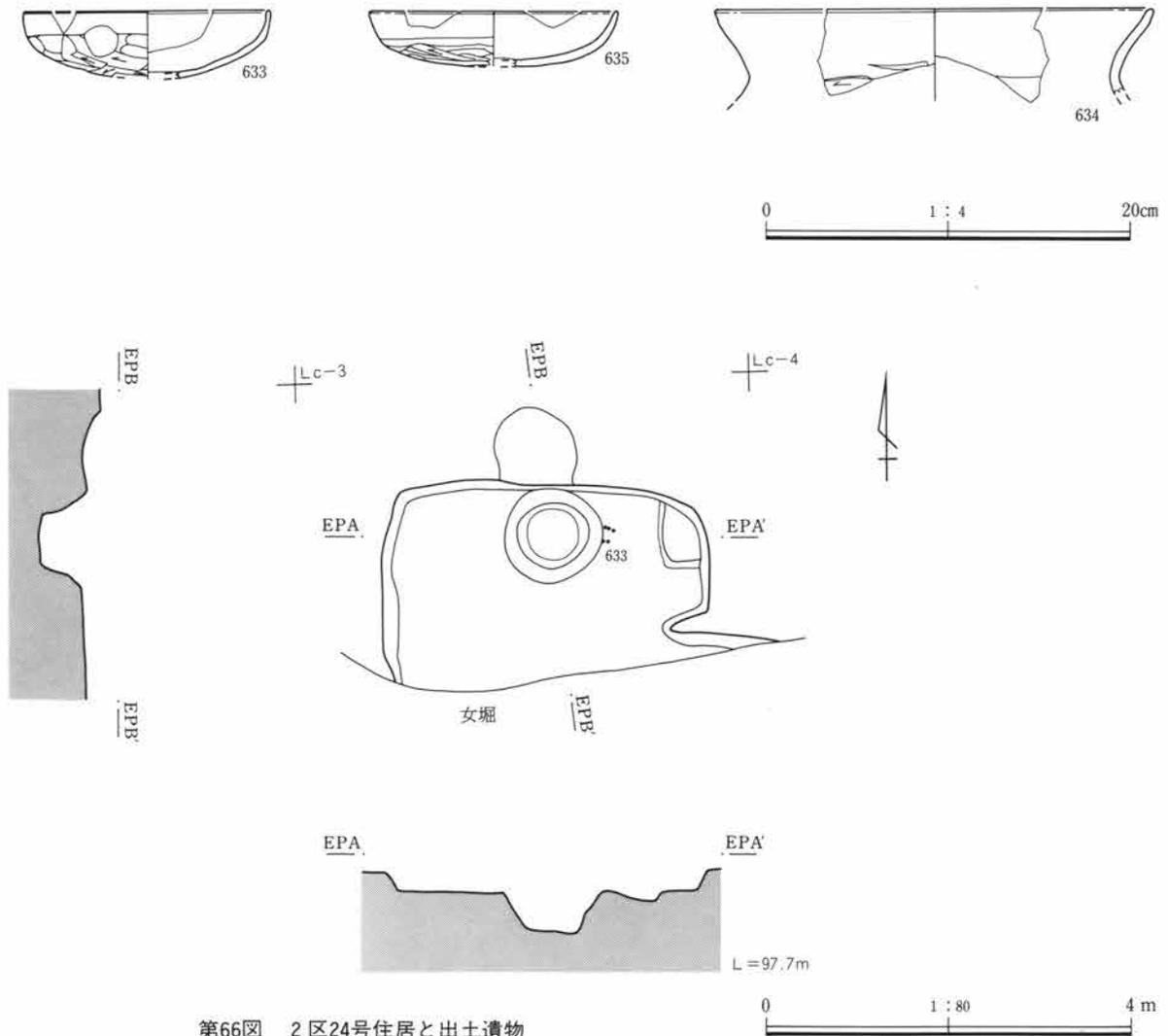
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 90点余りの遺物が出土している。土師器杯形土器(633)は住居北東部床面上5cmで出土した。図示した甕形土器(634)、杯形土器(635)は埋没土中の出土である。(遺物観察表:17頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



第66図 2区24号住居と出土遺物

2区26号住居

位置 Lb・c-5グリッド 写真 PL23
 重複 南東隅に不定形な土坑があり、切られている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。隅はやや丸い。南西隅は貯蔵穴が掘り広がっており、大きく丸くなっている。規模は長軸4.00m、短軸3.32mである。

面積 12.14㎡ 方位 N-87°-E
 床面 遺構確認面から39cm掘り込んで床面となる。床面のうち北壁沿いがやや下がっている。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は20cm、左側は22cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は45cmである。燃焼部の壁は焼け

て焼土化していた。煙道部は壁から外へ31cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに傾斜していた。

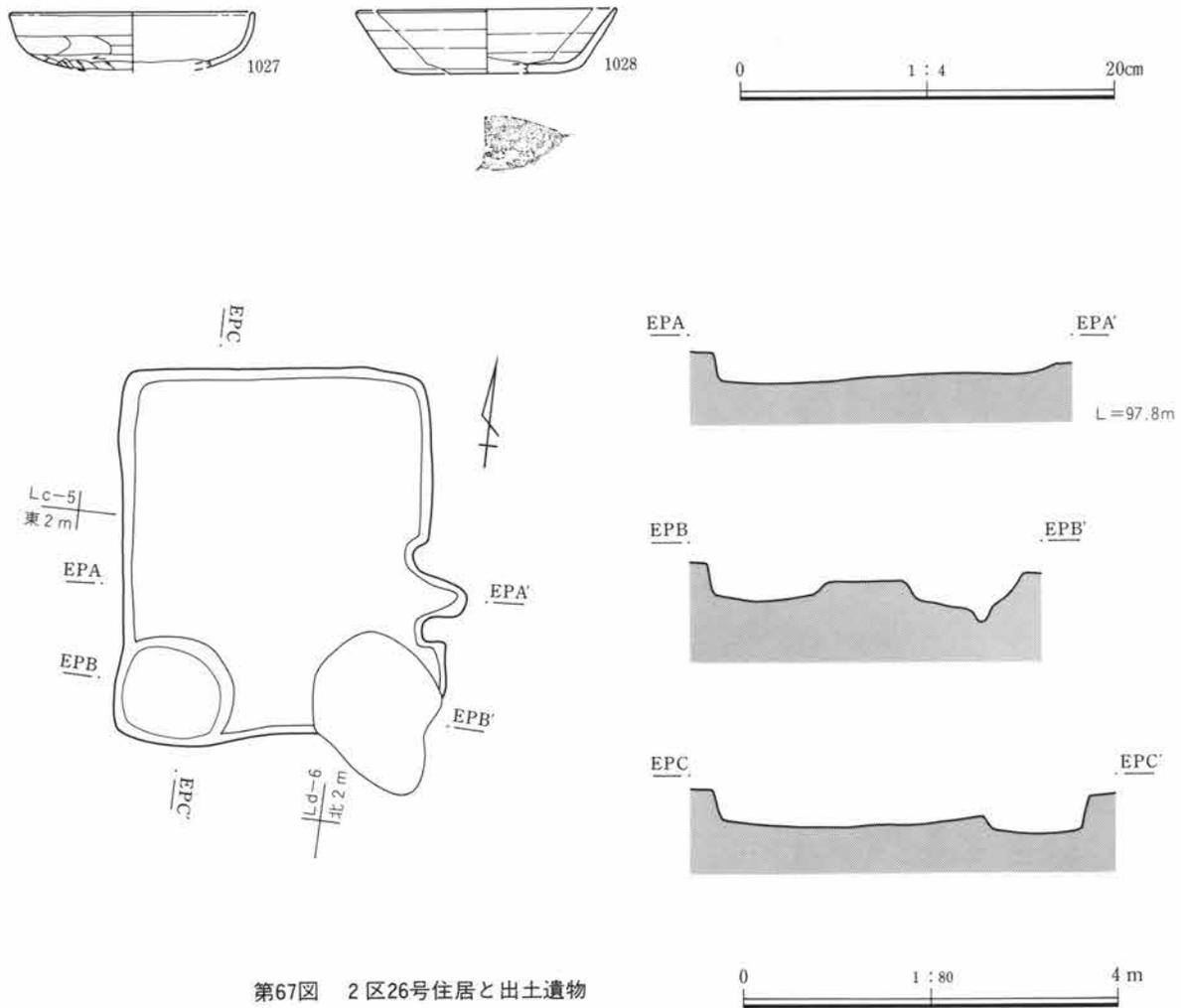
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南西隅に長径1.30m、短径1.16m、深さ0.43mのほぼ円形の貯蔵穴が検出された。断面形は箱型で、遺物は出土していない。

遺物 250点余りの遺物が出土しているが、床面近くの出土遺物はない。図示した土師器杯形土器(1027)、須恵器杯形土器(1028)は埋没土中出土である。(遺物観察表：17頁)

所見 出土遺物から、8世紀後半の住居と考えられる。



第67図 2区26号住居と出土遺物

2区30号住居

位置 La-5グリッド 写真 PL25

重複 北部に後出する27号住居が重複するが、本住居の方が深いので、壁や床面は残っていた。

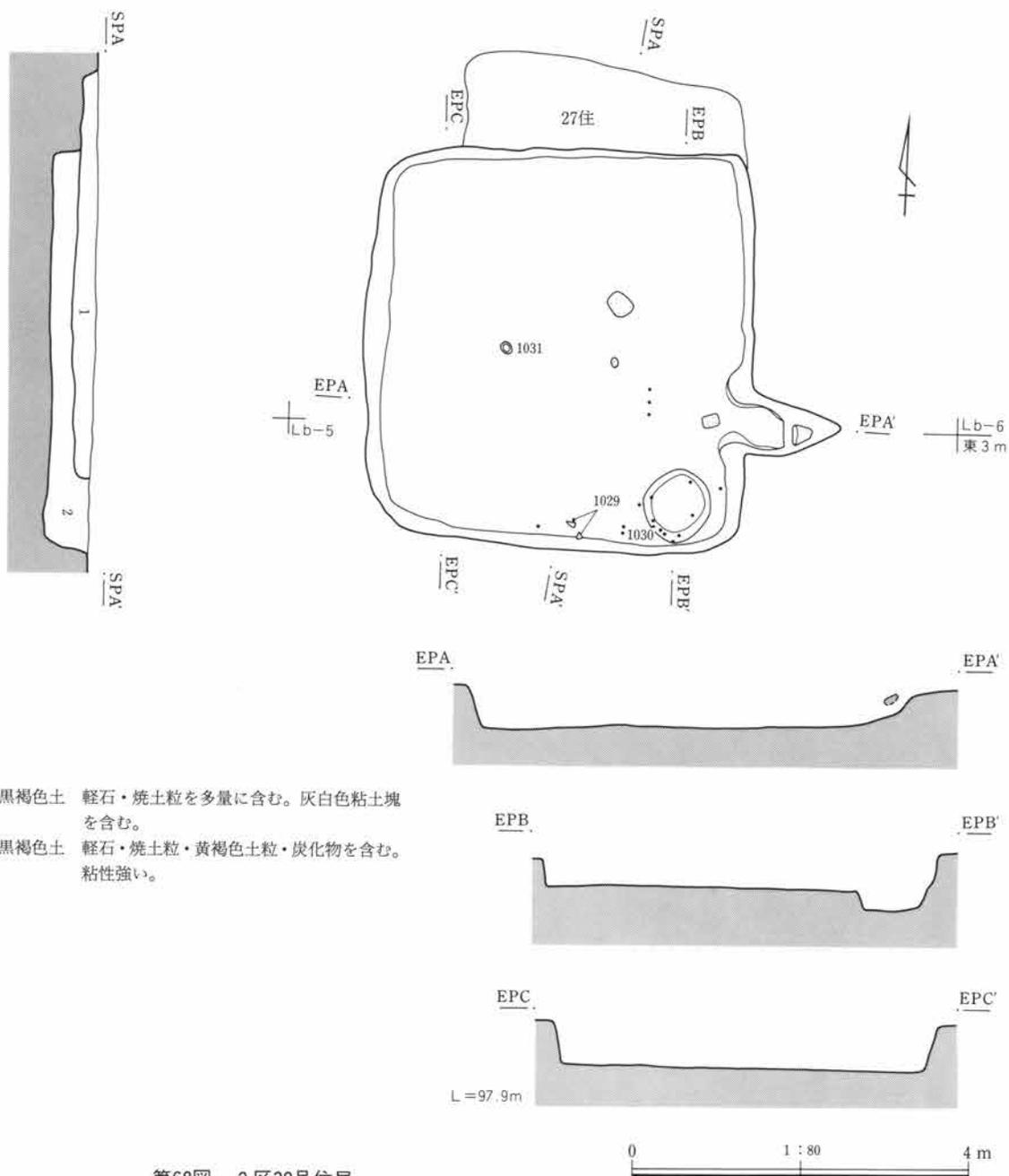
形状 長軸を南北方向にする正方形に近い長方形を呈する。周壁のうち西壁は、やや中央部が膨らんで凹凸しているが、他の壁は直線的に掘られている。四隅はやや丸い。規模は長軸4.75m、短軸4.65mである。

面積 18.41㎡ 方位 N-90°-E

床面 遺構確認面から60cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、竈前は硬化していた。

埋没土 軽石・焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が若干張り出す形態の竈で、向かって右側は12cm、左側は13cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は32cmである。燃焼部の壁は



1. 黒褐色土 軽石・焼土粒を多量に含む。灰白色粘土塊を含む。
2. 黒褐色土 軽石・焼土粒・黄褐色土粒・炭化物を含む。粘性強い。

第68図 2区30号住居

良く焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ110cm突出していた。燃燒部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに傾斜していた。煙道部中位には天井の一部が残っており、内側が良く焼けていた。

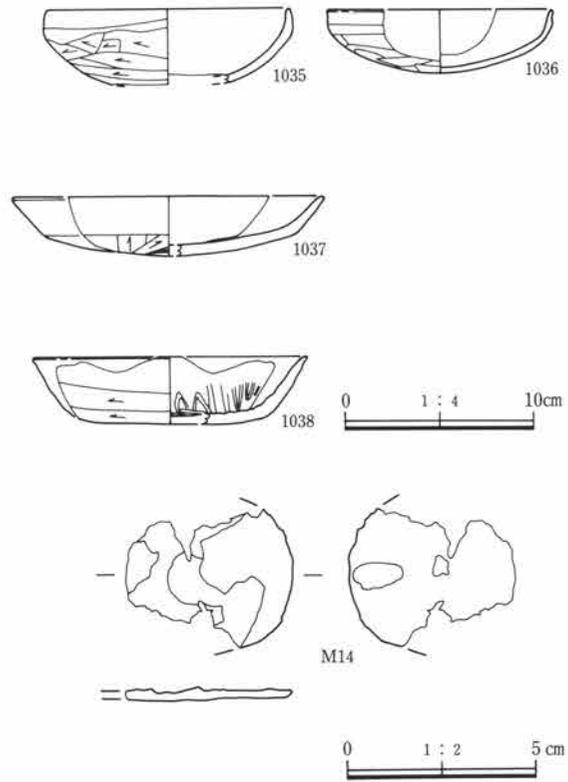
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

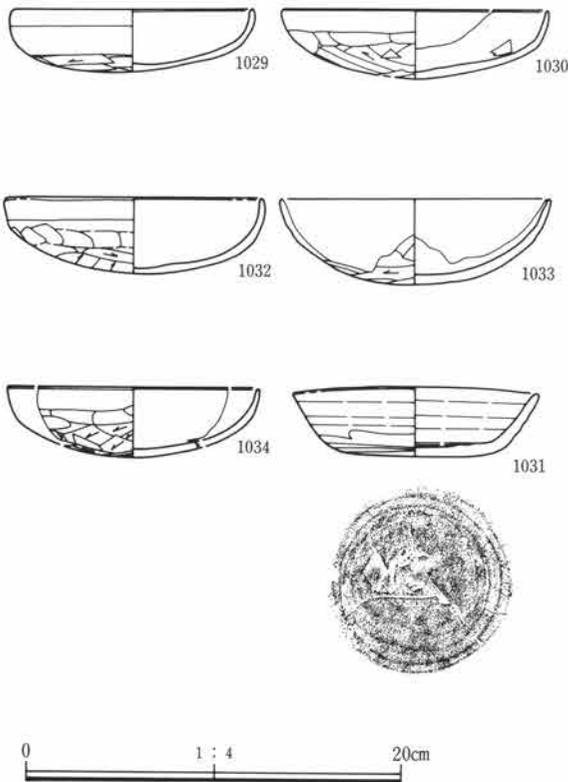
貯蔵穴 南東隅に、長径0.89m、短径0.80m、深さ0.29mのほぼ円形の貯蔵穴が検出された。断面形は箱形で、底面は平坦である。土師器破片が数片出土したが、いずれも小破片で、図示できなかった。

遺物 100点余りの遺物が出土している。南壁際の床面近くから、土師器杯形土器(1029・1030)が、中央部で須恵器杯形土器(1031)が床面直上で出土している。1032～1034の土師器杯形土器は埋没土中の出土である。(遺物観察表：17頁)

所見 出土遺物から、8世紀後半の住居と考えられる。



第70図 2区31号住居出土遺物



第69図 2区30号住居出土遺物

2区31号住居

位置 Hs-18・19グリッド 写真 PL25
重複 竈前に長軸0.93m、短軸0.75m、深さ0.60m以上の隅丸長方形の井戸と考えられる掘り込みがあり、床面を壊している。この井戸の時期は不明である。

形状 長軸をほぼ南北方向にする正方形を呈する。周壁は東西壁がやや膨らみ、南北壁がやや窪んでいる。隅は丸い。規模は東西軸3.77m、南北軸3.77mである。

面積 10.19m² 方位 N-73°-E
床面 遺構確認面から73cm掘り込んで床面となる。床面は平坦であるが、あまり硬化していない。北西部に長軸1.04m、短軸0.84m、深さ0.12mの長方形箱状の窪みがあるが、住居に伴うかどうか確定できなかった。

竈 東壁中央やや南側に竈が付設されていた。

住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は56cm、左側は54cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は52cmである。煙道部は壁から外へ10cm突出し、良く焼けて焼土化していた。燃焼部はほぼ平らで、壁の位置でほぼ直立して煙道部へ立ち上がっていた。

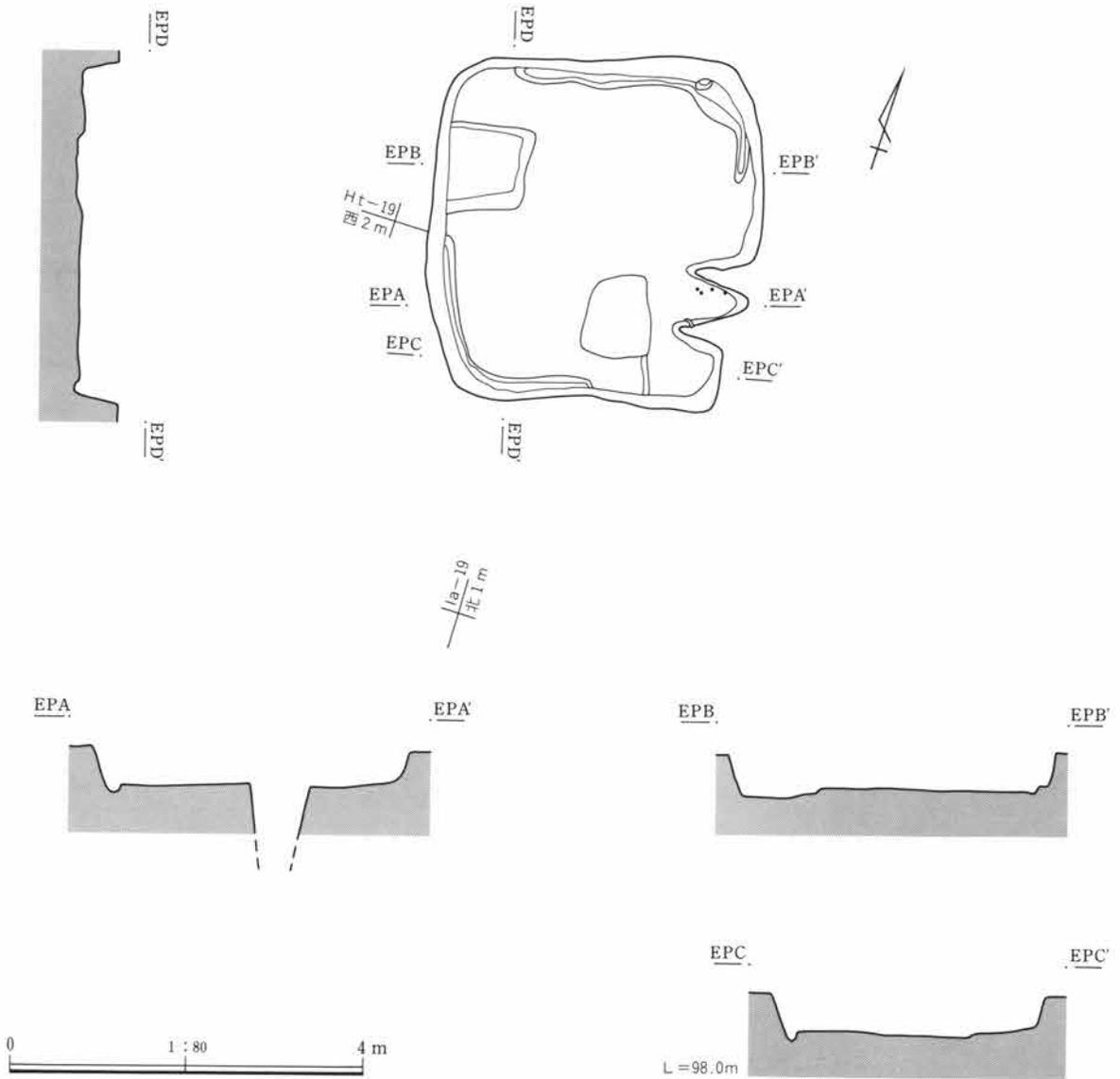
周溝 南壁中央から西壁中央までと、北壁西部から東壁北部までの二カ所に幅12～15cmの周溝が検出された。北東隅は35cmほどに広がっていた。

柱穴 検出されなかった。

遺物 100点余りの遺物が出土している。竈内部で土師器甕形土器の破片が出土しているが、図化できる破片ではなかった。図化した土師器杯形土器はいずれも埋没土中出土である。また、埋没土中から鉄製品(M14)が出土したが、種類は不明である。

(遺物観察表：18頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



第71図 2区31号住居

2区34号住居

位置 Hs-6グリッド 写真 PL26

重複 なし

形状 対角線をほぼ南北方向にする長方形を呈する。南壁は東部が、北壁は西部が少し膨らんでいるが、他の周壁は直線的に掘られている。隅はやや角張っている北隅除き、丸い。規模は長軸3.03m、短軸2.68mである。

面積 6.32㎡ 方位 N-67°-E

床面 遺構確認面から53cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、竈周辺は硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側にほとんど竈袖が張り出さない形態の竈で、向かって左側のみ12cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は40cmである。燃焼部の壁は良く焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ98cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、壁のところから煙道部へ斜め上方に傾斜していた。潰れた天井部

と考えられる焼土化した粘土塊が燃焼部中位に残っていた。また近くに土師器甕形土器が正立して出土した。

周溝 検出されなかった。

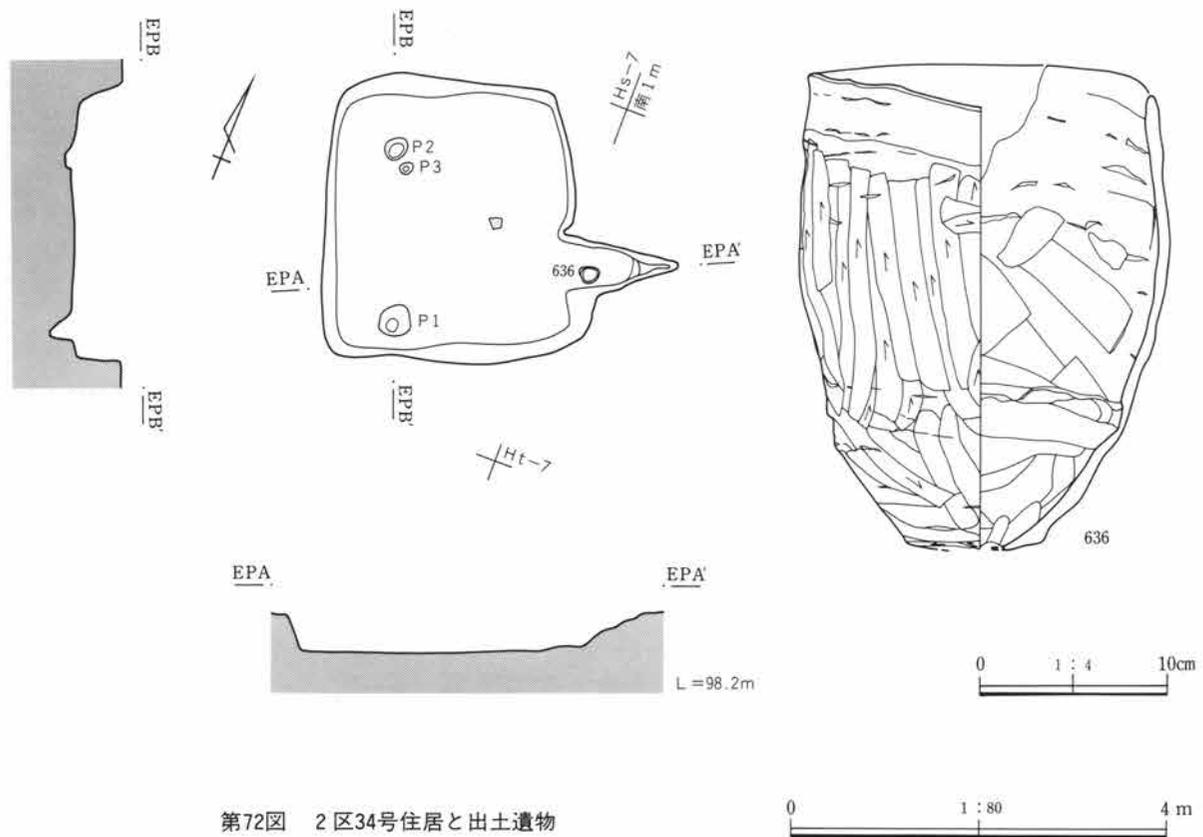
柱穴 2本の支柱穴と1本の小ピットが検出された。支柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:31×32×20cm、P2:23×23×7cm、小ピットは、P3:9×14×6cmである。支柱穴P1・P2を結んだ線は西壁に平行する。P3はP2の内側に接している。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 28点余りの遺物が出土している。図示した土師器甕形土器(636)は類例の少ない器形である。竈燃焼部灰面直上で出土した。

(遺物観察表:18頁)

所見 出土遺物から、8世紀以降の住居と考えられる。



第72図 2区34号住居と出土遺物

2区38号住居

位置 KP-3グリッド 写真 PL26・27
重複 なし

形状 短軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られており、隅は丸い。規模は長軸4.18m、短軸3.73mである。

面積 11.98㎡ 方位 N-89°-E

床面 遺構確認面から76cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦で、西側はやや下がっている。中央部やや北寄りに炭化材が遺存していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、両袖には土師器甕形土器(659・661)が門柱状に倒立していた。この土器に挟まれた焚口幅は36cmである。焚口部には天井部を支えていたと考えられる土師器甕形土器(660~663)が横位で潰れて出土した。燃烧部の壁はあまり焼けていなかった。煙道部は壁から外へ58cm突出していた。燃烧部はやや緩やかに傾斜

して、煙道部は斜め上方へ傾斜していた。

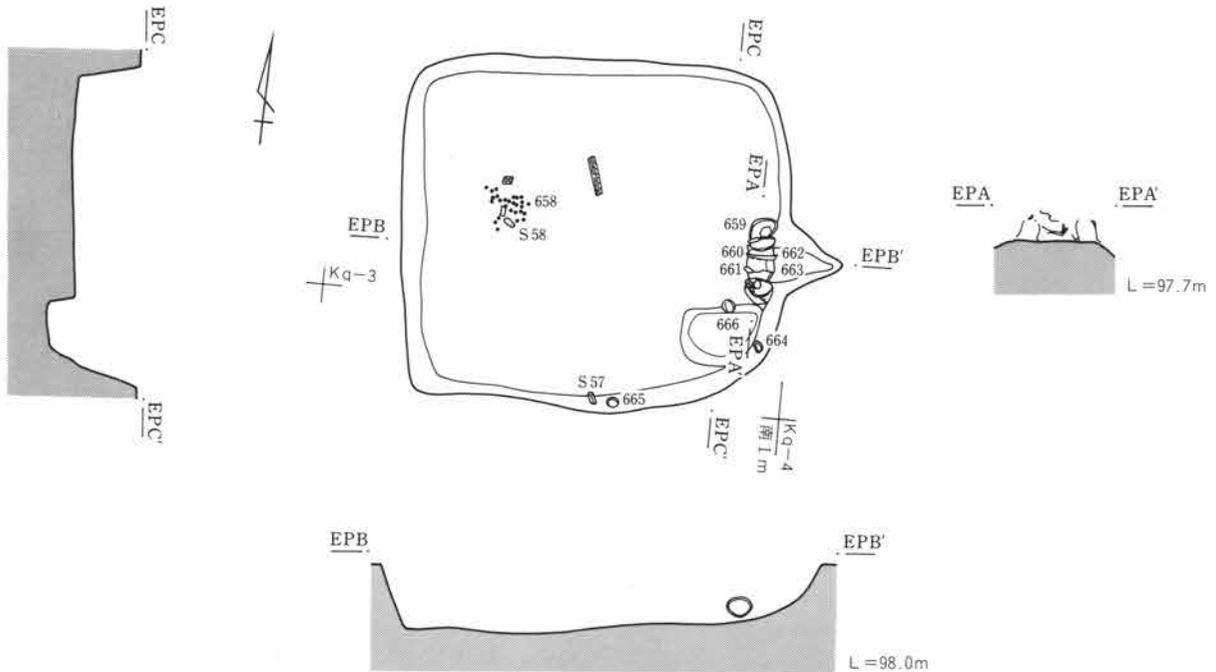
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に、長径0.83m、短径0.62m、深さ0.31mの楕円形の貯蔵穴が検出された。底面は平坦である。北縁から土師器杯形土器(666)が、東縁の壁上方から土師器杯形土器(664)が出土している。

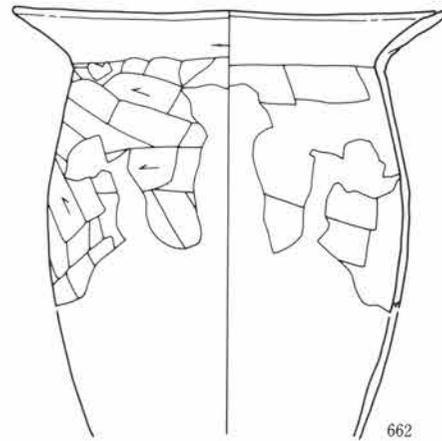
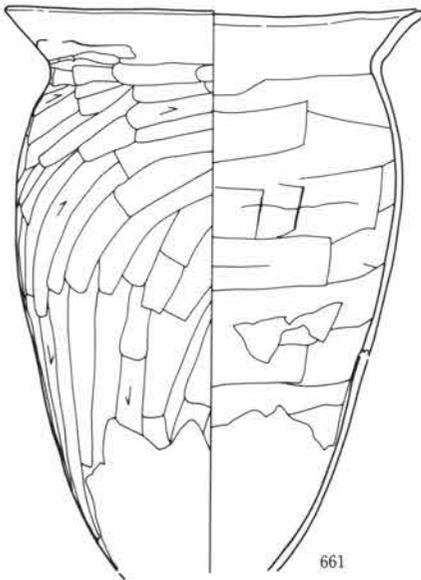
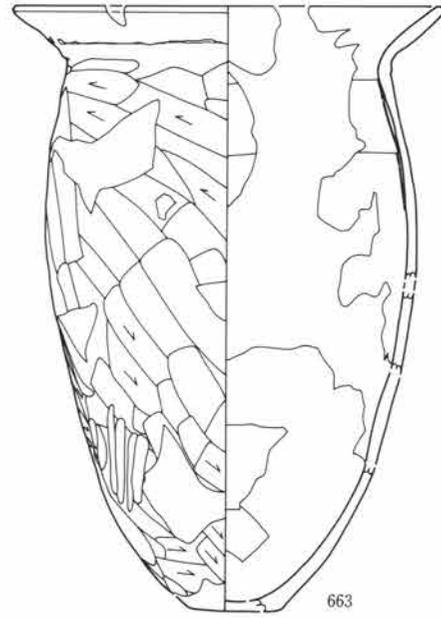
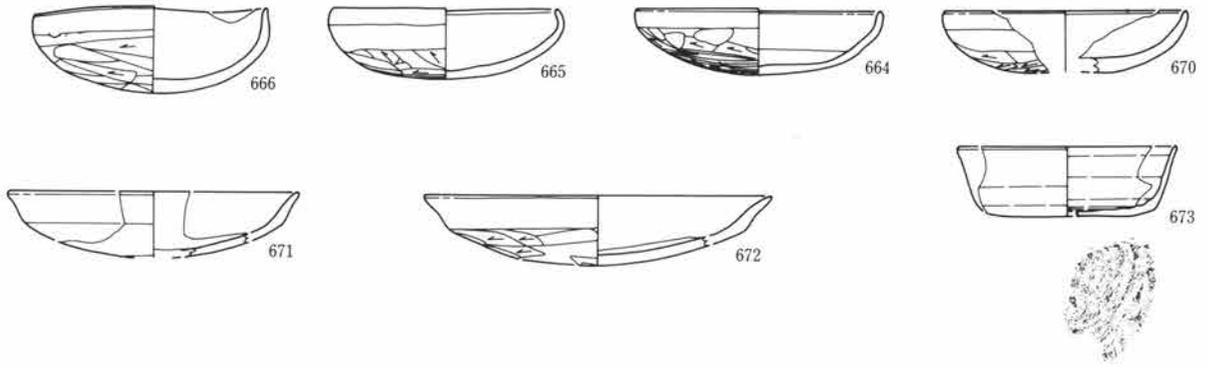
遺物 400点余りの遺物が出土している。埋没土中の出土遺物がほとんどであるが、床面に近い遺物は、前述したように竈や貯蔵穴の周辺からの出土が多い。また南壁中央部壁上方から土師器杯形土器(665)と砥石(S57)が、住居中央部西寄りの床面から10cmほど上位で土師器甕形土器(658)と棒状礫(S58)が出土している。図示した他の遺物は、埋没土中の遺物である。(遺物観察表：18・19頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。

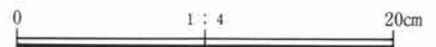


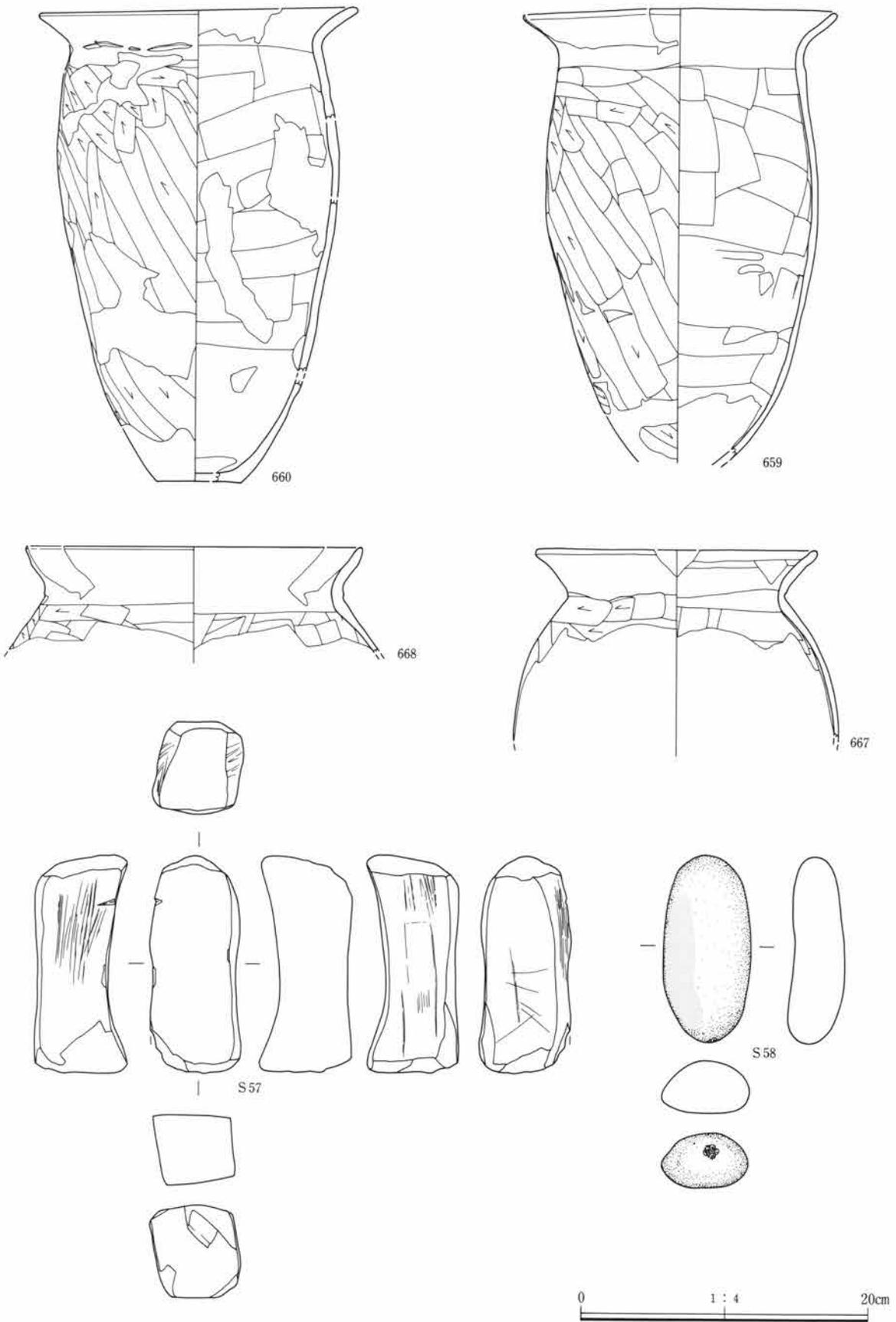
第73図 2区38号住居

2. 1・2区の遺構



第74図 2区38号住居出土遺物(1)





第75図 2区38号住居出土遺物(2)

2区39号住居

位置 H9-19グリッド 写真 PL27・28

重複 なし

形状 対角線をほぼ南北方向にする正方形を呈する。周壁は北壁と南壁にやや膨らみがあるほかは、直線的に掘られている。北隅が大きく丸くなっているが、他は比較的角張っている。規模は長軸3.68m、短軸3.61mである。

面積 10.75m² 方位 N-65°-E

床面 遺構確認面から61cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦である。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が若干張り出す形態の竈で、向かって右側は23cm、左側は20cm、袖の基部が残存していた。袖の先端には芯材の土師器甕形土器が倒立して据えられていた。左袖は676一個体であったが、右袖は674と675をつなげて使用していた。こ

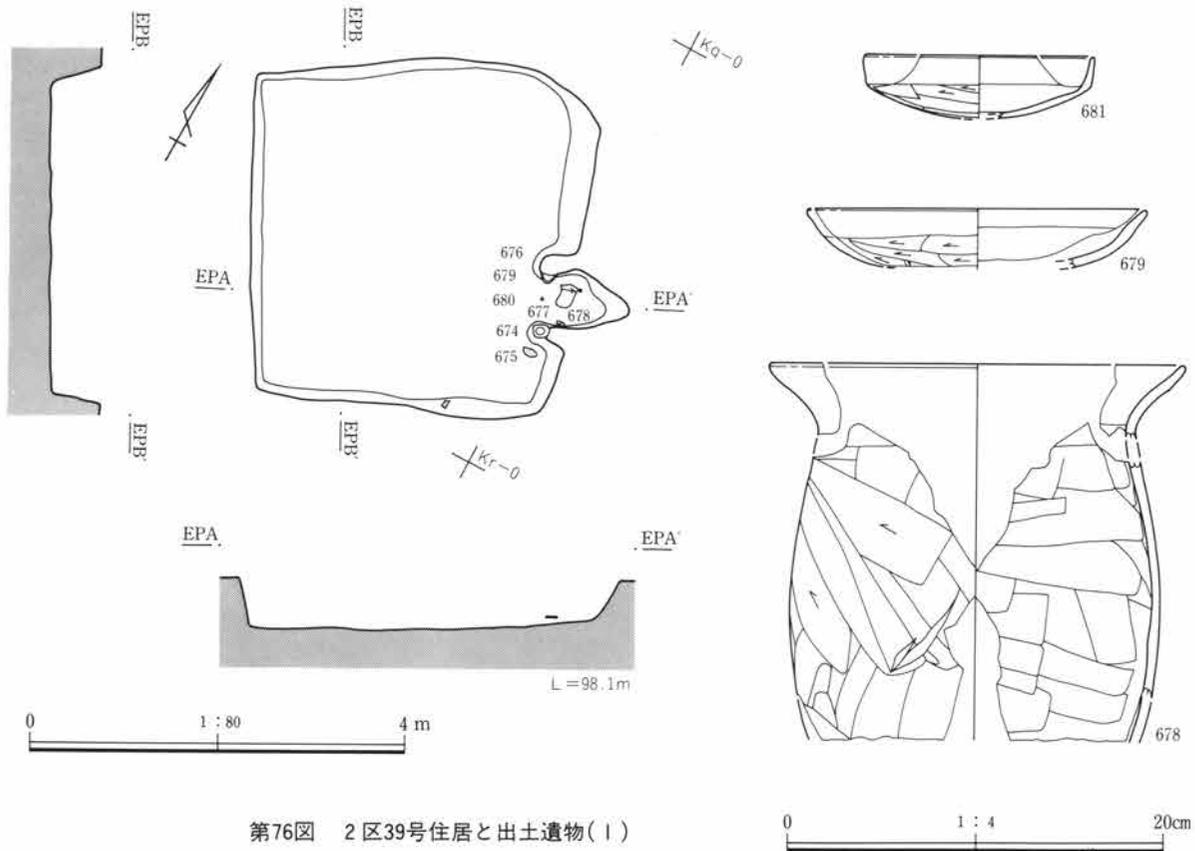
れらの土器に挟まれた焚口幅は45cmである。燃烧部の壁はあまり顕著に焼土化していなかった。煙道部は壁から外へ65cm突出していた。燃烧部はかなり奥まで平らで、煙道部は斜め上方へ立ち上がっていた。周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

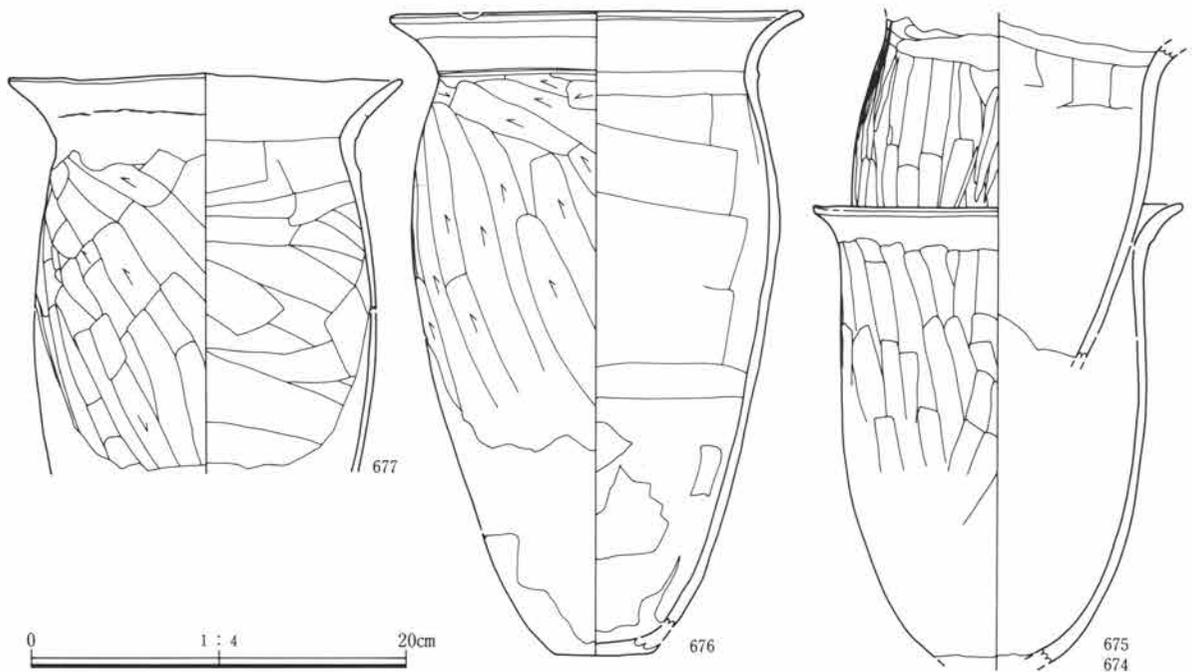
貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 60点余りの遺物が出土している。床面に近い遺物は、ほとんど竈周辺で出土している。前述したように674~676の土師器甕形土器は竈袖芯として出土した。さらに竈燃烧部で、土師器甕形土器(677・678)が出土している。竈左袖周辺で土師器杯形土器(679・680)が出土した。図示した杯形土器(681)は埋没土中の出土遺物である。(遺物観察表：19頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



第76図 2区39号住居と出土遺物(1)



第77図 2区39号住居出土遺物(2)

2区41号住居

位置 HP-9グリッド 写真 PL28

重複 西壁および南西隅が、52号住居・49号住居を切っている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られており、隅は比較的角張っている。規模は長軸4.80m、短軸4.02mである。

面積 15.78㎡ 方位 N-103°-E

床面 遺構確認面から41cm掘り込んで床面となる。床面は、若干の凹凸はあるが、竈の前面は硬化していた。

埋没土 下層は粘性のある灰褐色土で、上層は白色軽石・焼土粒を多く含む黒色土で埋まっていた。

竈 東壁中央やや南寄りに竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は20cm、左側は47cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は30cmである。燃焼部の壁は良く焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ102cm突

出していた。燃焼部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに立ち上がる。

周溝 検出されなかった。

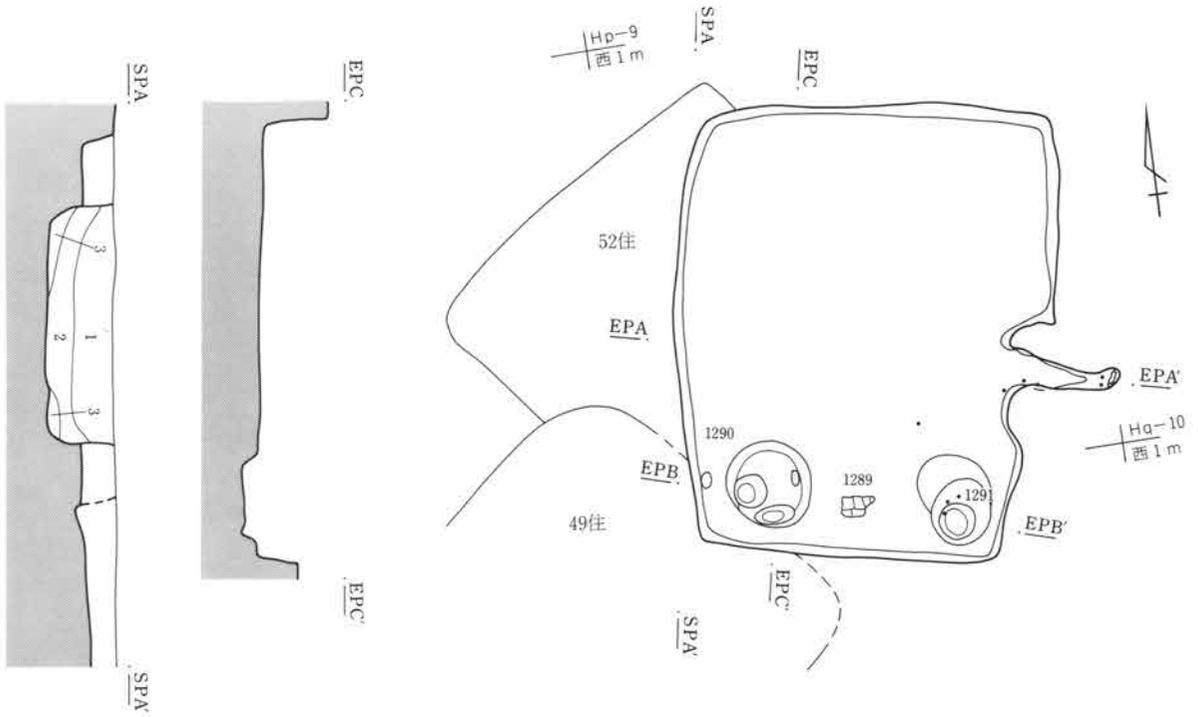
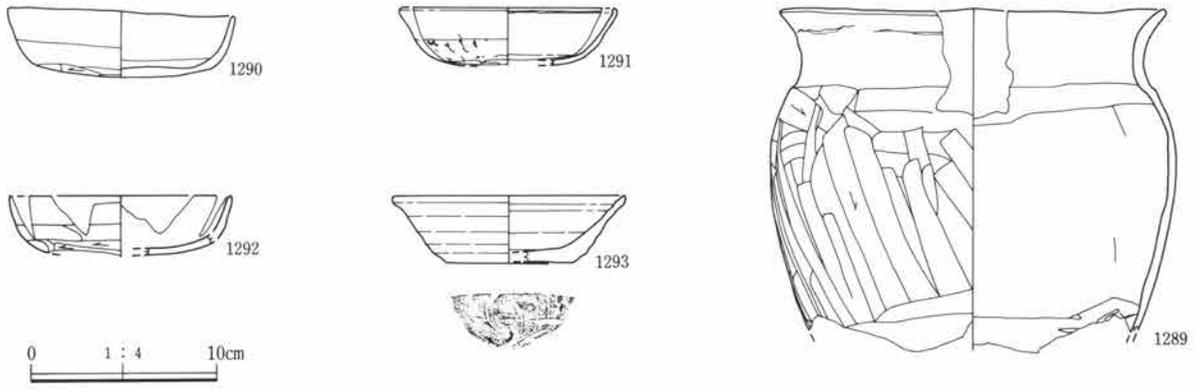
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 竈の右側、住居南東隅に、長径0.95m、短径0.65m、深さ0.34mの楕円形の貯蔵穴が検出された。北縁はなだらかで、南縁が直径20cmほどの円形のピット状になっている。また、住居南西隅にも、直径0.90m、深さ0.20mの円形の土坑が検出された。この土坑も南縁・西縁がピット状になっている。

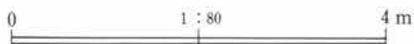
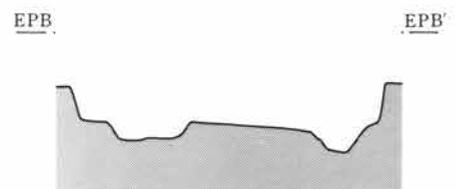
遺物 600点余りの遺物が出土している。埋没土出土の遺物がほとんどである。図示した土器のうち、土師器甕形土器(1291・1289)は貯蔵穴や南壁沿いの、土師器杯形土器(1290)は南西隅の床面近くから出土している。他は埋没土中の出土遺物である。

(遺物観察表：19頁)

所見 出土遺物から、9世紀前半の住居と考えられる。



1. 黒色土 白色軽石・焼土粒を多く含む。
2. 灰褐色土 斑鉄が少々みられ、粘性がある。
3. 灰褐色粘質土



第78図 2区41号住居と出土遺物

2区45号住居

位置 Hr-8グリッド 写真 PL29
重複 なし

形状 対角線をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁は北壁がやや膨らんで掘られているのを除き、直線的に掘られている。隅はやや丸い。規模は長軸4.12m、短軸3.83mである。

面積 12.48m² 方位 N-75°-E

床面 遺構確認面から85cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦で、竈前は硬化し、灰や焼土粒が広く残存していた。

竈 北東壁中央よりやや東側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は58cm、左側は50cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は30cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ55cm突出し

ていた。燃焼部はほぼ平らで、壁のあたりから煙道部へ斜め上方に傾斜していた。

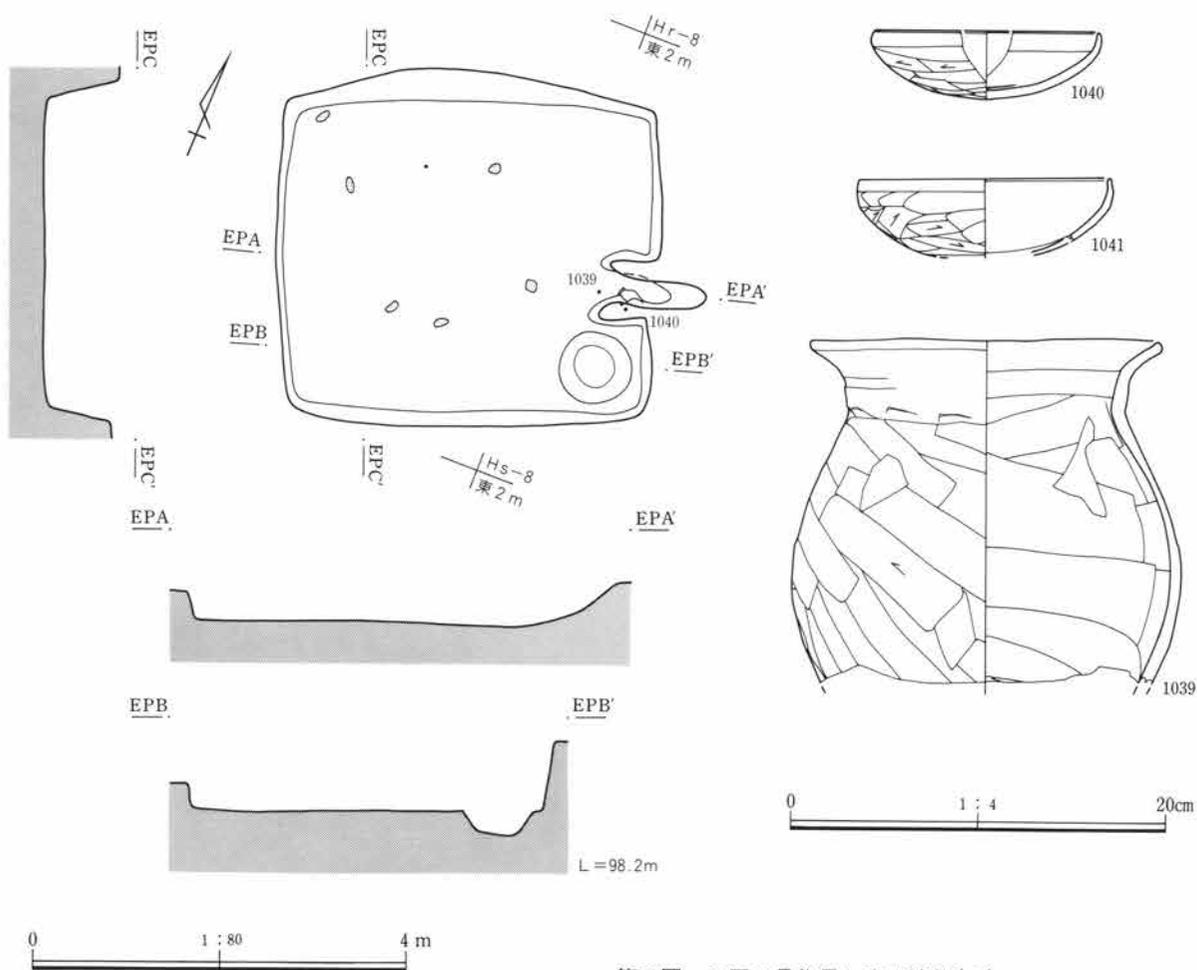
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

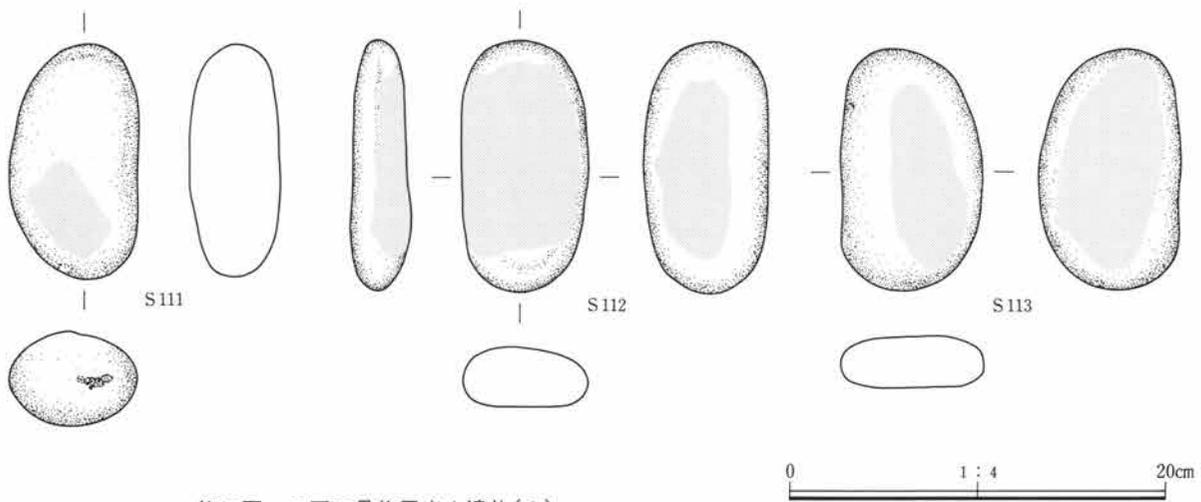
貯蔵穴 東隅、竈右脇に長径0.76m、短径0.74m、深さ0.23mのほぼ円形の貯蔵穴が検出された。断面形は台形で、底面中央部は平坦である。

遺物 100点余りの遺物が出土している。遺物はほとんど埋没土中の出土で、竈周辺から出土した遺物も図示できるほどに接合できなかった。図示した土師器甕形土器(1039)は竈燃焼部灰面直上から、杯形土器(1040)は竈袖粘土周辺から出土した。磨面のある棒状礫は、床面直上で出土したが、出土位置は特定できない。(遺物観察表：19・20頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



第79図 2区45号住居と出土遺物(1)



第80図 2区45号住居出土遺物(2)

2区53号住居

位置 Hn-13・14グリッド 写真 PL29
 重複 本住居北西隅が、67号住居の南東隅を切っている。

形状 短軸をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁は南壁がやや窪む他は、ほぼ直線的に掘られている。隅はやや丸い。規模は長軸3.25m、短軸2.80mである。

面積 7.08m² 方位 N-75°-E
 床面 遺構確認面から34cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦で、中央部は硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は23cm、左側は25cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は45cmである。燃烧部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ55cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで、壁のあたりから緩やかに煙道部へ傾斜していた。

周溝 竈左脇と南東隅の貯蔵穴が接する壁を除いて、周溝がほぼ全周していた。周溝の幅は10~12cmであった。

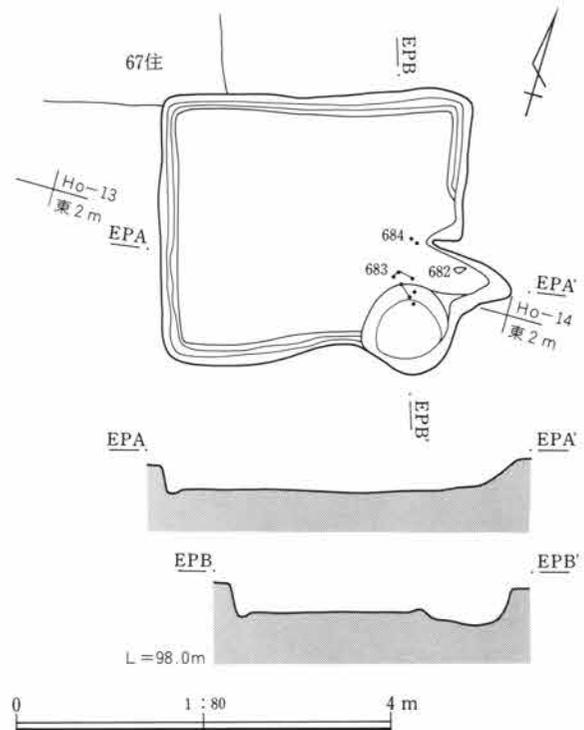
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に、長径0.95m、短径0.65m、深さ0.38mの楕円形の貯蔵穴が検出された。北縁から竈前にかけての床面に土師器杯形土器(683)が出土している。

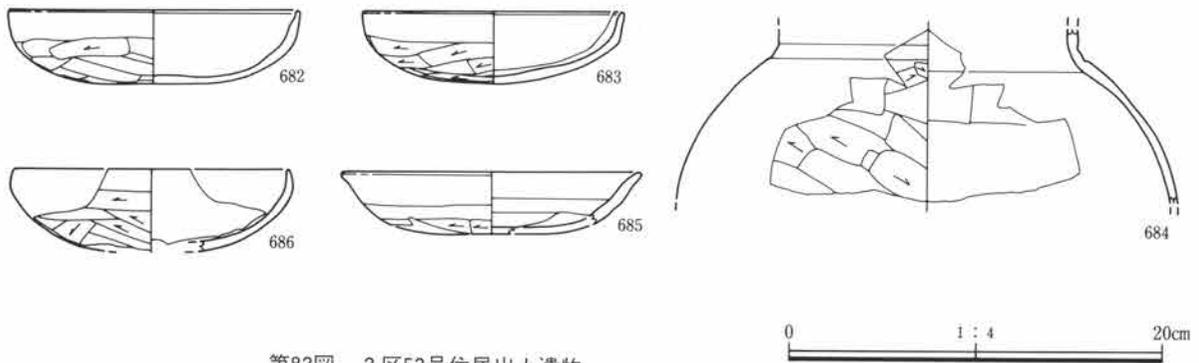
ている。

遺物 35点余りの遺物が出土している。竈周辺では燃烧部で土師器杯形土器(682)、左袖前で土師器甕形土器(684)の破片が出土している。他に図示した土師器杯形土器(685・686)は埋没土中の出土である。(遺物観察表：20頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



第81図 2区53号住居



第82図 2区53号住居出土遺物

2区54号住居

位置 Hn・o-4グリッド **写真** PL30
重複 本住居の南東隅が、55号住居の北西隅を切っている。

形状 基本的には長軸を南北方向にするほぼ正方形を呈するが、南壁東半分が不定形に張り出しており、長軸は最も長いところで6.04mである。南壁の他の周壁はほぼ直線的に掘られている。隅は比較的角張っていた。基本形の規模は長軸5.46m、短軸5.44mである。

面積 25.59㎡ **方位** N-85°-E

床面 遺構確認面から38cm掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦で、中央部は硬化していた。
埋没土 多量の軽石粒・焼土粒・炭化物粒を含む褐色土で埋まっていた。

竈 東壁ほぼ中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が若干張り出す形態の竈で、向かって右側は19cm、左側は9cm、袖の基部が残っていた。焚口幅は50cmである。燃烧部および煙道部の壁は良く焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ41cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで煙道部は東端で上方へ傾斜していた。

周溝 竈部分を除いて、幅18~24cmの周溝が全周していた。南壁沿いでは周溝が張り出し部に沿って検出されたことから、不定形ながらも、この張り出し部が住居に伴うものと考えられる。

柱穴 4本の支柱穴と1本のピットが検出された。各支柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:

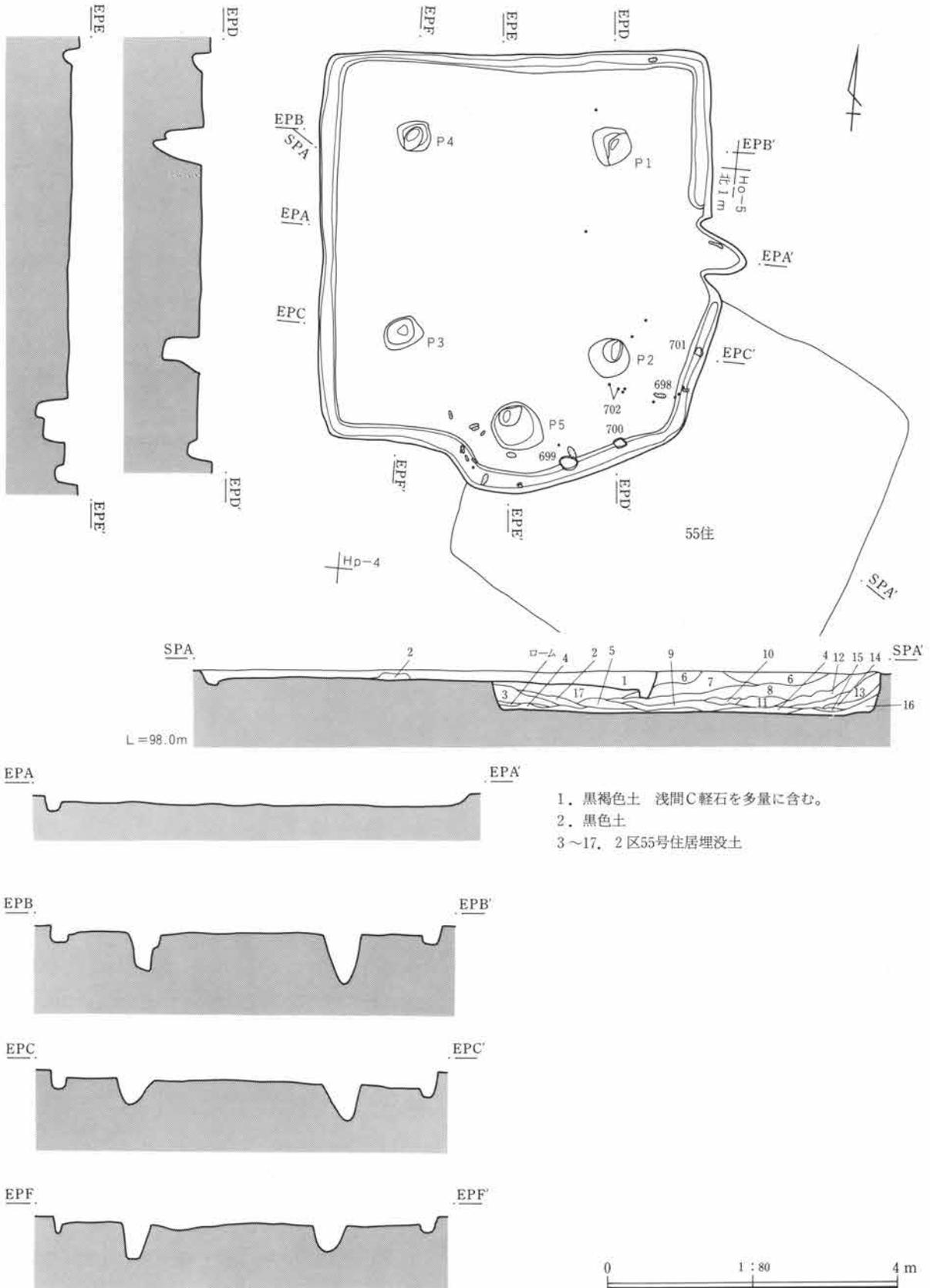
53×58×51cm、P2:44×54×35cm、P3:42×46×50cm、P4:51×53×67cmである。支柱穴のうちP1・P3・P4は住居対角線上にのる位置にあるが、P2はやや西にずれている。各支柱穴を結んだ形は正方形を呈する。また、南壁の張り出し部のほぼ中央部、周溝内縁から0.8m内側のところにP5が検出された。P5の規模は65×73×44cmで、住居の東西壁のほぼ中間に位置している。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 260点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土であるが、床面に近く、残存状況の良い遺物は住居南東部に出土する傾向がある。張り出し部の周溝内から土師器杯形土器(699・700)が底面から数cm上位で出土し、竈右側の東壁周溝内から土師器甕形土器(698)・杯形土器(701)が底面から上位出土した。また、支柱穴P2の南側の床面直上で土師器杯形土器(702)が出土した。なお、図示した磨石(S69・S70)は張り出し部出土と推定できるが、平面図中の位置を特定できない。

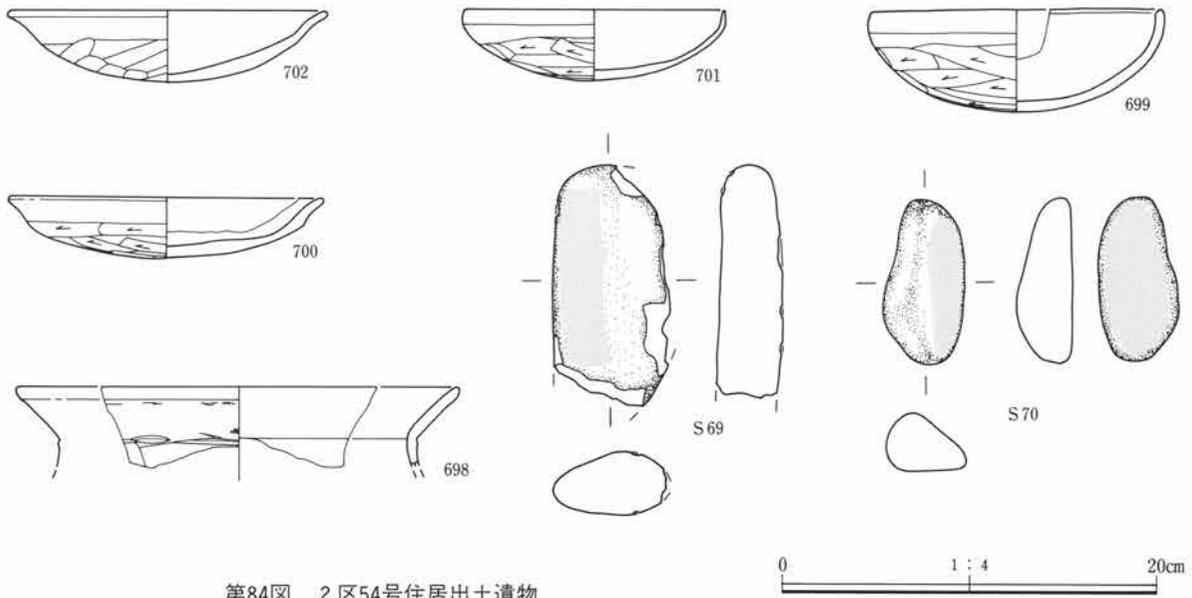
(遺物観察表:20頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。南壁東半部のやや不定形な周壁の張り出しは、南壁ほぼ中央に掘られたP5に伴う何らかの施設があったものと考えられる。P5は、P1~P4に比べ断面形が柱状で、下段の掘りこみも北側に偏っているものの、掘り方はまっすぐで傾いていない。また周辺には、棒状礫の出土が集中する傾向がある。



- 1. 黒褐色土 浅間C軽石を多量に含む。
- 2. 黒色土
- 3~17. 2区55号住居埋没土

第83図 2区54号住居



第84図 2区54号住居出土遺物

2区56号住居

位置 Hn-7・8グリッド 写真 PL31
重複 本住居の南壁が、57号住居の北壁を切っている。

形状 長軸を南北方向にする台形を呈する。西壁がやや東側より短く、南壁がやや東に開いている。周壁はほぼ直線的に掘られており、隅は丸い。規模は長軸3.70m、短軸3.65mで、最も短い西壁の長さは3.20mである。

面積 10.63㎡ 方位 N-90°-E

床面 遺構確認面から61cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、竈周辺は硬化していた。また、南壁ほぼ中央に、長径1.15m、短径0.95m、深さ0.29mの楕円形の土坑が検出された。土坑の壁際は楕円形のピット状に40cmほど掘り込まれている。この土坑は住居埋没土より下層であることは確認したが、住居に伴うかどうかは断定できなかった。

埋没土 下層は軽石をほとんど含まない黒色土で、上層は軽石粒を多く含む黒色土で埋まっていた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は50cm、左側は30cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は32cmである。燃焼部の壁は焼け

て焼土化していた。煙道部は壁から外へ62cm突出していた。燃焼部から煙道部へは緩やかに傾斜しており、煙道部東半分には天井部とおもわれる部分があり、煙道の端には直径16cmほどで周囲が焼土化した上向きの穴が検出された。

周溝 検出されなかった。

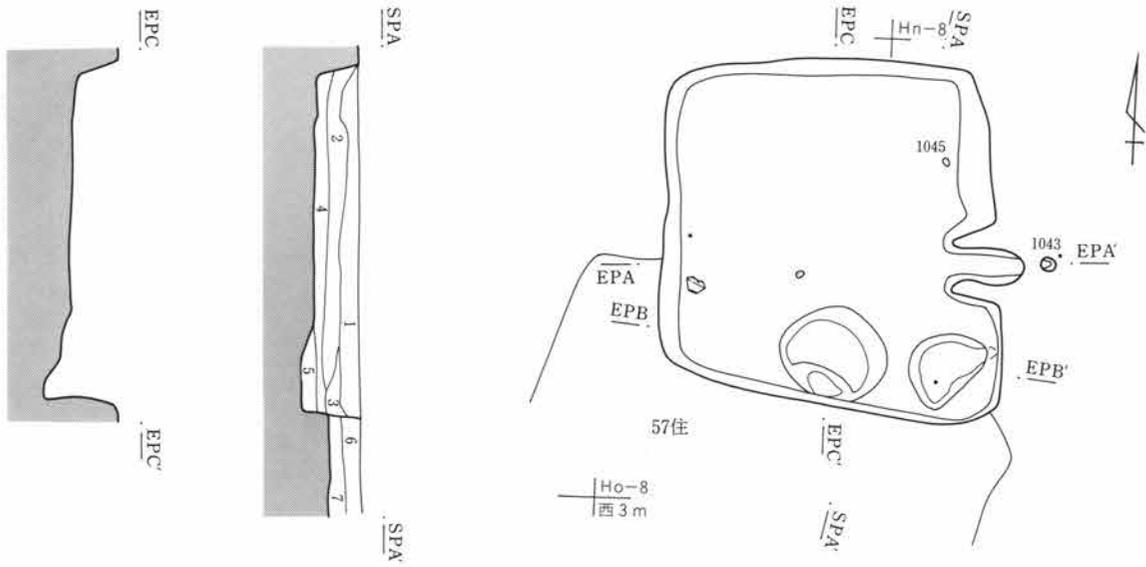
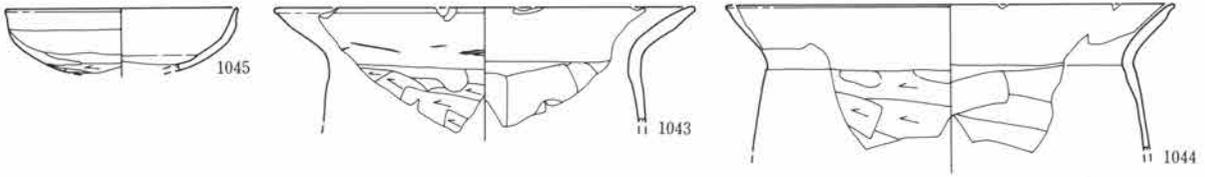
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に長径0.85m、短径0.65m、深さ0.22mの貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。形態がやや不定形で、貯蔵穴でない可能性もあるが、位置的には貯蔵穴と考えたい。

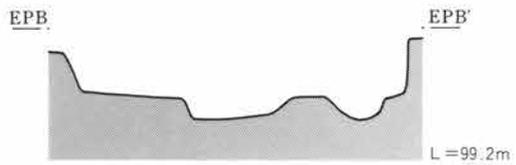
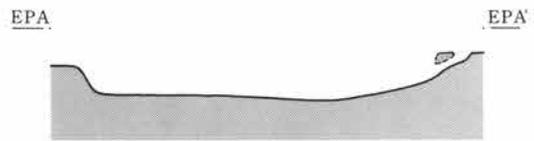
遺物 200点余りの遺物が出土している。埋没土からの出土遺物が多い。図示し得た床面直上の遺物は土師器杯形土器(1045)のみで、竈左側、東壁際で出土した。土師器甕形土器(1043)は口縁部破片であるが、竈煙道部上端の確認面で出土した。竈煙道部の構築材として用いられていた可能性もある。なお、西壁際で須恵器壺形土器が出土しているが、所在不明で図示できなかった。

(遺物観察表：20・21頁)

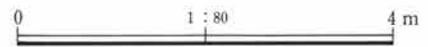
所見 出土遺物から、8世紀後半の住居と考えられる。



1. 黒色土 軽石・軽石粒を多く含む。白色軽石も散見される。小石も含む。1層と2層の間に斑鉄の固い層あり。
2. 黒色土 軽石粒をわずかに含む。
3. 2層に類するが、斑鉄の層でわけられる。
4. 黒色土 軽石をほとんど含まない。地山の塊等が下層に入る。
5. 黒褐色土 直径2～3cmの灰白色の地山塊を含む。粘質。下層は水が出る。
- 6・7. 2区57号住居埋没土



第85図 2区56号住居と出土遺物



2区62号住居

位置 Km-3グリッド 写真 PL31

重複 なし

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られており、隅は丸い。規模は長軸3.36m、短軸2.82mである。

面積 8.18㎡ 方位 N-84°-E

床面 遺構確認面から39cm掘り込んで床面となる。床面は平坦である。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は35cm、左側は40cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は47cmである。燃烧部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ43cm突出していた。燃烧部はやや窪んでおり、煙道部へ斜め上方に立ち上がっていた。

周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

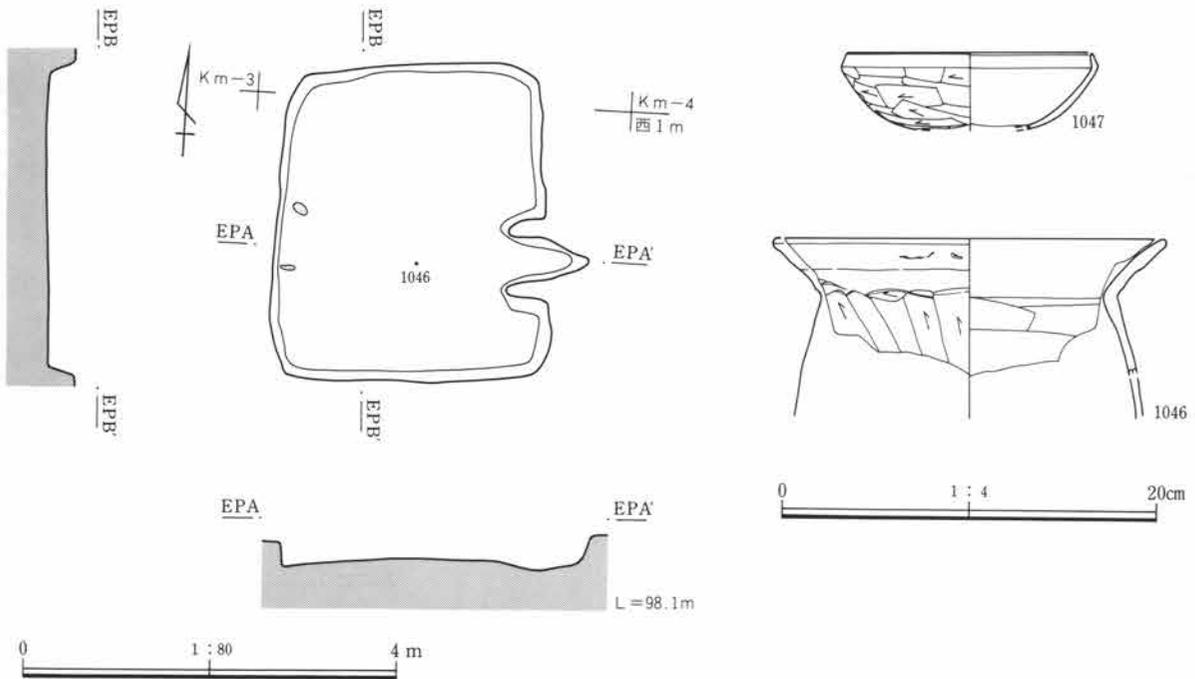
貯蔵穴 調査時には検出できなかったが、住居南東隅に黒褐色土が隅丸方形に堆積しているところがあり、これが貯蔵穴であった可能性が高い。



2区の遺構検出状況。台地内部にまで住居が
つくられている。

遺物 75点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土であった。住居中央部から出土した土師器甕形土器(1046)は床面から12cmほど上位で出土したものである。西壁際床面直上から棒状礫2点が出土しているが、敲いたり、磨ったりした痕跡はなかった。(遺物観察表：21頁)

所見 出土遺物から、8世紀初頭の住居と考えられる。



第86図 2区62号住居と出土遺物

2区63号住居

位置 Hk・1-19グリッド 写真 PL31

重複 なし

形状 長軸をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁は直線的に掘られており、隅は比較的角張っている。規模は長軸5.15m、短軸3.90mである。

面積 16.21m² 方位 N-80°-E

床面 遺構確認面から42cm掘り込んで床面となる。

竈 東壁中央寄りやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は22cm、左側は20cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は56cmである。燃烧部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ78cm突出し

ていた。燃烧部から煙道部へは緩やかに傾斜していた。

周溝 西壁中央部から北壁・東壁竈まで、幅14~20cmの周溝が半周していた。

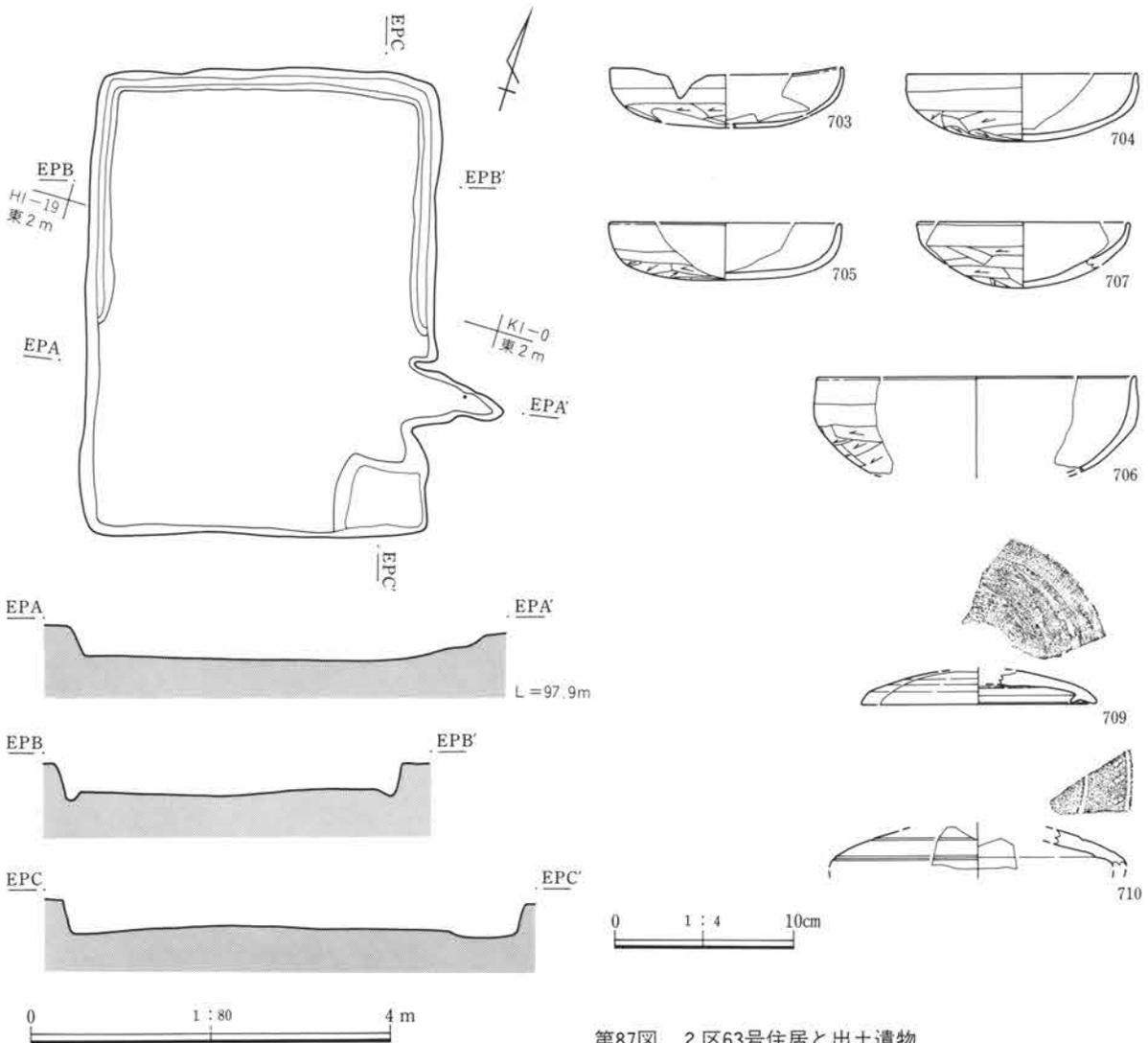
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に、長軸1.03m、短軸0.83m、深さ0.34mの方形の貯蔵穴が検出された。断面は皿状で、遺物はほとんど出土しなかった。

遺物 250点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の遺物である。床面近くの遺物も2点出土したが、図示できる破片ではなかった。

(遺物観察表：21頁)

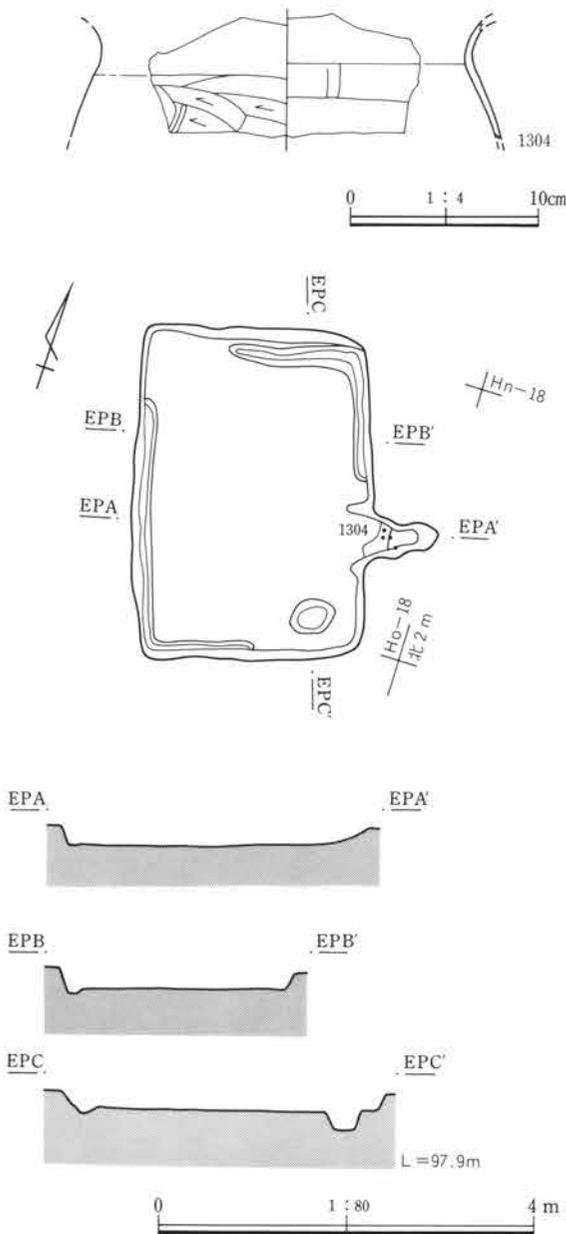
所見 埋没土の出土遺物から、8世紀前半の住居と推定したい。



第87図 2区63号住居と出土遺物

2区68号住居

位置 Hn-17グリッド 写真 PL32
 重複 なし
 形状 長軸をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁は直線的に掘られており、隅は比較的角張っている。規模は長軸3.50m、短軸2.56mである。
 面積 6.60m² 方位 N-76°-E
 床面 遺構確認面から19cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、竈の前面は硬化していた。



第88図 2区68号住居と出土遺物

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は7cm、左側は20cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は55cmである。燃烧部の壁は良く焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ80cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに傾斜していた。

周溝 北西隅と南西隅を除く壁沿いに、幅12~20cmの周溝が検出された。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 竈右側、住居南東隅に、長径0.48m、短径0.35m、深さ0.20mの楕円形の貯蔵穴が検出された。

遺物 竈の中から3点の遺物が出土したのみである。これは土師器甕形土器(1304)で、灰面から7cmほど上位で出土した。(遺物観察表:21頁)

所見 出土遺物から、9世紀前半の住居と考えられる。

2区69号住居

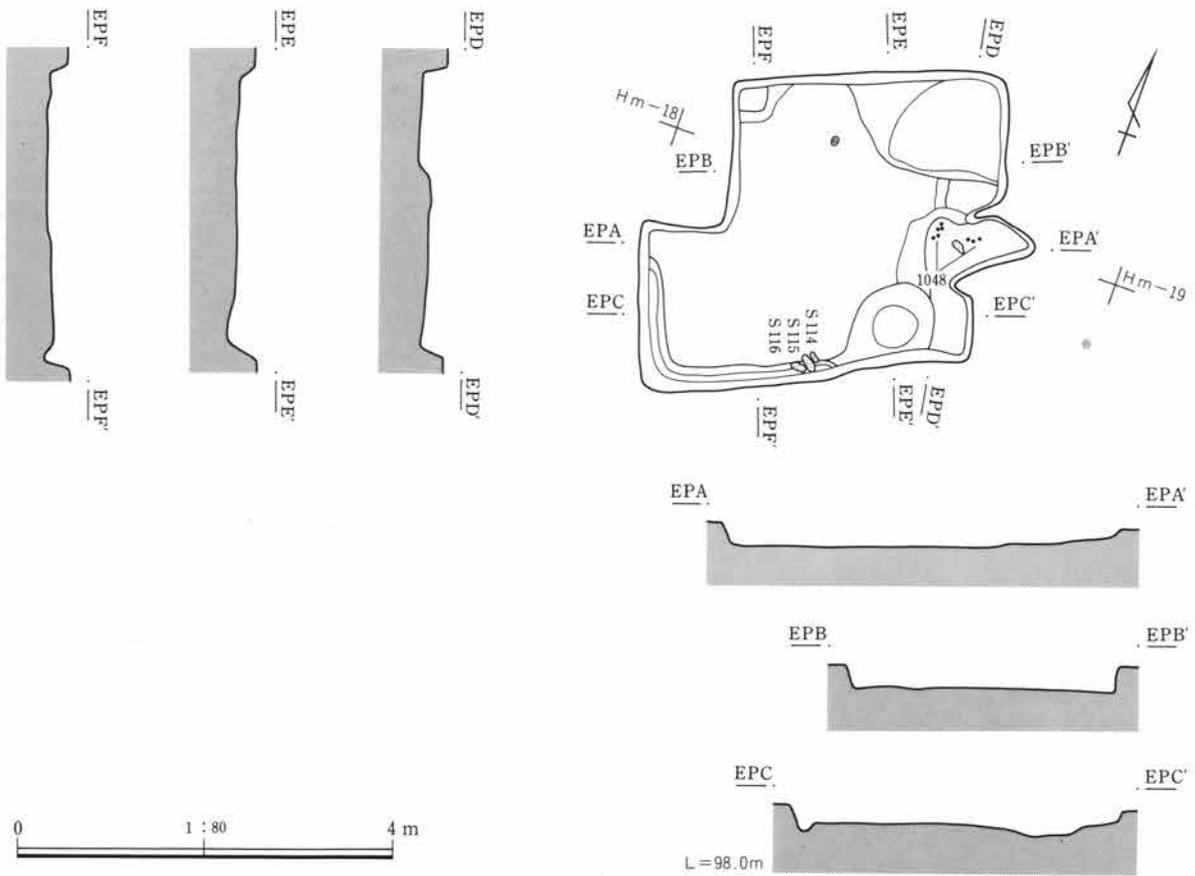
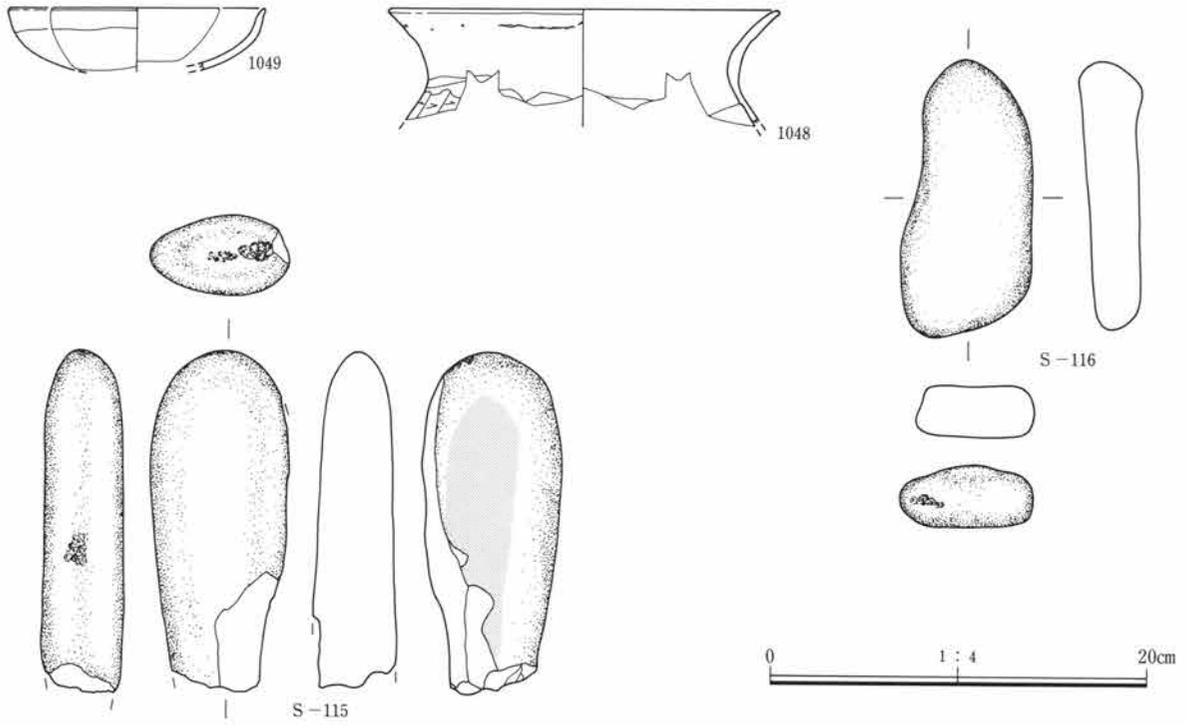
位置 H1・m-18グリッド 写真 PL32
 重複 重複遺構はないが、南西側に68号住居が近接している。

形状 南西部に張り出し部をもつL字形を呈する。東壁も竈の左側と右側では位置がずれており、複雑な形状を示している。南壁の東部がやや窪むのを除いて、周壁は直線的に掘られている。隅は比較的角張っている。規模は南北軸3.18m、北壁長2.92m、南壁長3.50m、張り出し部の長軸1.8m、短軸0.9mである。

面積 8.70m² 方位 N-72°-E

床面 遺構確認面から26cm掘り込んで床面となる。明確な床面をとらえられたのは竈前と住居南半のみで、北半は床下まで掘り過ぎた可能性が高い。北半で円形に黒色土のある部分は床下土坑と考えられる。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は20cm、左側は32cm、袖の基部が残存



第89図 2区69号住居と出土遺物

していた。焚口幅は50cmである。燃焼部の壁は顕著に焼けていない。煙道部は壁から外へ54cm突出していた。燃焼部から煙道部へは緩やかに傾斜していた。周溝 南壁西半部から張り出し部の西壁にかけて、幅15cmの周溝が検出された。

柱 穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に、長径0.87m、短径0.73m、深さ0.08mの浅い皿状の土坑が検出された。位置的には貯蔵穴と考えられる。

遺物 45点余りの遺物が出土している。図示した土師器甕形土器(1048)は竈前と燃焼部出土の遺物が接合したものである。南壁中央部壁際の床面直上で3点の敲石(S114・S115・S116)が出土した。土師器杯形土器(1049)は埋没土中の出土である。

(遺物観察表：21頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。

2区79号住居

位置 Hm・n-5・6グリッド

写真 PL32

重複 東半分が73号住居を切っている。

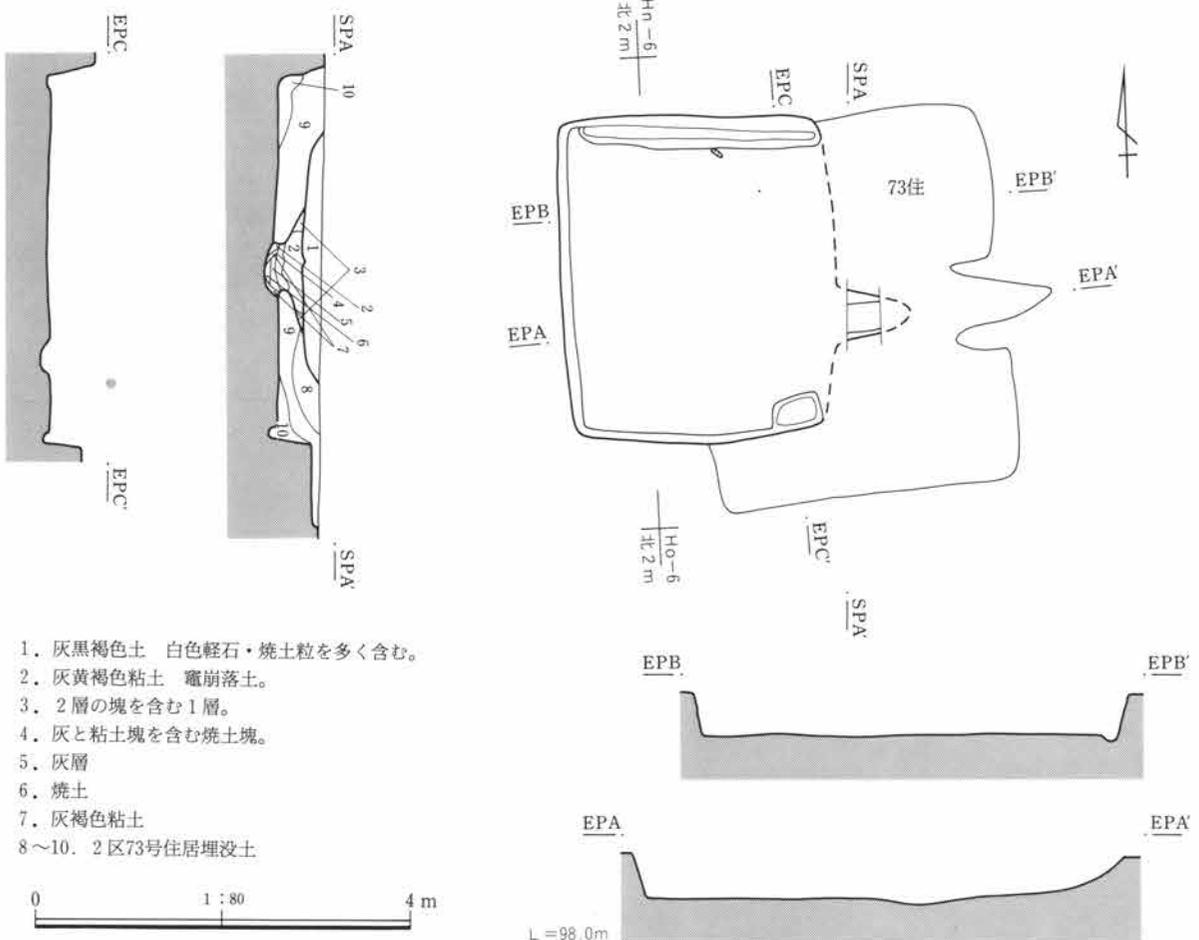
形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は直線的に掘られ、隅は比較的角張っている。規模は長軸3.45m、短軸推定2.93mである。

面積 推定8.55㎡ 北壁方位 N-92°-E

床面 遺構確認面から49cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らで、竈前面は硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。竈上層に攪乱があり、遺構確認面からは竈の存在がわからなかった。また、73号住居との新旧関係を明確にする以前に掘り始めたこともあって、竈の大部分を壊してしまう結果となった。竈は、横断面を記録できたにとどまった。

周溝 北壁沿いにのみ、幅20~22cmの周溝が検出



された。

柱 穴 検出されなかった。

貯蔵穴 竈右側、住居南東隅に、長径0.52m、短径0.35m、深さ0.10mの隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。

遺 物 床面近くからの出土遺物はない。図示した土師器甕形土器(1313)や須恵器碗形土器(1314)、蓋形土器(1315)は埋没土中の出土遺物である。また、埋没土中から、土製紡錘車(1316)と石製紡錘車(S133)が1個ずつ出土した。(遺物観察表：22頁)

所 見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。

2区82号住居

位 置 Hg-9グリッド 写 真 PL33

重 複 本住居の西壁が83号住居の東壁を、本住居の東壁が84号住居の北西隅を切っている。

形 状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は直線的に掘られ、隅は比較的角張っている。規模は長軸3.17m、短軸2.57mである。

面 積 7.00m² 方 位 N-92°-E

床 面 遺構確認面から38cm掘り込んで床面となる。床面は中央部がやや窪んでいるが、竈前を中心にして硬化していた。

埋没土 軽石・小礫を多く含む砂質の暗茶褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は15cm、左側は31cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は40cmである。燃烧部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ64cm突出していた。燃烧部はやや窪んで、緩やかに煙道部へ傾斜していた。

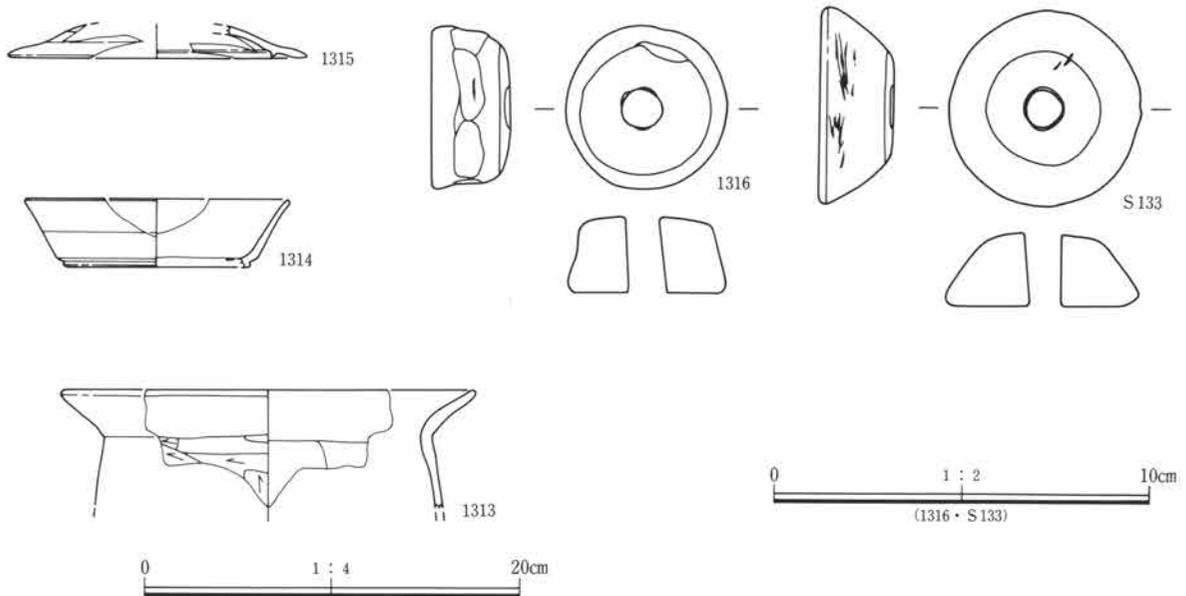
周 溝 検出されなかった。

柱 穴 検出されなかった。

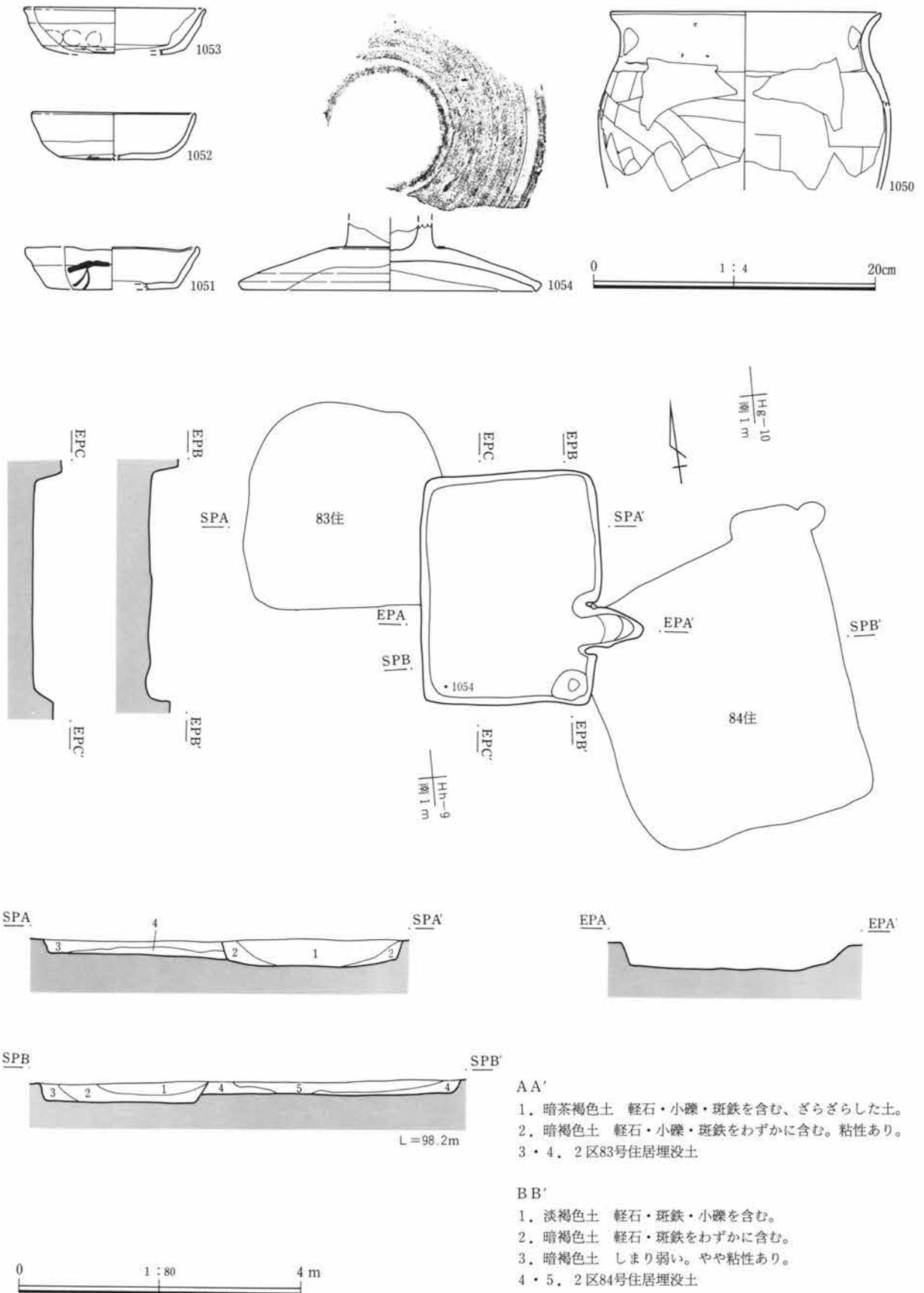
貯蔵穴 南東隅に、長径0.43m、短径0.42m、深さ0.11mのほぼ円形の貯蔵穴が検出された。

遺 物 10点あまりの遺物が出土している。図示した遺物のうち、須恵器蓋形土器(1054)は南西隅床面上10cmで出土した。他は埋没土中の出土遺物である。(遺物観察表：22頁)

所 見 出土遺物から、9世紀前半の住居と考えられる。



第91図 2区79号住居出土遺物



第92図 2区82号住居と出土遺物

2区88号住居

位置 Hm-5グリッド 写真 PL33

重複 本住居の北西隅が72号住居の南東隅を、本住居の南壁が71号住居の北壁を切っている。

形状 西壁方向を南北にする正方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られており、隅はやや丸くなっている。規模は長軸3.70m、短軸3.66mである。

面積 12.47㎡ 方位 N-91°-E

床面 遺構確認面から69cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦である。

埋没土 軽石・焼土粒を含む黒色土で埋まっていた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は15cm、左側は18cm、袖の基部が残存

していた。焚口幅は55cmである。燃焼部の壁はあまり顕著に焼けていなかった。確認面付近が焼土化していた。煙道部は壁から外へ65cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに傾斜していた。

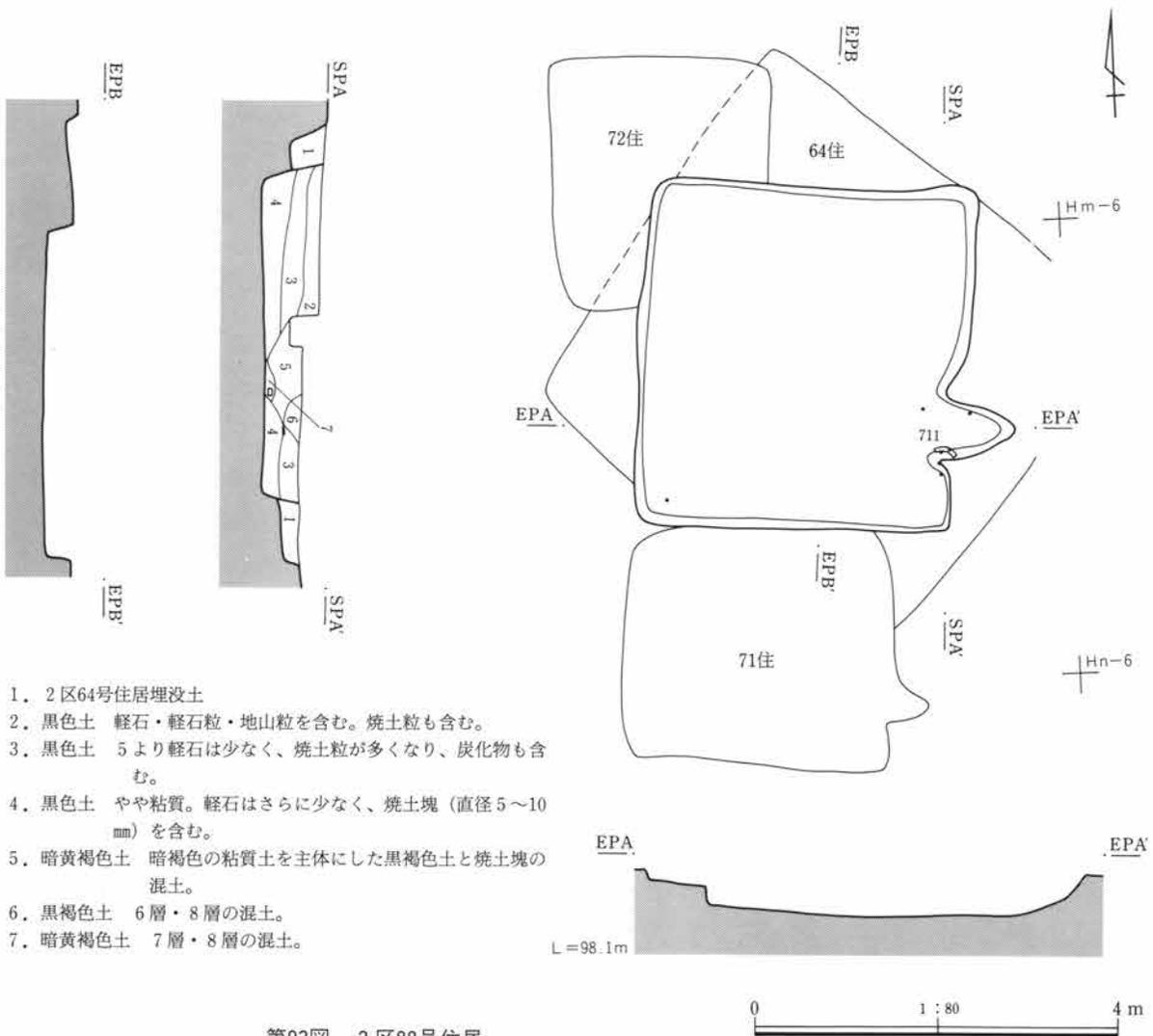
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

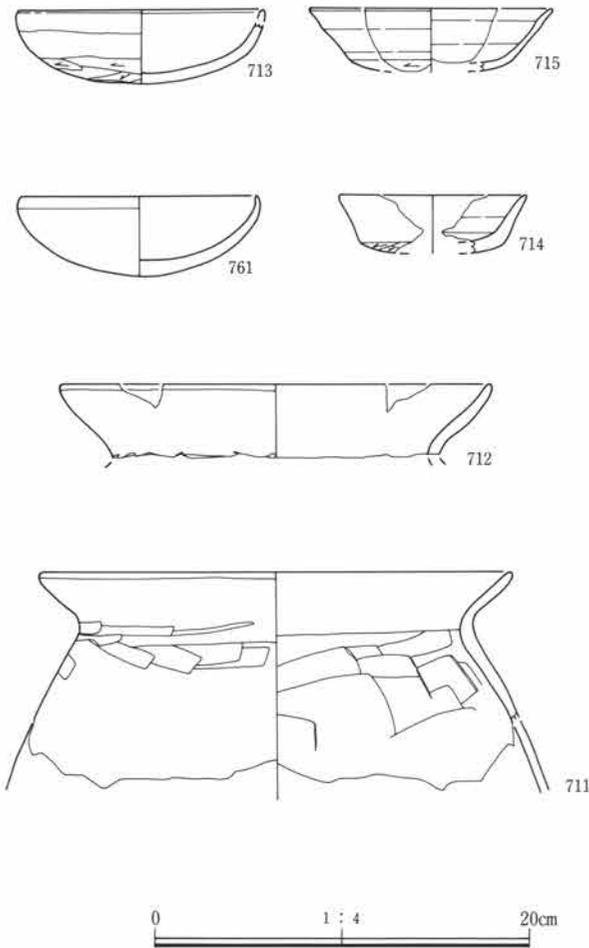
貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 400点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の破片遺物である。床面に近い遺物はきわめて少なく、図示できたのは竈右袖内側から出土した土師器甕形土器(711)だけである。他は埋没土中の出土遺物である。(遺物観察表：22頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



第93図 2区88号住居



第94図 2区88号住居出土遺物

2区97号住居

位置 Hk-16グリッド 写真 PL33・34
重複 なし

形状 短軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は北半部がやや膨らむ西壁を除いて、ほぼ直線的に掘られている。隅は丸い。規模は長軸3.64m、短軸2.84mである。

面積 8.93m² 方位 N-82°-E
床面 遺構確認面から24cm掘り込んで床面となる。床面には小さな凹凸があるが、全体には平坦である。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に若干竈袖が張り出す形態の竈

で、向かって右側は24cm、左側は10cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は38cmである。燃烧部の壁はあまり顕著に焼けていない。煙道部は壁から外へ34cm突出していた。燃烧部はやや窪んでおり、煙道部は斜め上方へ傾斜している。

周溝 検出されなかった。

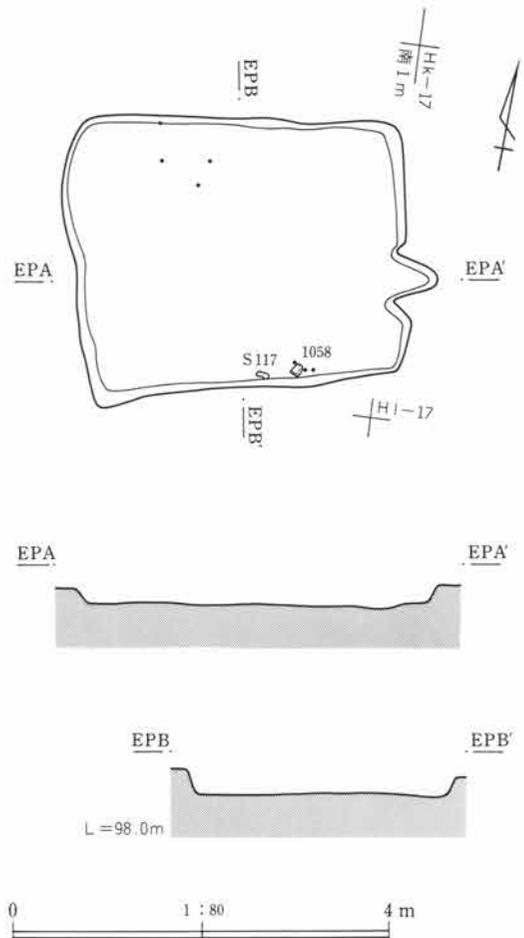
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

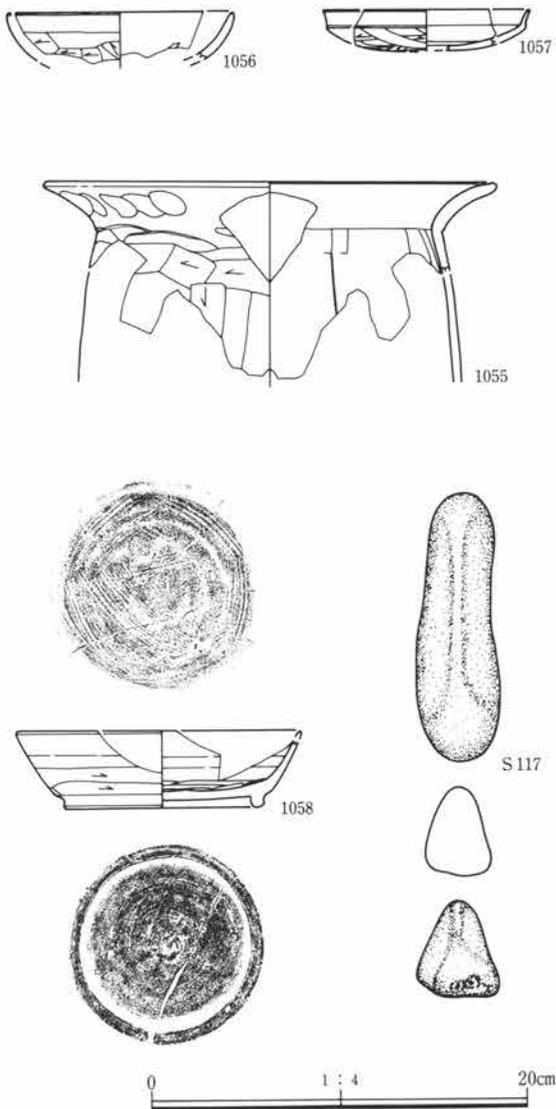
遺物 60点余りの遺物が出土している。床面近くの遺物は破片が多く図示できたのは、南壁際床面直上で出土した土師器杯形土器(1058)と敲石(S117)だけである。他は埋没土中から出土した。

(遺物観察表：22・23頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



第95図 2区97号住居



第96図 2区97号住居出土遺物

2区104号住居

位置 Kc-2グリッド 写真 PL34
重複 本住居北壁が105号住居南壁に切られている。

形状 対角線をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。南東隅が不定形に膨らんで検出されたが、本来は隅丸になると考えられる。他の隅も比較的丸く掘られている。規模は長軸4.01m、短軸3.32mである。

面積 推定11.9m² 方位 N-67°-E

床面 遺構確認面から53cm掘り込んで床面となる。床面には2基の円形土坑が検出された。南西隅の土坑は床面が沈んだものと考えられ、住居に伴うと考えられる。北東隅の土坑は長径1.21m、短径1.11m、深さ0.22mの楕円形であるが、住居に伴うかどうかは断定できなかった。

埋没土 焼土粒・軽石・黄白色土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈と考えられるが、向かって左側の袖は残っていなかった。右側は壁から38cmの袖の基部が残存していた。焚口幅は45cmである。煙道部は壁から外へ82cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで煙道部へ斜め上方に立ち上がっていた。

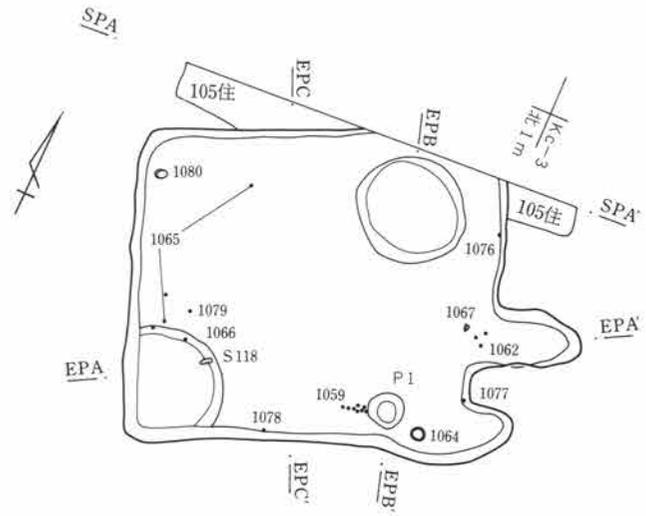
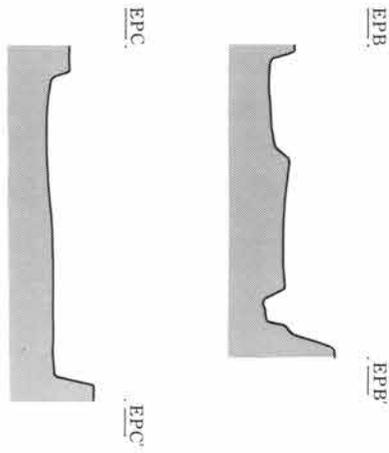
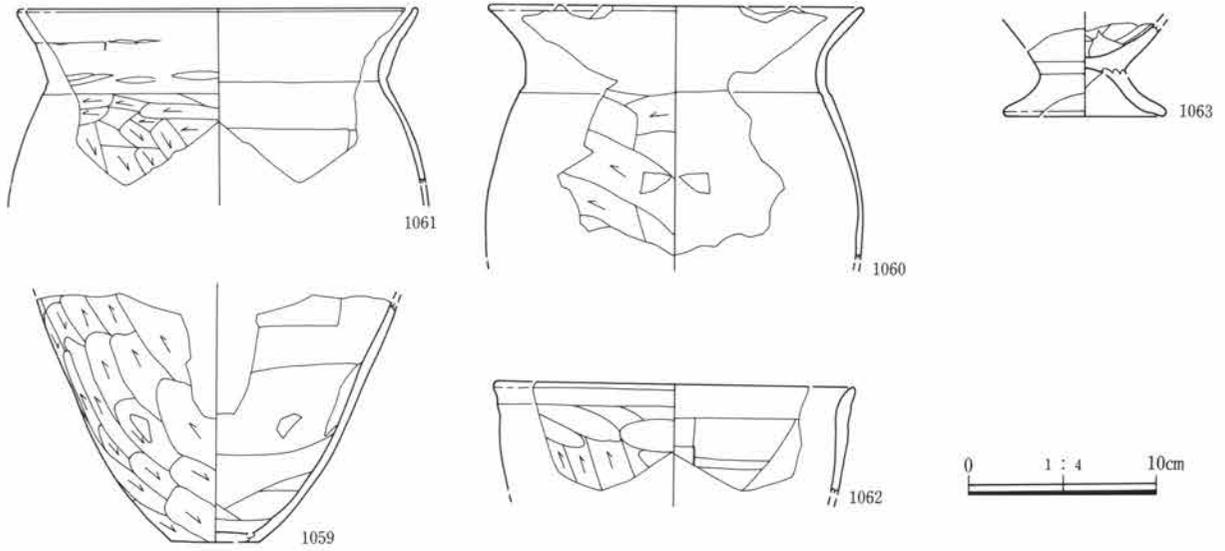
周溝 検出されなかった。

柱穴 南東部の壁寄りに1本のピットが検出された。規模（短径×長径×深さ）は、P1：37×39×28cmである。他に柱穴と考えられるピットが検出できなかったため、P1が住居の柱穴かどうかは断定できない。

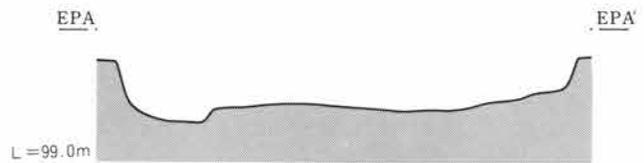
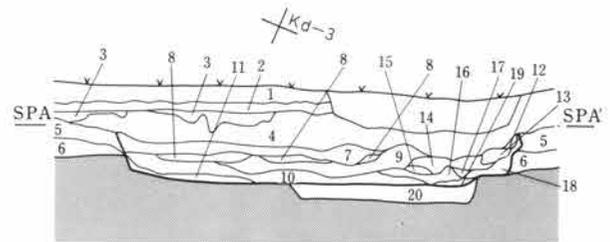
遺物 200点余りの遺物が出土している。本住居では、床面近くの遺物が比較的多く出土した。竈周辺からは、土師器甕形土器(1059・1062)が床面直上から、土師器杯形土器(1064・1067)が床面から10cmほど上で、須恵器杯形土器(1076・1077)が壁際や床面直上で出土した。また、西壁周辺から土師器杯形土器(1065・1066)、須恵器杯形土器(1078・1079・1080)が床面直上で出土した。埋没土中から出土した土師器杯形土器(1068)には底部外面中央部に「千万」の墨書がされている。また、1075は畿内産の杯形土器を模倣したものと考えられ、口縁部外面には細い沈線が巡る。内面は黒色処理され、内外面は丁寧に磨かれている。また、南東部から棒状礫が出土しているが、顕著な使用痕はなかった。

(遺物観察表：23・24頁)

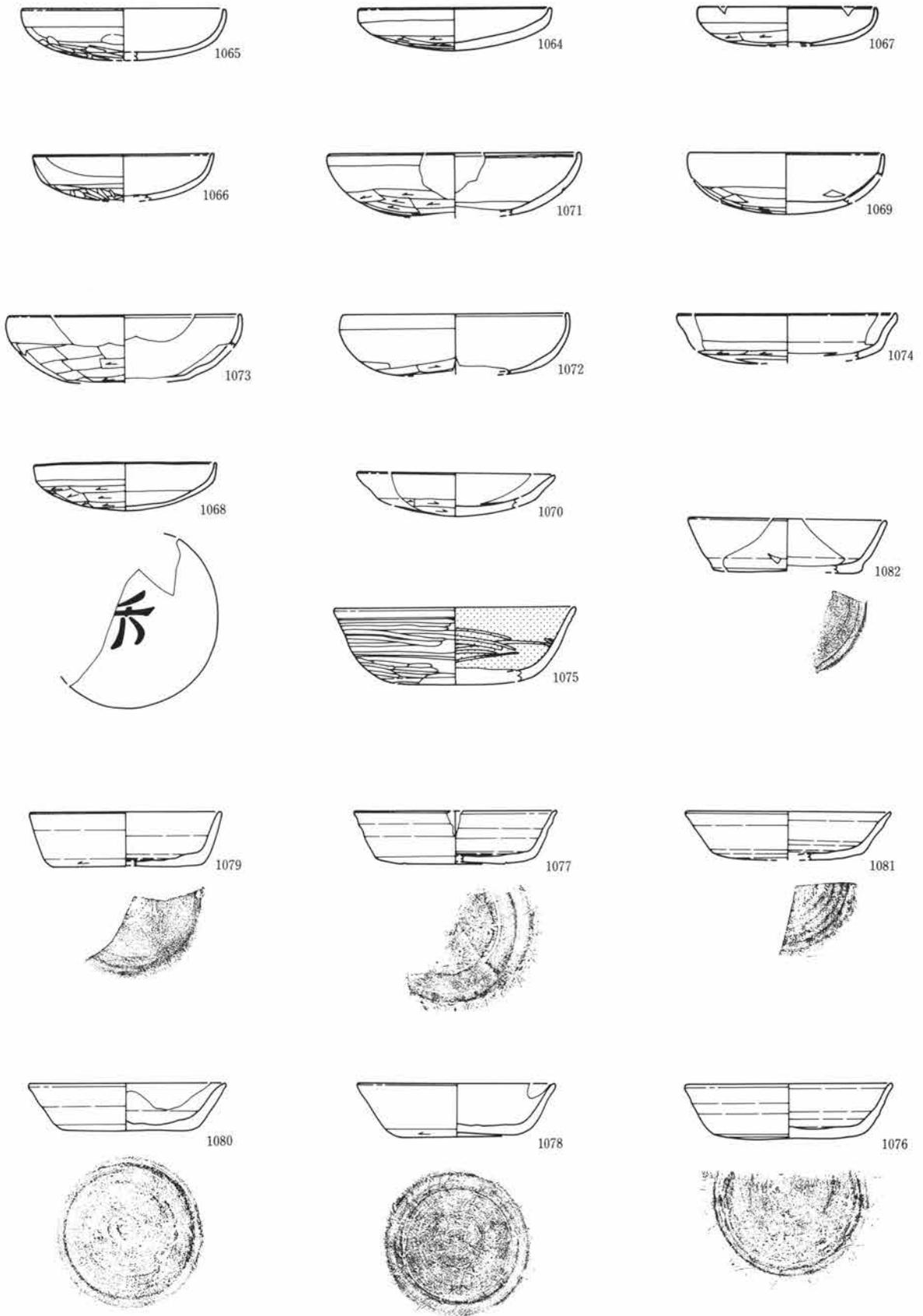
所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



1. 表土
2. 灰褐色土 斑鉄が著しく、しまりがある。
3. 灰褐色土 やや砂質。
4. 黒褐色土 白色軽石と焼土粒を多量に含む。
5. 黒色土 白色軽石を含む。
6. 5層と黄褐色土層の混土。
- 7~19. 2区105号住居埋没土
20. 黒褐色土 黄褐色粘土塊を含む。



第97図 2区104号住居と出土遺物(1)



第98図 2区104号住居出土遺物(2)

2区 105号住居

位置 Kc-2グリッド 写真 PL34

重複 南壁が、104号住居の北壁を切っている。

形状 住居の大半が調査区域外のため、全体形状は不明である。

面積 測定不可 南壁方位 N-83°-E

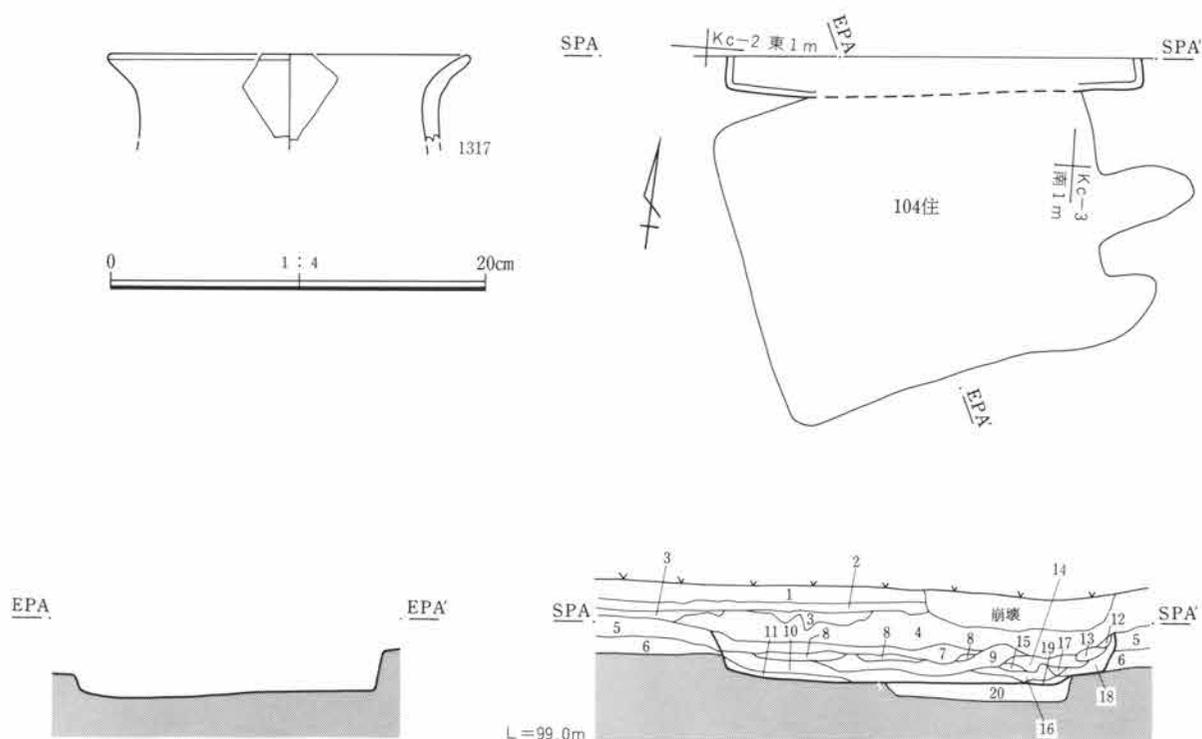
床面 遺構確認面から22cm掘り込んで床面となる。埋没土 白色軽石・焼土粒・炭化物粒を含む黒

色土で埋まっていた。

周溝 南壁沿いには検出されなかった。

遺物 数点の埋没土出土の遺物があるのみである。図示した土師器甕形土器(1317)も埋没土中の出土遺物である。(遺物観察表：24頁)

所見 104号住居との新旧関係および出土遺物から、8世紀中葉以降の住居と考えられる。



1. 表土
2. 灰褐色土 斑鉄が著しく、しまりがある。
3. 灰褐色土 やや砂質。
4. 黒褐色土 白色軽石と焼土粒を多量に含む。
5. 黒色土 白色軽石を含む。
6. 5層と黄褐色土層の混土。
7. 黒褐色土 白色軽石と焼土と炭化物を少量含む。
8. 鉄分凝固層
9. 7層に似る。やや黒みをおびる。
10. 黒色土 焼土塊・炭化物・黄白色粘質土小塊を含む。

11. 黒色土 黄白色粘質土塊を含む。
12. 焼土粒を含む黄白色土塊と4層の混土。
13. 黄白色粘質土塊
14. 黒褐色土 焼土粒・粘土粒を含む。
15. 14層と16層との混土。
16. 黄褐色粘土塊
17. 黒色土 焼土粒を含む。
18. 焼土
19. 焼土と灰。
20. 2区104号住居埋没土

第99図 2区105号住居と出土遺物

0 1:80 4 m

2区106号住居

位置 Hk・1-18・19グリッド

写真 PL35 重複なし

形状 長軸をほぼ南北方向にする正方形に近い長方形を呈する。周壁は直線的に掘られている。隅はやや丸い。規模は長軸3.90m、短軸3.65mである。

面積 12.14m² 方位 N-87°-E

床面 遺構確認面から45cm掘り込んで床面となる。床面は、北西隅と南西隅がやや高まっているが、全体に平坦で、竈前面から住居中央部にかけて硬化していた。竈前面には、焼土および灰が広がっていた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は42cm、左側は9cm、袖の基部が残存

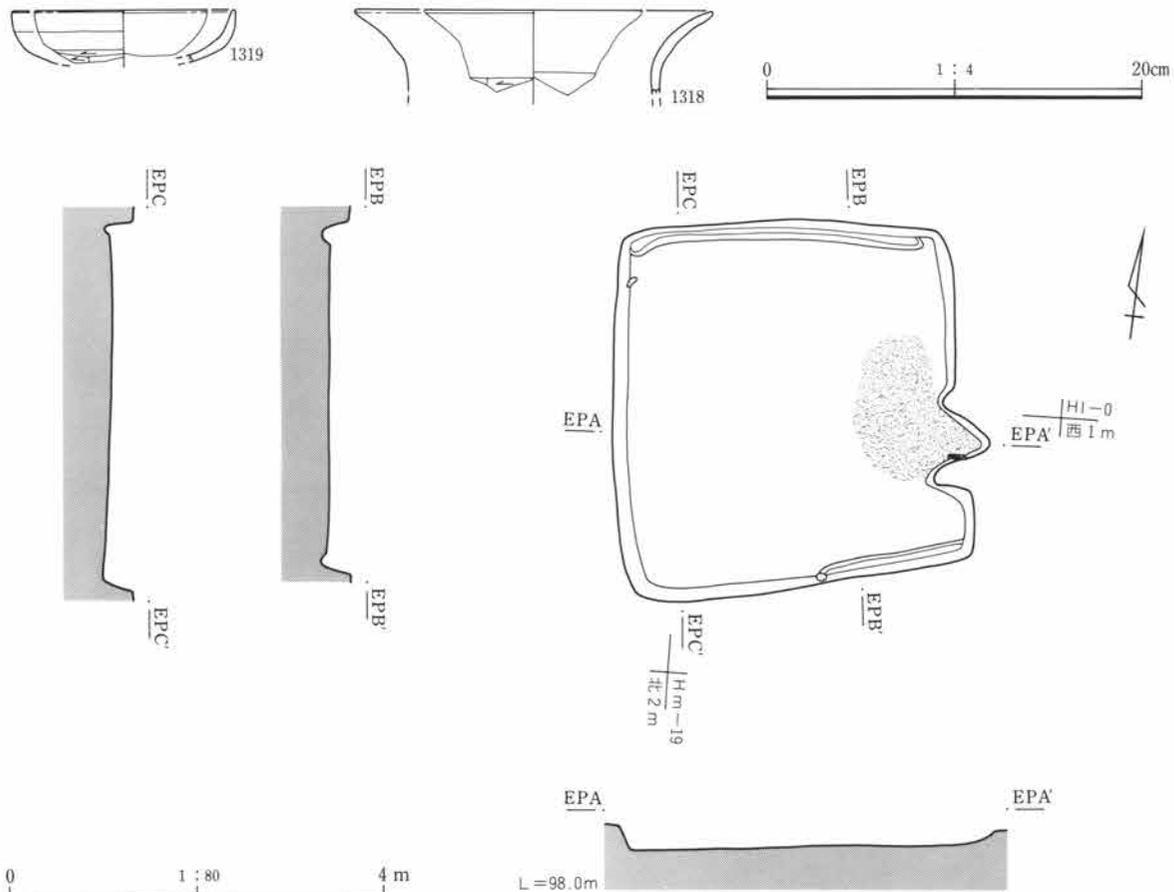
していた。焚口幅は60cmである。燃烧部の壁は、顕著に焼けていなかった。煙道部は壁から外へ20cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに傾斜していた。燃烧部右壁沿いに炭化材が出土した。周溝 北壁および南壁の東半に、幅12~15cmの周溝が検出された。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 50点余りの遺物が出土しているが、床面近くの出土遺物はない。図示した土師器甕形土器(1318)、土師器杯形土器(1319)は、埋没土出土の遺物である。(遺物観察表:24頁)

所見 埋没土中出土の遺物からではあるが、9世紀前半ころの住居と考えられる。



第100図 2区106号住居と出土遺物

2区 107号住居

位置 Hb-2・3グリッド 写真 PL35
重複 なし

形状 長軸を南北方向にする台形を呈する。西壁の南半部は削平されて確認できなかった。周壁は直線的に掘られ、隅は比較的角張っている。規模は長軸4.50m、短軸4.21mである。

面積 15.12m² 方位 N-80°-E

床面 遺構確認面から25cm掘り込んで床面となる。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は60cm、左側は28cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は62cmである。燃焼部の壁は灰白色粘土で構築されており、内側は比較的良く焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ63cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部へ斜めに傾斜し

ていた。

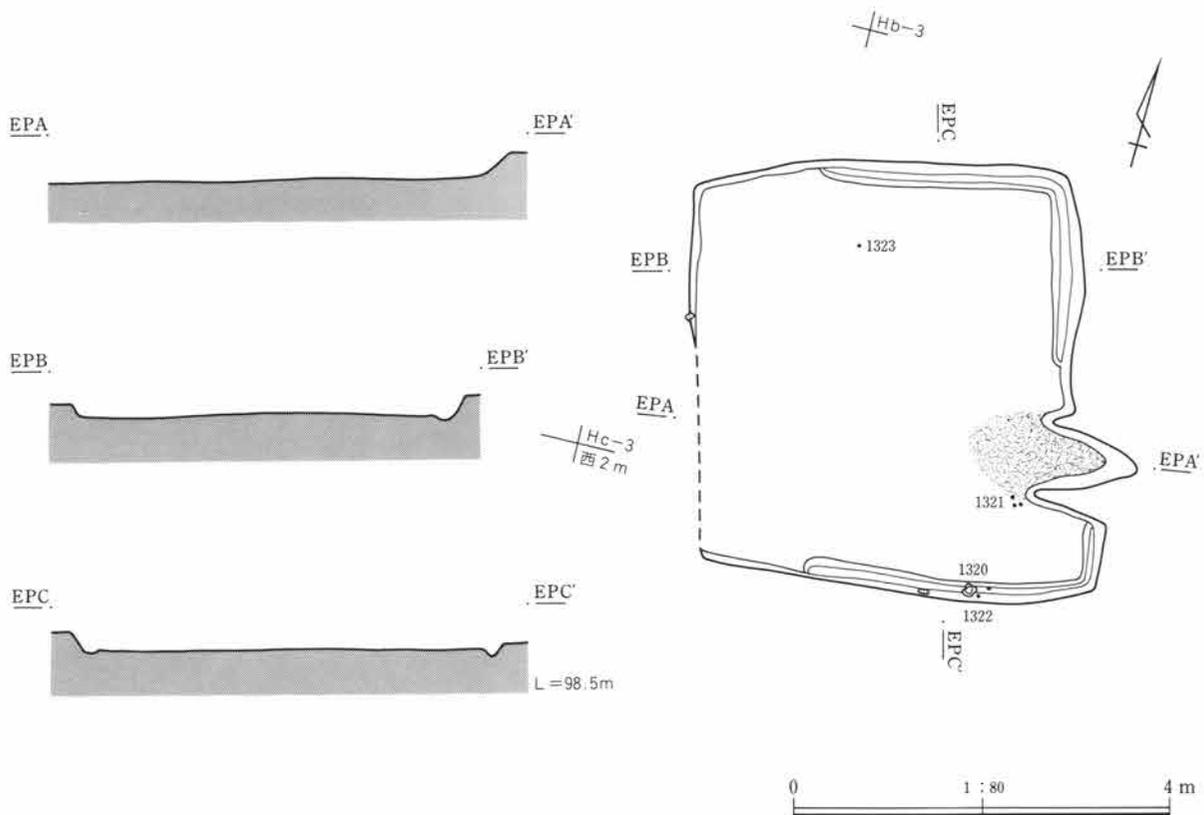
周溝 竈を除く東壁と、南北壁の中央部から東部にかけての壁沿いに、幅12~20cmの周溝が検出された。南壁の周溝からは、後述するように土師器の甕形土器・杯形土器が出土している。

柱穴 検出されなかった。

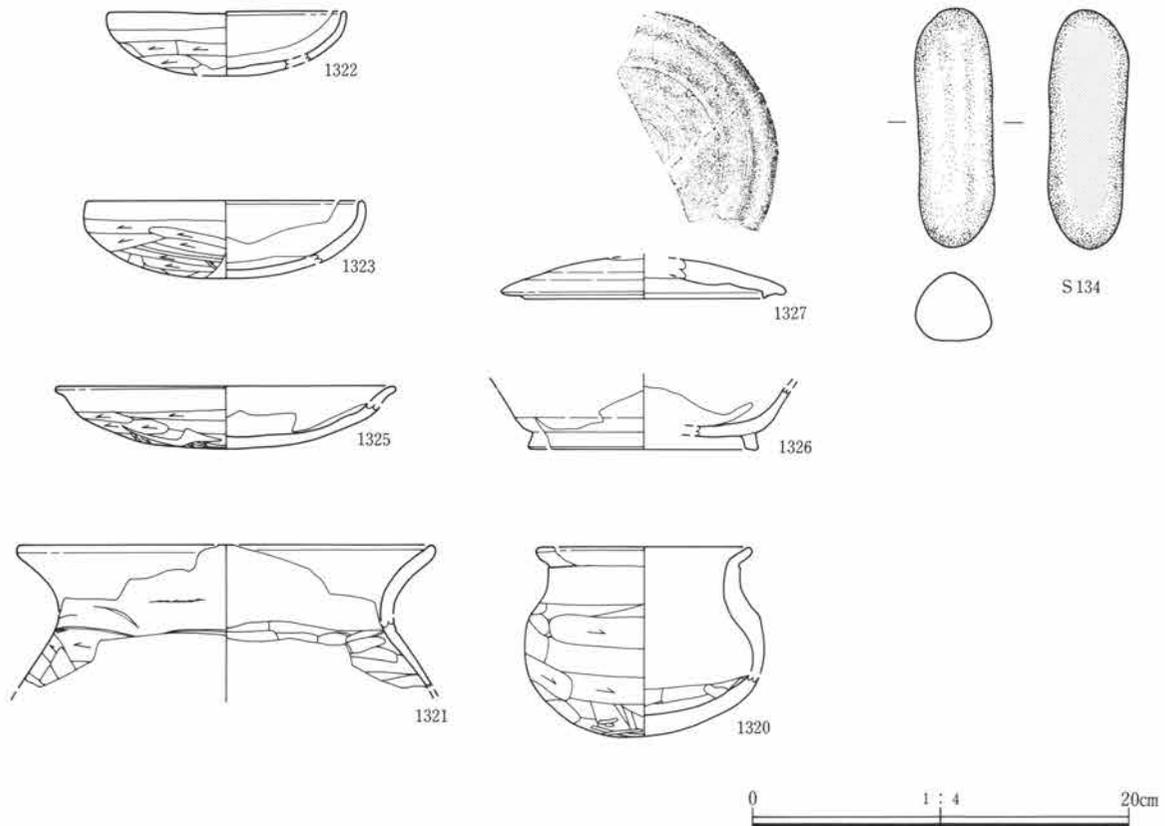
貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 210点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。北壁寄りには土師器杯形土器(1323)、竈右袖前から須恵器杯形土器(1324)と土師器甕形土器(1321)、南壁周溝内から土師器甕形土器(1320)、杯形土器(1322)が出土しているが、これらは比較的床面に近い遺物である。他は埋没土中から出土した。(遺物観察表：24頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



第101図 2区107号住居



第102図 2区107号住居出土遺物

2区108号住居

位置 Eb-17グリッド 写真 PL35

重複 なし

形状 東壁方向を南北方向にする方形を呈すると考えられるが、住居南西部がほとんど削平されており、全体形状は不明である。周壁は北壁と東壁の一部が残るのみであるが、直線的に掘られている。残存する北東隅はかなり丸い。

面積 計測不能 東壁方位 N-86°-E
床面 遺構確認面から8~17cm掘り込んで床面となる。床面は明確でなく、小ピットや土坑が掘られているが、住居に伴うかどうか不明である。

竈 検出されなかった。

周溝 検出されなかった。

柱穴 小ピットは検出されたが、柱穴と断定できるものはない。

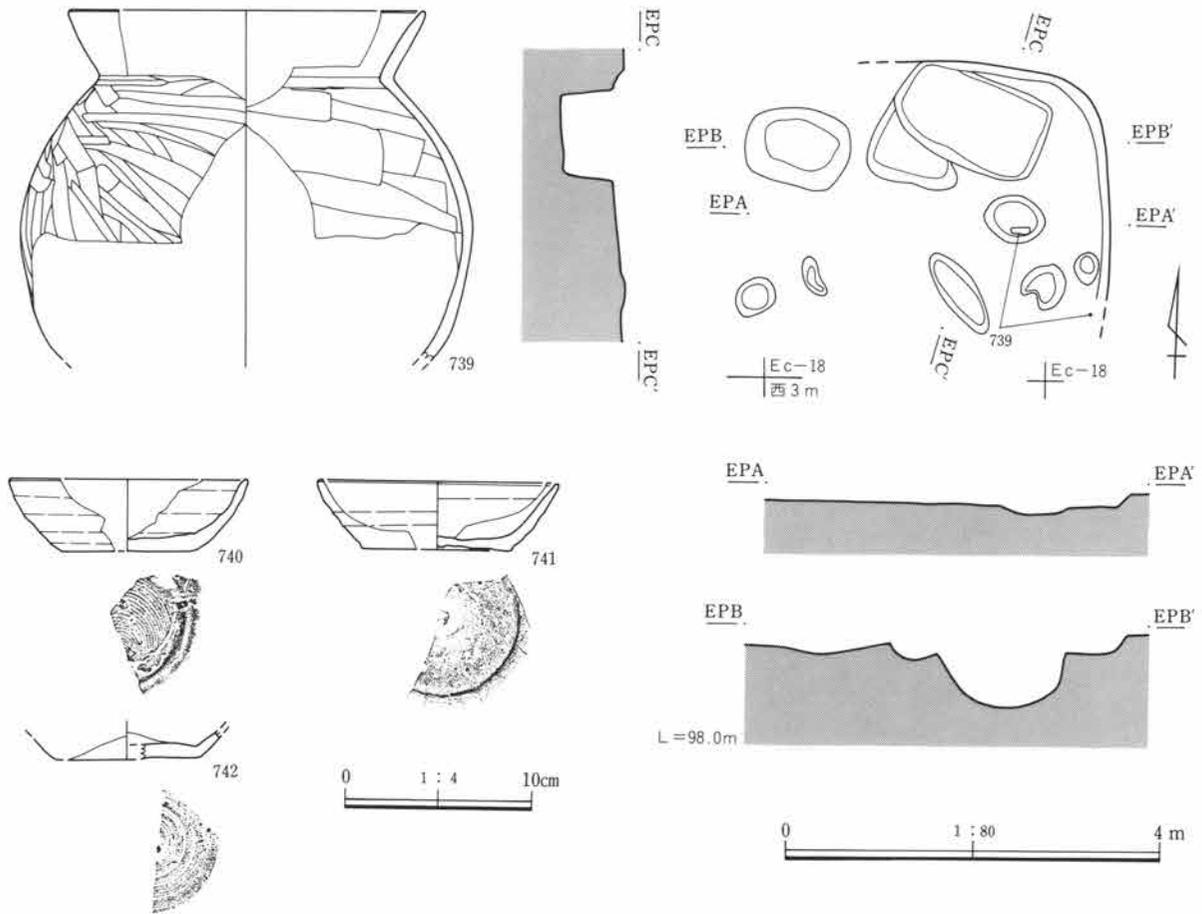
貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 110点余りの遺物が出土している。床面近くの遺物は多くなかった。図示した土師器甕形土器(739)は東壁寄りの床面直上で出土した。他の須恵器杯形土器(740・741・742)は埋没土中の出土である。(遺物観察表：25頁)

所見 出土遺物から、8世紀後半の住居と考えられる。



2区北端の幹線道路部分。西方へ山麓を貫く道路がつくられる。



第103図 2区108号住居と出土遺物

2区110号住居

位置 Kd-11グリッド 写真 PL36
重複 東壁を70号土坑に切られている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。隅は丸い。規模は長軸3.10m、短軸2.60mである。

面積 6.71m² 北壁方位 N-93°-E
床面 遺構確認面から20cm掘り込んで床面となる。新しい土坑やピットによって、床面が掘り込まれていて若干の凹凸がある。

埋没土 軽石粒・焼土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

竈 検出されなかった。

周溝 南壁沿いに、幅20~40cmの周溝が検出された。周溝内には、50~80cm間隔でピットが4本検出

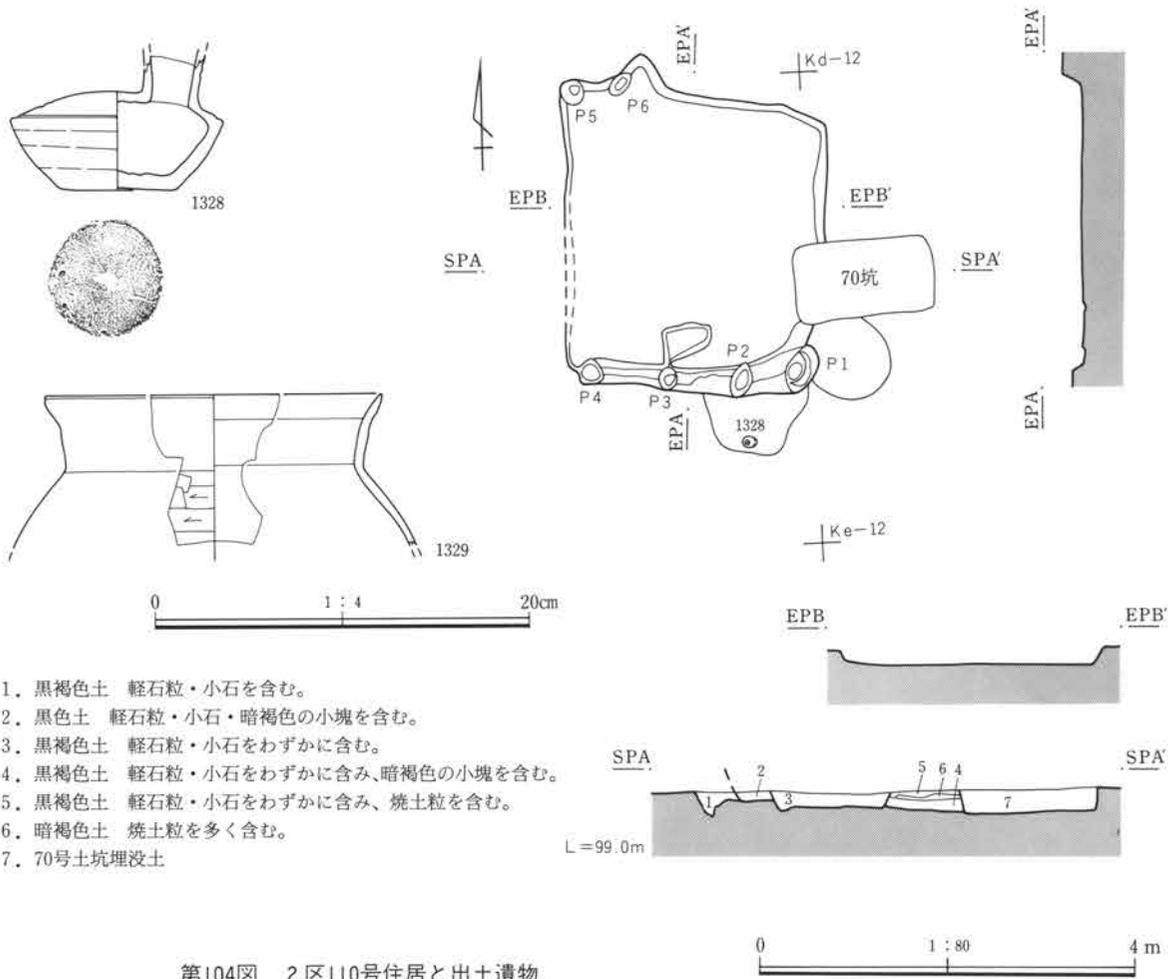
された。

柱穴 南壁周溝内に4本、北西隅に2本の小ピットが検出された。柱穴かどうかの確定はできない。各ピットの規模(短径×長径×深さ)は、P1:35×45×11cm、P2:23×32×50cm、P3:19×21×22cm、P4:25×26×25cm、P5:25×26×27cm、P6:20×22×14cmである。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 60点余りの遺物が出土している。埋没土中の出土遺物が多い。図示した土師器甕形土器(1329)は埋没土中の出土遺物である。また、須恵器横瓶(1328)は住居内ではなく、南壁東半分の外縁部の落ち込みの中から出土した。直接住居の時期を示すとはいえない。(遺物観察表:25頁)

所見 出土遺物から、9世紀の住居と考えられる。



第104図 2区110号住居と出土遺物

2区111号住居

位置 Ki-4グリッド 写真 PL36

重複 南西隅が5号掘立柱建物と重複していた。

本住居の方が古いと考えられる。

形状 長軸をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁は西壁がやや膨らんで掘られているほかは、ほぼ直線的に掘られている。隅はやや丸い。規模は長軸4.32m、短軸3.85mである。

面積 15.51m² 方位 N-76°-E

床面 遺構確認面から16cm掘り込んで床面となる。床面には小さな凹凸があるが、ほぼ平坦である。竈前面は硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は25cmである。燃焼部の壁は顕著に焼け

ていない。焼土粒が少量分布しているのみである。煙道部は壁から外へ42cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに立ち上がる。

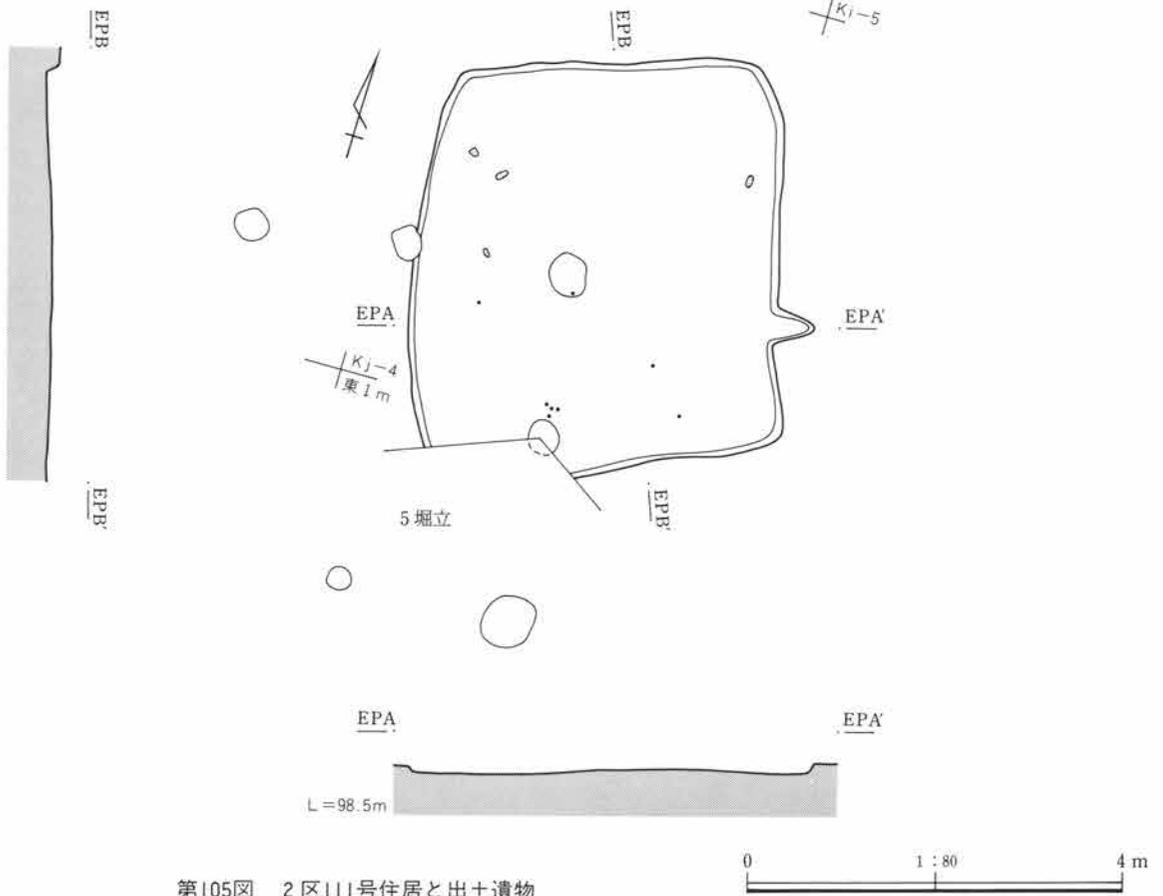
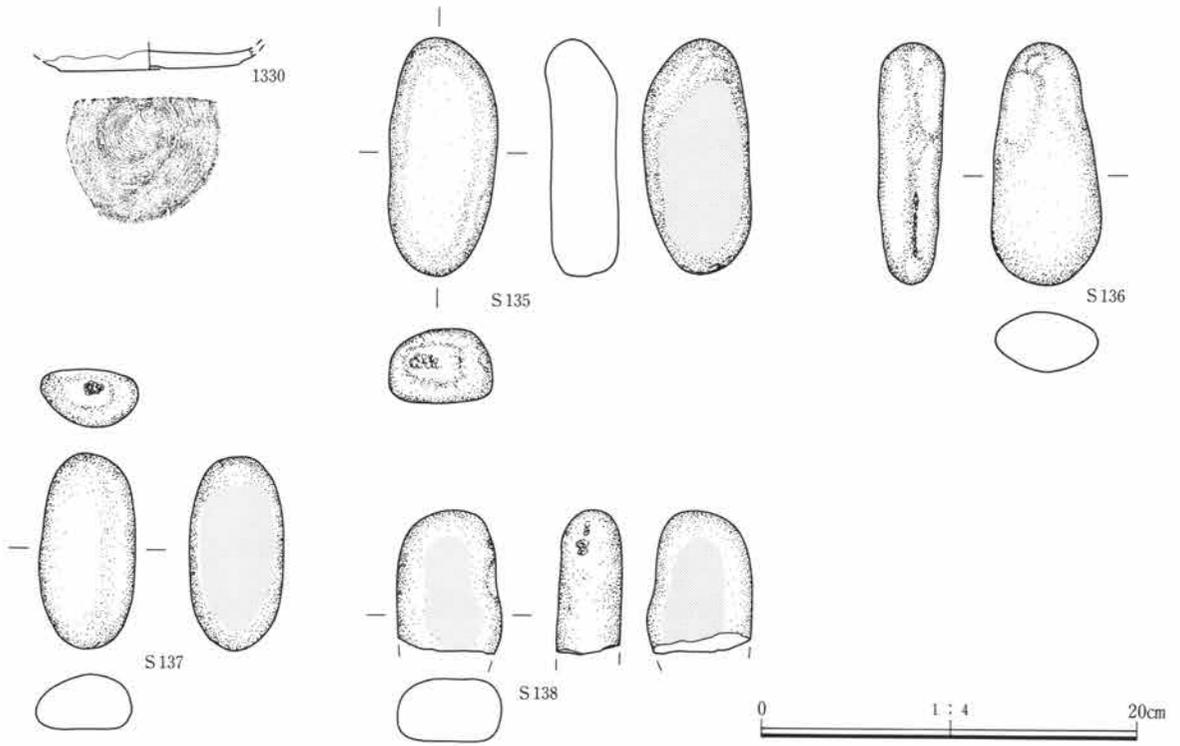
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 25点余りの遺物が出土している。床面近くからも遺物は出土したが、破片が多く図示できなかった。図示した須恵器杯形土器(1330)は埋没土中の出土遺物である。棒状礫(S135~S138)は、敲石・磨石として使われていたもので、住居北部に偏在していた。(遺物観察表:25頁)

所見 出土遺物から、9世紀前半の住居と考えられる。



第105図 2区III号住居と出土遺物

2区8号土坑

位置 Hq・r-4グリッド

写真 PL36・37

重複 47号住居を切っている。

形状 平面形は大形の円形を呈し、断面形はすり鉢状を呈する。規模は長軸4.37m、短軸4.33mである。

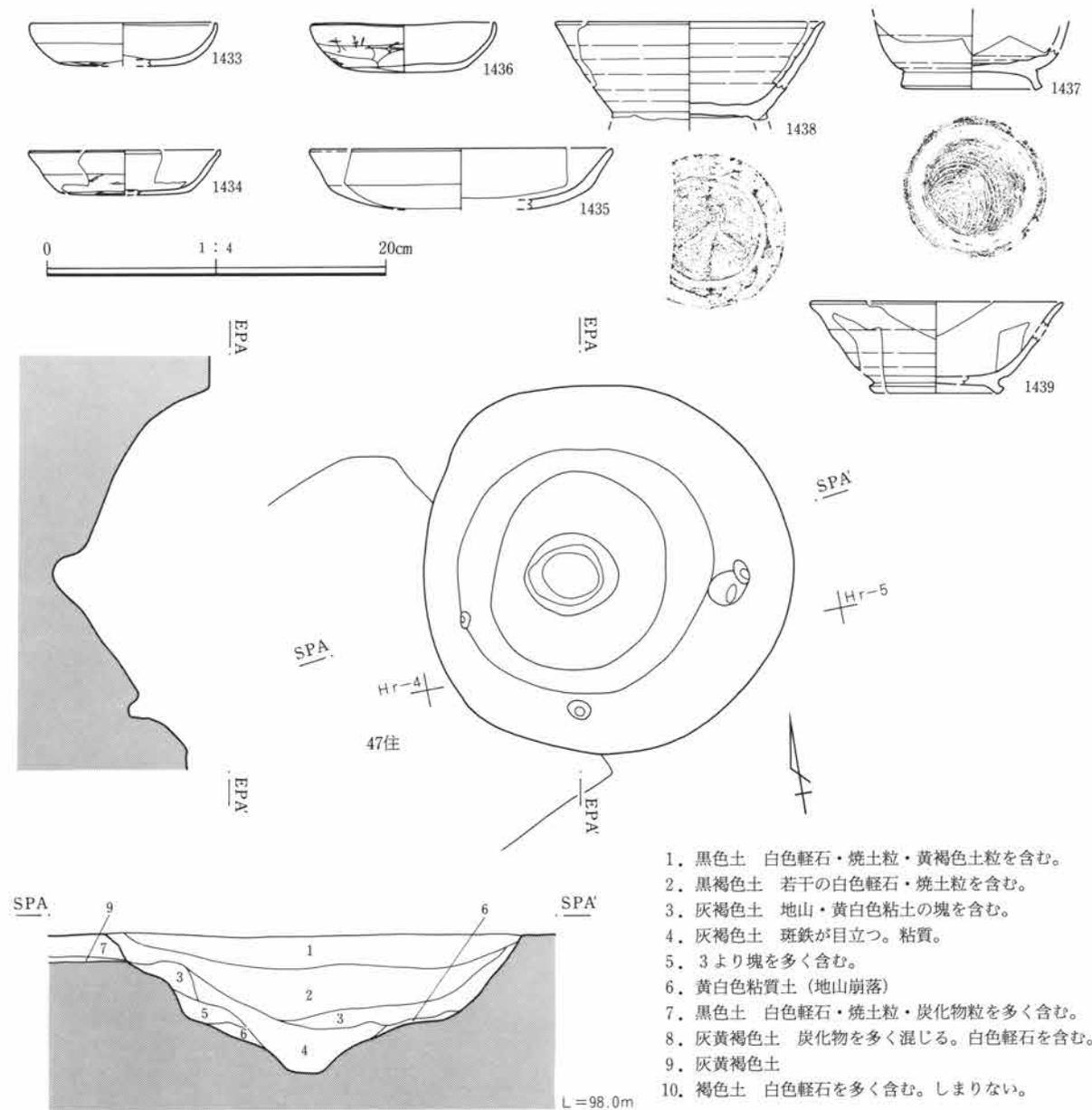
底面 遺構確認面から1.78m掘り込んで底面となる。底部は直径1.0m、深さ0.4mの筒状になってお

り、底面はほぼ平坦である。

埋没土 上層は軽石・焼土粒を含む黒褐色土で、下層は黄白色粘土塊を含む灰褐色土で埋まっていた。

遺物 80点余りの遺物が埋没土中から出土している。土師器・須恵器とも杯形土器の出土量が多い傾向がある。(遺物観察表：25頁)

所見 出土遺物から、9世紀前半の土坑と考えられる。形態的には1区に6基検出されている大形・円形のすり鉢状の土坑と共通している。



1. 黒色土 白色軽石・焼土粒・黄褐色土粒を含む。
2. 黒褐色土 若干の白色軽石・焼土粒を含む。
3. 灰褐色土 地山・黄白色粘土の塊を含む。
4. 灰褐色土 斑鉄が目立つ。粘質。
5. 3より塊を多く含む。
6. 黄白色粘質土(地山崩落)
7. 黒色土 白色軽石・焼土粒・炭化物粒を多く含む。
8. 灰黄褐色土 炭化物を多く混じる。白色軽石を含む。
9. 灰黄褐色土
10. 褐色土 白色軽石を多く含む。しまりない。

第106図 2区8号土坑と出土遺物

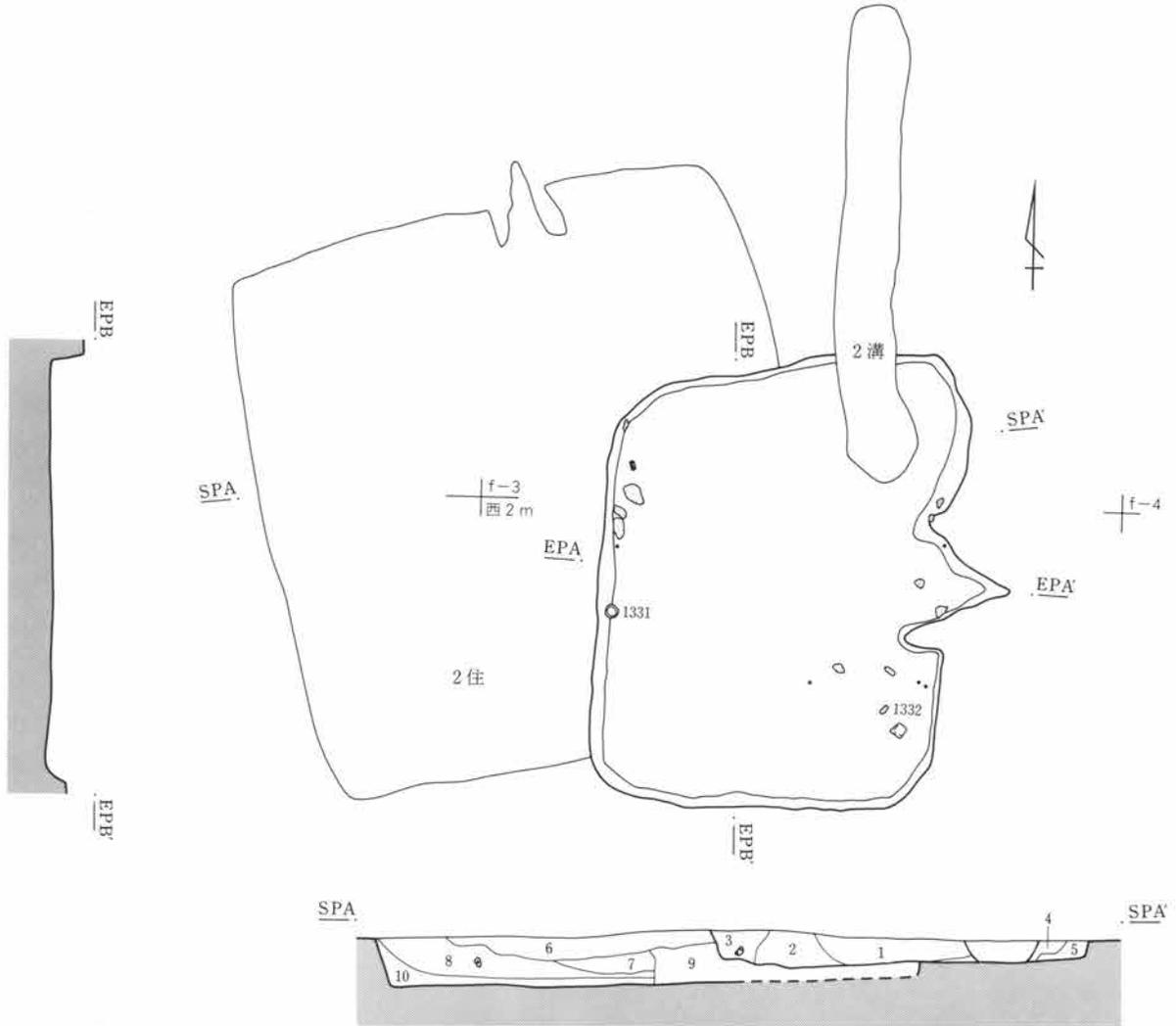
3. 3区の遺構

3区1号住居

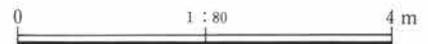
位置 f-3グリッド 写真 PL38
 重複 北東隅を2号溝が切っている。本住居西壁が2号住居の南東隅を切っている。
 形状 長軸を南北方向にする台形を呈する。周壁

は直線的に掘られている。隅は大きく丸い。規模は長軸4.85m、短軸3.81mである。

面積 15.45㎡ 方位 N-90°-E
 床面 遺構確認面から26cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、竈前面は硬化していた。
 埋没土 軽石・焼土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。



1. 暗茶褐色土 軽石・焼土粒（直径5mm以下）・炭化物粒を多量に含む。
2. 暗茶褐色土 軽石・焼土粒（直径5mm以下）・炭化物粒（直径5～10mm）を多量に含む。
3. 暗茶褐色土 多量の焼土と軽石・炭化物粒を含む。
4. 暗黄褐色土 軽石・焼土粒を含む。やや黄褐色土を混じる。
5. 暗黄褐色土 わずかな軽石と焼土粒を含む。やや黄褐色土混じりで、しまりは4層より強い。
- 6～10. 3区2号住居埋没土



第107図 3区1号住居

3区3号住居

位置 8-2グリッド 写真 PL38
重複 本住居が4号・5号住居の西壁を切っている。

形状 東壁方向を南北方向にする方形を呈すると推定される。住居の西半分が発掘調査区域外で未調査となったため、全体形状は不明である。周壁は調査した範囲ではほぼ直線的に掘られており、北東隅・南東隅は丸い。規模は南北長4.58mである。

面積 測定不可 方位 N-88°-E
床面 遺構確認面から43cm掘り込んで床面となる。床面はやや北西隅が窪んでいる。住居北部の床面上には、炭化物が集中して出土した部分があったが、特別の施設を検出するには至らなかった。
埋没土 軽石・焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は35cm、左側は62cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は42cmである。煙道部は壁から外へ54cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部東端は上方に傾斜していた。

周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 170点余りの遺物が出土している。ほとんどが埋没土中の出土遺物であるが、竈周辺には床面近くで出土した遺物が多い。図示した土師器甕形土器(1083・1048)は竈燃焼部および左袖周辺で出土した。土師器杯形土器(1085)と須恵器杯形土器(1087)は床面直上で出土した。また、北東壁寄の床面上4cmで須恵器蓋形土器(1089)と隣接して、鉄製刀子(M27)が出土した。この刀子は金属学的解析により、銅の含有量の多い銑鉄によってつくられたことが判明した。(遺物観察表：26頁)

所見 出土遺物にはやや古い様相の土器も含まれているが、全体的には8世紀後半の住居と考えておきたい。

竈 東壁ほぼ中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は45cm、左側は15cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は95cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ71cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで煙道部へ斜めに傾斜していた。

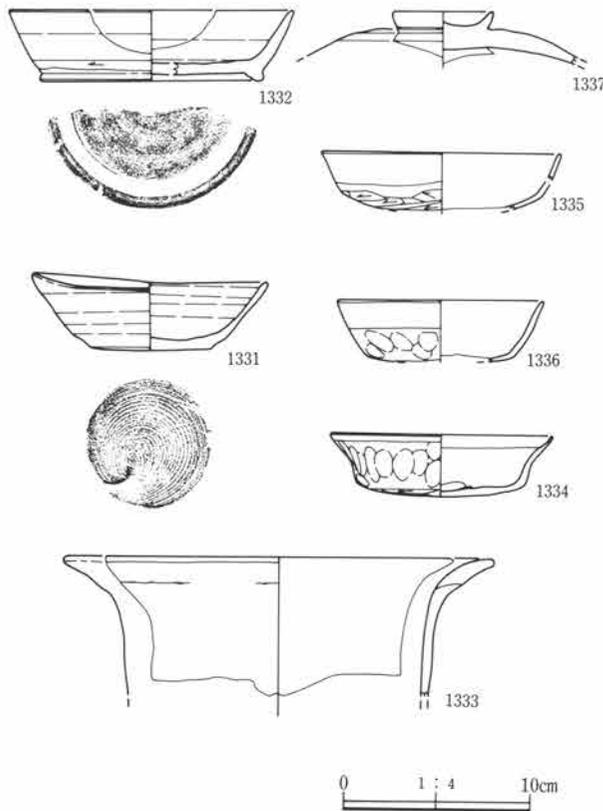
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

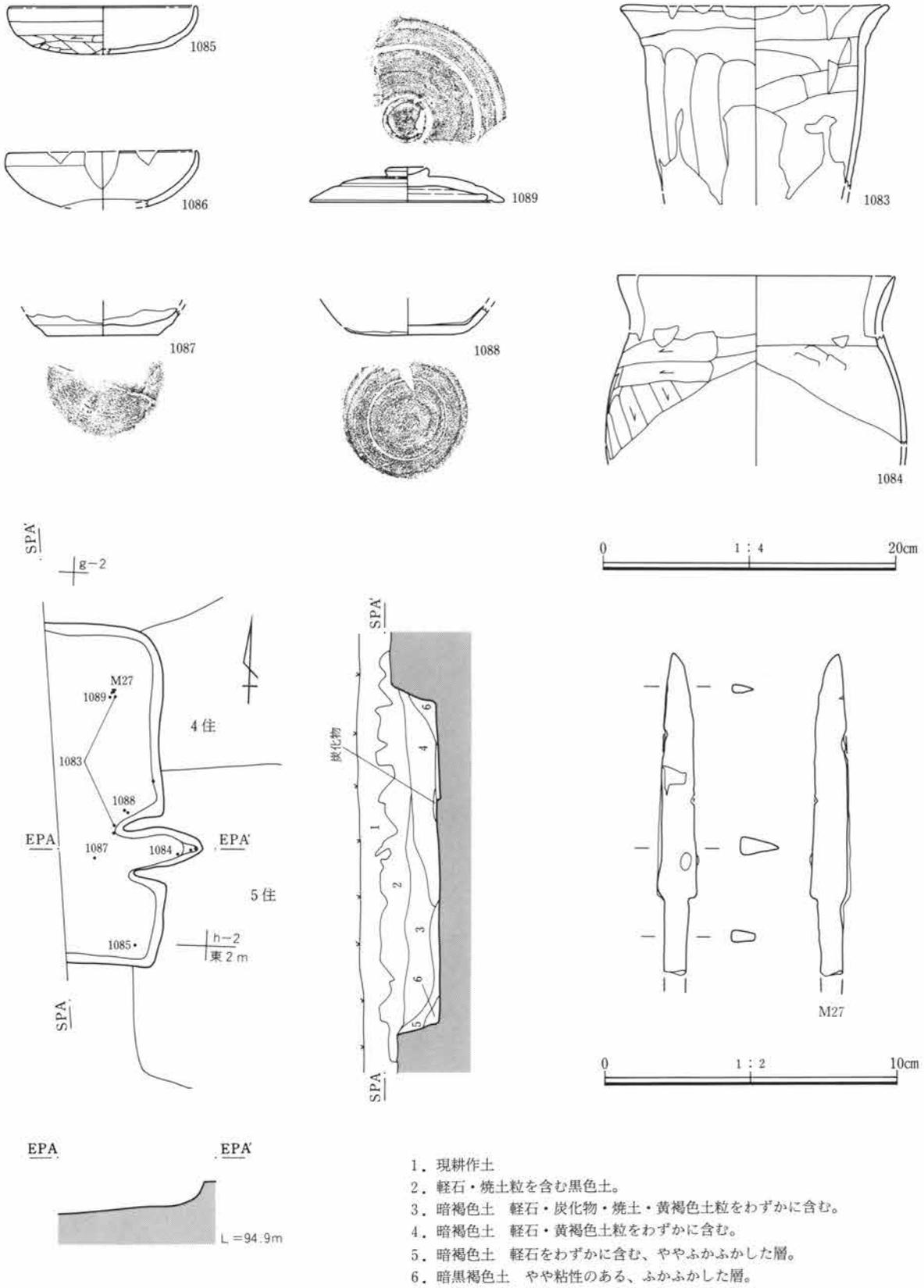
遺物 480点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。図示した須恵器杯形土器のうち、1331は西壁中央、1332は竈右脇の壁際床面近くから出土した。他の土師器や須恵器蓋形土器は埋没土中の出土である。また竈周辺や西壁北半部壁際に棒状礫が集中して出土したが、顕著な使用痕跡は観察できなかった。(遺物観察表：26頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



第108図 3区1号住居出土遺物

第3章 歴史時代前半期の遺構と遺物



第109図 3区3号住居と出土遺物

3区5号住居

位置 g・h-2グリッド 写真 PL39

重複 本住居の北壁が4号住居の南壁を切っている。また、本住居の西壁が3号住居の東壁を切っているが、本住居の方が深いので壁や床面は残っていた。

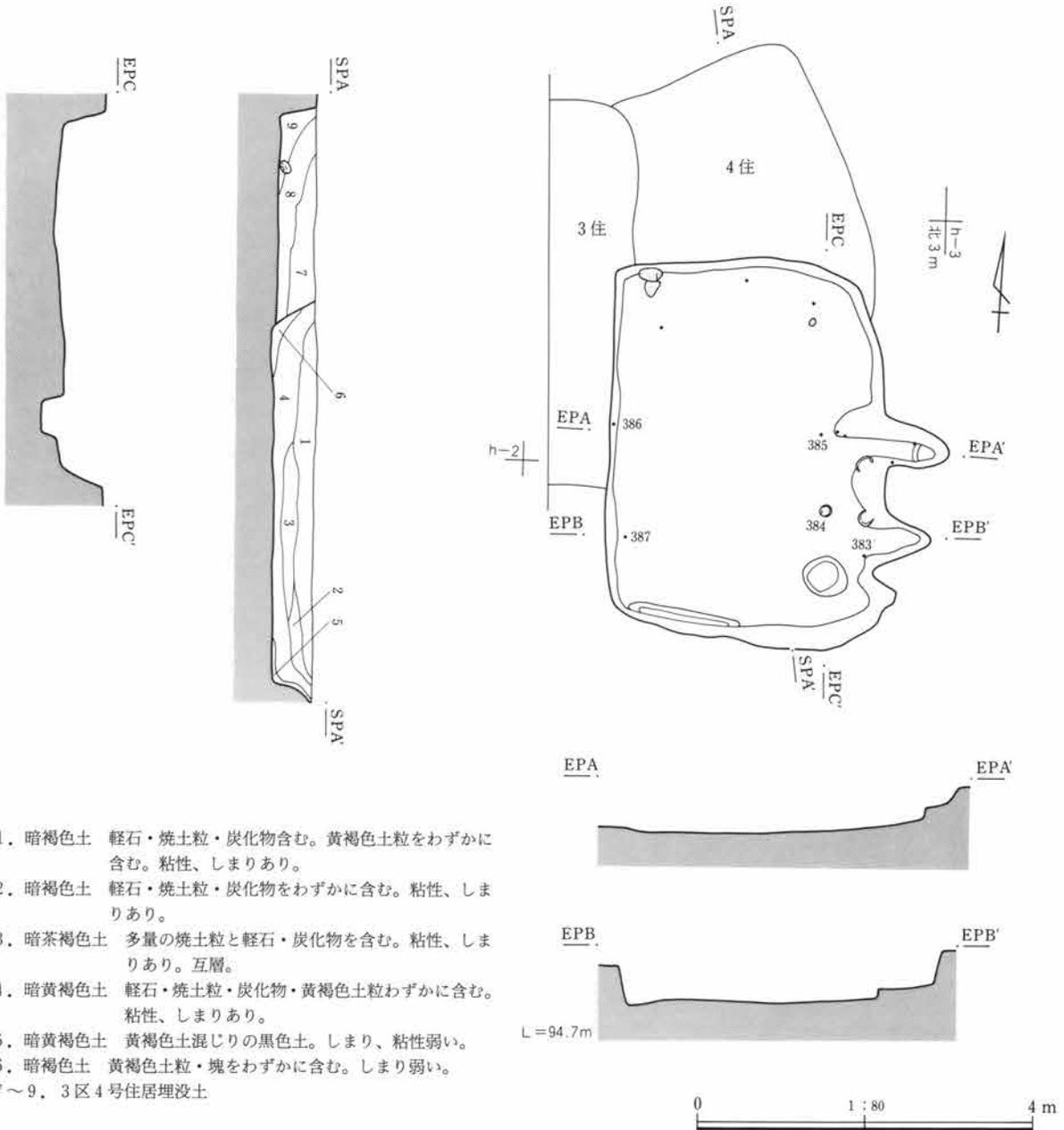
形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は北壁は直線的に掘られていたが、西壁は凹凸があり、南壁は東半分が膨らんでいる。隅は北西・南

西隅は比較的角張っているが、北東・南東隅は丸い。規模は長軸4.50m、短軸3.28mである。

面積 12.06㎡ 方位 N-89°-E
床面 遺構確認面から57cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦であった。

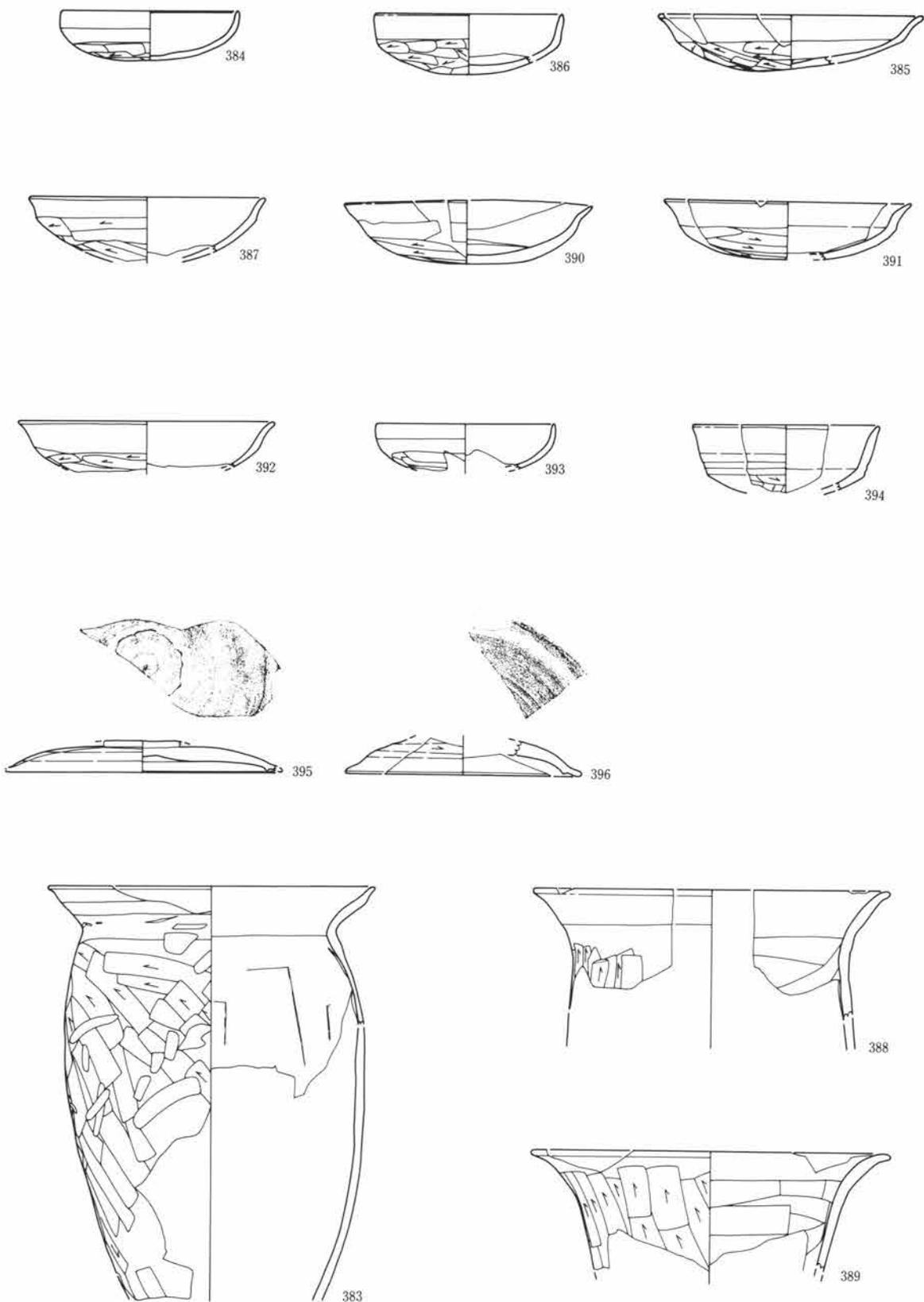
埋没土 軽石・焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 東壁に2基の竈が付設されていた。これらの竈に時間差があるのか、同時に使われていたかは



第110図 3区5号住居

第3章 歴史時代前半期の遺構と遺物



第III図 3区5号住居出土遺物

0 1:4 20cm

確定できなかった。

1号竈は東壁ほぼ中央、2号竈の左側に作られていた。1号竈の袖は住居壁より内側に張り出す形態で、向かって右側は17cm、左側は42cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は25cmである。新竈も右袖の芯に土師器甕形土器が使用されていた。煙道部は壁から外へ70cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで、煙道部中位には段があり、煙道端部は斜め上方に立ち上がる。

2号竈は東壁中央より南側の位置にあった。袖は住居壁より内側に少し張り出す形態で、向かって右側は8cm、左側は17cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は35cmである。左袖の芯には土師器甕形土器(383)が使用されていた。燃烧部の壁の焼土は崩落して燃烧部に落ちていた。煙道部は壁から外へ48cm突出していた。燃烧部から煙道部へかけての断面形は箱形で竈構築時に灰面下に入れられた土は除去されていた。

周溝 南壁西半分にのみ幅15cmほどの周溝が検出された。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に、長径0.53m、短径0.47m、深さ0.29mの楕円形の貯蔵穴が検出された。

遺物 320点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の遺物である。床面近くの遺物は前述した旧竈袖の土師器甕形土器(383)の他、土師器杯形土器(384・385)が竈前、386・387が西壁際の床面直上で出土した。図示した他の遺物は埋没土中出土である。(遺物観察表：26・27頁)

所見 出土遺物から、8世紀初頭の住居と考えられる。

3区6号住居

位置 8-3・4グリッド 写真 PL39・40
重複 北西隅が2号溝に、南西部が4号溝に切られている。

形状 短軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。隅はやや丸い。規

模は長軸6.20m、短軸5.50mである。

面積 28.26㎡ 方位 N-86°-E
床面 遺構確認面から42cm掘り込んで床面となる。床面には中央部に床面の検出できない窪みがあり、焼土粒・炭化物粒を含む黒色土で埋まっていたが、定形的な土坑や燃烧壁が検出できなかった。住居の施設と認定するに至らなかった。しかし、床面には炭化物や焼土の粒が多量に飛散し、住居埋没土中から鉄滓や炉体の破片に混じって、鉄塊が出土したこと、また、鞆羽口の破片が複数個体分出土していることから、鍛冶炉があった可能性が高い。

埋没土 軽石・小礫・焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は65cm、左側は80cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は34cmである。煙道部は壁から外へ突出していたのは10cmで、燃烧部は窪み、煙道端部へ斜め上方に傾斜していた。

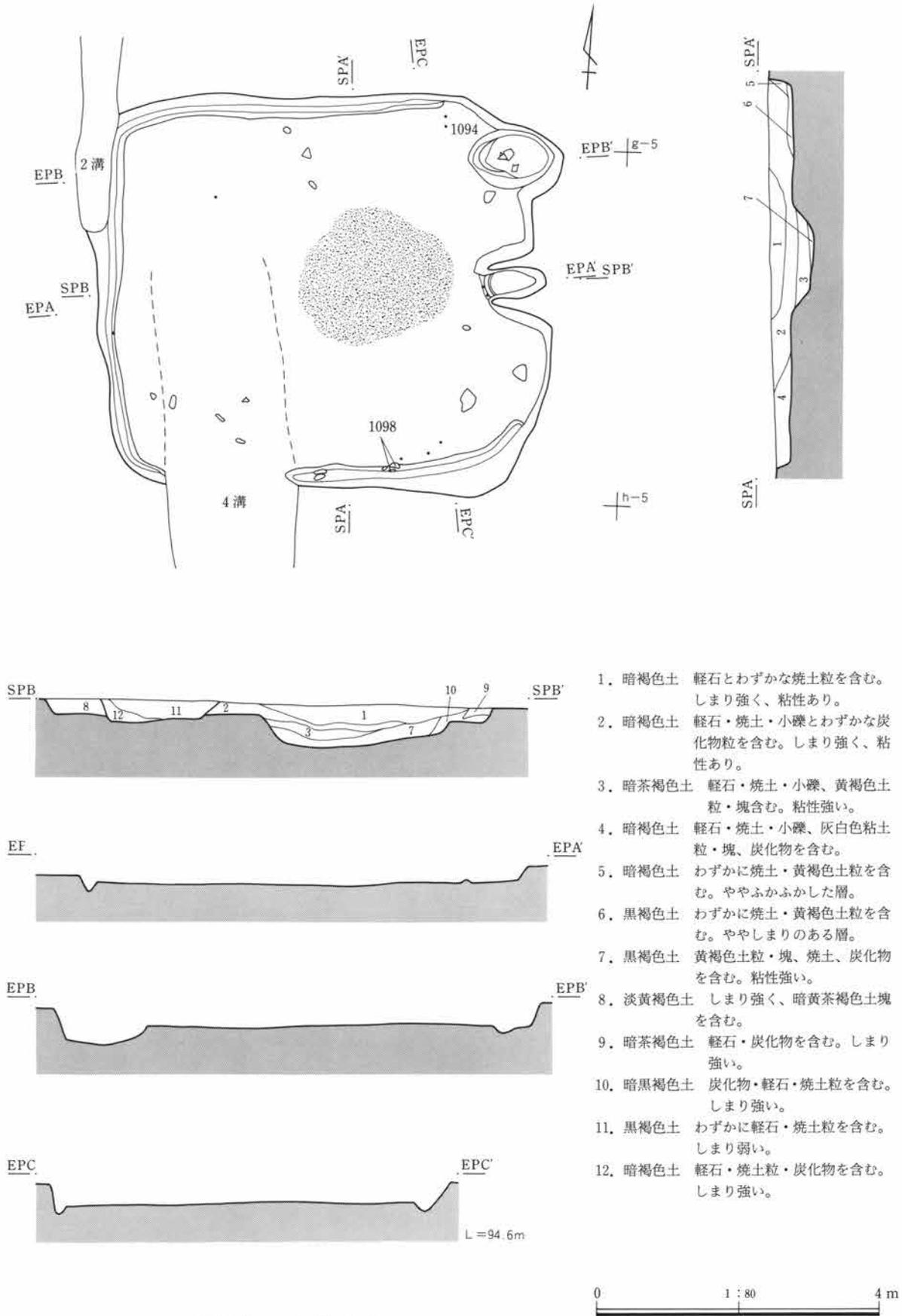
周溝 東壁を除く三壁沿いに幅20cmの周溝を検出。
柱穴 検出されなかった。

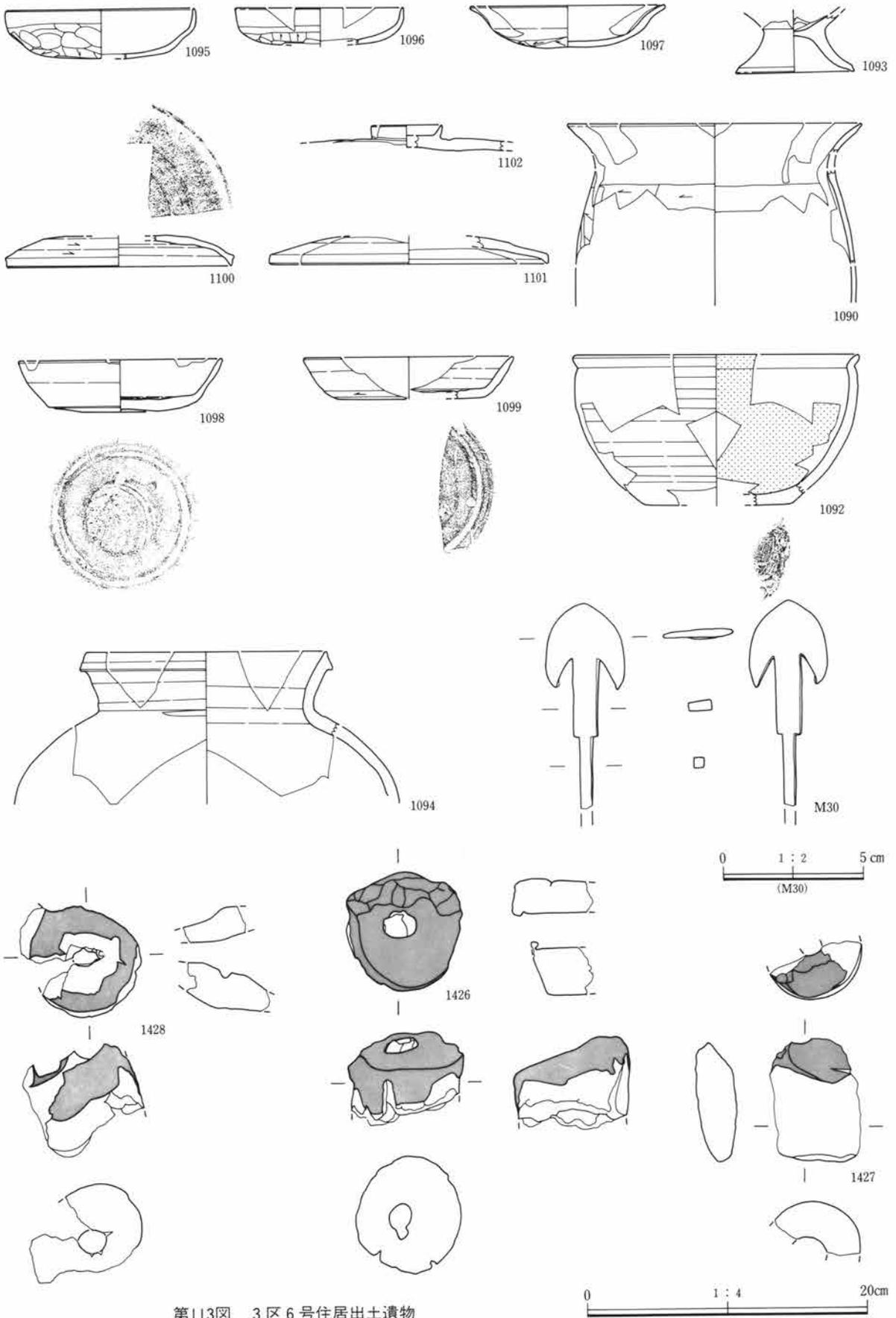
貯蔵穴 東壁北端部に、長径1.23m、短径0.80m、深さ0.27mの楕円形の土坑が検出された。角礫と若干の土器が出土しているが、住居に伴うとは断定できなかった。

遺物 1100点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。床面直上で出土したのは土師器台付甕形土器(1093)と土師器杯形土器(1095・1098)で、須恵器甕形土器(1094)は10cmほど床面から浮いていた。他の土器は埋没土中の出土である。鉄生産関連遺物は、炉体・鉄滓が多く、その中に鉄鏃(M30)と鉄塊(M31)が含まれていた。鞆羽口は複数個あり、全体形状を推定できるものを図示した。これらの遺物については、4章に分析と考察を掲載したので参照されたい。

(遺物観察表：27・28頁)

所見 出土遺物から、8世紀後半の住居と考えられる。





第113図 3区6号住居出土遺物

3区7号住居

位置 i・j-2グリッド 写真 PL41
重複 なし

形状 東壁方向を南北にする方形を呈すると考えられるが、西半分が調査区域外で未調査のため、全体形状は不明である。周壁はほぼ直線的に掘られているが、貯蔵穴がある南東隅だけ、やや膨らんでいて壁形状が不定形になっている。北東隅はやや丸い。規模は南北長3.54mである。

面積 計測不能 方位 N-80°-E
床面 遺構確認面から38cm掘り込んで床面となる。床面は小さな凹凸があるが、全体的には平坦。埋没土 下層は小礫・軽石を少量含む暗褐色土で、上層は軽石・焼土粒・黄褐色土粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 東壁ほぼ中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖がほとんど張り出さない形態の竈で、焚口幅は30cmである。焼土部の壁は良く焼けて

焼土化していた。煙道部は壁から外へ53cm突出していた。焼土部はやや傾斜しており、煙道端部は上方へ立ち上がっていた。焼土部で検出したピットは攪乱と考えられる。

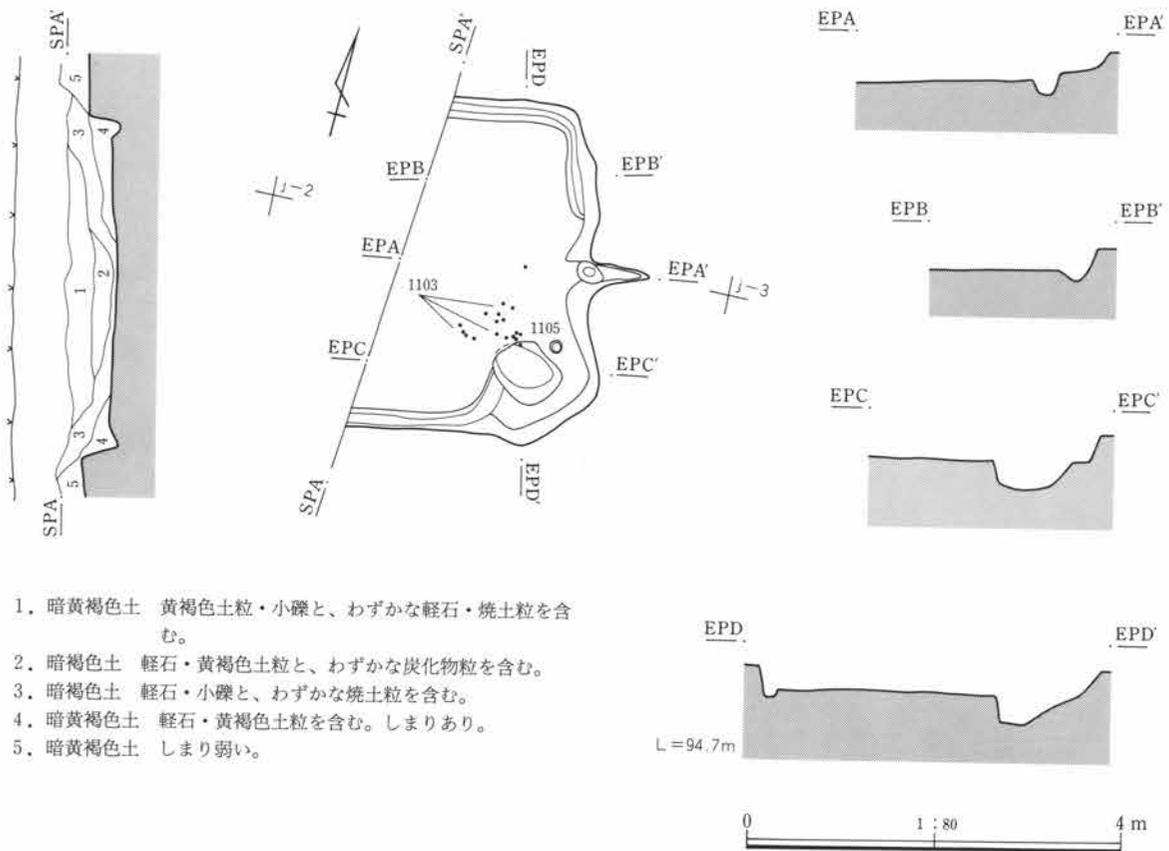
周溝 東壁竈以北から北壁にかけてと、南壁に、幅25~30cmの周溝が検出された。南壁沿いの周溝の東端は貯蔵穴につながっていた。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に、長径0.73m、短径0.65m、深さ0.30mの楕円形の貯蔵穴が検出された。北縁には土師器甕形土器や杯形土器が出土している。

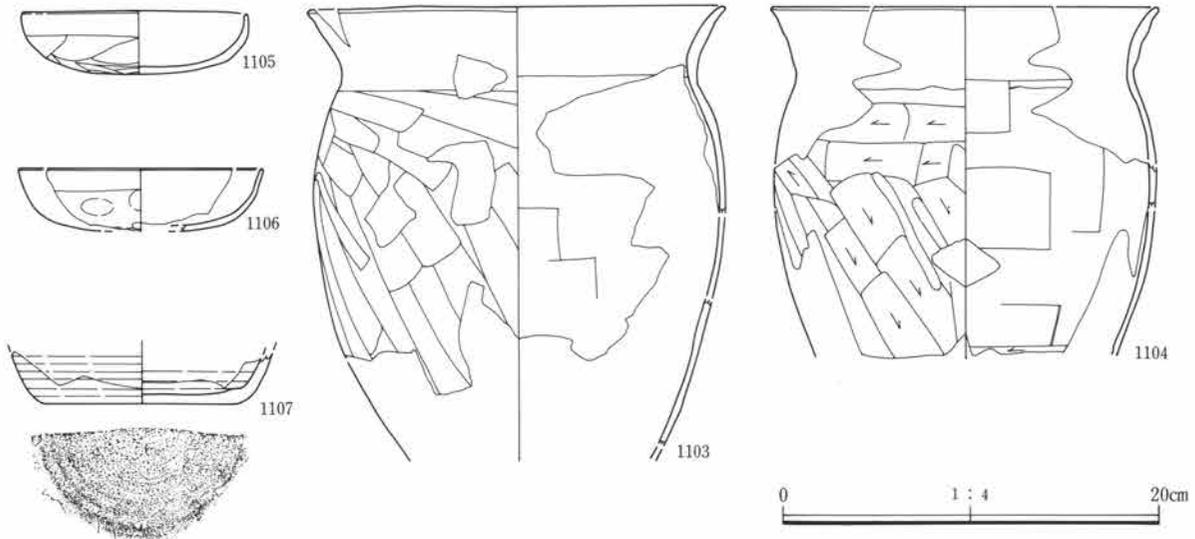
遺物 120点余りの遺物が出土している。床面近くの遺物は少ない。前述した貯蔵穴北脇の土師器甕形土器(1103)と杯形土器(1105)は床面から7~8cm上位で出土した。図示した他の遺物は埋没土中の出土遺物である。(遺物観察表:28頁)

所見 出土遺物から、8世紀後半の住居と考えられる。



1. 暗黄褐色土 黄褐色土粒・小礫と、わずかな軽石・焼土粒を含む。
2. 暗褐色土 軽石・黄褐色土粒と、わずかな炭化物粒を含む。
3. 暗褐色土 軽石・小礫と、わずかな焼土粒を含む。
4. 暗黄褐色土 軽石・黄褐色土粒を含む。しまりあり。
5. 暗黄褐色土 しまり弱い。

第114図 3区7号住居



第115図 3区7号住居出土遺物

3区8号住居

位置 k-2グリッド 写真 PL41

重複なし

形状 東壁方向を南北にする方形を呈すると考えられるが、調査できたのが住居北東隅に限られたために、全体形状は不明である。北東隅は丸く掘られている。

面積 計測不可 北壁方位 N-91°-E

床面 遺構確認面から43cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らで、比較的硬化していた。

竈 調査できた範囲の中では検出されなかった。

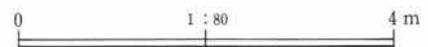
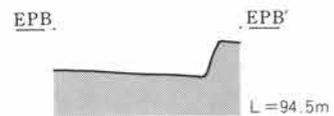
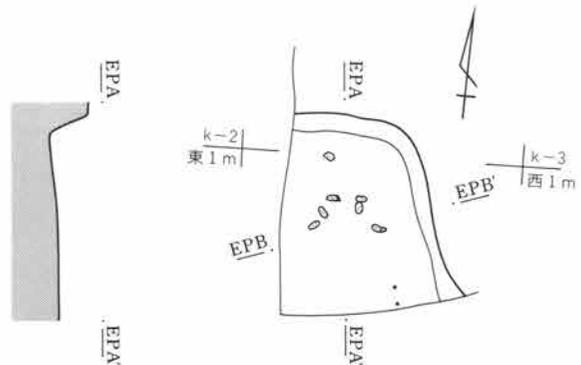
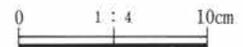
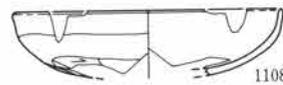
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 20点余りの遺物が出土している。東壁寄りの床面近くで、須恵器壺形土器破片や、土師器甕形土器破片が出土したが、図示できるほどの破片ではなかった。北東隅には棒状礫が7個集中して出土した。図示した土師器杯形土器(1108)は埋没土中の出土遺物である。(遺物観察表：28頁)

所見 出土遺物から、8世紀の住居と考えられる。



第116図 3区8号住居と出土遺物

3区5号溝

位置 i・j-2・3グリッド 写真 PL41

形状 3区の南端で検出された。北端は立ち上がっており、限界が確認されたが、南端は発掘区以南に続いている。幅は1.4~1.7mで、横断面形は台形を呈する。北端はラッパ状に掘り広がっており、その斜面にピットが3本掘られている。各ピットの規模(短径×長径×深さ)は、P1:42×45×44cm、P2:21×22×25cm、P3:46×48×41cmである。

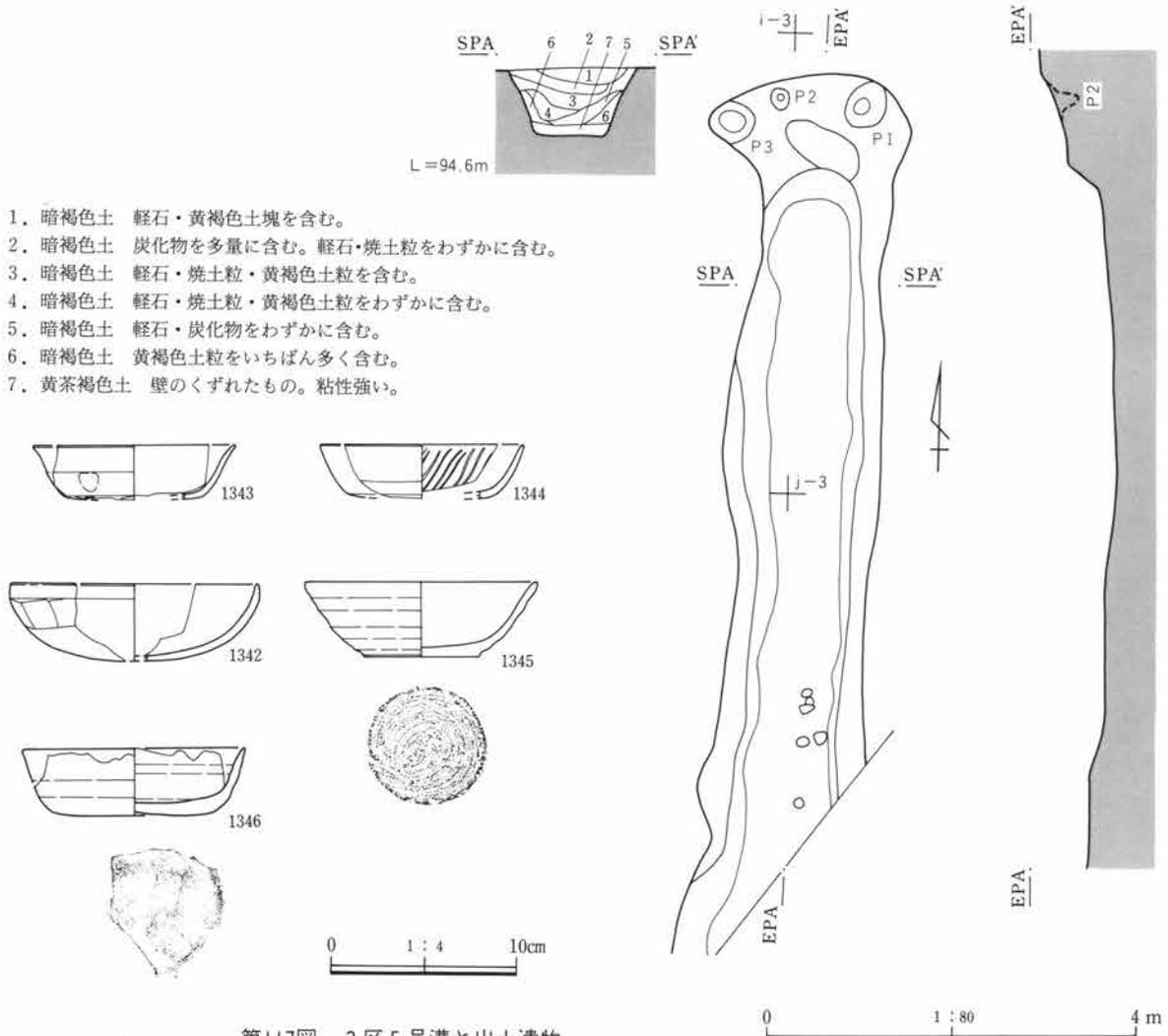
底面 最も深いところでは、遺構確認面から0.74m掘り込んで底面となる。底面はほぼ平坦であるが標高をみると北に行くにしたがって深くなっている。

埋没土 上層に多量の炭化物を含む暗褐色土層がある

り、鉄滓および炉体の破片も少量出土している。下層は黄褐色土粒・炭化物粒・焼土粒を少量含む暗褐色土で埋まっていた。

遺物 110点余りの遺物が埋没土中から出土している。図示した土師器・須恵器杯形土器も埋没土中から出土した。(遺物観察表:28頁)

所見 本溝は上層に鉄器生産遺構からの廃棄物と考えられるものが出土しているのが特徴である。これらは溝がある程度埋まった段階で捨てられている。3区には8世紀後半と考えられる鍛冶遺構のある6号住居があり、本溝に隣接している。この住居からの廃棄物とすれば、溝は8世紀後半以前に掘られている可能性もある。なお、出土遺物は8世紀から9世紀代のものを含んでいる。



第117図 3区5号溝と出土遺物

4. 5区の遺構

5区2号住居

位置 m-13・14グリッド 写真 PL42

重複 北壁が4号住居を切っている。

形状 短軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は北壁の東半分が膨らむように掘られているが、他は直線的に掘られている。隅は比較的角張っている。規模は長軸3.80m、短軸3.30mである。

面積 10.85㎡ 方位 N-85°-E

床面 遺構確認面から35cm掘り込んで床面となる。中央部はやや凹凸があるが、硬化していた。

埋没土 焼土粒・炭化物粒を多く含む灰褐色土で埋まっていた。

竈 東壁ほぼ中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって左側は40cm、袖の基部が残存していた。右側は残っ

ていなかった。焚口幅は52cmである。燃焼部の壁は、向かって左側は良く焼けて焼土化していたが、左側は顕著に焼けていない。煙道部は壁から外へ45cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに傾斜していた。

周溝 検出されなかった。

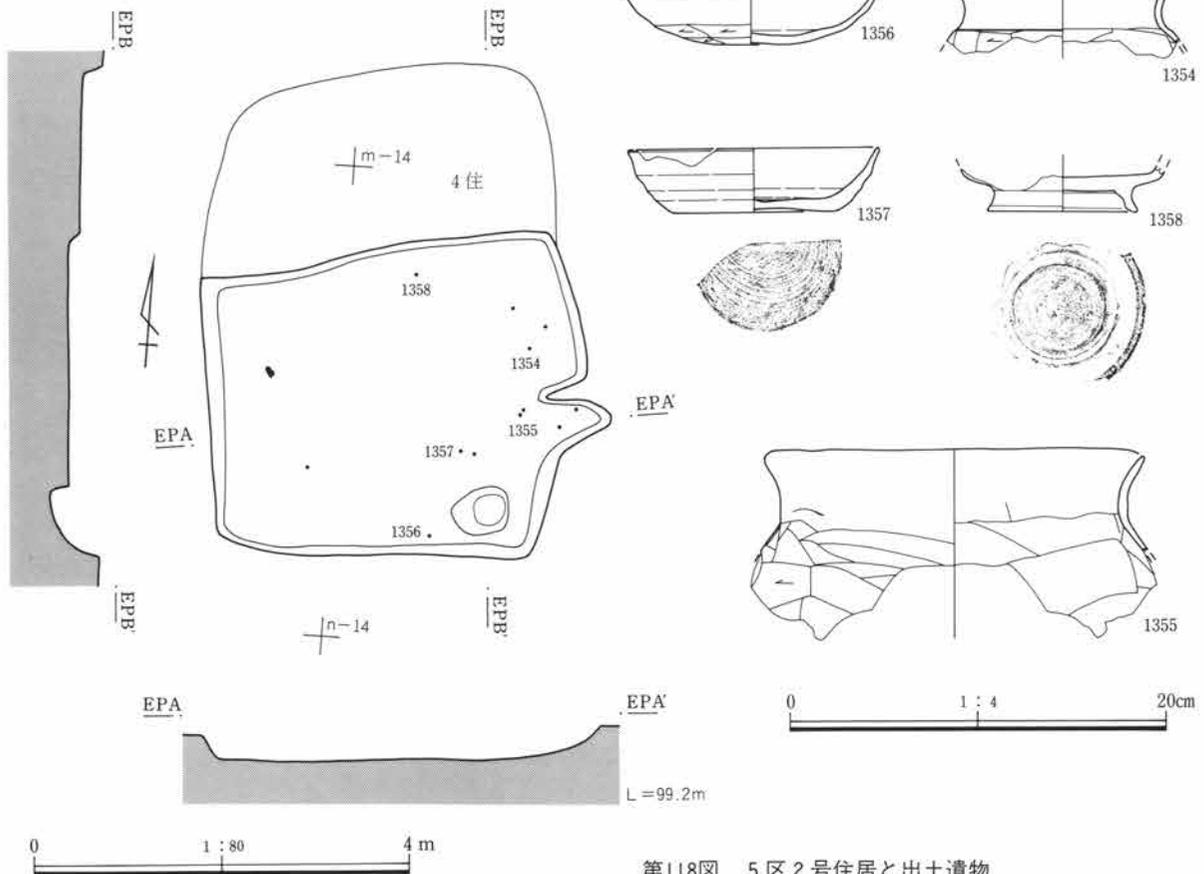
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 竈右側、住居南東隅に、長径0.60m、短径0.50m、深さ0.18mの楕円形の貯蔵穴が検出された。

遺物 300点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。竈周辺で出土した土師器甕形土器(1354・1355)は床面直上で出土した。土師器杯形土器(1356)は南壁沿い、須恵器碗形土器(1358)は北壁沿いで出土した。

(遺物観察表：28・29頁)

所見 出土遺物から、9世紀前半の住居と考えられる。



第118図 5区2号住居と出土遺物

5区3号住居

位置 m-12・13グリッド 写真 PL42・43

重複 西壁が、5号住居の東半分を切っている。
形状 長軸をほぼ南北方向にする台形を呈する。南東隅や東壁北部がやや膨らみ、周壁は曲線的に掘られている部分がある。隅は丸い。規模は長軸3.70m、短軸3.10mである。

面積 9.97㎡ 方位 N-76°-E

床面 遺構確認面から35cm掘り込んで床面となる。西部は5号住居埋没土上に床面がつくられており、若干くぼんで床面が検出された。

埋没土 白色軽石・焼土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、

向かって右側は5cm、左側は12cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は57cmである。燃烧部の壁は焼けて焼土化していたが、右側は崩落していた。煙道部は壁から外へ70cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに立ち上がっていた。

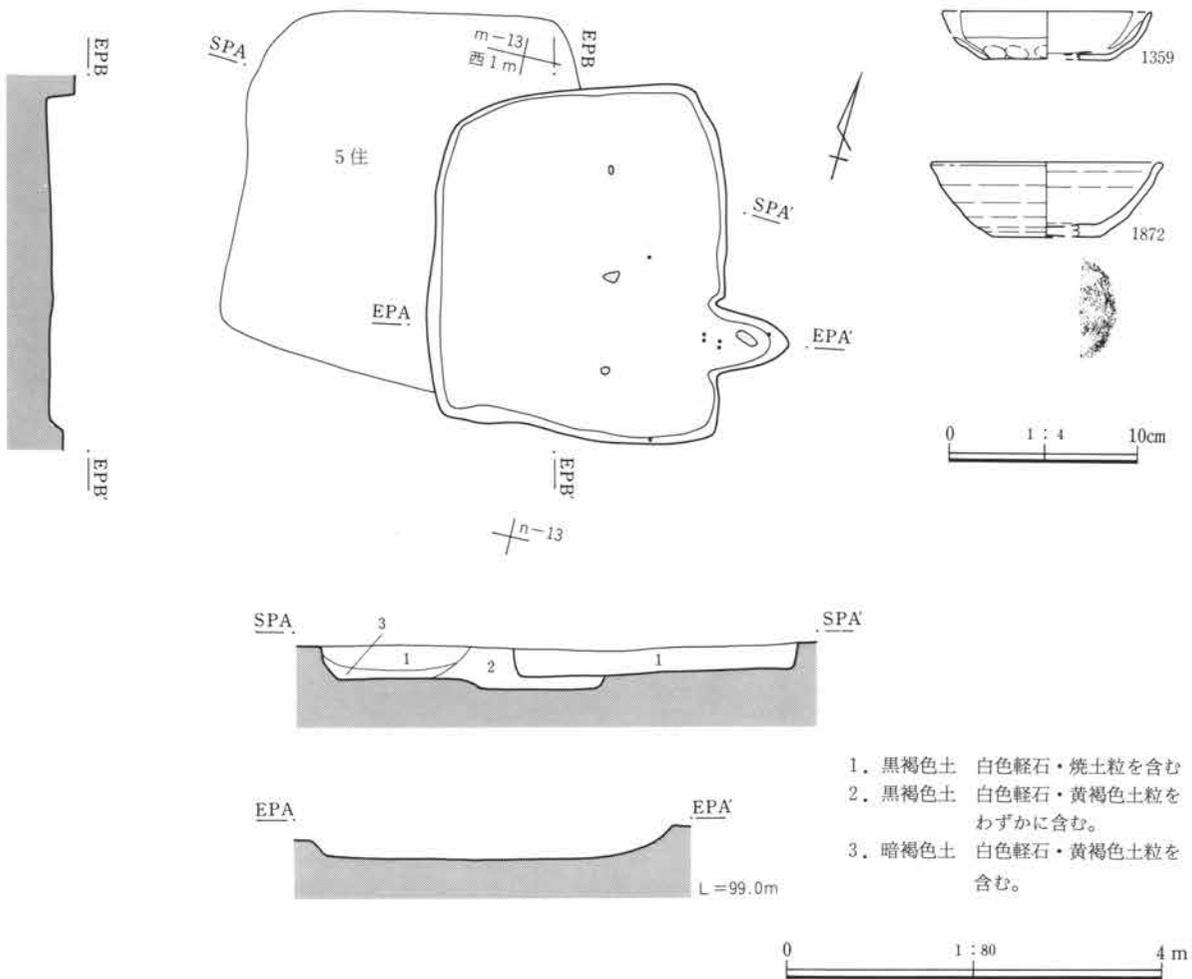
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 160点余りの遺物が出土している。埋没土中の出土遺物がほとんどで、床面近くの遺物も破片が多かった。図示した土師器杯形土器(1359)は埋没土中の出土遺物である。(遺物観察表：29頁)

所見 出土遺物から、9世紀前半の住居と考えられる。



第119図 5区3号住居と出土遺物

5区4号住居

位置 1・m-13・14グリッド 写真 PL42

重複 南半分が2号住居に切られている。

形状 東壁方向を南北にする方形を呈すると考えられるが、南半分が切られているために全体形状は不明である。周壁はほぼ直線的に掘られており、隅は大きく丸い。規模は東西長3.74mである。

面積 測定不可 北壁方位 N-80°-E

床面 遺構確認面から27cm掘り込んで床面となる。床面は平坦であるが、あまり硬化していない。

竈 検出されなかった。2号住居に壊されたと考えられる。

周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

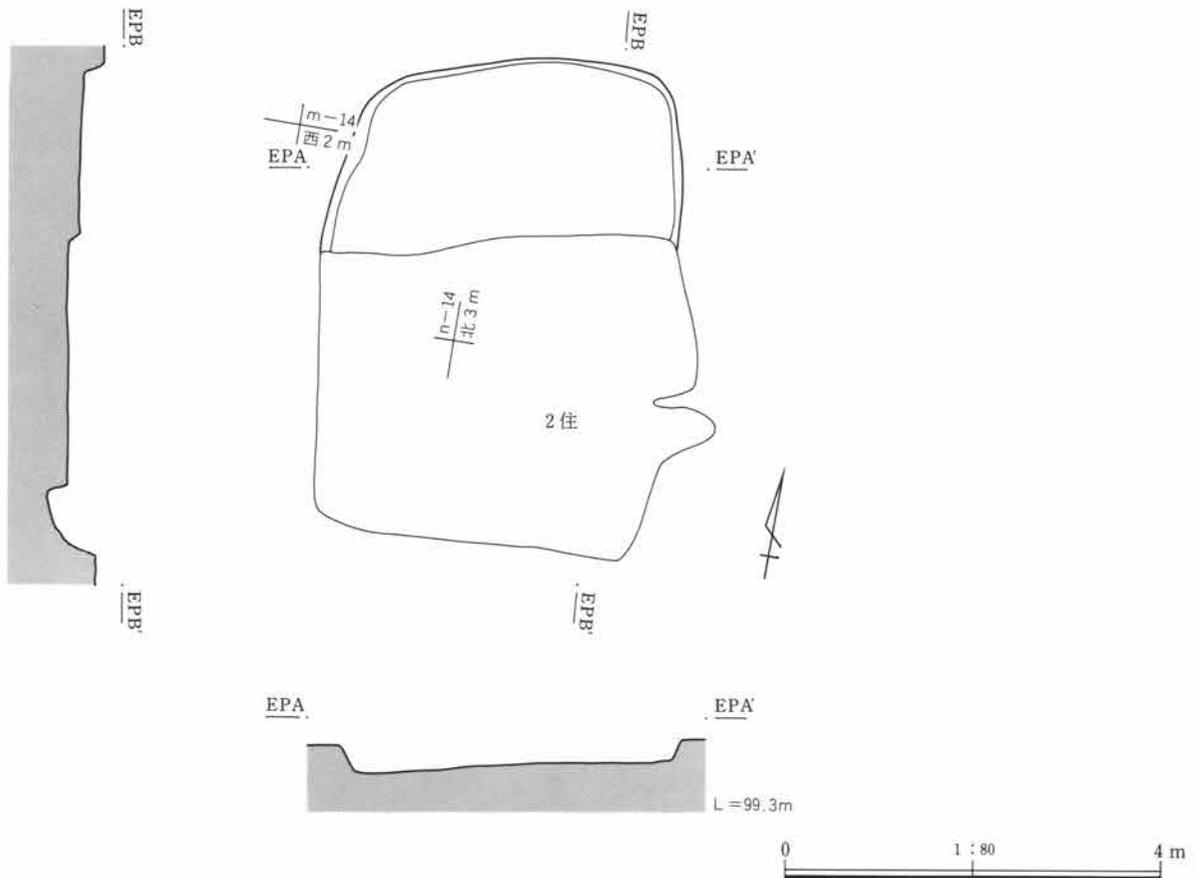
貯蔵穴 検出されなかった。



5区西半の住居の重複。

遺物 3点ほどの遺物が出土したが、床面近くの遺物はない。

所見 埋没土中の出土遺物から、9世紀前半以前の住居と推定される。



第120図 5区4号住居

5区5号住居

位置 m-12グリッド 写真 PL43

重複 東半分を3号住居の西壁に切られている。
 形状 長軸を南北方向にする台形を呈する。周壁は直線的に掘られている。隅は大きく丸い。規模は長軸3.95m、短軸3.40mである。

面積 11.7㎡ 方位 N-78°-E

床面 遺構確認面から33cm掘り込んで床面となる。3号住居に切られていない東半分の床面は、ほぼ平坦であったが、西壁沿いに幅0.4m、長さ2.3mの範囲で高くなっている部分があった。

埋没土 白色軽石・黄褐色土粒を含む黒褐色土・灰褐色土で埋まっていた。

竈 東壁ほぼ中央に竈が付設されていたが、住居東半分は3号住居に切られているので、竈の最下部が残ったのみであった。竈の詳細な構造は不明であるが、残存する範囲では焚口幅は45cm、壁から外へ張り出した煙道部は40cmであった。

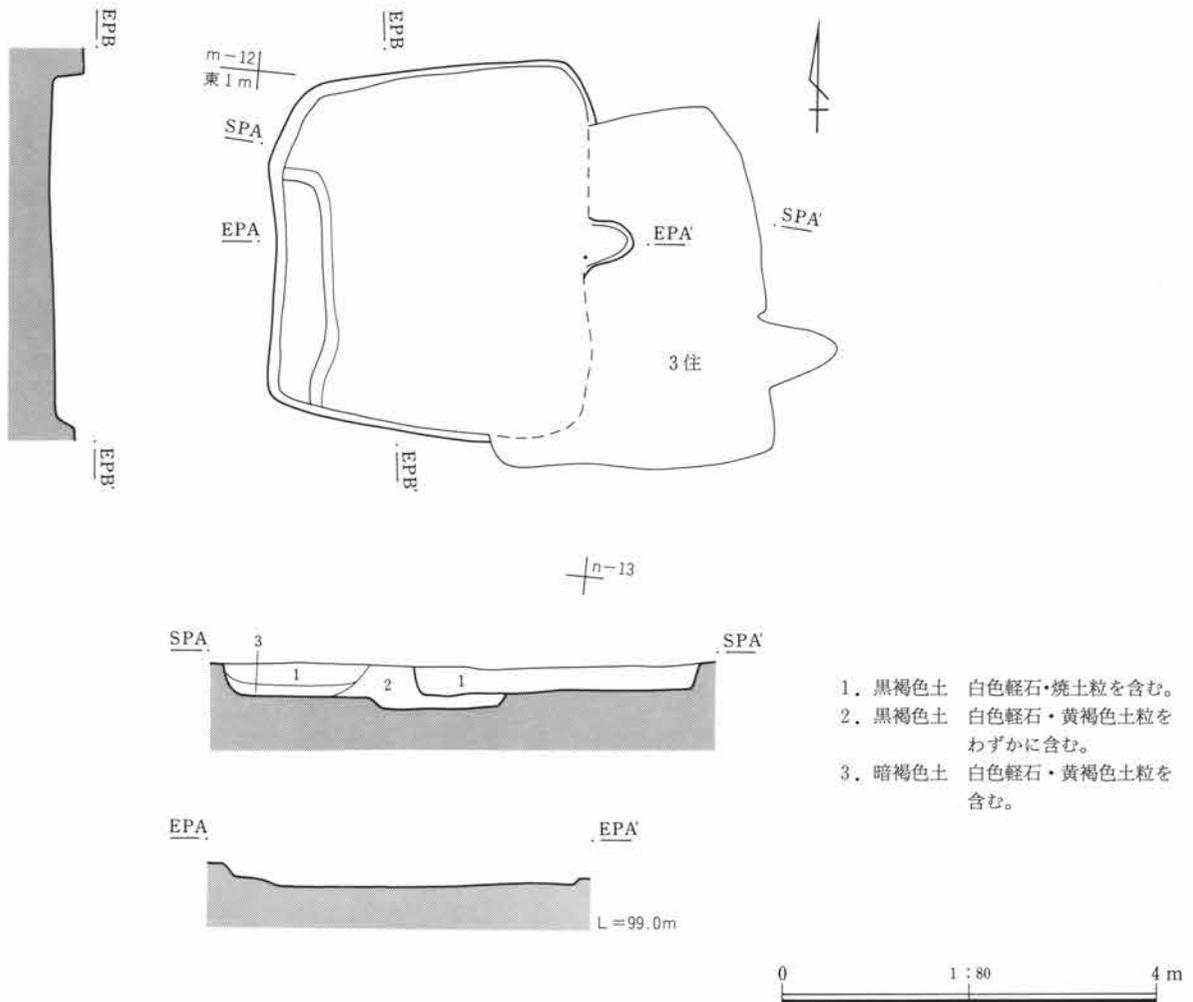
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 30点余りの遺物が出土しているが、ほとんど埋没土中の出土遺物である。

所見 出土遺物から、住居の時期を決めることはむずかしいが、3号住居よりは古いので9世紀前半以前の住居と考えられる。



第121図 5区5号住居

5区8号住居

位置 k-5グリッド 写真 PL43・44

重複 西半分を1号・6号住居に切られている。
 形状 対角線を南北方向にする方形を呈するが、南西壁が切られているので、全体形状は不明である。周壁はほぼ直線的に掘られている。北隅は大きく丸く、東壁は比較的角張っている。規模は短軸と考えられる方向は3.42m、長軸は不明である。

面積 測定不可 方位 N-50°-E
 床面 遺構確認面から50cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、竈全面は硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は33cm、左側は20cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は28cmである。燃烧部の壁は良く

焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ66cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで煙道部東端で、緩やかに立ち上がっていた。竈焚口では多くの土師器甕形土器破片が使用面に出土した。

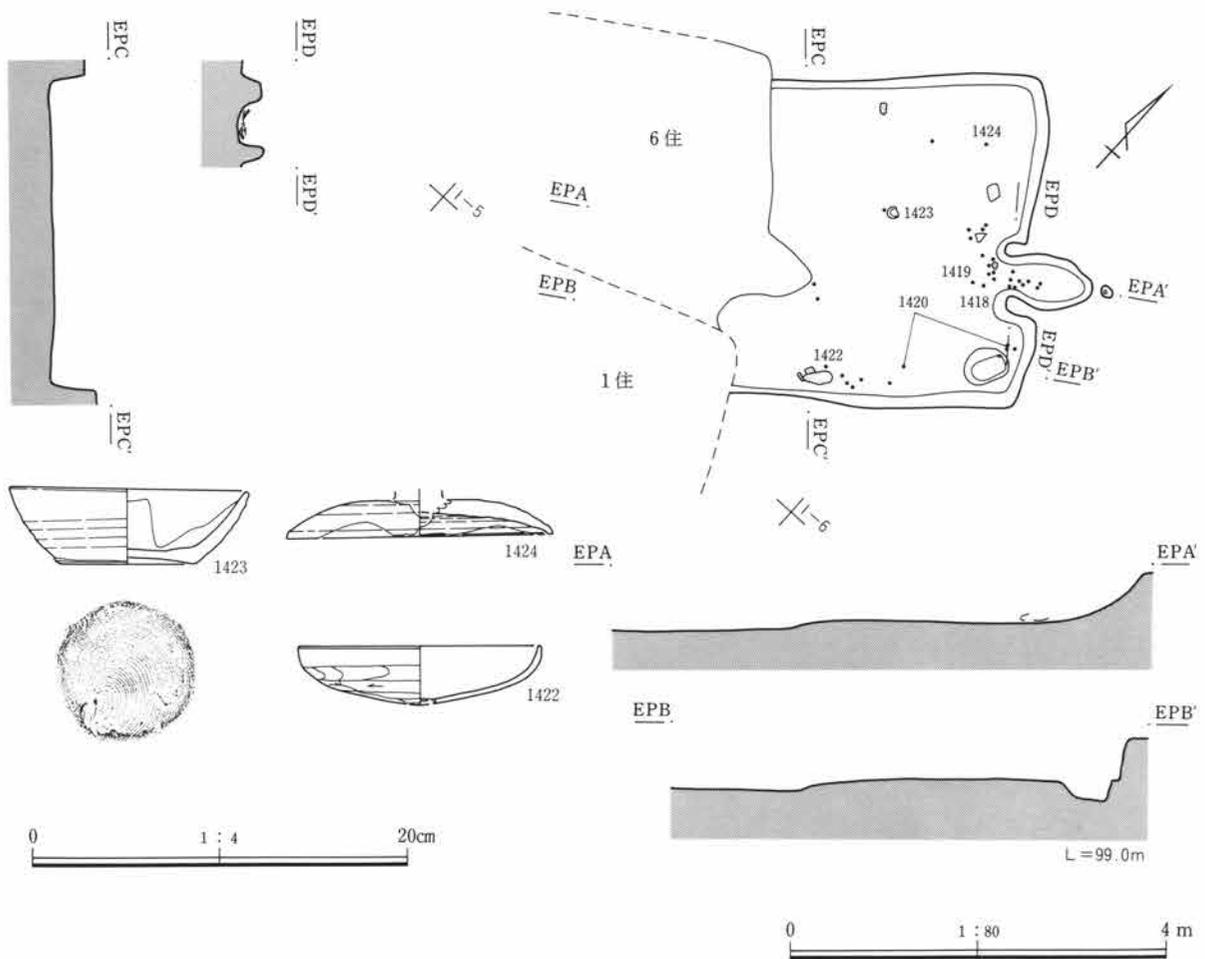
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

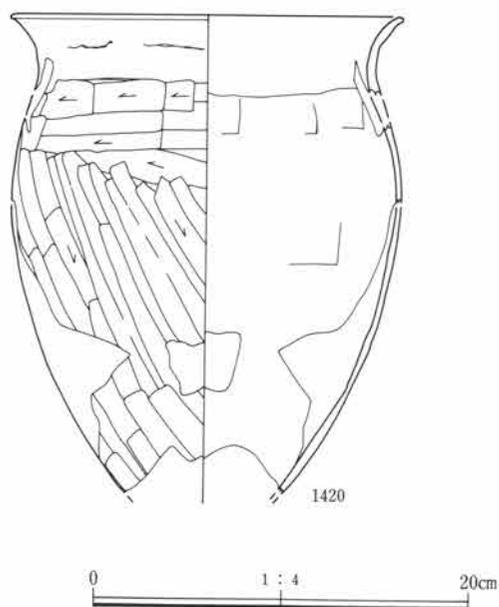
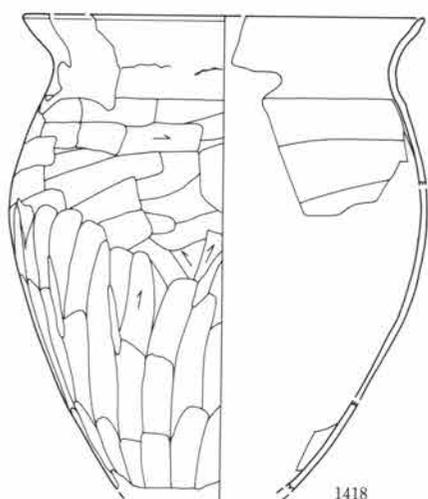
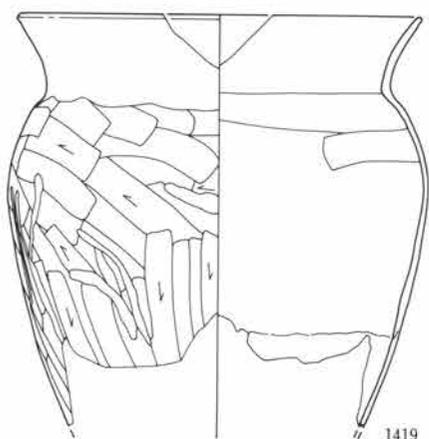
貯蔵穴 竈右側、住居東隅に、長径0.46m、短径0.41m、深さ0.23mの楕円形の貯蔵穴が検出された。

遺物 490点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。竈前や右脇の貯蔵穴周辺に土師器甕形土器(1418・1419・1420)が床面直上で出土した。南東壁沿いには土師器杯形土器(1422)が床面近くから出土した。(遺物観察表：29頁)

所見 出土遺物から、8世紀後半の住居と考えられる。



第122図 5区8号住居と出土遺物(1)



第123図 5区8号住居出土遺物(2)

5区10号住居

位置 k・1-4グリッド 写真 PL44

重複 住居東部の大部分を、6号住居・10号住居に切られている。また、試掘調査のトレンチが住居中央部を貫いている。

形状 西壁を南北方向にする方形を呈すると推定されるが、全体形状は不明である。西壁は直線的に掘られている。隅はやや丸い。規模は西壁長4.60mである。

面積 測定不可 方位 N-9°-E

床面 遺構確認面から49cm掘り込んで床面となる。床面は平坦である。

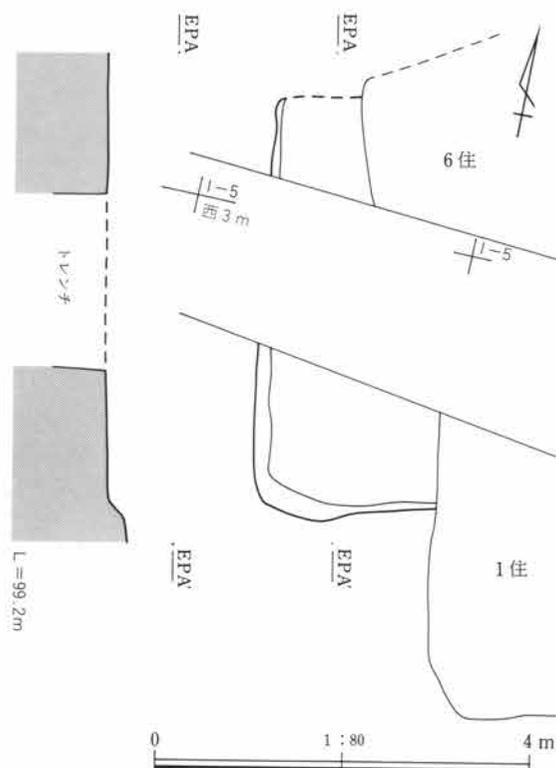
竈 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 70点余りの遺物が出土している。図示し得る遺物はなかった。

所見 埋没土の出土遺物から、8世紀初頭の住居と推定される。



第124図 5区10号住居

5. 6区の遺構

6区1号住居

位置 h-2グリッド 写真 PL45
重複 現代のサク溝で一部の壁・床面が切られていた。

形状 短軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は、西壁がやや膨らみ、東壁がややへこんでいる。隅は丸い。規模は長軸2.55m、短軸1.60mである。

面積 3.29㎡ 方位 N-19°-E

床面 遺構確認面から9cm掘り込んで床面となる。細かな凹凸はあるが、全体には平坦な床面である。

竈 北壁ほぼ中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は22cmである。燃烧部の壁は削平されて残っていない。煙道部は壁から外へ50cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに傾斜していた。

周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 10点余りの遺物が出土している。竈内からも遺物が出土したが、破片で図示できなかった。図示した須恵器蓋形土器(1362)は竈右前の床面直上で出土した。(遺物観察表：29頁)

所見 出土遺物から、8世紀の住居と考えられる。

6区4号住居

位置 d・e-4・5グリッド 写真 PL45
重複 7号住居の北西隅を切っている。

形状 短軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られ、隅は比較的角張っている。規模は長軸4.60m、短軸4.35mである。

面積 16.5㎡ 方位 N-83°-E

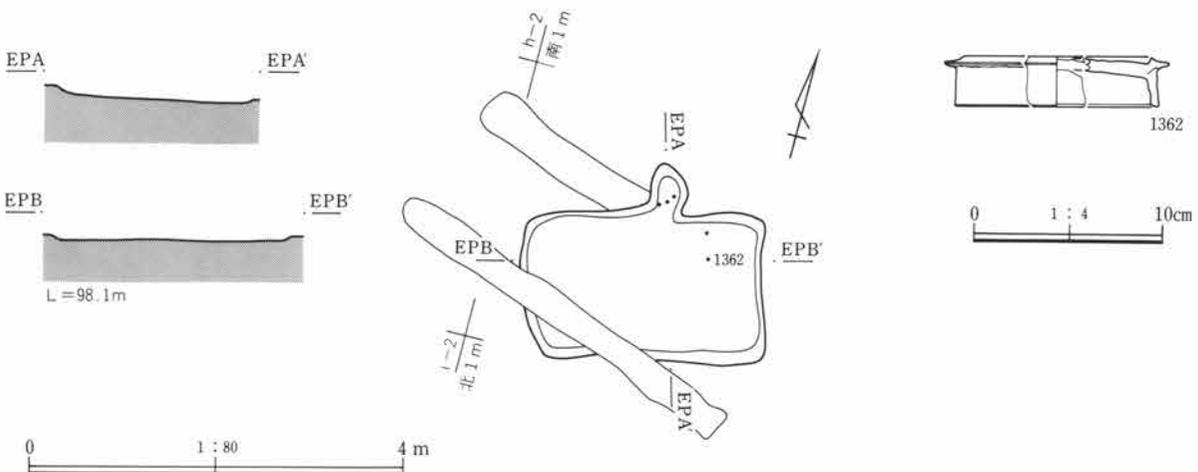
床面 遺構確認面から33cm掘り込んで床面となる。

竈 東壁ほぼ中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は10cmの袖の基部が残存していた。左側は残っていなかった。焚口幅は30cmである。煙道部は壁から外へ50cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで煙道部東端で立ち上がっていた。

周溝 北壁の西2/3から西壁そして南壁の西2/3のコの字形に、幅18~24cmの周溝が検出された。

柱穴 南壁中央の周溝から0.3mほど住居内部に入った位置に小ピットが1本検出された。柱穴と断定できないが、規模(短径×長径×深さ)は、P1：41×51×31cmである。

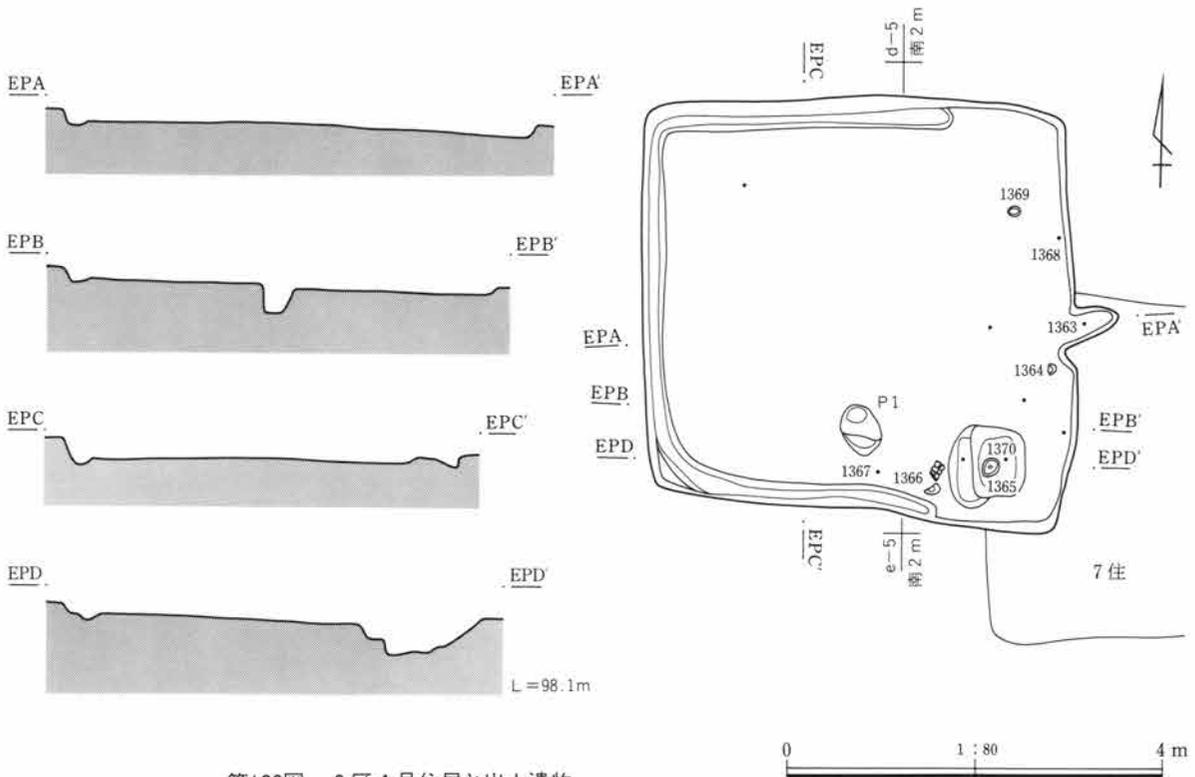
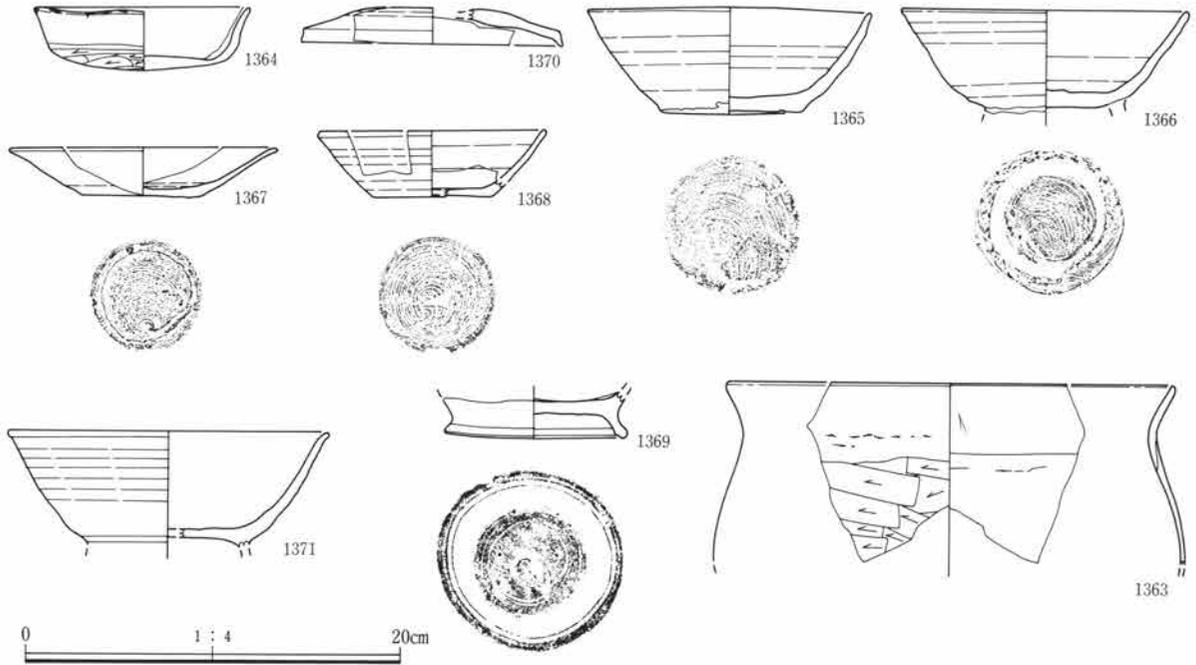
貯蔵穴 竈右側、住居南東隅に、長軸0.80m、短軸0.75m、深さ0.32mの隅丸方形の貯蔵穴が検出された。中から須恵器杯形土器と蓋形土器が出土している。また、西縁からは須恵器碗形土器が出土している。



第125図 6区1号住居と出土遺物

遺物 160点余りの遺物が出土している。床面近くから出土した遺物は1/4ほどある。竈周辺からは土師器甕形土器(1363)と杯形土器(1364)が出土した。他は須恵器の杯形土器・椀形土器で、前述したように貯蔵穴周辺に蓋形土器(1370)、杯形土器(1365)、

椀形土器(1366)が偏在し、P1の脇に杯形土器(1367)、北部東壁沿いに杯形土器(1368)、椀形土器(1369)が出土している。(遺物観察表：29・30頁)
所見 出土遺物から、9世紀前半の住居と考えられる。



第126図 6区4号住居と出土遺物

6区5号住居

位置 c-5グリッド 写真 PL46

重複 北東隅を新しい土坑に、竈煙道部東半を8号住居に切られている。本住居の北壁が6号住居を切っている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は直線的に掘られており、隅は比較的角張っている。規模は長軸3.40m、短軸2.95mである。

面積 8.77m² 方位 N-100°-E

床面 遺構確認面から10cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、竈前から中央部にかけて硬化していた。

埋没土 焼土粒・軽石を含む黒色土で埋まっていた。

竈 東壁中央南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は50cmである。燃烧部の壁は削平されて残ってい

なかった。使用面に焼土が散っているのみであった。煙道部は、8号住居に切られているため、壁から外へどのくらい突出していたかは不明である。燃烧部はほぼ平らで煙道部へ傾斜していた。

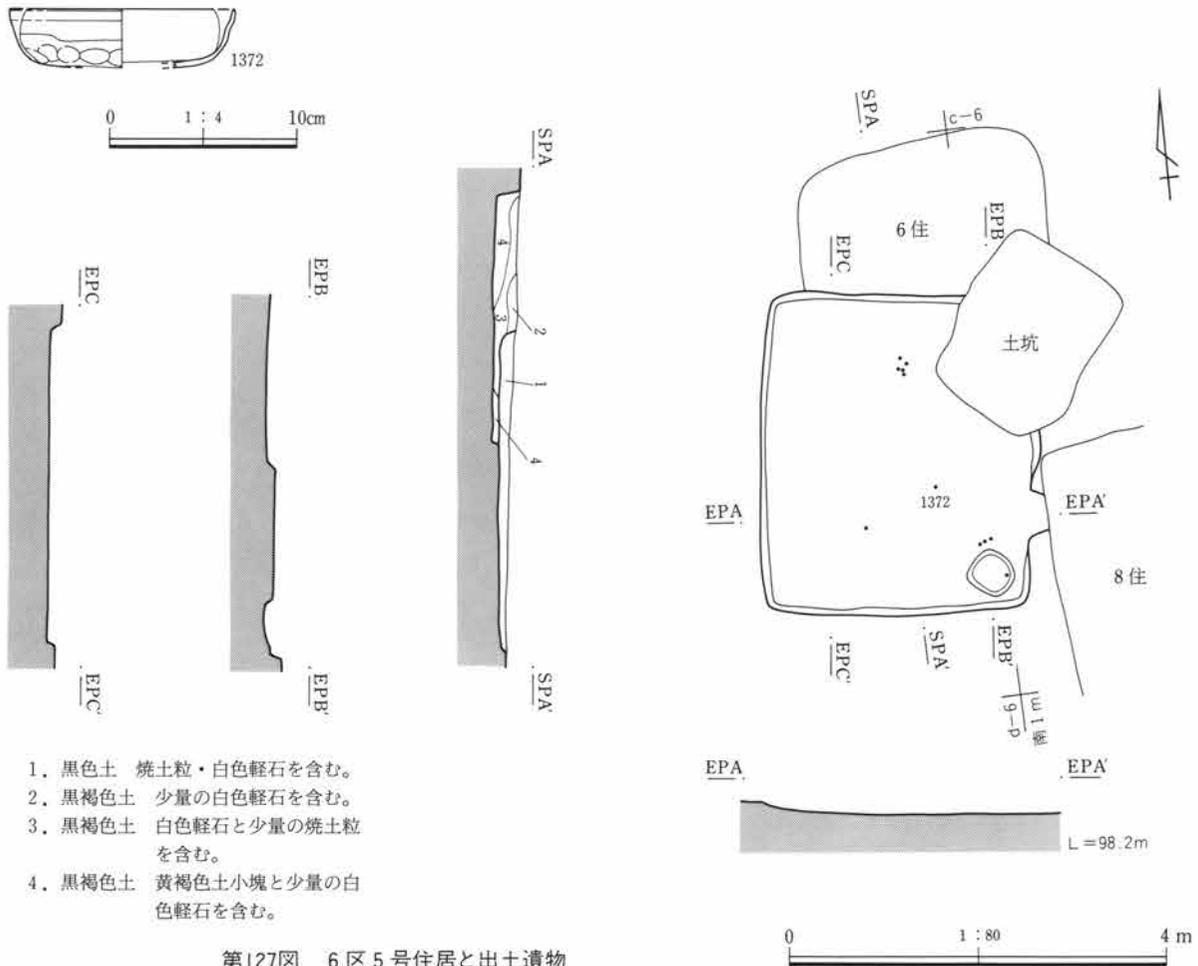
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 竈右側、住居南東隅に直径0.50m、深さ0.08mの貯蔵穴が検出された。周辺からは土師器甕形土器の破片が出土したが、図示できなかった。

遺物 25点余りの遺物が出土している。土師器甕形土器の破片は北部でも出土したが、図示できなかった。図示した土師器杯形土器(1372)は竈前の床面直上で出土した。(遺物観察表：30頁)

所見 出土遺物から、9世紀前半の住居と考えられる。



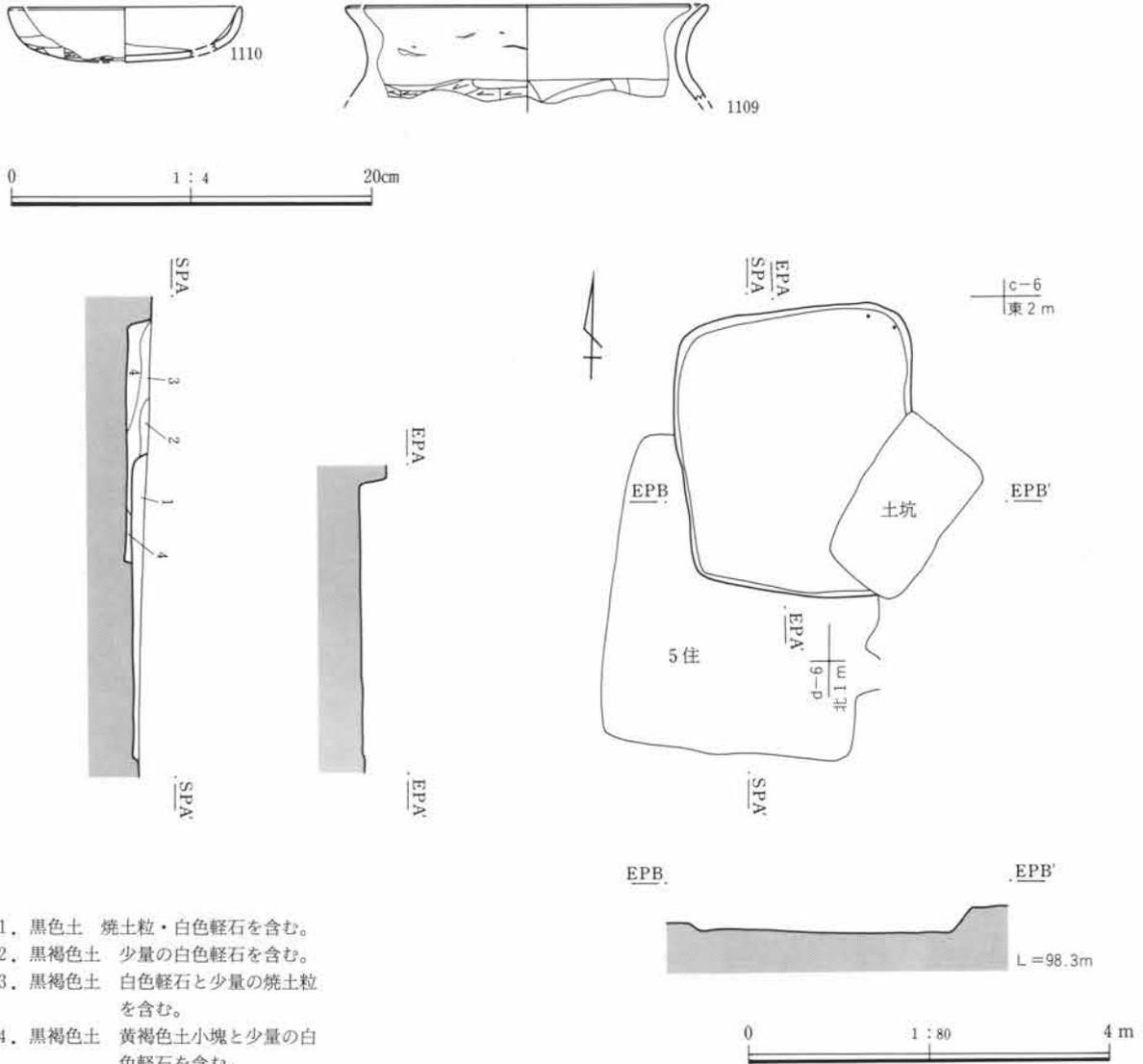
第127図 6区5号住居と出土遺物

6区6号住居

位置 c-5・6グリッド 写真 PL46
 重複 南東隅が新しい方形土坑に切られている。
 また、南半分が5号住居に切られているが、本住居の方が若干深いので、床面・壁は残っていた。
 形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られているが、隅は丸い。規模は長軸3.21m、短軸2.65mである。
 面積 推定7.24m² 方位 N-85°-E
 床面 遺構確認面から25cm掘り込んで床面となる。床面は小さな凹凸があるが、硬化していた。
 埋没土 白色軽石・焼土粒を含む黒褐色土で埋まっ

ていた。

竈 竈は東壁中央より南に付設されていたと考えられるが、新しい土坑に切られて残存していない。
 周溝 検出されなかった。
 柱穴 検出されなかった。
 貯蔵穴 検出されなかった。
 遺物 140点余りの遺物が出土しているが、ほとんど埋没土中の出土遺物である。図示した遺物も埋没土中で出土した。(遺物観察表：30頁)
 所見 出土遺物から、8世紀後半の住居と考えられる。



1. 黒色土 焼土粒・白色軽石を含む。
2. 黒褐色土 少量の白色軽石を含む。
3. 黒褐色土 白色軽石と少量の焼土粒を含む。
4. 黒褐色土 黄褐色土小塊と少量の白色軽石を含む。

第128図 6区6号住居と出土遺物

6区7号住居

位置 e-5グリッド 写真 PL46

重複 北西隅が4号住居に切られているが、本住居の方が深いので、4号住居貯蔵穴が掘り込まれた部分以外は、壁や床面は残っていた。

形状 西壁を南北方向にする正方形を呈する。周壁は直線的に掘られている。隅は北東隅が丸くなっている以外は、比較的角張っていた。規模は長軸3.57m、短軸3.54mである。

面積 10.87㎡ 方位 N-87°-E

床面 遺構確認面から40cm掘り込んで床面となる。床面は平坦であった。

埋没土 下層は焼土粒を含む灰褐色粘質土塊で、上層は黄褐色土粒・軽石粒を含む黒色土で埋まっていた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、

向かって右側は18cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は70cmである。煙道部は壁から外へ60cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで煙道部東端で緩やかに立ち上がっていた。

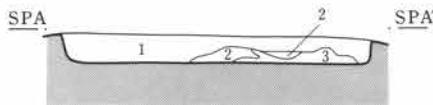
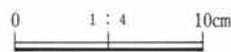
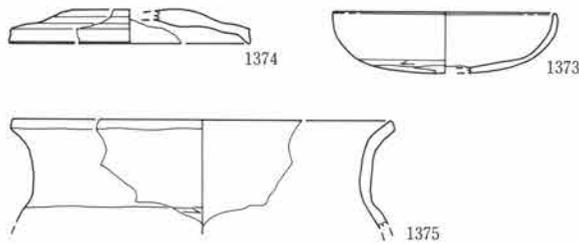
周溝 南壁の東半にのみ、幅10cmの周溝が検出された。

柱穴 検出されなかった。

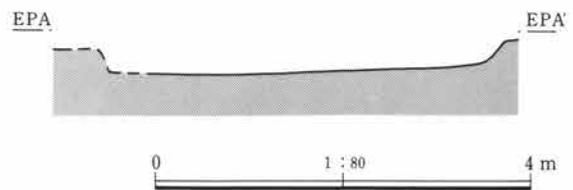
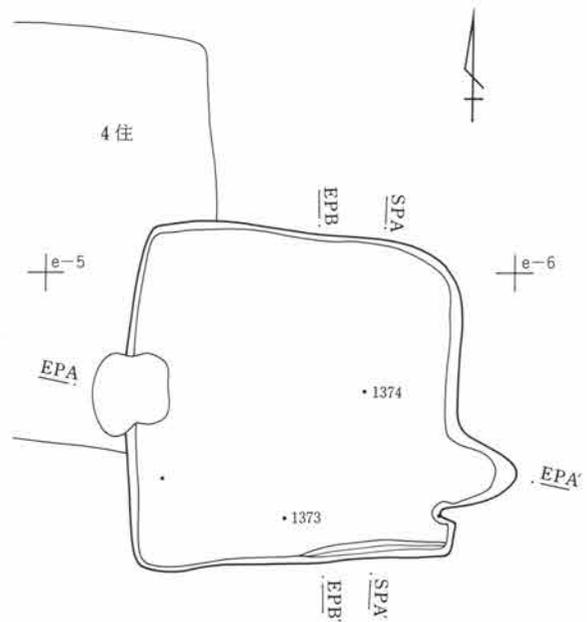
貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 220点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。図示した須恵器蓋形土器(1374)は中央部東寄りの床面直上で、土師器杯形土器(1373)は南壁中央壁沿いで床面直上で出土した。土師器甕形土器(1375)は埋没土中の出土遺物である。(遺物観察表：30頁)

所見 出土遺物から、8世紀後半の住居と考えられる。



1. 黒色土 黄褐色土粒・焼土粒を多く含む。白色軽石を含む。
2. 黒褐色土 黄褐色土粒・焼土粒を多く含む。白色軽石を含む。
3. 灰褐色土 黄褐色土粒・灰褐色粘土塊主体。焼土粒を含む。粘性が強い。
4. 黒褐色土 黄褐色土粒・灰褐色粘土を含むかたい層。



第129図 6区7号住居と出土遺物

6区11号住居

位置 k・1-2グリッド 写真 PL47

重複 本住居の南部が、先行する12号住居の北部を切っている。また、本住居の北壁を2号溝が切っている。

形状 短軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は、南壁がやや膨らむように掘られている他は、直線的である。隅はやや丸い。規模は長軸4.06m、短軸3.44mである。

面積 9.78㎡ 方位 N-93°-E

床面 遺構確認面から44cm掘り込んで床面となる。本住居周辺は現代の耕作痕が著しい地点であったが、本住居の床面までは及んでいなかった。床面はやや凹凸があるが、中央部は硬化していた。

埋没土 焼土粒や白色軽石を含む暗褐色土・黒褐色土で埋まっていた。

竈 東壁ほぼ中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は30cm、左側は44cm、袖の基部がやや大きく残存していた。焚口幅は26cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ34cm突出していた。燃焼部はやや傾斜しており、煙道部へ緩やかに続いていた。

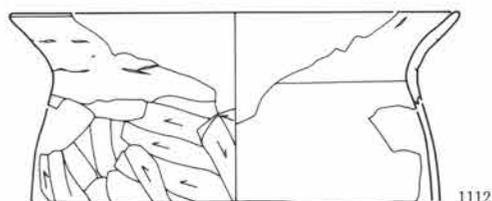
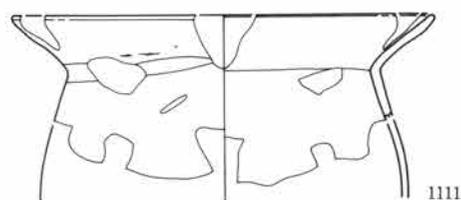
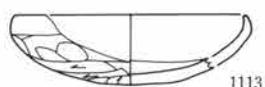
周溝 東壁を除く三辺の壁に、幅15~20cm、深さ5cmほどの周溝が検出された。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に、長径0.80m、短径0.74m、深さ0.18mの円形の貯蔵穴が検出された。底面はほぼ平らであったが、出土遺物は無い。

遺物 90点余りの遺物が出土している。ほとんどが埋没土中の出土遺物である。図示した土師器杯形土器(1113・1114)は住居中央部や、竈前から出土しているが、床面から8~9cm上位で出土した。また、土師器甕形土器(1111)も床面から10cm上位で出土した。西側周溝内から礫が出土したが、顕著な使用痕は見られなかった。(遺物観察表：30頁)

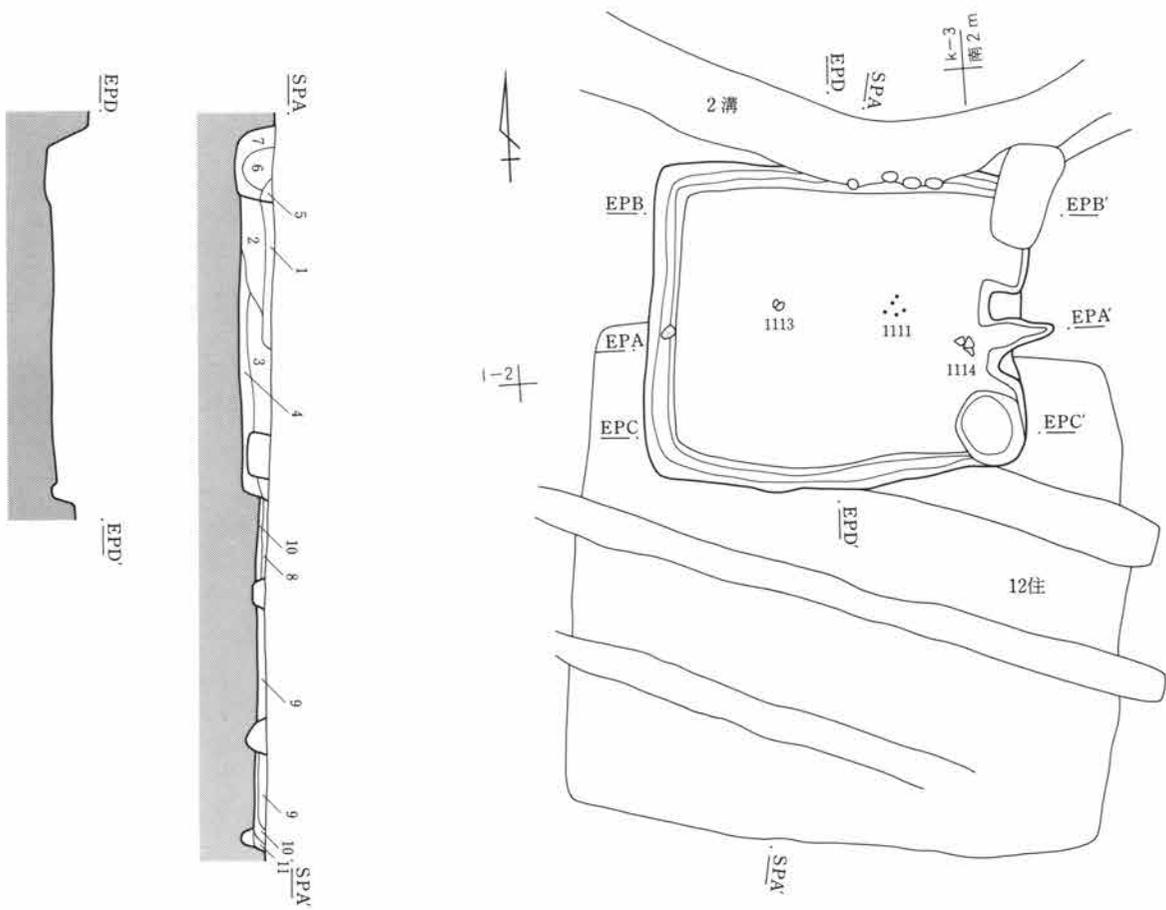
所見 床面出土遺物ではないが、出土遺物からは8世紀前半の住居と推定される。



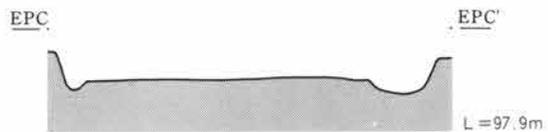
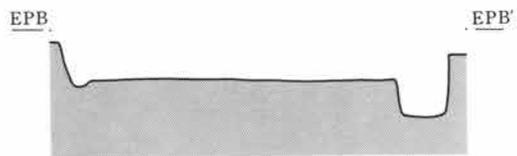
第130図 6区11号住居出土遺物

6区11号・12号住居の重複。

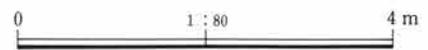




- 1. 褐色土 わずかに焼土粒・斑鉄を含む。
- 2. 黒褐色土 わずかに焼土粒・斑鉄・白色軽石を含む。1層よりしまりあり。
- 3. 黒褐色土 わずかに焼土粒・斑鉄・白色軽石・黄褐色土粒を含む
- 4. 暗褐色土 わずかに焼土粒・白色軽石を含む。
- 5～7. 2号溝埋没土
- 8～11. 12号住居埋没土



第131図 6区11号住居



6区13号住居

位置 n-1・2グリッド 写真 PL47
重複 なし

形状 短軸を南北方向にする平行四辺形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。隅は大きく丸い。規模は長軸3.98m、短軸3.13mである。

面積 10.30m² 方位 N-91°-E
床面 遺構確認面から30cm掘り込んで床面となる。住居南東隅の床面に焼土が残っていた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は58cmである。煙道部は壁から外へ62cm突出しており、燃焼部から煙道部へ緩やかに傾斜していた。

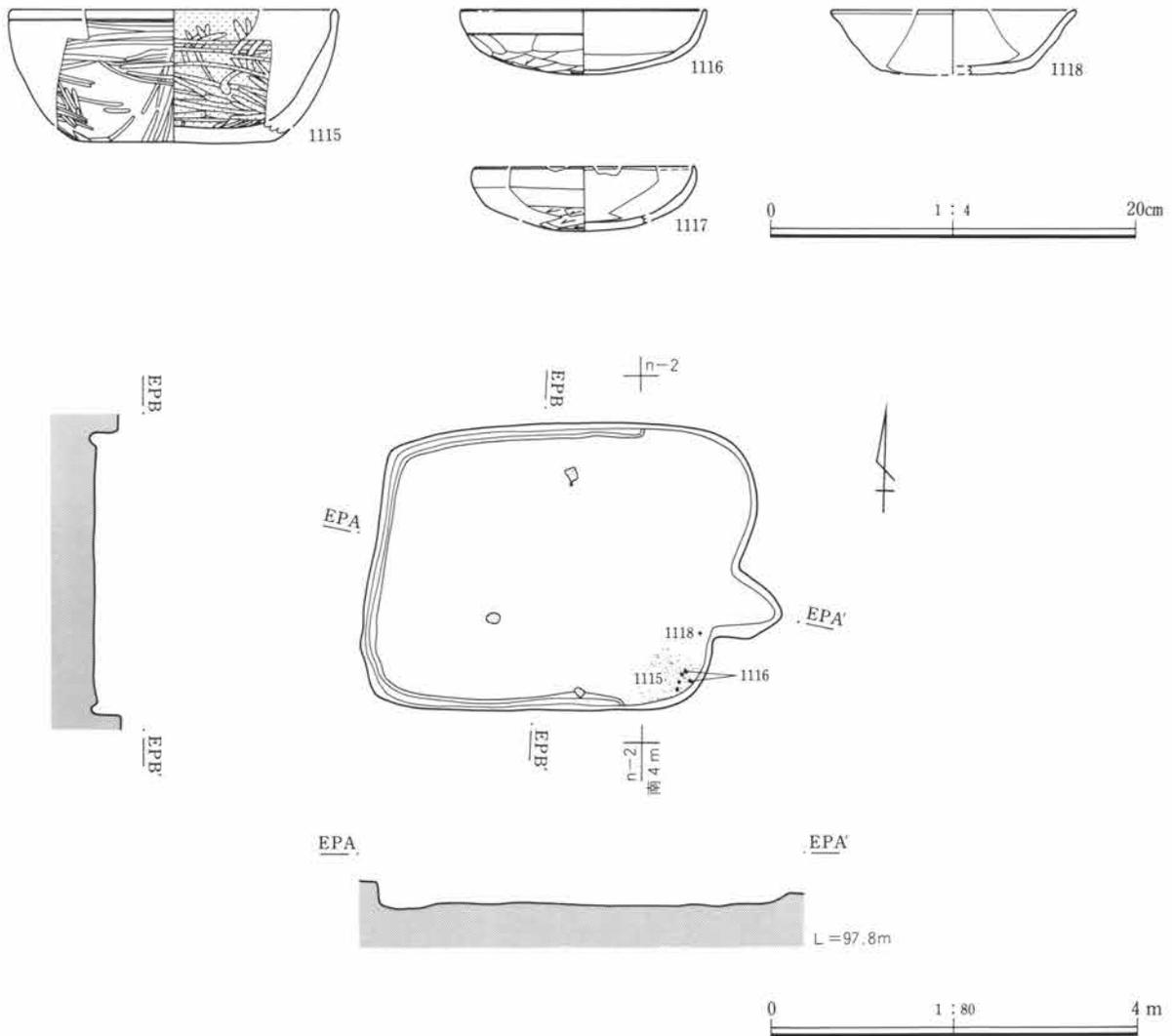
周溝 北壁の西2/3と、西壁全部、南壁の西2/3のUの字状に、幅10~15cm、深さ3~5cmの周溝が検出された。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 40点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。床面近くの土器は、土師器杯形土器(1115・1116)が、竈右脇の焼土直上から、須恵器杯形土器(1118)が竈右前で床面上7cmで出土している。(遺物観察表：30・31頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。

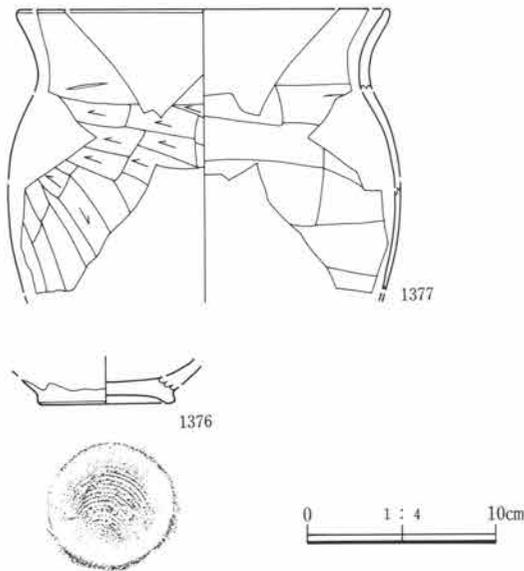


第132図 6区13号住居と出土遺物

6. 7区の遺構

7区3号住居

位置 Bq-13グリッド 写真 PL48
 重複 南東隅を5号溝に切られている。
 形状 短軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られていた。隅は丸く、北壁お



よび北西・北東隅は削平を受けており、明確にとらえられなかった。規模は長軸2.95m、短軸1.63mである。

面積 測定不可 方位 N-80°-E
 床面 遺構確認面から4cm掘り込んで床面となる。床面は平坦であったが、顕著な硬化面はとらえられなかった。

竈 東壁中央に竈が付設されていたと推定される。削平が著しく、燃焼面の焼土や灰が残っていたのみで、竈の構造は不明である。

周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 70点余りの遺物が出土しているが、ほとんど埋没土中の出土遺物である。図示した須恵器杯形土器(1376)は、南壁中央壁際で出土した。土師器甕形土器(1377)は埋没土中の出土である。

(遺物観察表：31頁)

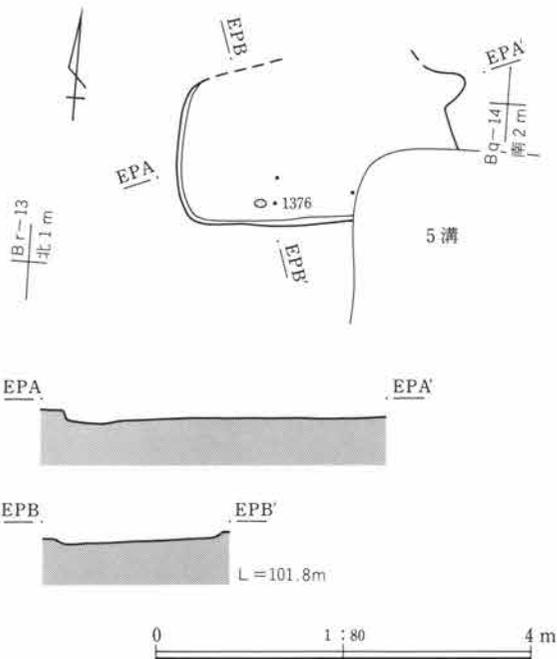
所見 出土遺物から、9世紀前半の住居と考えられる。

7区4号住居

位置 B0-15グリッド 写真 PL48
 重複 西半分を4号溝に切られている。
 形状 東壁をほぼ南北方向にする方形を呈すると推定されるが、西側は4号溝に切られ、北半分は削平されており、全体形状は不明である。南壁は直線的に掘られており、南東隅は比較的角張っている。規模は不明である。

面積 測定不可 方位 N-80°-E
 床面 遺構確認面から14cm掘り込んで床面となる。床面を把握できたのは竈前面のみで、焼土や灰が広がっていた。南側は深さ25~30cmほどの掘り込みになったが、床面が明瞭に残っていなかったため、床下まで掘ってしまった結果と考えられる。

竈 東壁に竈が付設されていたが、東壁のどの位置であったかは不明である。竈も削平を受けており、全体の構造は不明である。



第133図 7区3号住居と出土遺物

周溝 検出されなかった。

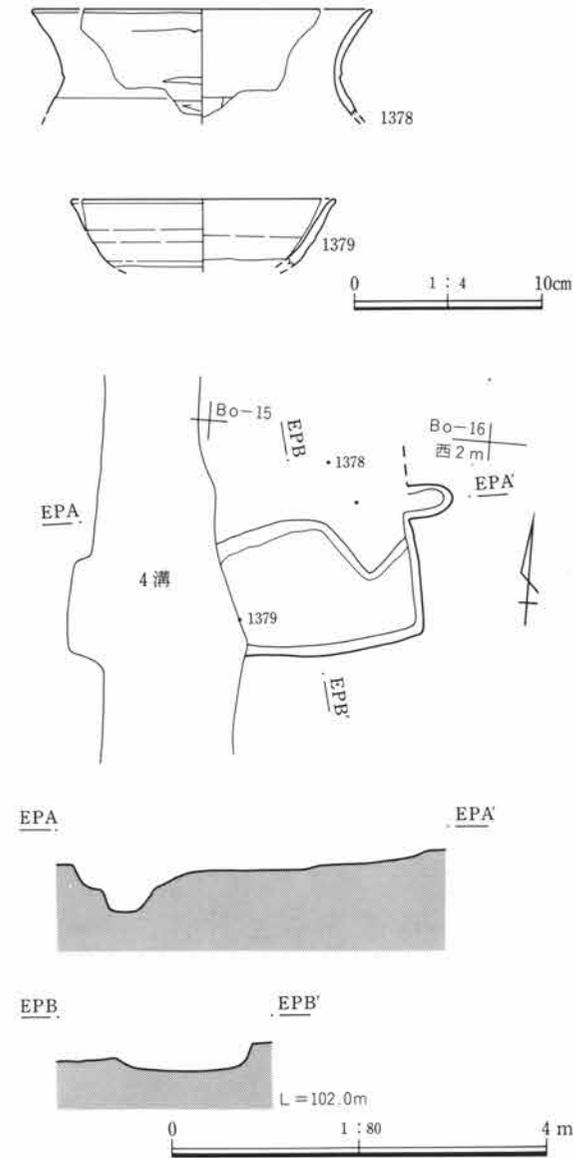
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 20点余りの遺物が出土している。埋没土中の出土遺物が多かったが、図示した土師器甕形土器(1378)は中央部、須恵器杯形土器(1379)は南壁沿いのそれぞれ床面直上で出土したものである。

(遺物観察表：31頁)

所見 出土遺物から、9世紀前半の住居と考えられる。



第134図 7区4号住居と出土遺物

7区6号住居

位置 Bs・t-5・6グリッド

写真 PL48 重複 南西部の床面の一部に、住居より新しい井戸が掘られている。

形状 長軸を南北方向にする方形を呈する。周壁は中央部がやや膨らむように掘られている。隅は丸い。規模は長軸6.45m、短軸6.25mである。

面積 33.72㎡ 方位 N-95°-E

床面 遺構確認面から58cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らで、中央部は硬化していた。

埋没土 焼土粒・小礫・軽石粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は40cm、左側は38cm、袖の基部が残存していた。左側の竈構築粘土は、燃焼部上部にも残存していた。焚口幅は55cmである。燃焼部の壁は良く焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ55cm突出していた。燃焼部は壁のラインで急に立ち上がり、緩やかに煙道部へ傾斜していた。

周溝 検出されなかった。

柱穴 4本の支柱穴が検出された。各支柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:32×32×45cm、P2:38×40×59cm、P3:38×38×46cm、P4:41×48×64cmである。支柱穴のうちP1・P4は住居対角線上に位置するが、P2・P3は、対角線より北へややずれている。各支柱穴を結んだ形はやや台形を呈する。

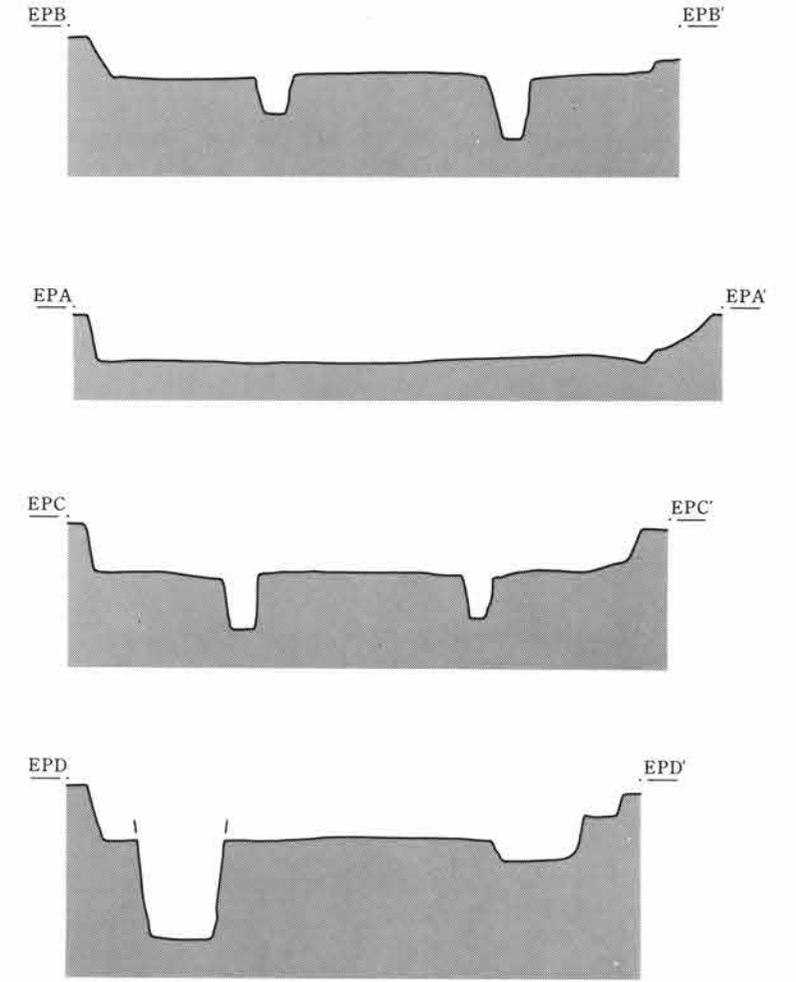
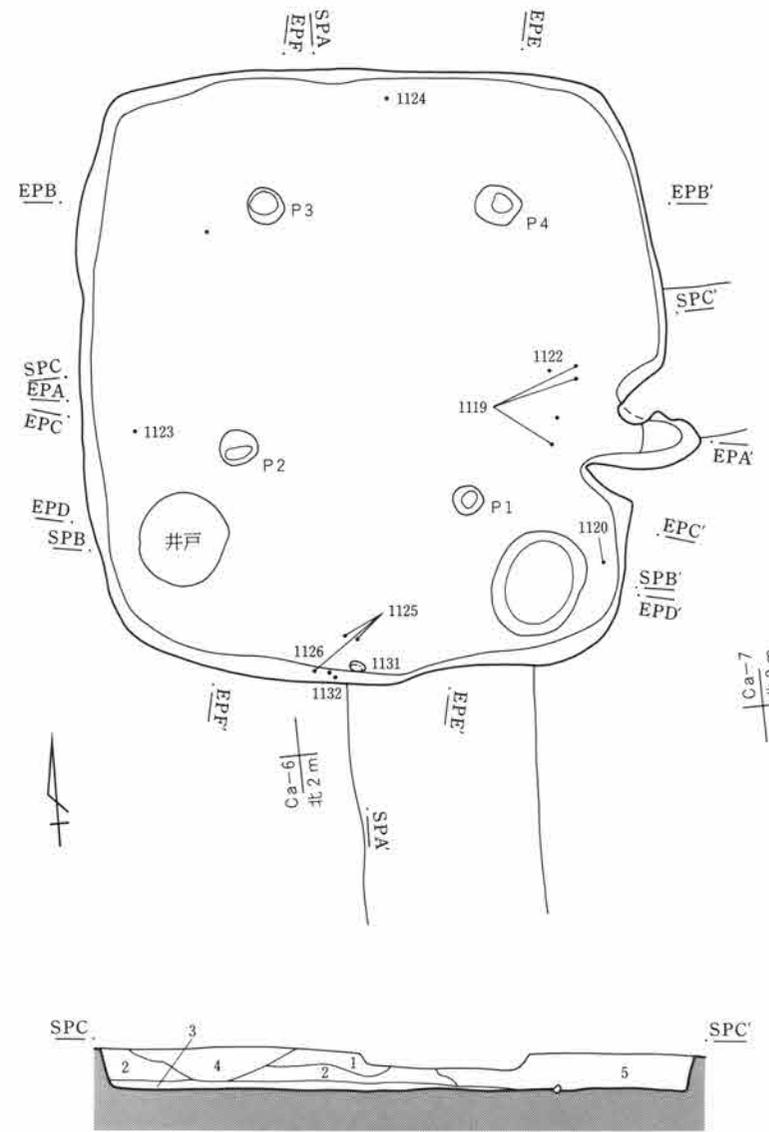
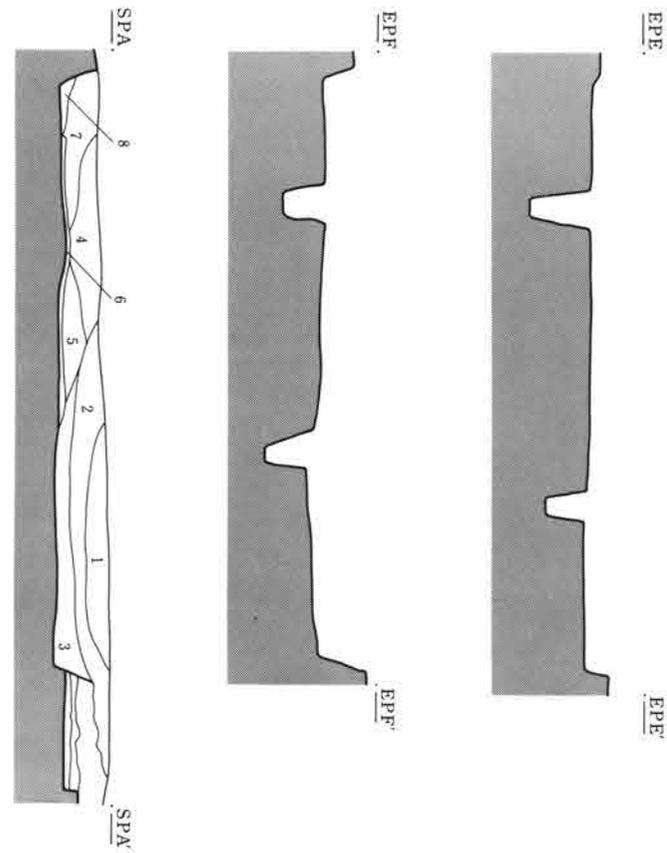
貯蔵穴 住居南東隅に、長径1.09m、短径1.02m、深さ0.49mの円形の貯蔵穴が検出された。底面は平らである。

遺物 1300点余りの遺物が出土している。床面近くの遺物は少ない。図示した遺物のうち、土師器杯形土器(1123)は西壁際で、土師器甕形土器(1124)が北壁際の床面直上で出土している他は、やや床面より上位で出土した。また、南壁中央壁際には、土師器杯形土器(1125・1126)と須恵器碗形土器(1132)、須恵器杯形土器(1131)が集中して出土しているが、

住居に伴うかどうか明らかでない。

(遺物観察表：31・32頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。

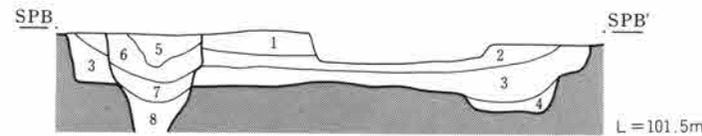


AA'

1. 褐色土 焼土粒・白色軽石を含む。しまり強い。
2. 暗褐色土 焼土粒・白色軽石・炭化物を含む。しまりあり。
3. 褐色土 黄褐色土粒・白色軽石・焼土粒を含む。しまりあり。
4. 褐色土 焼土粒・小礫を多量に含む。ざらついた層。
5. 暗褐色土 焼土粒・小礫を4層よりやや少なく含む。ざらついた層。
6. 暗褐色土 焼土粒・黄褐色土粒を含む。しまり強い。(貼床)
7. 褐色土 多量の小礫と、焼土粒を含む。ざらついた層。
8. 褐色土 小礫を7層よりやや少なく含む。ややざらついた層。

BB'

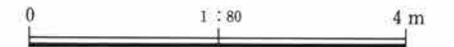
1. 赤褐色土 焼土粒・軽石を含む。しまり強い。
2. 暗赤褐色土 焼土粒・軽石・炭化物を含む。しまり強い。
3. 赤褐色土 焼土粒・軽石・黄褐色土粒を含む。しまり強い。
4. 暗褐色土 焼土粒・黄褐色土粒・塊を含む。
5. 暗褐色土 軽石を含む。黄褐色土粒・焼土粒をわずかに含む。ふかふかした層。
6. 暗褐色土 黄褐色土粒・塊・焼土粒をわずかに含む。ふかふかした層。
7. 暗褐色土 焼土粒をわずかに含む。ふかふかした層。
8. 暗褐色土 わずかに黄褐色土粒を含む。ふかふかした層。

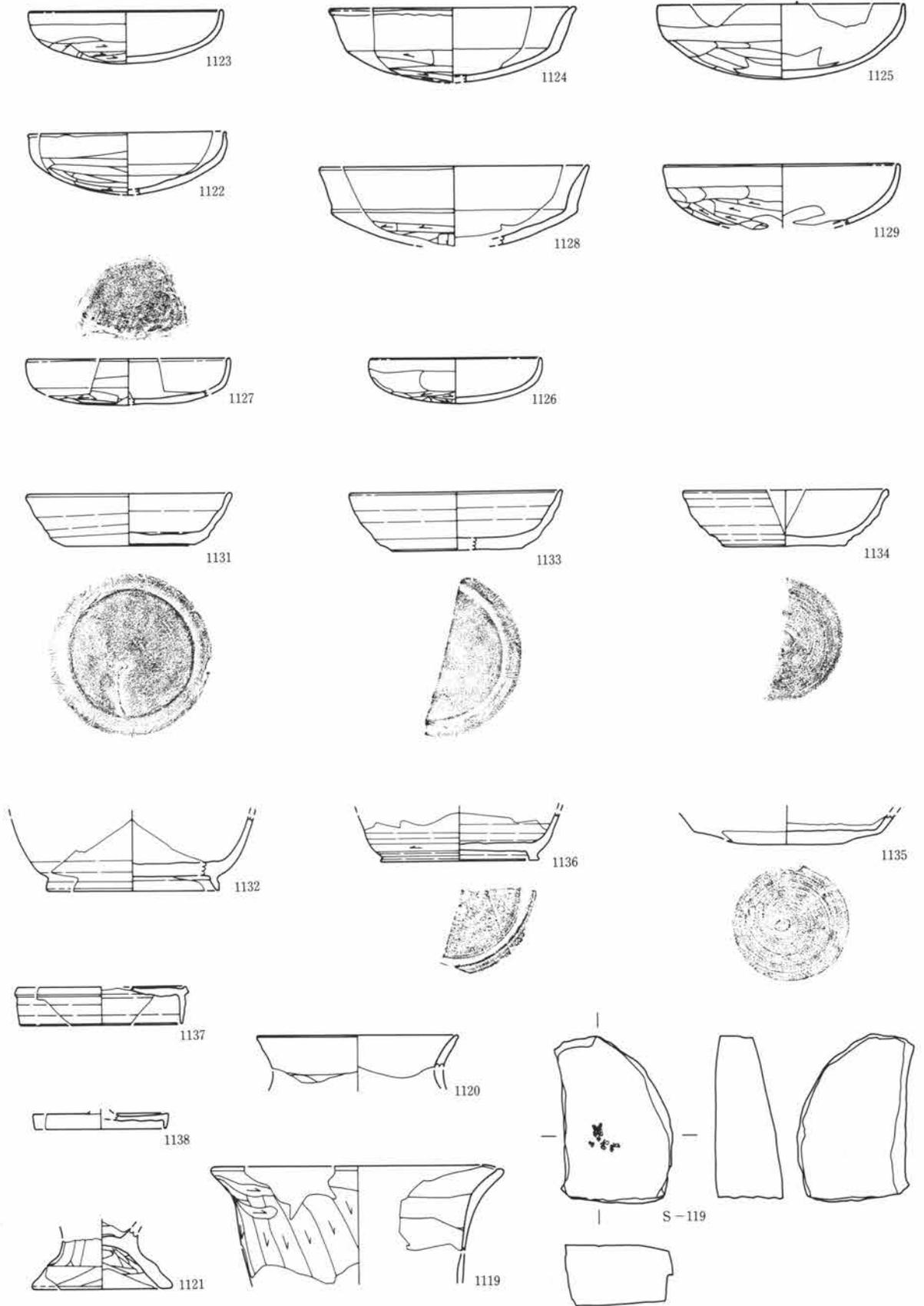


CC'

1. 褐色土 焼土粒・小礫・礫を多量に含む。ざらついた層。
2. 暗褐色土 焼土粒・小礫・礫を多量に含む。ざらついた層。
3. 暗褐色土 焼土粒・小礫・礫を含む。ざらついた層。
4. 暗茶褐色土 焼土粒・小礫を多量に含む。
5. 黄茶褐色土 焼土粒を多量に含む。黄褐色土粒を含む。しまり非常に強い。

第135図 7区6号住居





第136図 7区6号住居出土遺物

0 1:4 20cm

7区7号住居

位置 Ca・b-8グリッド 写真 PL49
重複なし

形状 東壁をほぼ南北方向にする方形を呈すると推定されるが、試掘トレンチが住居西部を切ってしまったため、全体形状は不明である。周壁はほぼ直線的に掘られているが、隅はやや丸い。規模は南北長2.20mである。

面積 計測不可 方位 N-91°-E

床面 遺構確認面から11cm掘り込んで床面となる。床面にはやや凹凸がある。顕著な硬化面はとらえられなかった。

竈 東壁中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は35cmである。削平が著しく、燃焼部の壁はほとんど

残っていないが、焚口部には焼土化した壁が残っていた。また、焚口部右側には、人頭大の角礫が残されており、竈の構築材の可能性もある。煙道部は壁から外へ52cm突出していた。燃焼部は平らで煙道部東端で斜めに立ち上がっていた。

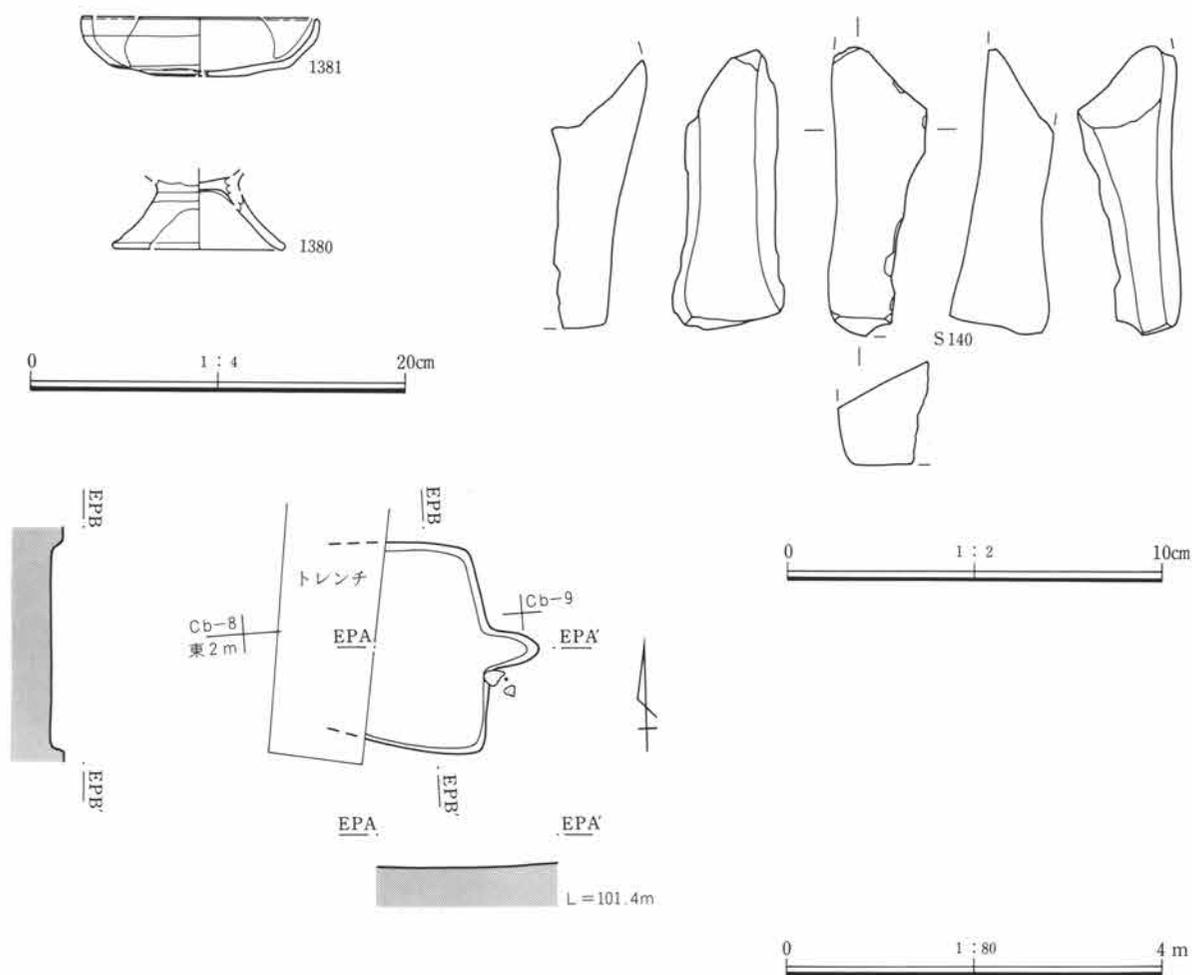
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 20点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中から出土した破片で、図示できたのは土師器甕形土器(1380)、土師器杯形土器(1381)、砥石(S140)のみである。(遺物観察表:32頁)

所見 出土遺物から、9世紀前半の住居と考えられる。



第137図 7区7号住居と出土遺物

7区8号住居

位置 Cd-10グリッド 写真 PL49

重複 西部を1号溝・17号井戸に切られている。

形状 東壁を南北方向にする方形を呈すると推定されるが、西部が切られているため、全体形状は不明である。残存する周壁はほぼ直線的に掘られている。隅は北東隅は丸く、南東隅は角張っていた。規模は南北長2.30mである。

面積 測定不可 方位 N-95°-E

床面 遺構確認面から17cm掘り込んで床面となる。床面にはやや凹凸があり、顕著な硬化面はとらえられなかった。

竈 東壁ほぼ中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口

幅は20cmである。焚口の両側には棒状礫が1本ずつ立てられており、竈壁の芯材として入れられていたと考えられる。煙道部は壁から外へ55cm突出していた。燃烧部はややくぼんでおり、煙道部へ緩やかに傾斜していた。

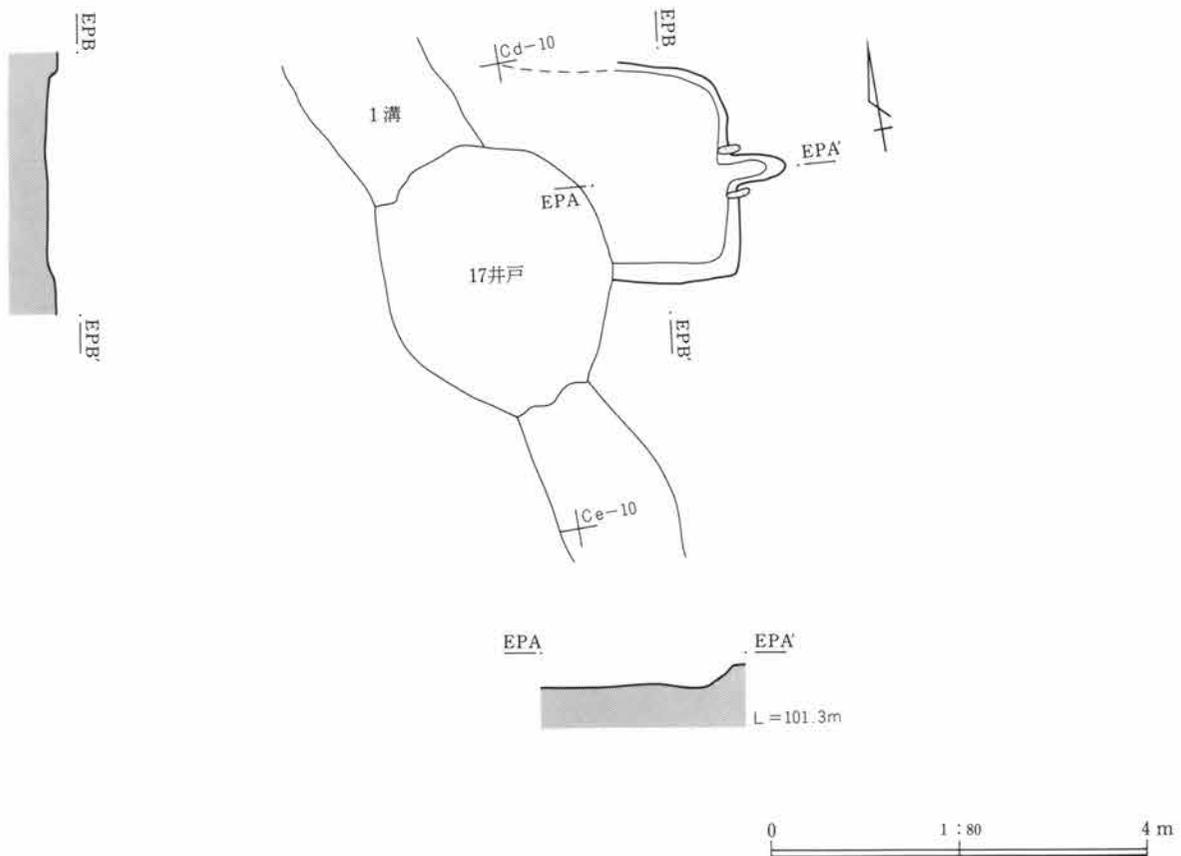
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 35点余りの遺物が出土しているが、いずれも破片で埋没土中から出土した。図示できる遺物はなかった。

所見 埋没土中の出土遺物から、8世紀の住居と推定される。



第138図 7区8号住居

7. 8区の遺構

8区4号住居

位置 Bc・d-9グリッド 写真 PL49

重複 なし

形状 短軸をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られ、隅は角張っている。規模は長軸4.62m、短軸3.81mである。

面積 13.14m² 方位 N-81°-E

床面 遺構確認面から49cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、竈前面から中央部にかけて硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に若干竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は20cm、左側は11cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は50cmである。燃焼部の壁には顕著な焼土は残っていなかった。煙道部は壁から

外へ66cm突出していた。燃焼部はやや窪んで、煙道部へ緩やかに傾斜していた。

周溝 幅12~15cm、深さ2.5~4cmの周溝が竈部分を除いて全周していた。

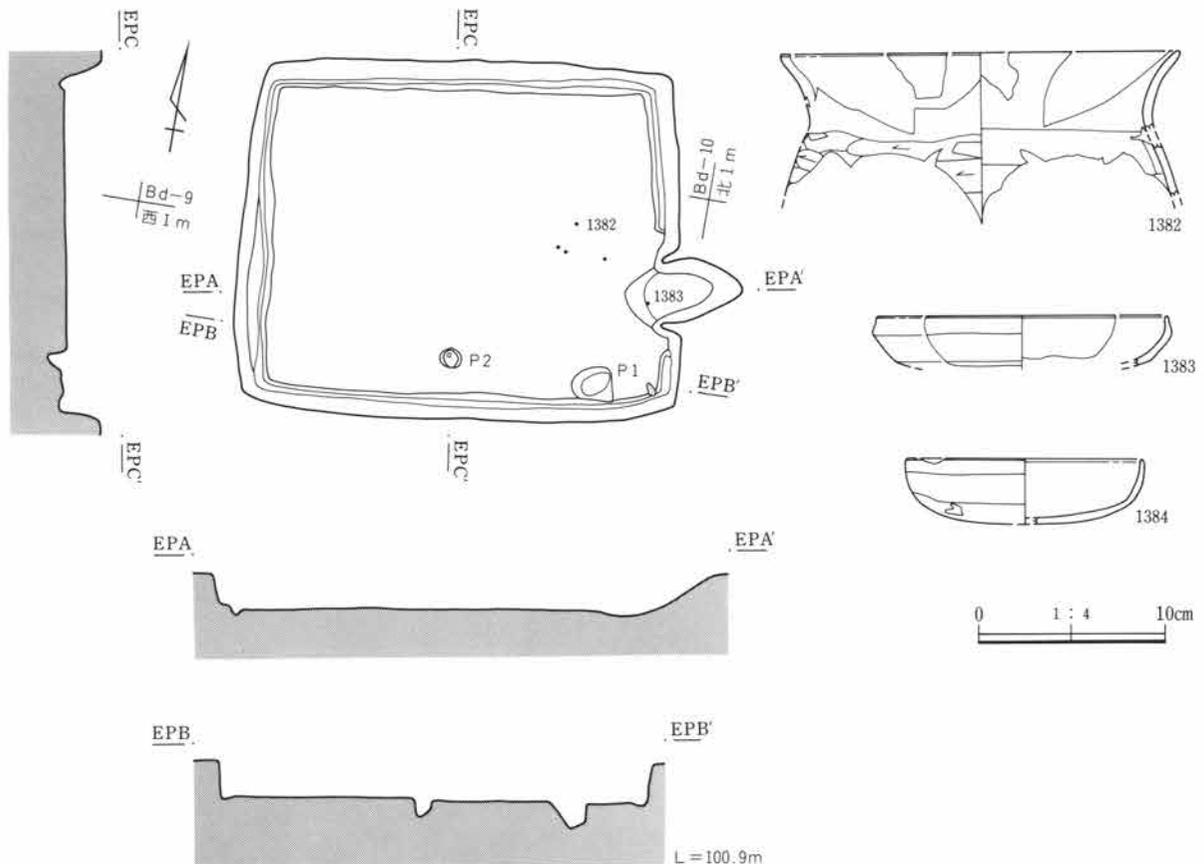
柱穴 支柱穴は検出されなかったが、2本の小ピットが検出された。ピットの規模（短径×長径×深さ）は、P1：34×44×28cm、P2：20×22×17cmである。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 40点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。図示した土師器杯形土器(1383)は竈使用面から出土した。甕形土器(1382)は竈左前で床面から10cmほど上で出土した。

(遺物観察表：32頁)

所見 出土遺物から、8世紀後半の住居と考えられる。



第139図 8区4号住居と出土遺物

8区5号住居

位置 A・P-10グリッド 写真 PL49
重複 南壁西端を2号土坑が切っているが、本住居の方が深いので、住居の壁・床面は残っていた。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られているが、北西隅がやや膨らんでいる。隅は丸い。規模は長軸4.02m、短軸3.76mである。

面積 10.76㎡ 方位 N-103°-E

床面 遺構確認面から44cm掘り込んで床面となる。竈前から北東部にかけては、床面をとらえることができたが、南西部は顕著な床面がとらえられず掘り方まで掘り下げた状態になってしまった。

埋没土 軽石・小石・焼土粒を含む暗灰褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されてい

た。住居壁より内側に竈袖がほとんど張り出さない形態の竈で、焚口幅は40cmである。燃烧部の壁には顕著な焼土は残っていなかった。煙道部は壁から外へ70cm突出していた。燃烧部は窪んでいて、煙道部へ緩やかに傾斜していた。

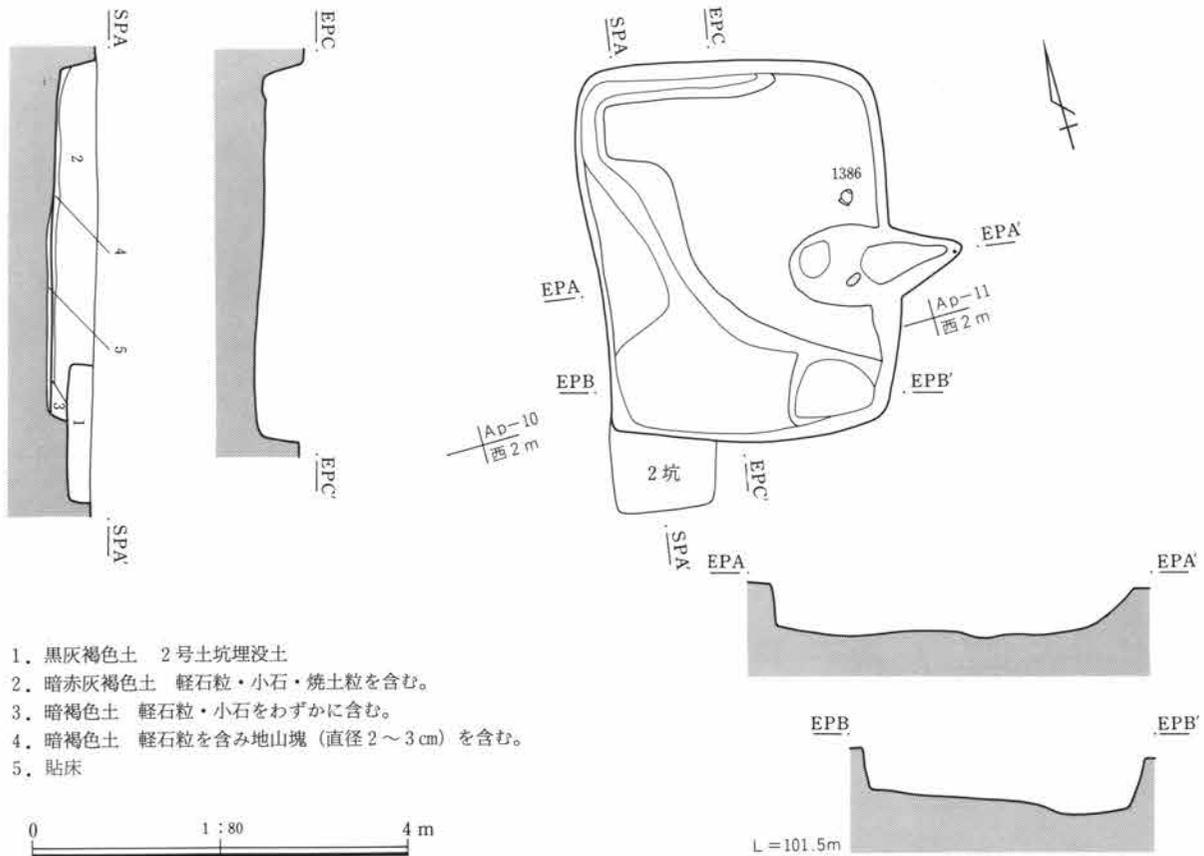
周溝 北壁の西半部から北西隅にかけて、幅20cmの周溝が検出された。

柱穴 検出されなかった。

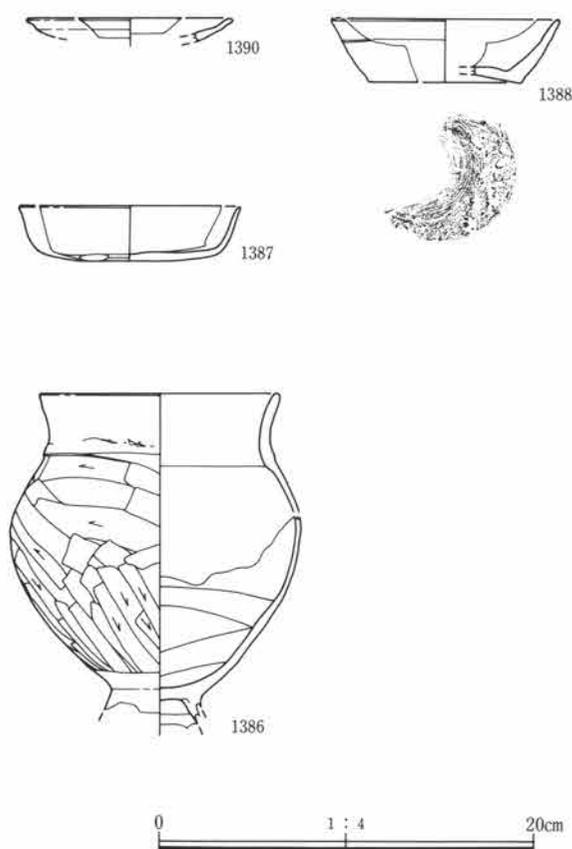
貯蔵穴 竈右側、住居南東隅に長径1.08m、短径0.83m、深さ0.19mの隅丸方形の貯蔵穴が検出された。

遺物 40点余りの遺物が出土している。埋没土中の出土遺物がほとんどである。床面近くの遺物は、土師器甕形土器(1386)が竈左前で斜立して床面直上で出土した。(遺物観察表：32頁)

所見 出土遺物から、9世紀前半の住居と考えられる。



第140図 8区5号住居



第141図 8区5号住居出土遺物

8区6号住居

位置 Am・n-9グリッド 写真 PL50
 重複 2号掘立柱建物の柱穴が南壁や床面の一部を切っている。

形状 短軸をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁はやや西壁が膨らんでいる他は、直線的に掘られている。隅は、北東・南東隅は比較的角張っていたが、北西・南西隅は丸く掘られていた。規模は長軸4.25m、短軸3.30mである。

面積 11.92㎡ 方位 N-106°-E
 床面 遺構確認面から30cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦で、竈前から中央部にかけて硬化していた。

埋没土 軽石や焼土粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に若干竈袖が張り出す形態の竈であったと考えられるが、袖は粘土ではなく、左右ともに角柱状の石が立てられていた。角礫に挟まれた焚口幅は40cmである。焚口部には、袖石の上に渡されていたと考えられる石1対が中央に落ち込んだような状態で出土した。石の周囲には白色粘土が残っており、竈の天井部は粘土で構築されていたことがわかる。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ75cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに傾斜していた。

周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 竈左側、住居北東隅に、長径1.12m、短径0.96m、深さ0.61mの方形の貯蔵穴が検出された。断面形は箱形で、底面は平らである。貯蔵穴の住居北壁・東壁に接するように掘られており、住居壁からそのまま掘り込まれて、底面にいたる。西側・南側の周囲には幅20~25cm、高さ4cmの縁がつくられている。

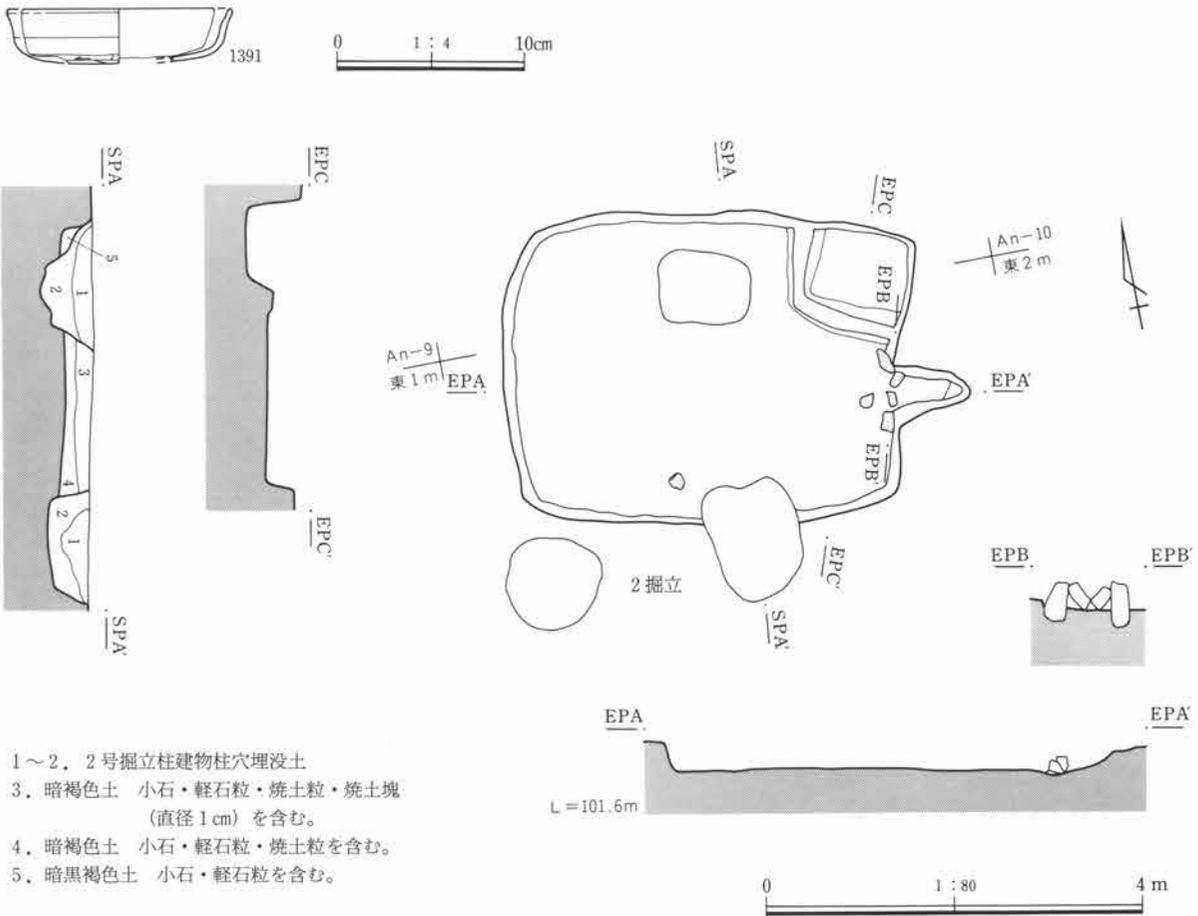
遺物 80点余りの遺物が出土しているが、ほとんど埋没土中出土の破片である。図示し得たのは土師器杯形土器(1391)のみである。

(遺物観察表：33頁)

所見 埋没土中の出土遺物から、9世紀前半の住居と推定される。

8区6号住居と重複する2号掘立柱建物跡。





- 1～2. 2号掘立柱建物柱穴埋没土
 3. 暗褐色土 小石・軽石粒・焼土粒・焼土塊
 (直径1cm)を含む。
 4. 暗褐色土 小石・軽石粒・焼土粒を含む。
 5. 暗黒褐色土 小石・軽石粒を含む。

第142図 8区6号住居と出土遺物

8区13号住居

位置 Ac-10・11グリッド 写真 PL50
 重複 西壁を12号住居に、南壁の一部を5号掘立柱建物の柱穴に切られている。

形状 東壁をほぼ南北方向にする方形を呈すると推定されるが、西部が切られているために全体形状は不明である。周壁には凹凸があり、壁の中央部がへこんで掘られる傾向がある。残存する北東隅はやや角張っている。規模は南北長2.75mである。

面積 測定不可 方位 N-130°-E
 床面 遺構確認面から6cm掘り込んで床面となる。床面には細かな凹凸があるが、全体としては平坦である。顕著な硬化面はなかった。

埋没土 軽石・焼土粒を含む褐色土で埋まっていた。

竈 南東隅に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は20

cmである。焚口部の左側には角礫が出土し、竈構築材の芯と考えられる。燃焼部の壁は顕著な焼土化はみられなかった。煙道部は壁から外へ70cm突出していた。燃焼部はやや窪み、煙道部へ緩やかに立ち上がっていた。

周溝 検出されなかった。

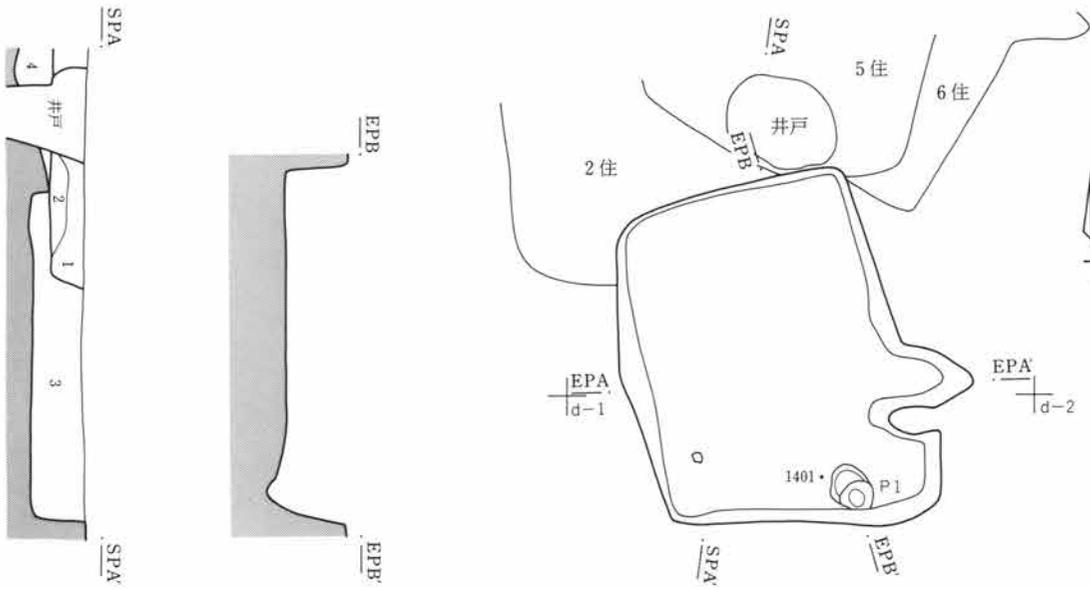
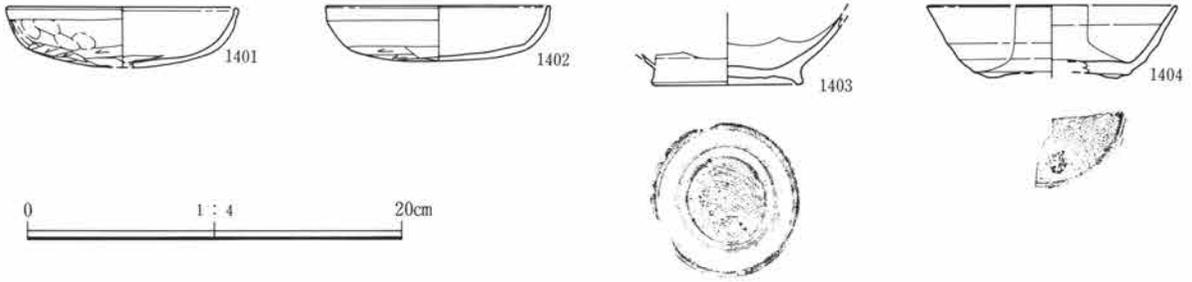
柱穴 住居南部に小ピットが1本検出されたが、主柱穴とは断定できなかった。小ピットの規模(短径×長径×深さ)は、P1:52×55×31cmである。貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 埋没土中から2点遺物が出たのみである。土師器杯形土器(1397)を図示した。確認できた住居壁は低いので、遺物は床面に近いものと考えられる。(遺物観察表:33頁)

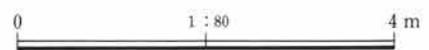
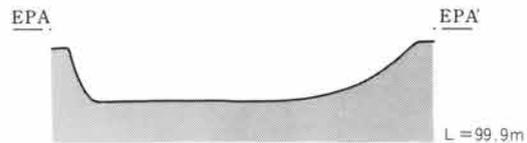
所見 埋没土の出土遺物から、9世紀前半の住居と推定される。

遺物 80点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物であるが、図示した土師器杯形土器(1401)はP1西脇の床面直上で出土した。他は埋没土中の出土遺物である。(遺物観察表:33頁)

所見 出土遺物から、8世紀後半の住居と考えられる。



1. 褐色土 小砂利・白色軽石・少量の焼土粒を含む。
2. 1層に焼土粒を多く含む。
3. 黒褐色土 小石・軽石粒・焼土粒を含む。
4. 2号住居埋没土



第144図 9区3号住居と出土遺物

9. 10区の遺構

10区1号住居

位置 e-2グリッド 写真 PL52

重複 なし

形状 東壁をほぼ南北方向にするほぼ正方形を呈する。周壁は北壁と南壁がやや膨らむが、東西壁は直線的に掘られている。隅は比較的角張っている。規模は長軸(南北長)3.60m、短軸(東西長)3.57mである。

面積 10.55㎡ 方位 N-75°-E

床面 遺構確認面から35cm掘り込んで床面となる。床面には小さな凹凸があるが、全体にはほぼ平坦で、竈前面から中央部にかけて硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、

向かって右側は40cm、左側は50cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は40cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ50cm突出していた。煙道部の天井が一部残存していた。燃焼部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに傾斜していた。

周溝 検出されなかった。

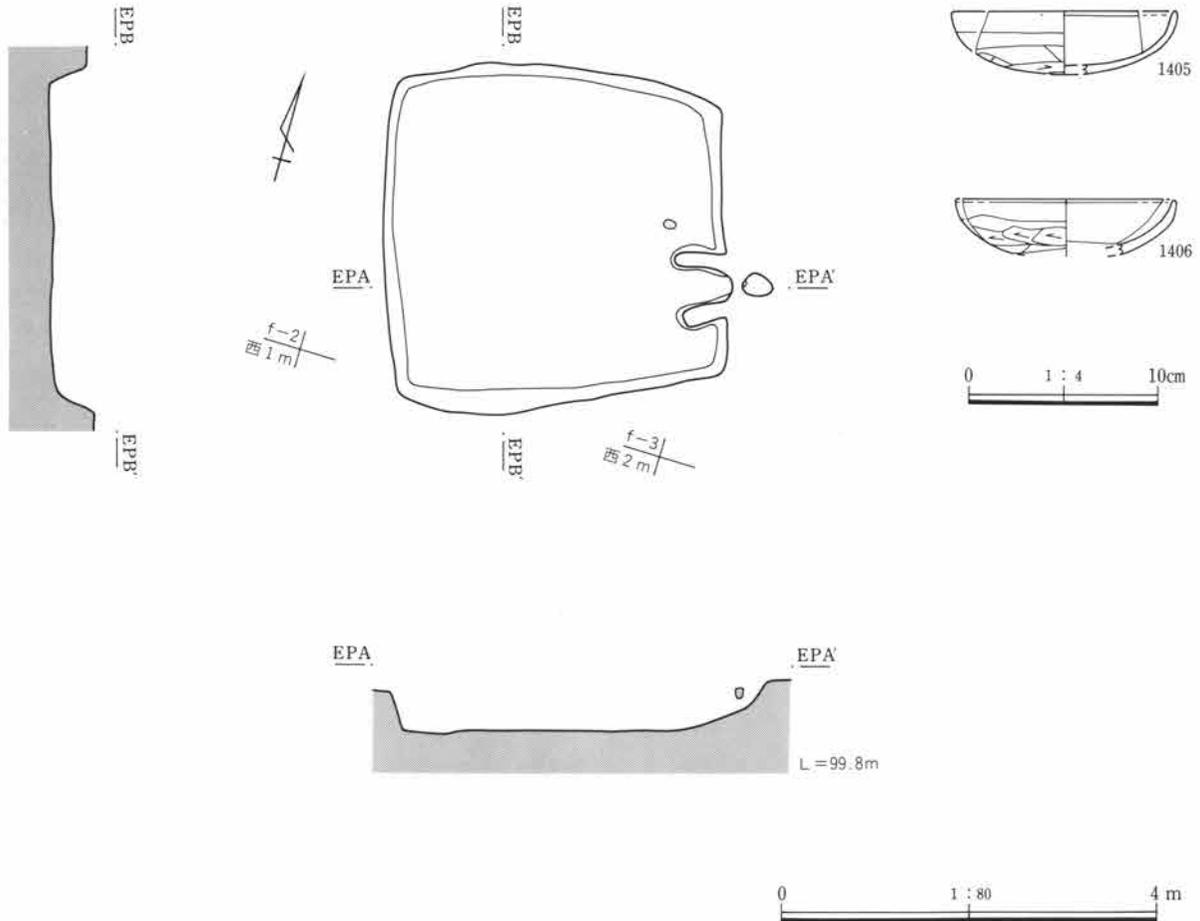
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 60点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。須恵器甕形土器胴部破片が1点、中央部床面直上で出土したが、図示できなかった。図示した土師器杯形土器(1405・1406)はいずれも埋没土中の出土遺物である。

(遺物観察表：33頁)

所見 埋没土中の出土遺物から、8世紀前半の住居と推定される。



第145図 10区1号住居と出土遺物

10区2号住居

位置 c・d-1・2グリッド 写真 PL51
重複 なし

形状 長軸を南北方向にする台形を呈する。西壁長4.8mに対して東壁長6.0mであり、東壁の北側・南側両方に張り出す台形である。周壁はやや中央部が膨むように掘られている。隅は丸い。規模は長軸5.70m、短軸5.27mである。

面積 23.67㎡ 方位 N-87°-E

床面 遺構確認面から64cm掘り込んで床面となる。床面のうち、中央部は硬化していたが、周辺部は軟弱で床面をとらえられない部分もあった。

竈 東壁ほぼ中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は85cm、左側は88cm、袖の基部が残存していた。焚口幅は56cmである。燃焼部の壁は良く焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ13cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、緩やかに煙道部へ傾斜していた。

周溝 南壁から西壁の南部と、西壁北部から北壁西部にかけての二カ所に幅20~30cm、深さ10~13cmの周溝が検出された。南壁の周溝がとぎれている位

置は、P2・P3の位置に対応している。南壁東端では、壁が南へ屈曲しているのに対して、周溝は東方向へ直線で掘られていた。この不一致は、住居南壁の掘り過ぎに起因する可能性も考えられる。

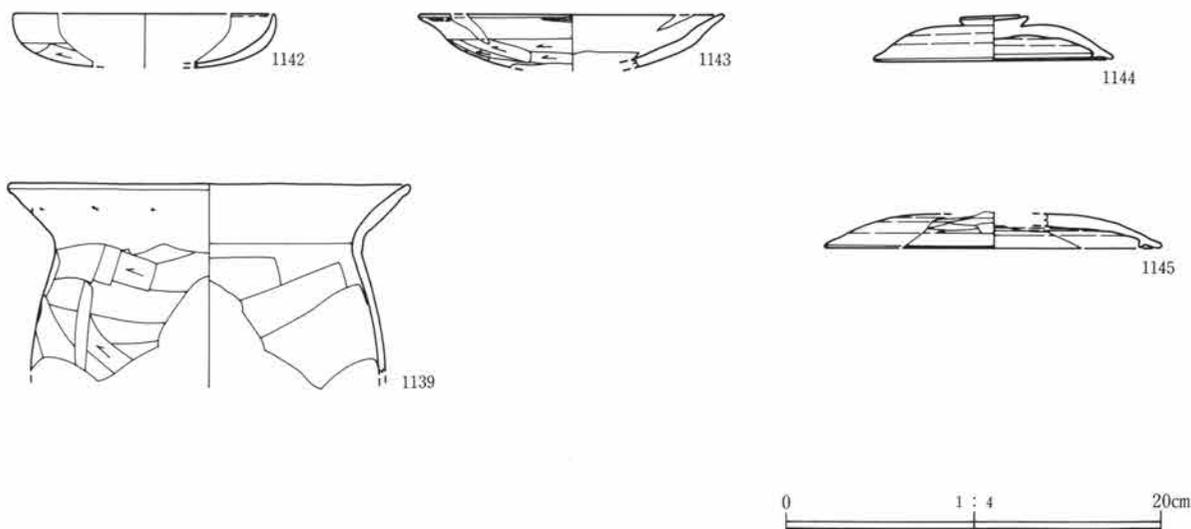
柱穴 4本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:57×66×76cm、P2:67×100×30cm、P3:64×65×72cm、P4:65×67×67cmである。主柱穴のうちP2・P3は住居対角線上に位置するが、P1・P4は対角線からやや内側にずれている。各主柱穴を結んだ形は長方形を呈する。

貯蔵穴 検出されなかった。

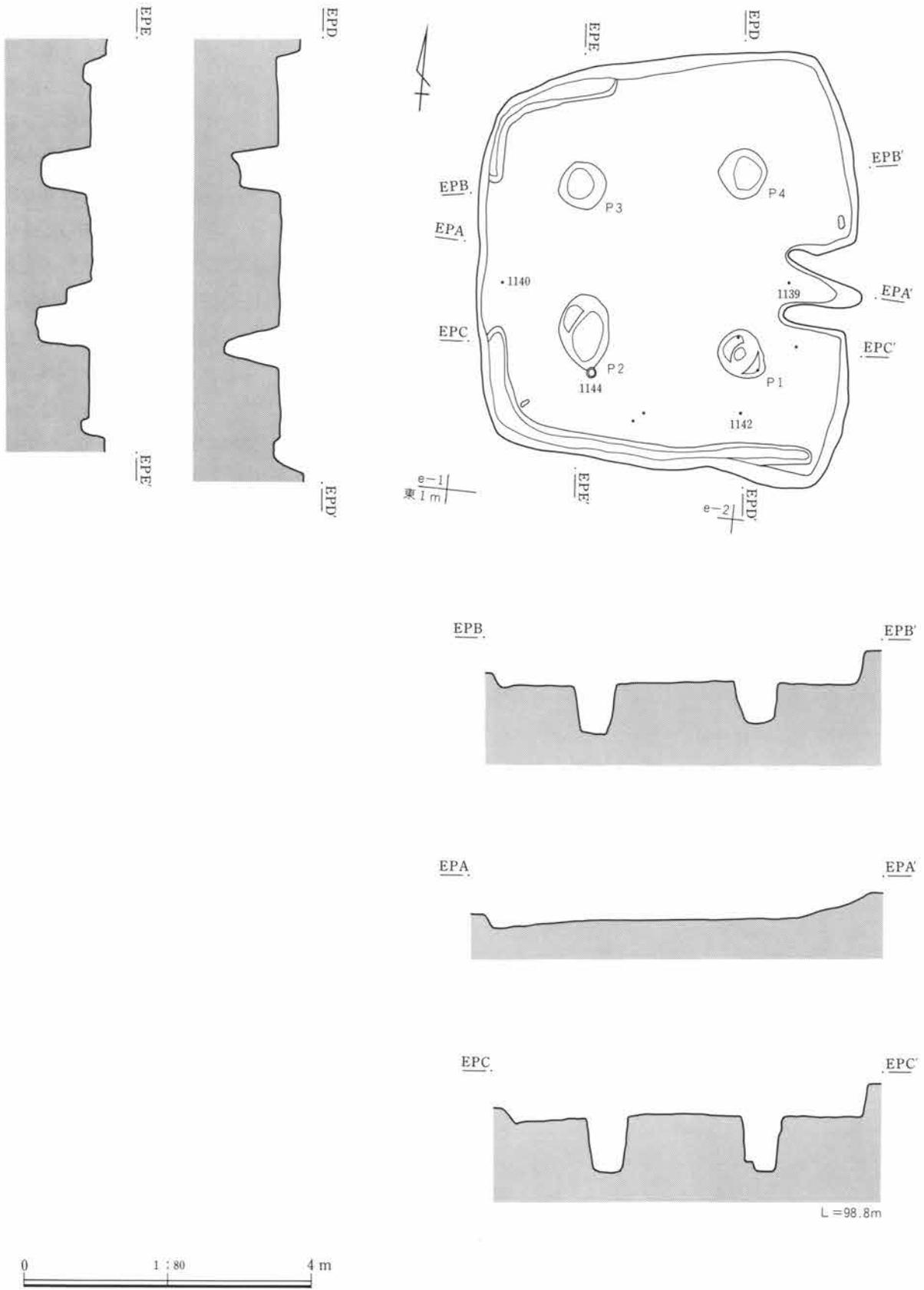
遺物 240点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。図示した土師器甕形土器(1139・1140)や土師器杯形土器(1142)、須恵器蓋形土器(1144)は、比較的床面近くの出土遺物である。1140が床面から10cmほど上位に出土したのを除けば、他の図示した遺物は床面直上から出土した。

(遺物観察表:33頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



第146図 10区2号住居出土遺物



第147図 10区2号住居

10区3号住居

位置 d-3・4グリッド 写真 PL52

重複 なし

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。隅は比較的角張っている。規模は長軸4.22m、短軸3.50mである。

面積 10.76m² 方位 N-98°-E

床面 遺構確認面から71cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らで、中央部は硬化していた。住居南西部の床面には、直径20cmほどに焼土化している部分があった。周辺に方形の板状礫が検出されたが、金属関連遺物はなく、鍛冶等の施設とは特定できなかった。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は40cm、左側は26cm、袖の基部が残存し

ていた。焚口幅は51cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ65cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで煙道部へ緩やかに傾斜していた。

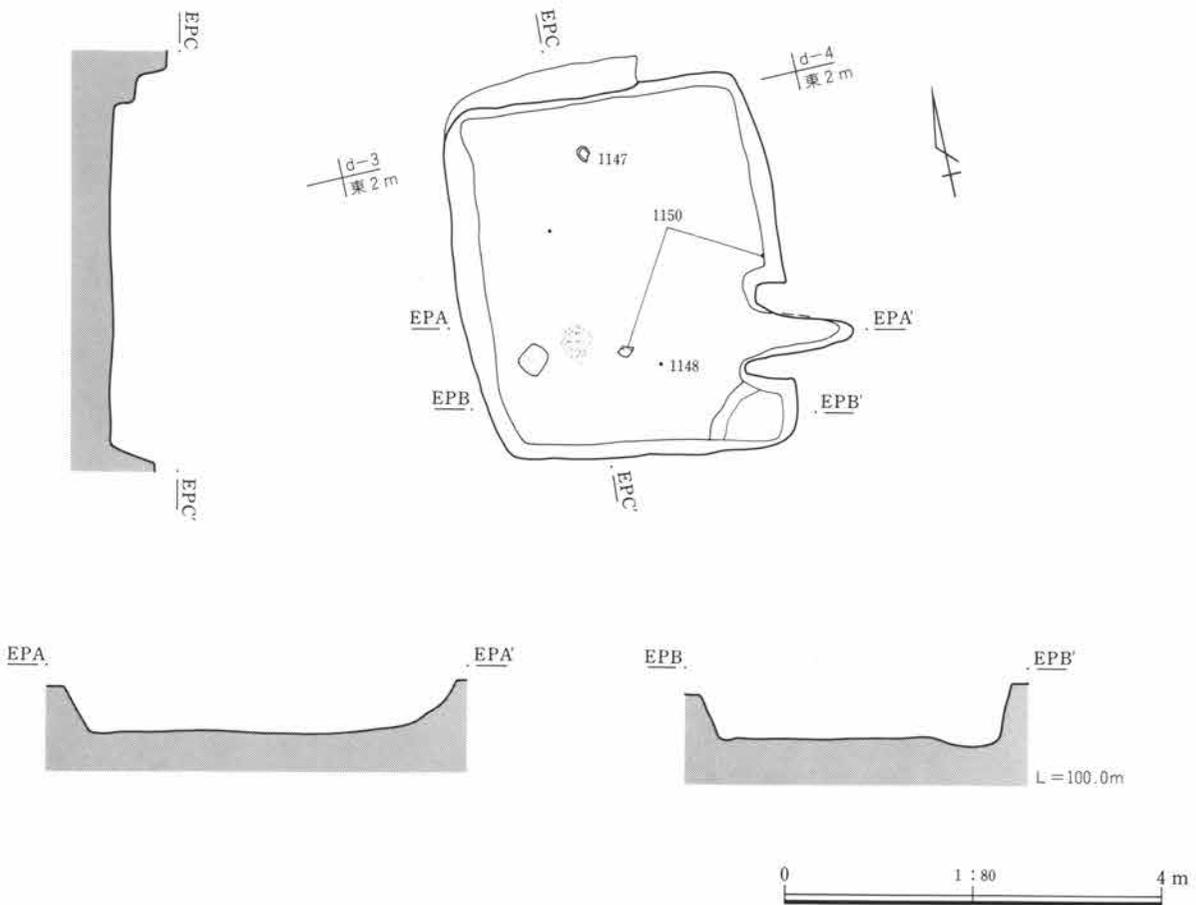
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

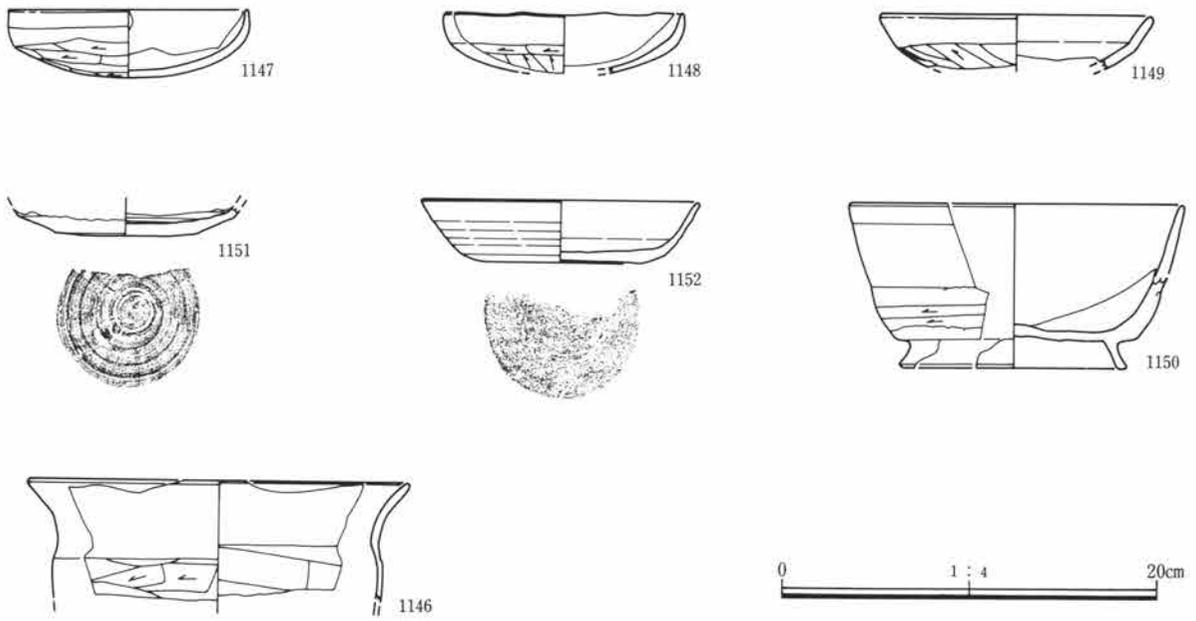
貯蔵穴 南東隅に、長径0.87m、短径0.71m、深さ0.65mの不正楕円形の貯蔵穴が検出された。

遺物 110点余りの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。図示した須恵器碗形土器(1150)は、東壁際床面直上と中央部の床面から浮いた遺物が接合した。北部では土師器杯形土器(1147)がほぼ完形で、床面上6cmのところ出土した。(遺物観察表：33・34頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



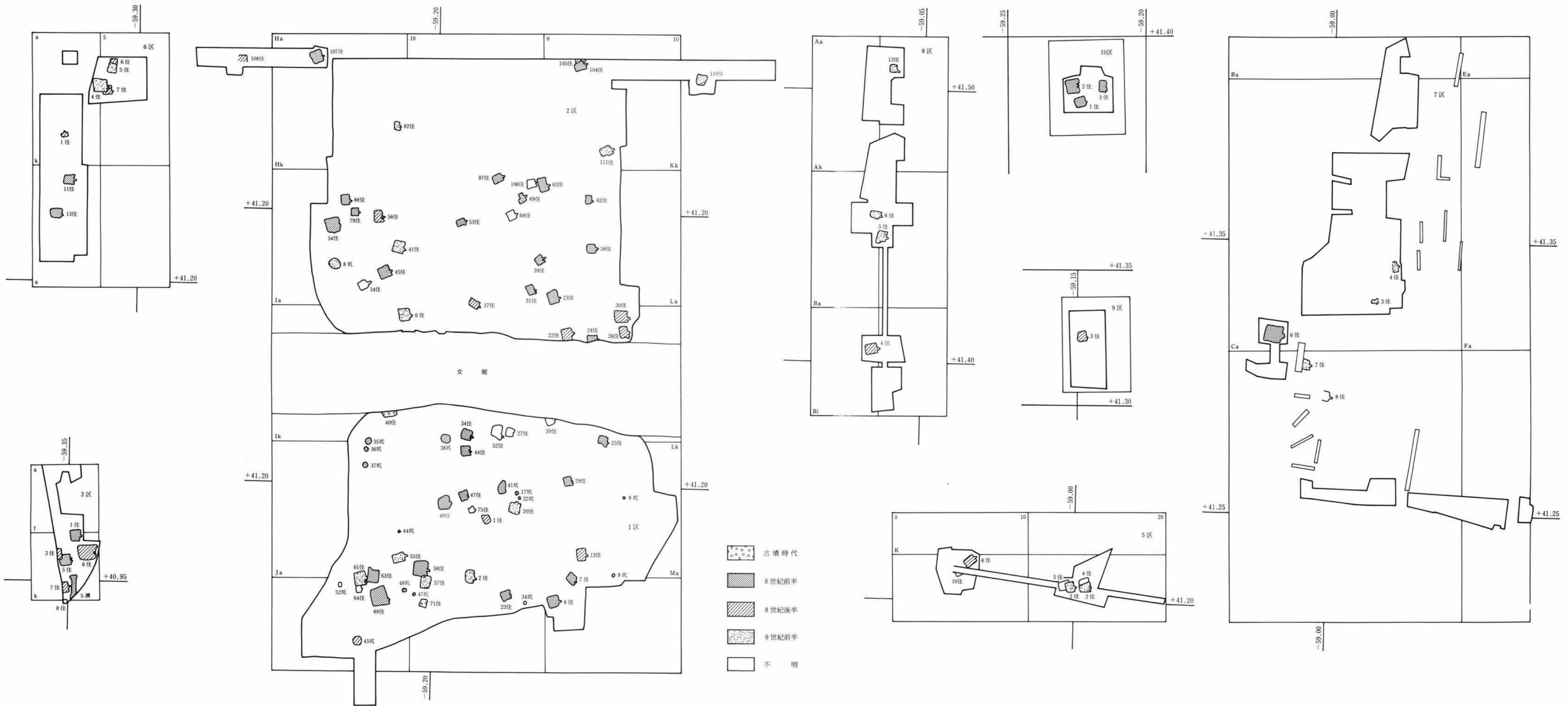
第148図 10区3号住居



第149図 10区3号住居出土遺物



荒砥上ノ坊遺跡1・2区では、赤城山南麓の低台地に古墳時代初頭から平安時代の住居群が検出された。この低台地を貫くように、12世紀初頭に大用水堀《女堀》が掘削される。東方から1・2区を望む。



第150図 歴史時代前半期の遺構の位置

第4章 調査の成果

1. 調査の成果と課題

荒砥上ノ坊遺跡は、群馬県中央部赤城山南麓の低台地に営まれた複合集落遺跡である。発掘調査では11の発掘区に、縄文時代前期から中世にわたる住居や土坑・溝が検出された。縄文時代の遺構は前期の住居3軒のみで、発掘区内で検出された遺構は古墳時代初頭まで途絶えるが、古墳時代初頭以降平安時代後期までの住居は継続的に検出された。

本年度の整理作業は、このうち8世紀と9世紀前半の遺構を対象に実施し、歴史時代前半期として報告した。本章では、調査および整理事業の成果と課題のうち、遺構分布・鉄生産遺構を中心にまとめ、住居と重複して検出された地割れ跡について触れる。さらに、個別の分析結果として鉄製遺物の金属学的解析を掲載する。

遺構分布 荒砥上ノ坊遺跡は、古墳時代初頭からこの地点に定着した農耕集落遺跡である。発掘区内の状況に限れば、古墳時代の居住域は6世紀後半に住居の分布傾向が変化し、中央の低台地全体に広がるようになる。さらに、7世紀後半には東西の台地にも居住域が拡大したことが判明している。奈良時代以降11世紀までの191軒の住居は、4区を除く10カ所の発掘区に分布しており、基本的には7世紀後半の居住域の占地傾向を継続している。そして、さらに

台地内部へと住居の分布が広がるようになる。

第3表は、本書で報告した8世紀～9世紀前半の住居86軒、土坑14基、井戸2基、溝1条の、時期と検出された発掘区の一覧表である。このうち本項では、最もまとまって居住域を調査した1・2区の遺構分布の変遷をみておきたい。なお、1・2区以外の調査区は道水路部分の狭く部分的な調査であったので、本項での遺構分布の分析からは除外しておく。

1・2区は中央低台地の南端近くに位置し、古墳時代を通じて居住域であった。歴史時代にも住居が全体に分布し、古墳時代後期の遺構分布を踏襲している。近年の土器編年では四半世紀ごとの土器の分類が可能である。しかし、出土遺物の多寡によっては全遺構の時期をその編年で決定できない。したがって本文では半世紀ごとの時期区分で記述した。しかし、荒砥上ノ坊遺跡でも住居の出土土器に新旧を示す型式差を看取することができる。中央低台地の1・2区の遺構分布をこの四半世紀の時期区分(未確定)でみると、第151図のようになる。

8世紀第1四半期と考えられる住居は、1・2区全域に分布するが、西半分に多く分布し、東部には少ない。また、2区西端に並んでいる35～37号土坑も8世紀前半でも古い様相の土器を出土する。この時期の住居は、これらの土坑群をとり巻くように分布しているようにも見える。第2四半期と考えられ

第3表 荒砥上ノ坊遺跡の歴史時代前半期遺構一覧表

地形単位	発掘区	8世紀				9世紀	
		前半		後半		前半	
中央低台地	8区			住居1軒		住居3軒	
	9区			住居1軒			
	10区	住居3軒					
	1・2区	住居28軒	土坑14基	住居10軒	土坑1基	住居10軒	土坑1基
	6区	住居2軒		住居3軒		住居2軒	
西台地	4区						
	3区	住居2軒	溝1条	住居3軒			
	11区						
東台地	7区	住居1軒				住居3軒	
	5区			住居1軒		住居2軒	

第4章 調査の成果

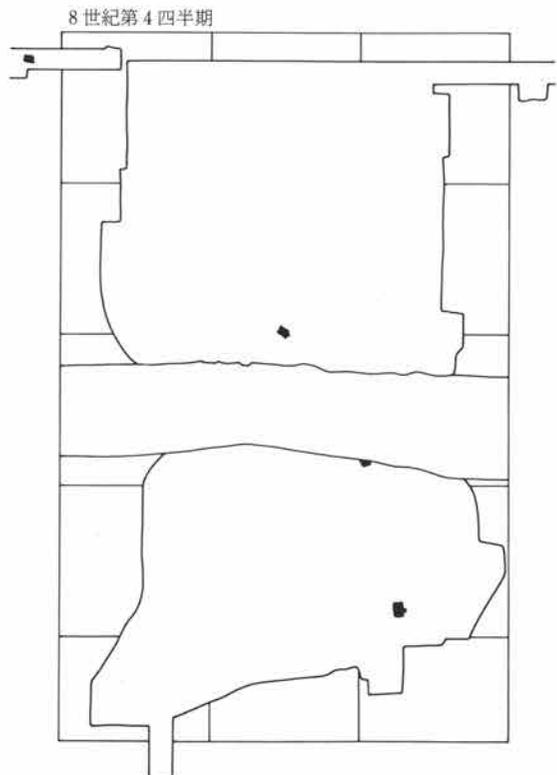
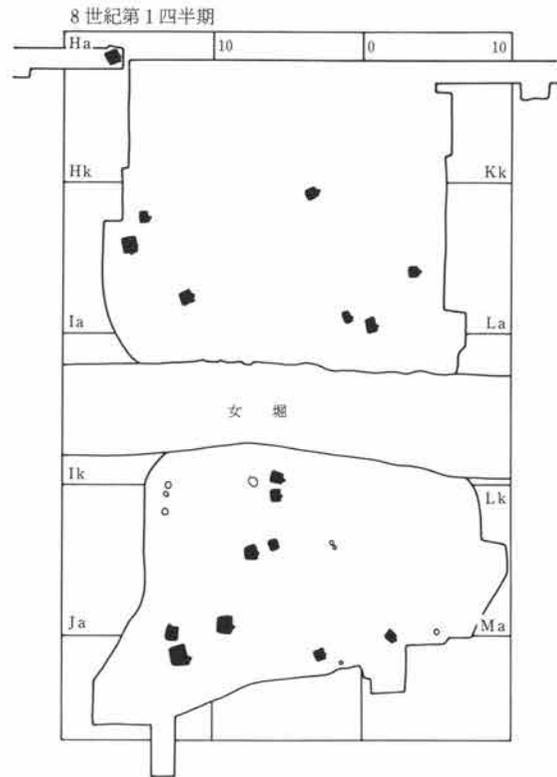
る住居は、1・2区の東半分が多く、土坑群をとり囲んだ8世紀初頭の住居群の外縁部に分布域をやや動かしている。

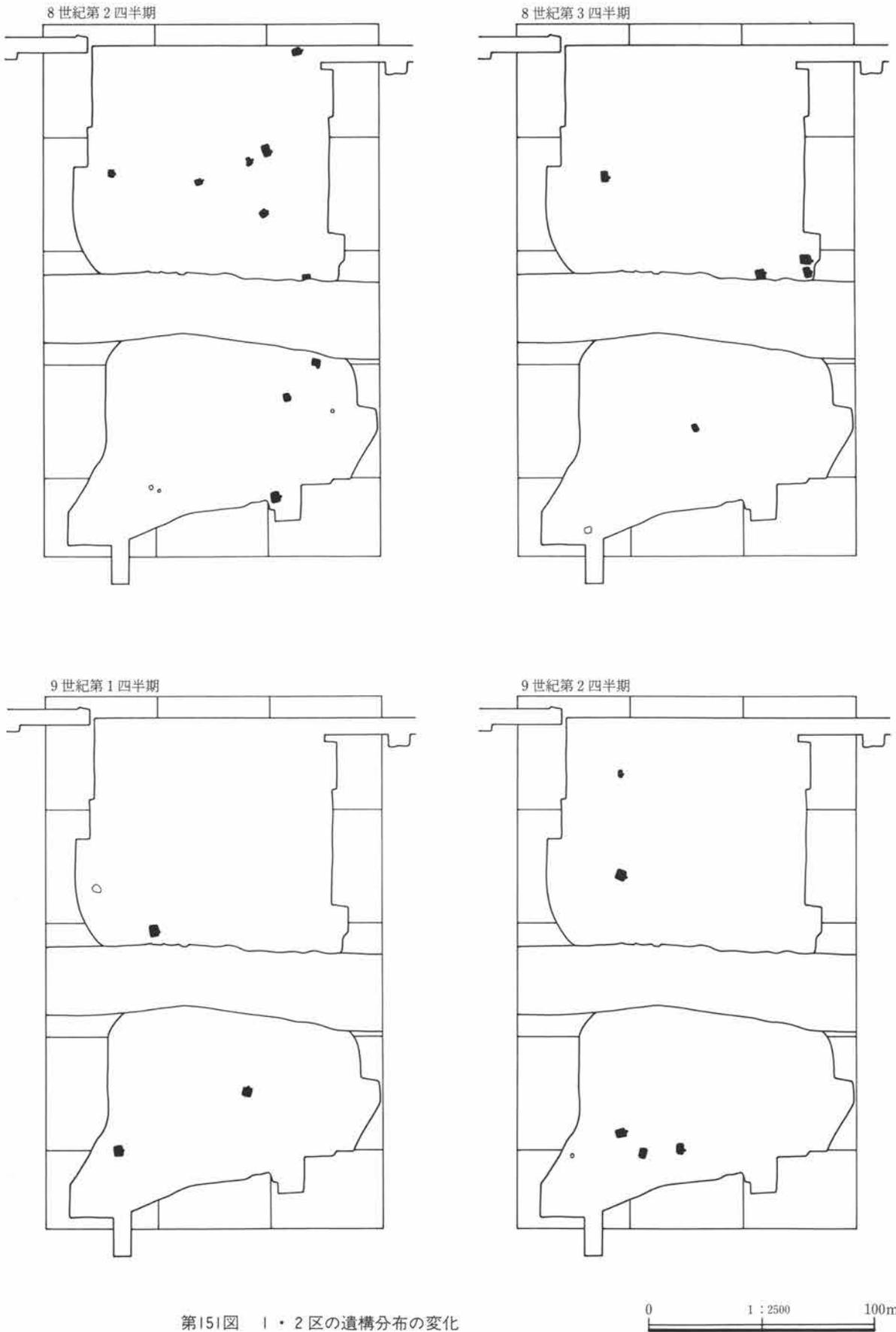
8世紀後半になると、住居の数はほぼ半分減り、第3・第4四半期とも東部にやや偏った分布を示す。これに対して9世紀前半の住居は低台地の西半分に分布するようになり、前の時期と対照的である。

1区と2区は、本遺跡の発掘区の中では広く調査できた地点であるが、低台地上の居住域をすべて確認したわけではない。1区と2区の間は、中世末期に掘られた上幅30mほどの女堀によって壊されているし、低台地の南端部には未調査区がある。また、中央低台地の東西端はほぼ調査されたが、居住域の北限が9区・10区とどう関連するか等未確認に終わった部分も少なくない。このような限られた調査結果からではあるが1・2区の遺構分布には2つの大きな変化が認められる。ひとつは8世紀第3四半期で、住居数の減少と東半への偏在である。もう1つは9世紀初頭の西半への移動である。これは前代の廃屋を避けたものとも考えられるが、この時期に何らかの土地利用の変化があったことが推定できる。他の集落遺跡の動向も含めて考える必要がある。

8世紀前半に機能していたと考えられる1区35～38号土坑は低台地西縁辺に偏在している。周辺には同時期の遺構が無い空白部があり、その周囲に土坑を取り巻くように住居がつくられている。土坑の機能は明確にし得ていないが、特に1区35号土坑は、多量の杯形土器が出土し、中には「☆」形の刻書のあるものも含まれている。8世紀後半から9世紀前半にかけても同型式の土坑は、低台地西縁に1基ずつ検出されており、集落内での継続的な機能が考えられよう。今後、類例を集め、更に検討していきたい。

鉄生産遺構 西側台地縁辺にある3区6号住居(8世紀後半)は、鍛冶遺構を伴う住居であったことが鉄生産関連遺物の金属学的解析から明らかになった。調査では鍛冶遺構の実態をつかむことはできなかったが、出土した鉄生産関連遺物の精査と、金属学的





第151図 1・2区の遺構分布の変化

分析によって、鍛冶遺構の存在と生産工程についての具体的な内容が明確になったのである。

本住居で出土した鉄生産関連遺物は、多くの鞆羽口・炉体の破片と鉄滓で、遺物の精査によってさらに鉄塊系遺物と鍛造剥片さらに鉄鏃を1点ずつ確認した。これらの鉄生産関連遺物の分析から、本住居では①外部から供給された銑鉄素材を砂鉄を使って脱炭し、鋼を製造していたこと、②製造された鋼を用いて鉄器を製作していた可能性が高いことが判明した。これらの鉄塊系遺物・鉄滓・鉄製品には、金属学的解析から成分的に矛盾がなく、素材加工から製品生産まで、本住居でおこなっていたことが推定されたのである。

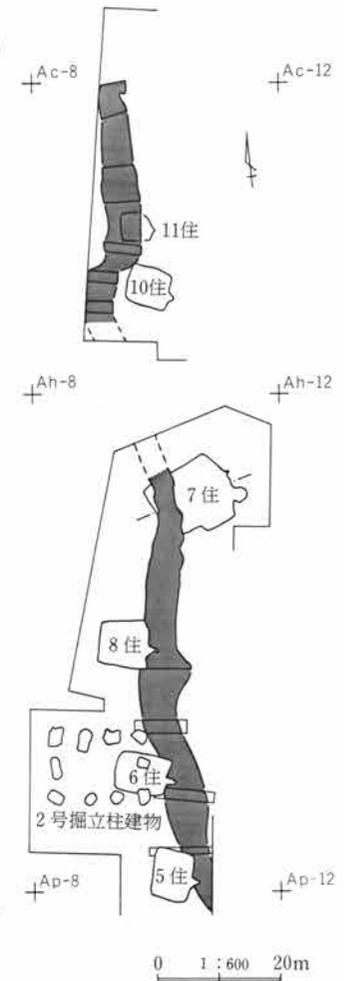
また、同じ8世紀後半の3区3号住居で出土した刀子は、銅含有量の高い素材が使われていることが判明した。現段階では、銅含有量の多い鉄鋼石の国内採掘や、国内銅山での8世紀における操業は確定されていない。この時期の鉄素材の流通に関して、大陸をも視野に入れる必要があることが提起された。

赤城山南麓には、粕川村三カ尻西遺跡の箱形炉(7世紀後半)をはじめとして、大胡町八ヶ峯遺跡群(8世紀)・乙西尾引遺跡、宮城村片並木遺跡で製鉄遺構が確認されている。鉄器素材としての銑鉄塊が流通しているとすれば、これらの在地の製鉄遺跡と、本遺跡例のような集落内の鍛冶遺構での鋼精練および製品生産、さらに集落内での消費を一連のものとして考える視点が必要であろう。今回の解析からはさらに大陸をも視野に入れる必要も示唆されている。なお、次項に(財)岩手県文化振興事業団に研究委託した出土鉄の分析報告書を掲載した。担当していただいた赤沼英雄氏には、鉄生産や分析資料の選択について多くの御教授をいただいた。記して感謝する次第である。

地割れ 人為的な遺構とは異なるが、8区で南北に発掘区を縦断する地割れを検出した。地割れは、幅2.0~2.4m、延長約66mにわたり確認できた。断面はほぼ箱形を呈するが、両側に陥没による小溝がで

きている。近年、赤城山南麓では弘仁9(818)年の地震災害と考えられる土石流や地割れ・噴砂などが遺跡から検出されている。本遺跡8区で検出された地割れも、重複する住居の年代から考えると、この地震の影響と考えられる。重複する遺構のうち、7世紀代の7号・11号住居は地割れによって壊されている。また、5・6・8・10号住居は地割れ埋没土の上面で平面形を確認した。特に5・6号住居は9世紀第2四半期の土器を出土しており、818年の地震災害後から数~数10年の間につくられた住居と考えられる。

以上のように、残された課題も多いが、8~9世紀前半の集落の調査および整理事業のまとめとしたい。課題は、続刊の中で述べていきたいと考えている。



第152図 8区の地割れ

註

1. 岩手県立博物館赤沼英雄氏の御教示による。
2. 粕川村教育委員会1992年発掘調査
穴沢義功1994「古代東国の鉄生産」『古代東国の産業—那須地方の窯業と製鉄業—』栃木県立なす風土記の丘資料館第2回企画展栃木県教育委員会
3. 大胡町教育委員会1986『上大屋・樋越地区遺跡群』
1994『乙西尾引遺跡・西天神遺跡・柴崎遺跡』
4. 宮城村教育委員会1969『片並木遺跡』
5. 新里村教育委員会1991『赤城山南麓の歴史地震』

荒砥上ノ坊遺跡出土鉄製遺物の 金属学的解析

岩手県立博物館 赤 沼 英 男

1 はじめに

群馬県前橋市荒砥上ノ坊遺跡では、古墳時代初頭から平安時代にあたる住居跡群が発見された。8世紀後半に比定される住居跡からは不明確な焼土遺構とともに、ふいごの羽口、鉄滓、鉄塊系遺物、それに製品鉄器が検出され、鉄に関する生産活動がなされていたことが明らかになったが、活動の内容については不明であった。

こうした状況をふまえ財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の依頼により、製品鉄器や鉄素材の流通の状況と遺跡内での生産活動の実態の解明をはかることを目的として、同遺跡から出土した遺物の金属学的解析を行った。その結果、8世紀後半には、銑鉄を素材とし脱炭材として砂鉄を使用するという、鋼精錬によって製造された鋼を用いて製作されたとみなすことのできる鉄器の流通が認められ、併せて、遺跡内でも鋼精錬操作がなされていた可能性の高いことが明らかになった。

これまでの出土遺物の金属学的解析によって、静岡県浜松市に立地する天王中野遺跡¹⁾、青森県百石町に立地する根岸(2)遺跡²⁾でも銑鉄を素材とする鋼の流通が行われていたことが指摘されている。奈良時代から平安時代初頭の鉄器製作が広域的な銑鉄の流通に依拠していた可能性のあることを示すものであり、律令体制下での鉄・鉄器生産の見直しにつながる重要な情報をもたらしたといえる。

2 分析資料

分析を行った資料は住居跡内より出土した鉄器、鉄塊系遺物(表面が一様に赤錆で覆われ、金属鉄またはその錆が相当量残存しているとみなすことのできる資料)、鉄滓の合計9点である。資料の名称、資料番号、検出遺構、ならびに推定年代を表1に、鉄器の外観を図1に、鉄塊系遺物、鉄滓のそれを図6、図7に示す。なお、鉄器の中でNo.2鉄鏃は鉄生産関連遺構が検出された3区6号住居跡から見いだされており、住居跡内で製作された可能性のあることが指摘されている。

表1 分析を行った資料の概要

No.	資料名	資料番号	出土遺構	時代
1	刀子	M27	3区3号住居	8世紀後半
2	鉄鏃	M30	3区6号住居	〃
3	鉄塊系遺物	M31	〃	〃
4	鉄滓	M32	〃	〃
5	流出滓a	M33	〃	〃
6	流出滓b	M34	〃	〃
7	流出滓c	M35	〃	〃
8	鑿	M28	1区36号土坑	8世紀
9	刀子	M7	1区20号住居	9世紀前半

注) 年代の推定は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団小島 敦子氏による。

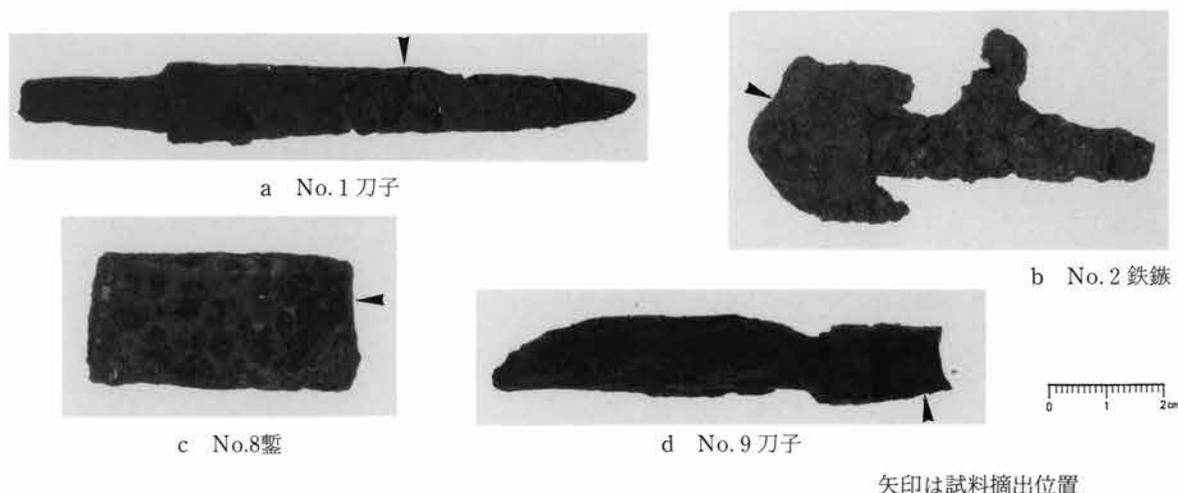


図1 分析を行った鉄器の外観

3 分析用試料の調整

鉄器からの分析用試料の摘出は、資料全体の形状を損ねることのないよう細心の注意を払いながら、ダイヤモンドカッターを使って行った。摘出した試料をさらに2分し、大きい方の試料片を組織観察に供し、もう一方を化学成分分析用試料とした。なお、試料を摘出した部位はエポキシ樹脂で補修し、原形に復した。

鉄塊系遺物と鉄滓についてはダイヤモンドカッターで2つに切断した。つぎに鉄滓の切断面を注意深く観察し、錆層に鉄滓が付着している領域がないかどうかを調べた。該当する領域が認められた場合にはその部分ともう一方の切断面の適合箇所から、そうでない場合にはそれぞれの切断面の中心部分から試料片を抜き出した。このようにして準備した2つの試料片を組織観察と化学成分分析に供した。

4 分析方法

(1) 分析用試料の調整

組織観察用試料片は樹脂で固定し、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した後、金属顕微鏡を用いて組織の観察を行った。なお、錆化の進行と水溶性成分の溶出を考慮し、研磨は水を一切使用しない方法により行った。また、地金の製造方法を推定するうえで重要と判断された鉄器中の非金属介在物（鋼を製造する過程で分離・除去することができずに残った異物）、および鉄塊系遺物に付着する鉄滓ならびに鉄滓中の鉱物については、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA）によりそれらの組成を決定した。

化学成分分析用試料片はエチルアルコール、つぎにアセトンで洗浄し、十分に乾燥した。錆試料と鉄滓は粉碎しテフロン分解容器に、メタル試料は直接テフロン分解容器に秤量した後、酸を使って溶解した。このようにして調整した溶液を誘導結合プラズマ発光分光分析（ICP-AES）に供し、T.Fe, Cu, Mn, P, Ni, Co, Ti, Si, Ca, Al, Mg, Vを定量した。なお、鉄塊中のC, S, 鉄滓中のM.Fe, FeOについては、それぞれ燃焼高周波一赤外吸収法、重クロム酸カリウム滴定容量法により求め、Fe₂O₃は計算によった。

5 分析結果

5-1 鉄器の化学組成

鉄器から抽出した試料片の化学組成を表2に示す。No.8 鑿のT.Feは96.50%であるが、それに比べ他の3点の鉄器はいずれも61%台と低いレベルにある。前者についてはほぼ健全なメタル試料が、後者については相当に錆化が進んだ試料が分析されたことがわかる。

No.1 およびNo.9 刀子からはCu分がそれぞれ0.063%, 0.056%検出されている。さらにNo.1 刀子についてはP分が0.105%含有されている。これら2点の刀子には異種金属の付着は認められないことから、分析されたCu分はもとの健全な地金に含有されていたとみなすことができる。一方、P分については埋蔵環境からの富化の可能性がある⁴⁾。この場合同じ埋蔵環境下にあったとみなすことのできる他の鉄器のP分と比較検討を行うことにより富化の可能性の有無を検討することになるが、No.1 刀子と同じ遺構面から出土した他の鉄器に関する分析値がないためその方法による検討は困難であった。ここではもとの健全な地金の中に相当量のP分が含有されていた可能性のあることを指摘するにとどめておく。なお、No.1 刀子には通常の砂鉄よりも高レベルのCo分が含まれている。

5-2 鉄器から抽出した試料片のマイクロ組織

鉄器から抽出した試料片のマクロおよびマイクロ組織を図2に示す。No.9 刀子から抽出した試料片の内部は錆化によってほとんどが失われており、わずかに周縁部の錆層を残すだけである。図2 a₂は図2 a₁領域A部のマイクロ組織であるが、内部に金属光沢を呈する微細な線状の結晶Cm、もしくはその欠落孔によって構成される島状の組織が観察される。結晶Cmはもとの健全な鋼におけるパーライト中のセメンタイトと判定できる⁵⁾。この結晶もしくはこの結晶の欠落孔によって構成される領域をもとの健全な地金におけるパーライトとし、錆化による結晶の膨張を無視すると、図2 a₃に示すその分布状況から、もとの健全な地金は炭素含有量0.2~0.3%の鋼とみなすことができる。図2 b₂(図2 b₁の枠で囲んだ部分のマイクロ組織)から明らかのように、同様の組織はNo.2 鉄鏃にも認められ、同様にして炭素含有量0.1~0.2%の鋼と評価できる。

表2 鉄器の分析結果

No.資料名	化 学 成 分 (%)												マイクロ組織	N.M.I
	T.Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V		
1 刀子	61.60	0.063	0.003	0.105	0.025	0.046	0.034	0.790	0.067	0.263	0.046	0.001	no	T
2 鉄鏃	61.60	0.019	0.002	0.022	0.011	0.029	0.024	0.755	0.064	0.146	0.022	0.004	Cm(0.1~0.2)	T
8 鑿	96.50	0.012	0.002	0.029	0.013	0.021	0.003	0.010	0.011	0.005	<0.001	<0.001	—	W,M
9 刀子	61.40	0.056	0.002	0.055	0.023	0.036	0.004	0.916	0.056	0.019	0.011	<0.001	Cm(0.2~0.3)	no

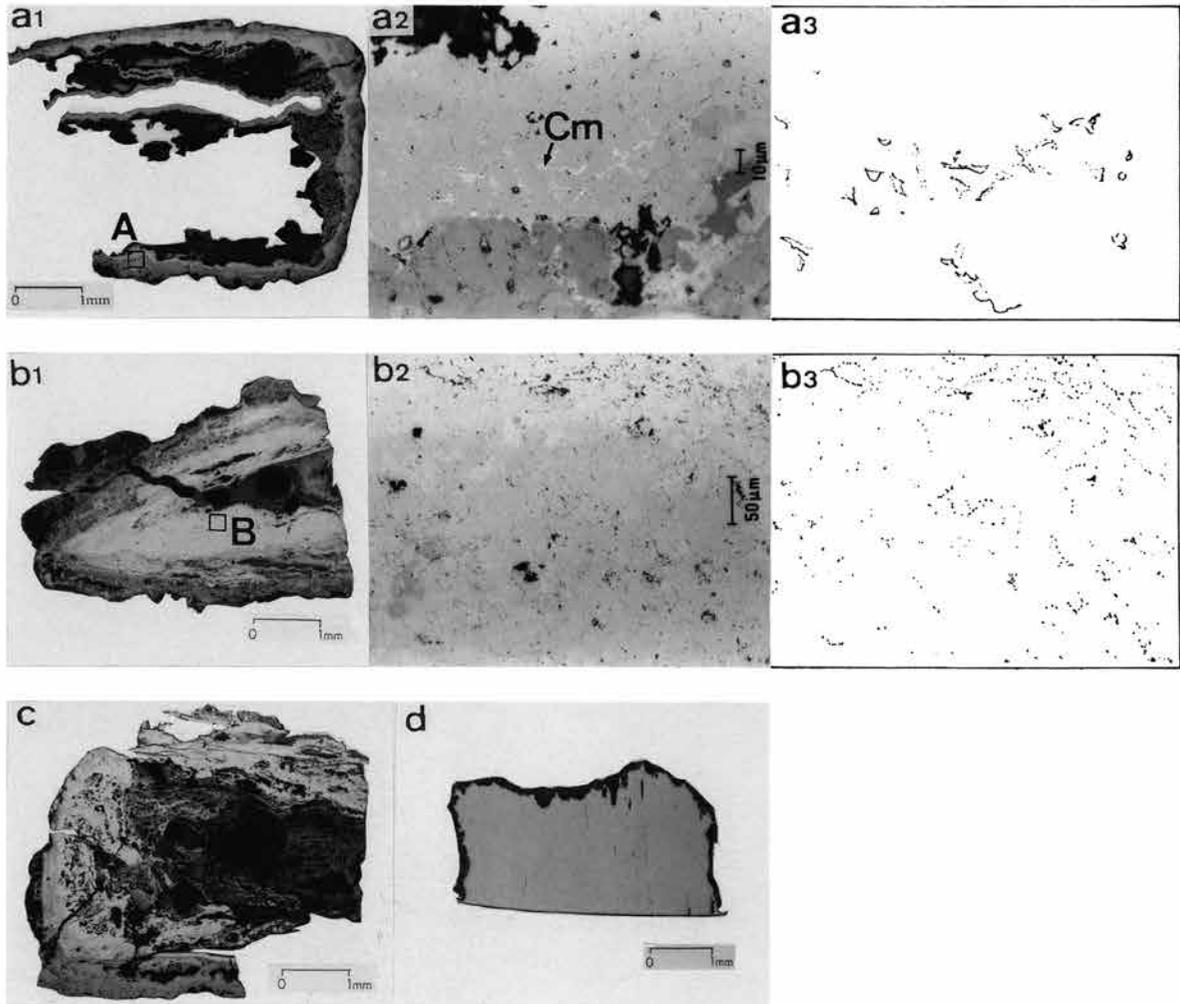
注1) 分析はICP-AES法による。

注2) ーは分析せず、Cmはセメンタイトもしくはその欠落孔、Cmのカッコ内の数値はマイクロ組織から推定される炭素含有量、noは見いだされず。

注3) N.M.Iは非金属存在物組成、Tはチタン化合物、Wはウスタイト(理論組成: FeO)、Sはガラス質けい酸塩、Mはマトリックス。

第4章 調査の成果

なお、No.8 鑿については酸で腐食させることによりもとの健全な地金の組織を観察することが可能となるが、腐食による非金属介在物の喪失を考慮し今回は見合わせた。また、No.1 刀子にはもとの健全な地金の状態を推定できる組織を見いだすことができなかった。



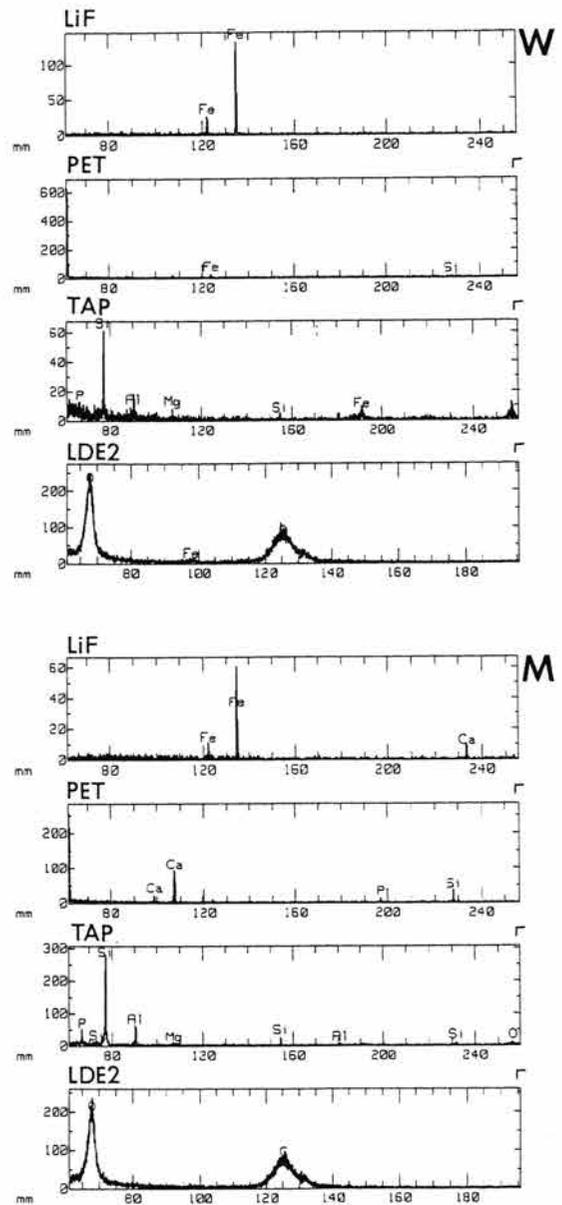
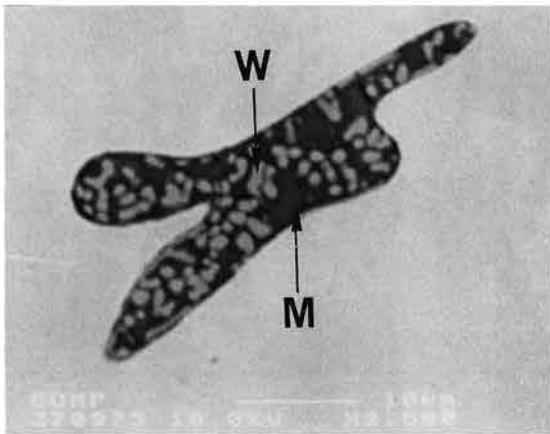
a₁・a₂・a₃: No.9 刀子 b₁・b₂・b₃: No.2 鉄鋸
 c: No.1 刀子 d: No.8 鑿
 ミクロ組織はマクロ組織の枠で囲んだ内部を観察したものである。

図2 鉄器から抽出した試料片の組織観察結果

5-3 鉄器に見いだされた非金属介在物組成

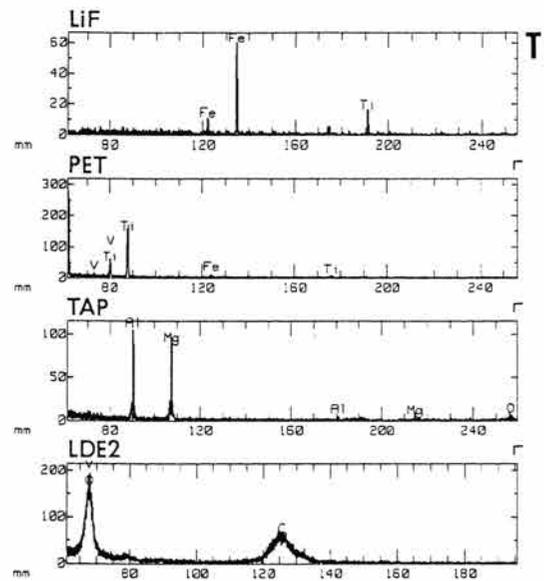
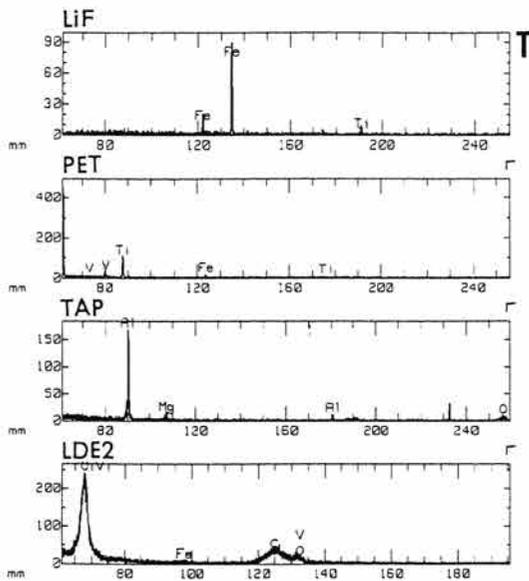
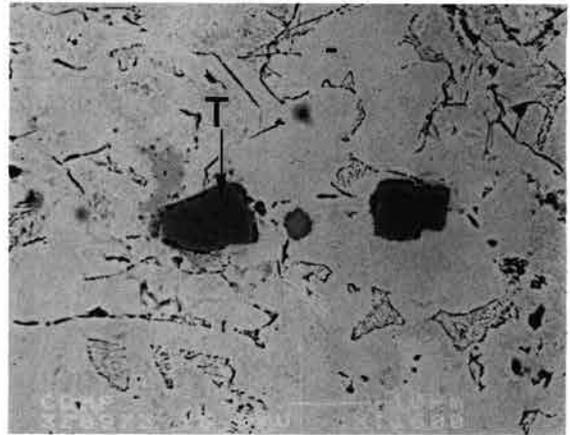
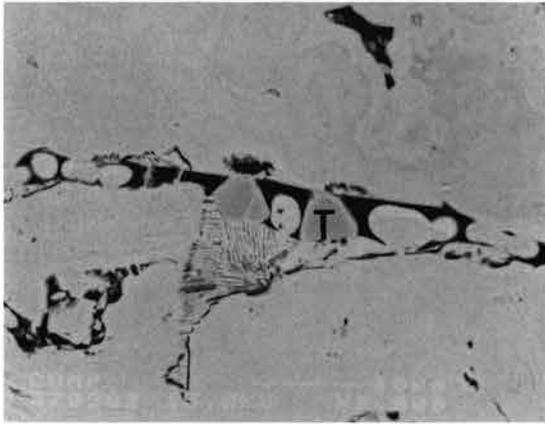
No.8 鑿には薄層状を呈した非金属介在物(鋼の製造過程で除去することができずに残った異物)が多数観察され、その多くは灰色の粒状結晶Wと黒色領域Mによって構成されていた。代表的なものをEPMAにより分析した結果が図3であるが、化合物WにはFeと酸素(O)が高濃度に含有されておりウスタイト(理論組成: FeO), 黒色領域MはFe, Si, Ca, Al, Mg, Pを含むマトリックスと判定される。

No.1 刀子とNo.2 鉄鏃にはいずれにも暗灰色の角状化合物Tが見いだされ、EPMAによる分析によってFeO-TiO₂-Al₂O₃-V₂O₅-MgO系のチタン化合物と同定できた(図4, 図5)。なお、No.9 刀子については錆化が著しく、摘出した試料片には非金属介在物を見いだすことができなかった。



SEI: 2次電子像,
COMP: 反射電子像(組成像),
W: ウスタイト(理論組成 FeO),
M: マトリックス。

図3 No.8 鑿から摘出した試料片に見いだされた非金属介在物のEPMAによる分析結果



COMP：反射電子像（組成像），
T：チタン化合物。

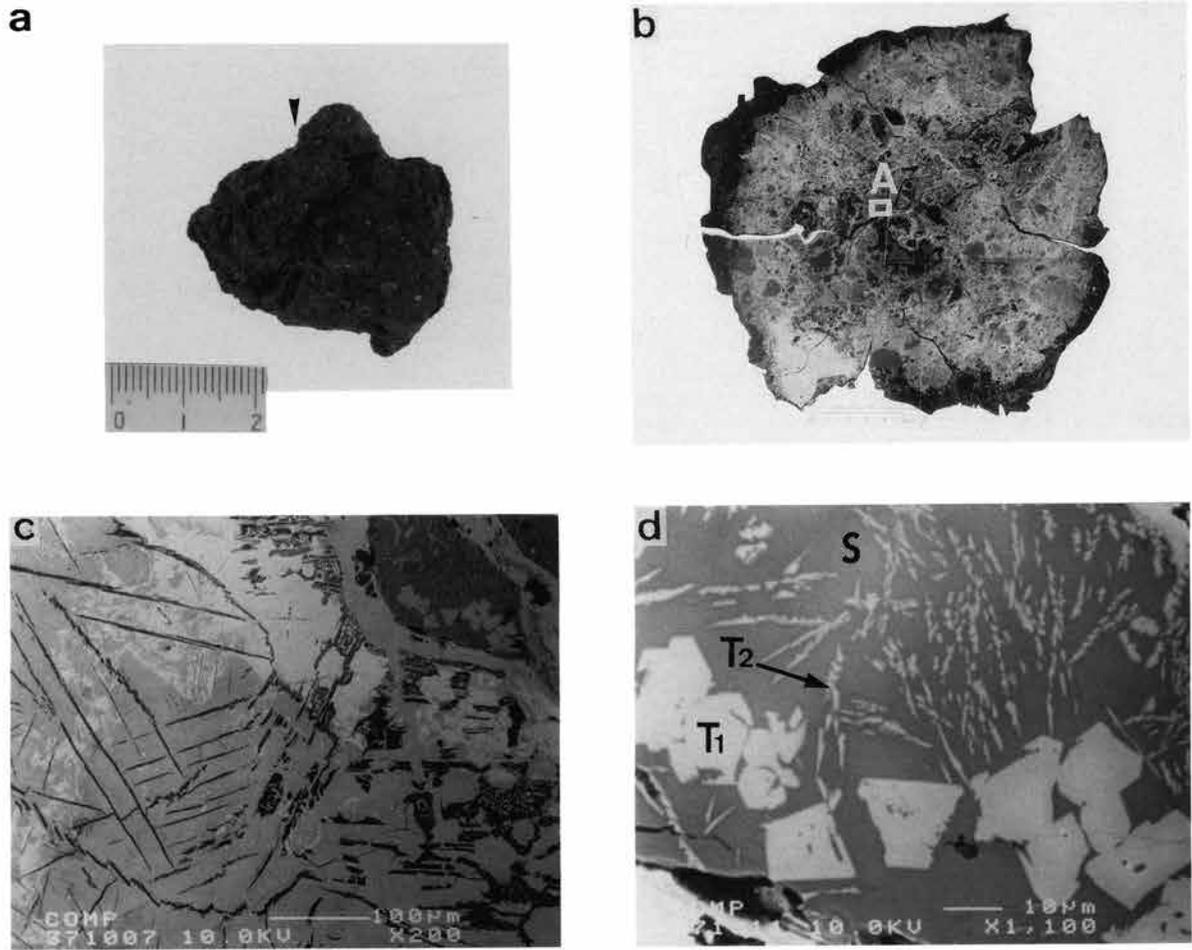
COMP：反射電子像（組成像），
T：チタン化合物。

図4 No.1 刀子から抽出した試料片に見いだされた非金属介在物のEPMAによる分析結果

図5 No.2 鉄鏝から抽出した試料片に見いだされた非金属介在物のEPMAによる分析結果

5-4 鉄塊系遺物と鉄滓の化学組成

表3に鉄塊系遺物，表4に鉄滓の化学組成を示す。No.3鉄塊系遺物の Fe_2O_3 は69.09%であり，分析を行った試料片のかなりの部分が錆によって構成されていたものと推測される。Cu分，Ni分，Co分はいずれも0.05%未満である。No.4，No.5，No.6鉄滓のT.Feは43~54%にあり，No.4鉄滓についてはFeO分が58.58%を占める。 SiO_2 分， Al_2O_3 分もそれぞれ17~44%，4~12%にあることから，これら3点の鉄滓はその大半がウスタイト，FeO- SiO_2 系化合物，およびガラス質けい酸塩によって構成されていたものと推定される。No.7鉄滓のT.Feは11.70%とNo.4~No.6鉄滓に比べ低レベルにある反面， SiO_2 は71.21%と高含有量をとる。主としてガラス質けい酸塩からなる試料とみなすことができる。



- a: 外観, 矢印は資料切断位置。
- b: マクロ組織。
- c, d: bの領域A部, cの枠で囲んだ部分のEPMAによる分析結果。
T₁, T₂はチタン化合物, Sはガラス質けい酸塩

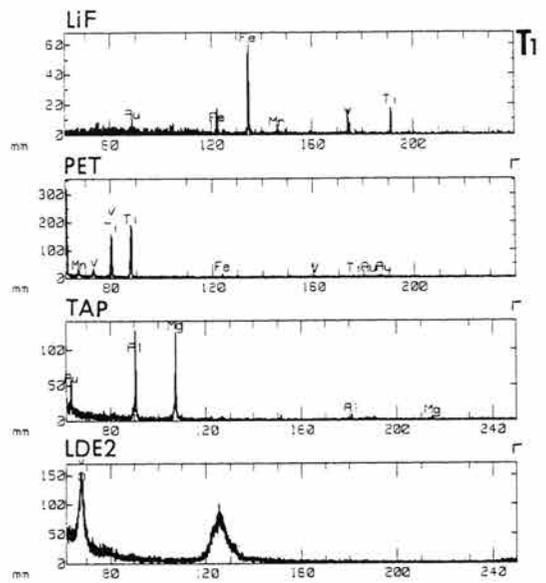


図6 No.3鉄塊系遺物の外観と組織観察結果

表3 鉄塊系遺物の化学組成 (%)

No	T.Fe	M.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	Cu	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg
3	54.74	0.28	7.90	69.04	0.01	0.02	0.02	0.17	3.15	0.42	1.30	0.31

注) T.Fe, M.Fe, FeO, はクロム酸カリウム滴定容量法, 他はICP-AES法による。

表4 鉄滓の化学分析

No	資料名	化 学 成 分 (%)													CaO+MgO		鉱 物 組 成		
		T.Fe	M.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	Cu	Mn	P ₂ O ₅	Ni	Co	TiO ₂	SiO ₂	CaO	Al ₂ O ₃	MgO	V ₂ O ₅		SiO ₂	Al ₂ O ₃
4	鉄滓	51.67	0.28	58.58	8.46	—	—	—	—	2.99	17.48	1.76	4.88	1.94	—	0.212	0.758	W,F,T,M	
5	流出滓 a	43.00	—	—	—	0.002	0.137	1.17	0.002	0.004	2.18	43.68	3.36	11.19	2.26	0.166	0.129	0.502	W,F,O,T,H,M
6	流出滓 b	53.40	—	—	—	0.004	0.133	0.577	<0.001	0.008	2.81	33.20	3.13	6.31	1.43	0.296	0.137	0.723	W,T,F,M
7	流出滓 c	11.70	—	—	—	0.005	0.139	0.674	<0.001	0.006	0.631	71.21	2.09	10.93	1.83	0.038	0.055	0.359	S

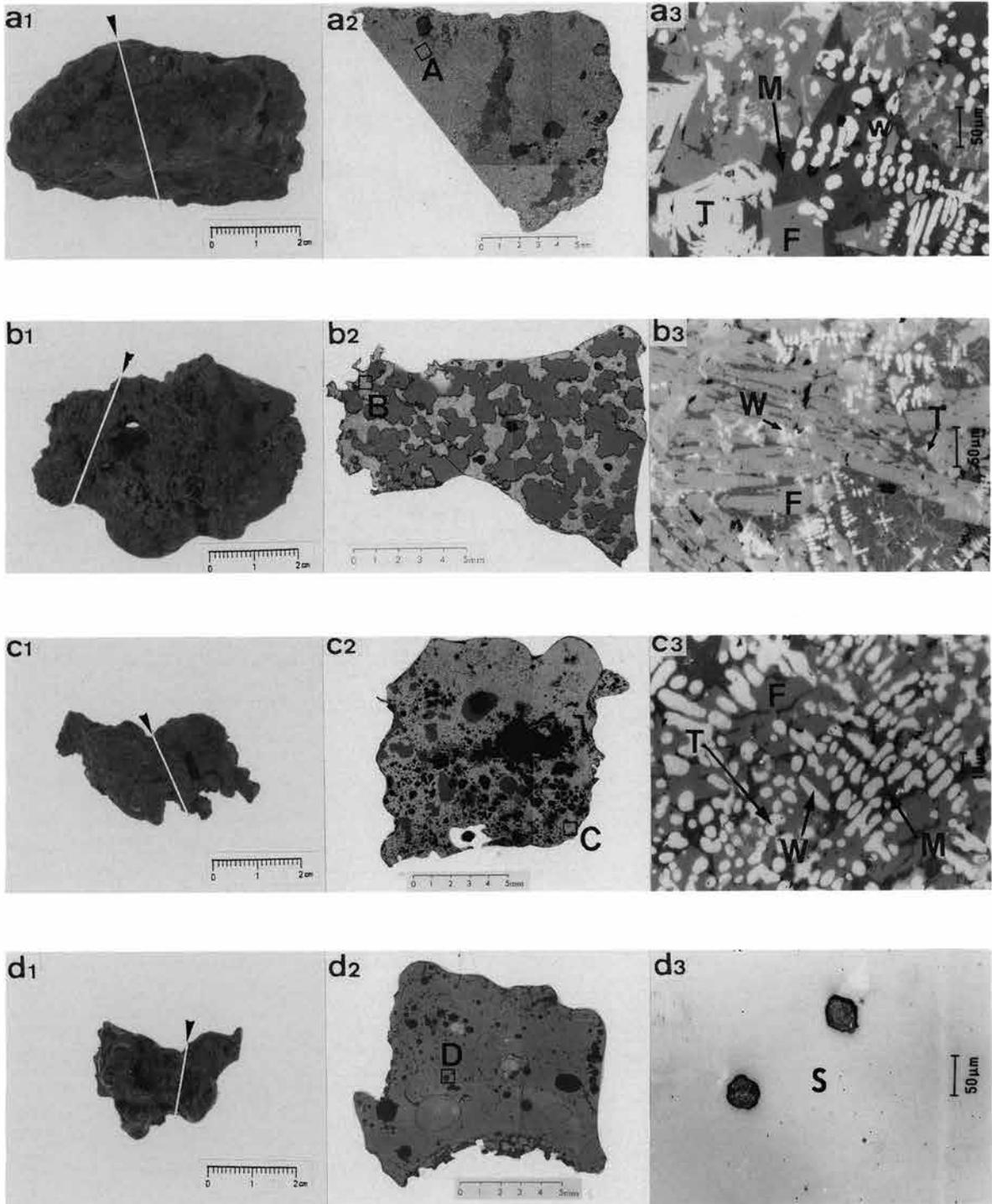
注1) T.Fe, M.Fe, FeO, はクロム酸カリウム滴定容量法, 他はICP-AES法による。

5-5 鉄滓のマクロおよびマイクロ組織

No.3 鉄塊系遺物 (図6 a) から摘出した試料片のマクロ組織 (図6 b) から, この試料は錆層の中に鉄滓が貫入したものであることがわかる。錆層にはいたるところに, 図6 c (図6 a 領域A部のマイクロ組織) に示す初析セメンタイト (PCm) が欠落して生じたと推定される組織が観察され, さらに, 灰色の角状化合物 (T₁) と柱状化合物 (T₂) からなる鉄滓がその組織に付着していた。E PMAによる分析によって化合物T₁, T₂はいずれもFeO-TiO₂-Al₂O₃-V₂O₅-MgO系のチタン化合物 (T₂の方がT₁に比べTi濃度が高い) であることが確かめられ (図6 d), それらは黒色のFeO-SiO₂-Al₂O₃-CaO-K₂O-MgO-P₂O₅系のガラス質けい酸塩によってとり囲まれていた。この分析結果から, No.3 鉄塊系遺物は過共析鋼に鉄滓が貫入した資料であることが判明した。

No.4 鉄滓の表面は赤褐色をした錆層と黒褐色のガラス化した鉄滓によって覆われていた。図7 a₃に示すマイクロ組織 (図7 a₂の領域A部) には, 灰色の粒状化合物 (W), 灰色のチタン化合物 (T), 暗灰色の化合物 (F) が残存しており, E PMAによる分析によってそれぞれウスタイト (理論組成FeO), FeO-TiO₂-Al₂O₃-MgO系のチタン化合物, FeO-MgO-SiO₂系化合物と同定された。

No.5 流出滓 a (図7 b₁) は黒褐色のガラス化した試料で, 表面には一様に空隙がみられる。図7 b₂のマクロ組織もこの試料が多数の空隙を含んだ鉄滓であることを示している。図7 b₃によると, 結晶Fがマイクロ組織のほとんどを占め, ところどころに灰色の粒状結晶W, 灰色の結晶Tも認められる。図8のE PMAによる分析結果によれば, 結晶FはFeO-MgO-SiO₂系の化合物, 結晶Wはウスタイトであり, ウスタイトの粒界にFeO-TiO₂-Al₂O₃-V₂O₅系のチタン化合物Tが析出している。そして, 一部のチタン化合物と結晶FにはそれぞれFeO-Al₂O₃系化合物HとFeO



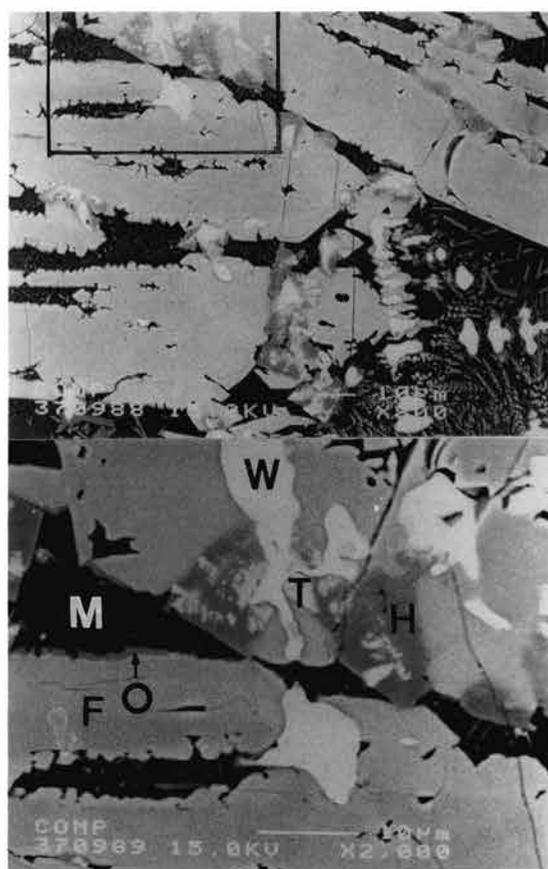
a₁・a₂・a₃: No. 4 鉄滓 b₁・b₂・b₃: No. 5 流出滓 a
 c₁・c₂・c₃: No. 6 流出滓 b d₁・d₂・d₃: No. 7 流出滓 c
 外観の矢印は試料の切断位置, マクロ組織の枠で囲んだ部分はマイクロ組織位置。
 T: チタン化合物 W: ウスタイト F: FeO-MgO-SiO₂系化合物
 M: マトリックス

図7 分析を行った鉄滓の外観と組織観察結果

-CaO-SiO₂系化合物Oが付着している。また、各結晶のまわりはFe, Si, Al, Ca, K, Na, P, Oを含有するマトリックスによって取り囲まれている。

No.6 流出滓b (図7 c₁) のマクロ組織 (図7 b₂) には、一様に灰色の粒状化合物 (W) が析出している。図7 c₃のマイクロ組織観察結果によると、化合物Wの中には灰色の化合物Tが、また、その周辺には暗灰色の化合物Fがみられ、化合物WとFの回りは微細な結晶が混在したマトリックス (M) が取り囲んでいる。なお、EPMAによる分析によって化合物Wはウスタイト、化合物TはFeO-TiO₂-Al₂O₃-V₂O₅系のチタン化合物、化合物FはFeO-MgO-SiO₂系化合物であり、マトリックスにはFe, Si, Al, Ca, K, Na, Oが含有されていることが確認された。

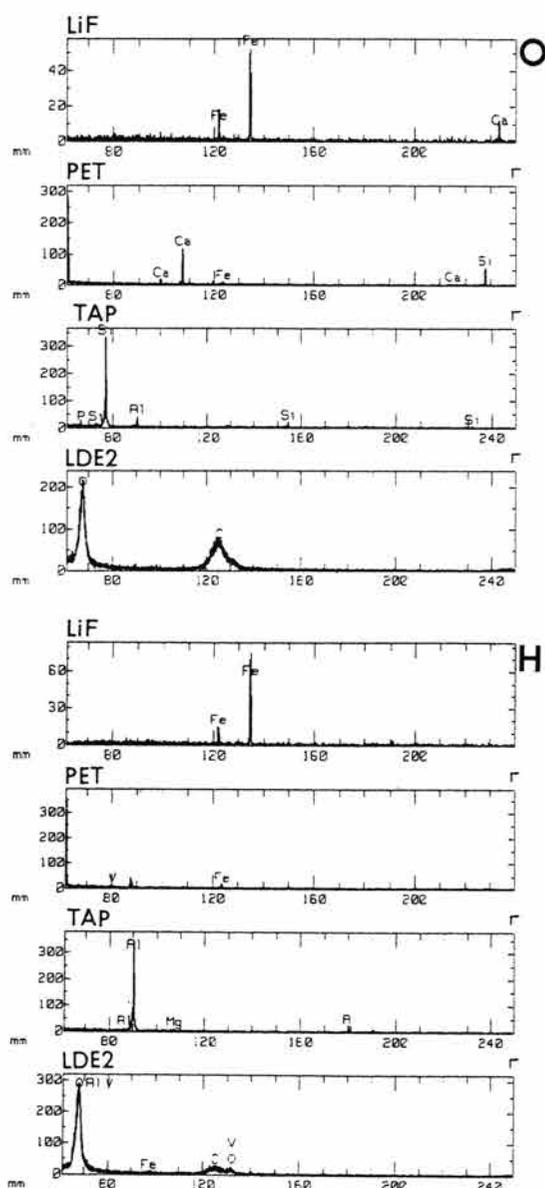
No.7 流出滓c はガラス質けい酸塩からなる。また、いたるところに空隙も観察される (図7 d₂,



下の写真は上の枠で囲んだ部分を高倍で観察したもの。

- COMP：反射電子像（組成像），
 F：FeO-MgO-SiO₂系の化合物，
 O：FeO-CaO-SiO₂系の化合物，
 T：FeO-TiO₂-Al₂O₃-V₂O₅系のチタン化合物，
 H：FeO-Al₂O₃系の化合物，
 W：ウスタイト，M：マトリックス

図8 No.5鉄滓のEPMAによる分析結果



d₃)。5—4で述べたように、No 5 鉄滓からは70%を越えるSiO₂分と10%以上のAl₂O₃分が検出されているが、組織観察の結果も化学成分分析結果と合致する。

6 鉄器地金の材質

鉄器は鋼を素材とする鍛造鉄器と銑鉄を素材とする鑄造鉄器の2つに分類される。分析を行った鉄器の中でNo 2 鉄鏃およびNo 9 刀子はそれらの組織観察結果から鍛造鉄器であることが明らかである。No 1 刀子ならびにNo 8 鑿も同様にしてやはり鍛造鉄器と判定される。

ところで、鋼の製造に用いられる原料鉱石として砂鉄と鉄鉱石の2つを挙げることができる。鋼の製造に際し砂鉄が用いられた場合、砂鉄の還元により生成するチタン化合物が鋼に残存する非金属介在物の中に見いだされることになる。そこでNo 1 刀子およびNo 2 鉄鏃の製作に使用された鋼は砂鉄の使用により製造されたとみなすことができるが、No 8 鑿については砂鉄の使用は認められない。なお、No 1 刀子には0.063%ものCu分と0.046%ものCo分が、No 9 刀子には0.056%ものCu分が含有されている。0.05%を越えるCu分、あるいは0.05%程度のCo分が砂鉄に由来する可能性はきわめて低く、脈石中にCu鉱物またはCo鉱物を随伴する鉄鉱石(おそらくは磁鉄鉱)に起因するとみななければならない。

上述の分析結果を総合すると、分析を行った4点の鉄器は地金の材質の上から以下の4つに分類できる。

- 1) 脈石中にCu鉱物とCo鉱物を随伴する鉄鉱石と砂鉄の
両者の使用によって製造された鋼を素材とするもの……No 1 刀子
- 2) 砂鉄の使用によって製造された鋼を素材とするもの……No 2 鉄鏃
- 3) 砂鉄の使用がみとめられないもの……No 8 鑿
- 4) 脈石中にCu鉱物を随伴する鉄鉱石を始発原料として
製造された鋼を素材とし、砂鉄の使用については不明なもの……No 9 刀子

なお、後述に従えば、No 1 刀子は脈石中にCu鉱物とCo鉱物を随伴する鉄鉱石(おそらくは磁鉄鉱)を始発原料として生産された銑鉄を素材とし、脱炭材として砂鉄を使用するという鋼精錬によって製造された鋼により製作された鉄器と解釈できる。また、No 2 鉄鏃のように化学組成上の特徴がみられず、非金属介在物中にチタン化合物が見いだされた鉄器については、それが直接製鋼法により製造されたという前提に立てばただちに砂鉄を始発原料としていたとみなすことができる。しかし、化学組成上の特徴がみられない銑鉄を素材とし、脱炭材として砂鉄を使用する鋼精錬によって製造された鋼を用いて製作された可能性もある。後述のように過共析鋼とチタン化合物を含む鉄滓の検出によって、後者の可能性の高いことが明らかになったわけであるが、ここでは直接製鋼法と間接製鋼法という2つの鋼製造法を考慮し、とりあえず砂鉄の使用という表現をとった。

7 古代ならびに中世における鋼の製造

古代および中世における鋼の製造プロセスにはいまだに不明な点が多く、いくつかの仮説が出されているが、それらを整理すると以下のごとくになる。

- 1) 原料鉱石(砂鉄もしくは鉄鉱石)を還元し鉄を生産する段階

2) 1) で生産された鉄中の炭素量を調整し、目的とする鋼を製造する段階

3) 2) で製造された鋼を素材とし目的とする鉄器を製作する段階

ここではとりあえず1)を製錬、2)を精錬、3)を小鍛冶とする。

1)の製錬によって得られる鉄はその炭素含有量によって銑鉄と鋼の2つに分類される。製錬炉で得られた鉄から極力前者の鋼部分を摘出して含有される不純物を除去するとともに、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そしてその鋼を使って製品鉄器が製作されたとする見方がある⁶⁾。製錬炉で直接に鋼が作り出されるという意味でこの方法は直接製鋼法と呼ばれている。さらに製錬による粗鉄を精製し目的とする鋼を製造するという上述の操作は精錬鍛冶とされている。しかし、ここでいう精錬鍛冶がどのような設備を用いどのようにしてなされたかという点についての具体的な記述はない。不純物の除去と炭素量の増減という複数の操作工程があったと推測されるが、具体的な操作方法が不明である以上、その操作の過程でどのような鉄滓が排出されたのかを論ずることは困難である⁷⁾。

1)の製錬では銑鉄も生産される。銑鉄は再び溶解炉で溶解し、鑄型に注ぎ込むことによって鑄造鉄器となる。また、銑鉄中の炭素を低減させる、すなわち脱炭を行うことによって鋼を得ることもできる。この場合の脱炭の方法としては、半地下式堅型炉もしくは火窟炉の中にあらかじめ用意された銑鉄を投入して炉床部に銑鉄浴を生成させた後、その上から砂鉄、もしくは鉍石粉を投入する方法がとられていた可能性の高いことが鉄生産関連遺構から検出された遺物の金属学的解析結果に基づき指摘されている⁹⁾¹⁰⁾。銑鉄を脱炭して鋼を製造するという方法は間接製鋼法と呼ばれるが、本論では“鋼精錬”という用語を用いることにする。

小鍛冶操作では鍛打・加熱を繰り返して目的とする鉄器への造形が行われるので、鍛打のときは加熱された鋼の表面に生成する酸化鉄(スケール)が剝離(これは鍛造薄片と呼ばれる)する。一方、加熱のときは酸化鉄が半溶融状態になり、火窟炉の底部に溜まる。そこで炉壁材と反応して鉄分に富む半溶融状の鉄滓状物質を生成し、加熱炉の底で固化する。このようにして生成した“椀形状”(供え餅を逆さにした形)の鉄滓状物質が、鉄関連遺跡の発掘調査では小鍛冶滓として扱われている。従って、小鍛冶滓は金属鉄、錆層、ウスタイト(FeO)を主成分とし、他にスケールが炉材と反応した際に生成するFeO-SiO₂系化合物が混在した組成をとるものと推測される。

上述から明らかなように、2)でいう精錬の中には直接製鋼法に基づく精錬鍛冶と間接製鋼法での鋼精錬という2つの異なった概念が存在することがわかる。精錬鍛冶についてはその操作内容をより明確にする必要があると考えられるが、その問題はともかく、ここでは銑鉄を脱炭し鋼を製造するという鋼精錬とは区別して扱うことにしたい。上述を整理すると、図9のごとくなる。

なお、直接製鋼法では製錬によってただちに鋼を得ることができるから、製錬が行われる場所で実際に使用される原料鉍石は鉄鉍石か砂鉄のいずれかであり、両者が混合して使用されることはまずない。一方、間接製鋼法の場合、まず銑鉄が生産され、その銑鉄をもとに鋼が製造される。銑鉄と鋼の製造場所は同じ場合もあるが、生産された銑鉄が他の場所に運ばれ鋼の製造に供されることも考えられる。この場合、脱炭材としては砂鉄と鉄鉍石のうち鋼を製造する所で入手容易なものが利用されることになる。

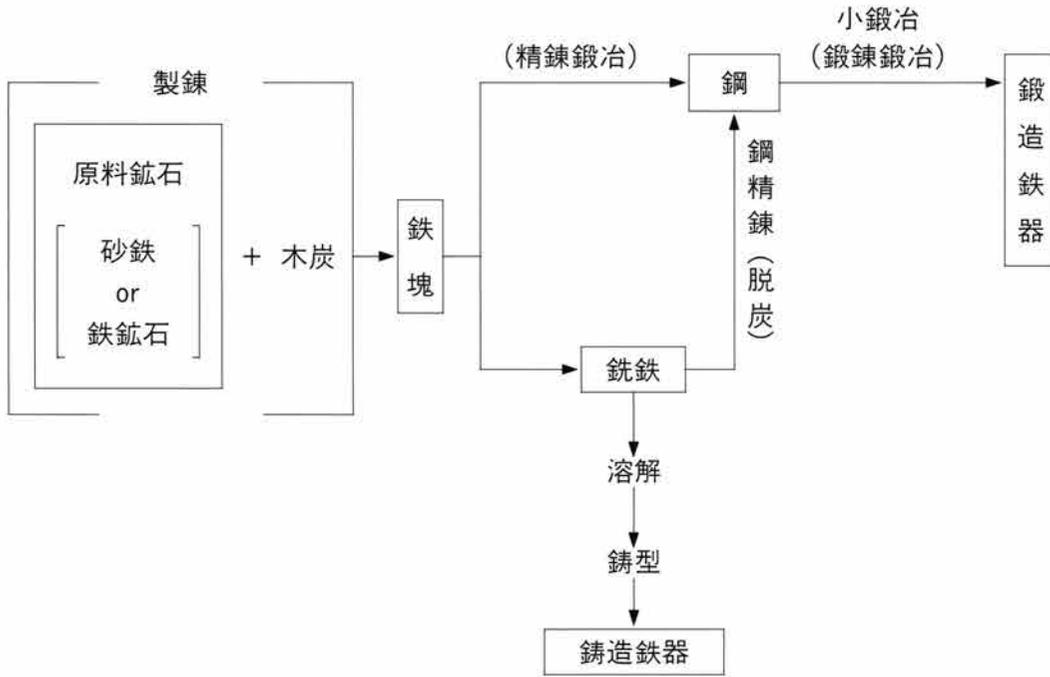


図9 推定される鋼の製造法



図10 3区6号住居跡から検出された鍛造薄片の外観

8 鉄塊ならびに鉄滓組成からみた荒砥上ノ坊遺跡における生産活動

分析を行った鉄滓はいずれも3区6号住居跡から検出されたものである。この遺構からは鍛造薄片が発見されており(図10)、小鍛冶が行われていたことを指摘できる。5点のうちNo.3鉄塊系遺物は、チタン化合物の残存する鉄滓が過共析鋼中に貫入した資料である。No.4, No.5, No.6の3点についてもFeO-TiO₂-Al₂O₃-V₂O₅-MgO系のチタン化合物が見いだされている。砂鉄の使用によって生成した鉄滓とみなしなければならず、これら4つの遺物を小鍛冶操作に伴って排出されたものとして扱うことは困難である。考えられるのは製錬か鋼精錬のいずれかであるが、住居跡内での火窟炉による生産活動を考えた場合、前者を想定することはできない。銑鉄を素材とし、脱炭材として砂鉄を使用する鋼精錬が住居跡内でなされていたとみなすことによって、分析結果の説明が可能となる。No.3鉄塊系遺物は砂鉄を使って銑鉄を脱炭する鋼精錬操作の途中でできた過共析鋼に、鉄滓が付着した資料と解釈される。

分析を行った4点の鉄滓の(CaO+MgO)/SiO₂, (CaO+MgO)/Al₂O₃はそれぞれ、0.055~0.22、0.35~0.76にある。特に、No.4鉄滓については通常の粘土に比べ(CaO+MgO)/SiO₂, (CaO+MgO)/Al₂O₃のいずれもが、他の3点については(CaO+MgO)/Al₂O₃がやや高い値をとる。No.5流出滓aにFeO-CaO-SiO₂系化合物が見いだされたことをふまえれば、銑鉄を脱炭する際にCaO分、MgO分を含む造滓材(鋳滓を融体化するための助材)が使用された可能性について考慮する必要がある。

No.4, No.5, およびNo.6鉄滓のTiO₂分は3%未満であり、残存するチタン化合物のTi濃度も低レベルにある反面、マイクロ組織中に相当量のウスタイトが観察された。また、No.4鉄滓には50%を越えるFeO分が含まれており、鋼精錬の最終段階で排出された鉄滓である可能性が高い。

上述の分析の結果、荒砥上ノ坊遺跡では外部から供給された銑鉄を素材とし、脱炭材として砂鉄を使用する鋼の製造がなされ、その鋼を使って鉄器の製作が行われていた可能性の高いことが明らかになった。なお、No.3鉄塊系遺物の組成から、鋼精錬の素材となった銑鉄中のCu分、Co分、Ni分は低レベルにあったと推定される。また、このような組成の銑鉄を用いて製造された鋼も化学組成上の特徴はみられないことになる。鉄滓や過共析鋼が検出された遺構から出土したNo.2鉄鏃も化学組成上の特徴はなく、一応遺跡内で製造された鋼を用いて製作されたとみることができる。この点については今後製作途上にある遺物の検出でもって明確にする必要がある。一方、砂鉄の使用が認められないNo.8鏃、脈石中にCuもしくはCo鋳物を随伴する鉄鋳石が始発原料として用いられたと推測されるNo.1, No.9刀子は、製品として遺跡内に持ち込まれたとみなければならない。

最後に問題となるのが銑鉄や鍛造鉄器の供給地である。考古学の発掘調査によって、6世紀後半には列島内に製錬技術が定着したことが指摘されている。関東地域においても製錬炉跡とみなすことのできるいくつかの遺構が発見されている。そこで、まず、列島内での供給を考える必要がある。そのためには製錬炉跡が見いだされた遺跡においてどのような組成の鉄が生産されたのかを明確にしなければならない。その上で上述の過共析鋼や鍛造鉄器の製作に使用された鋼の組成との対比を行い、供給地域を絞り込む作業を行う必要がある。

同時に分析を行った鉄器の中には、脈石中にCu鋳物またはCo鋳物を含む鉄鋳石を始発原料として製作されたと推定されるものもある。列島内において銅含有量レベルの高い鉄鋳山としては、

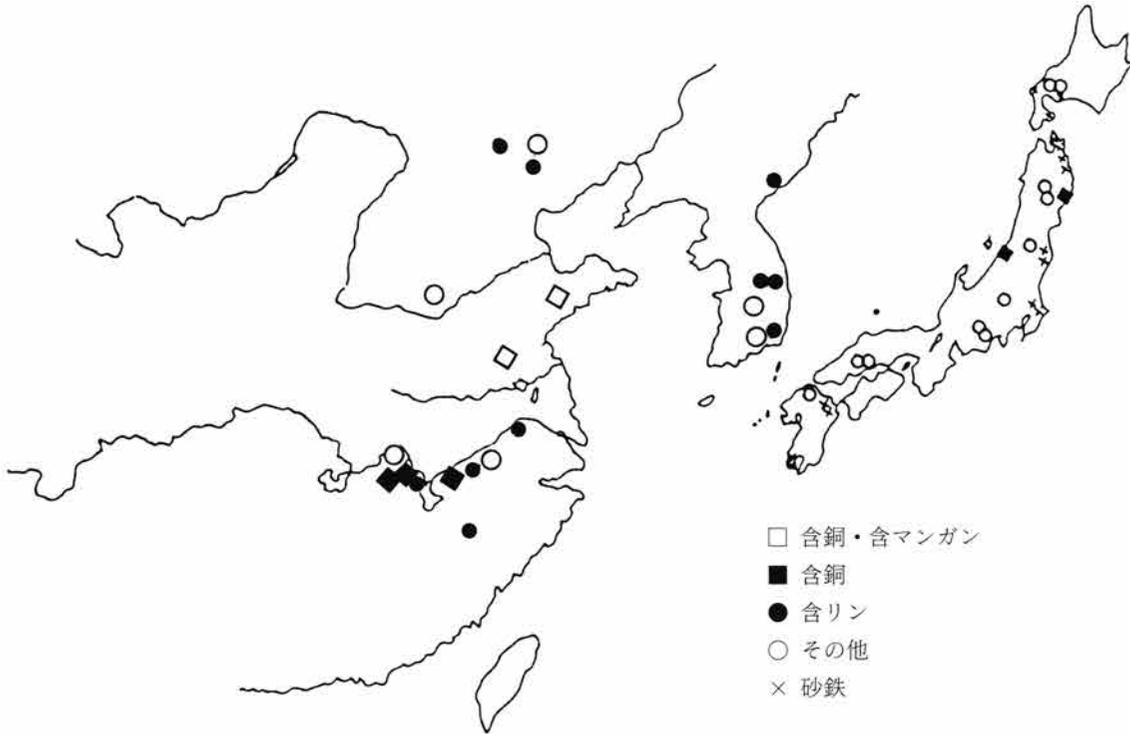


図11 日本列島・中国・朝鮮半島に分布する主な鉄鉱山

岩手県の釜石鉱山，新潟県の赤谷鉱山を挙げることができるが，それは大陸の山東半島から揚子江下流域にかけても分布する(図11)。既述のとおり奈良時代には静岡県浜松市の天王中野遺跡でも住居跡内の鉄生産関連遺構から0.082%ものCu分を含有する過共析鋼が鉄生産関連遺構に伴って検出されている¹¹⁾。従って，鋼と製品鉄器は列島内において製作された可能性が多分にある。しかし，鉄素材，とりわけ銑鉄に関しては大陸からの供給を無視することはできない。分析の結果は，国内はもとより大陸にまで視野を広げて流通問題に関する検討が不可欠であることを示している。

奈良時代から平安時代初頭における鋼の製造が，大陸からの銑鉄の供給に依拠していたと考えられることもでき，律令体制下における鋼の製造と鉄器の製作の見直しにつながる重要な結果が導き出されたといえよう。

9 ま と め

群馬県前橋市荒砥上ノ坊遺跡の8世紀後半に比定される住居跡からは，脈石中に銅鉱物を随伴する鉄鉱石を始発原料として生産された銑鉄を素材とし，脱炭材として砂鉄を使用する鋼精錬によって製造された鋼を用いて製作されたとみなすことのできる刀子が出土した。9世紀前半の住居跡からも含銅の鉄鉱石を始発原料とする刀子が見いだされ，8世紀後半の住居跡からは，鋼の製造に際し砂鉄の使用が認められない鑿と，砂鉄の使用によって製造された鋼を素材とする鉄鋸が検出された。

第4章 調査の成果

鉄鍬が出土した住居跡内では鉄生産関連遺構も確認され、供伴する鉄塊系遺物、鉄滓の組成から、ここでは鋼精錬がなされていた可能性の高いことが判明した。さらに、鉄塊系遺物の組成と対比することによって、鉄鍬が遺跡内で製造された鋼を用いて製作されたと解釈することができた。

8世紀から9世紀にかけて、この遺跡では製品鉄器に加え、銑鉄塊の供給を受け鋼の製造と鉄器の製作が営まれていた可能性の高いことが明らかになったわけである。そして、鋼製造の素材となった銑鉄の供給地としては、大陸をも視野に入れて検討する必要があることが指摘された。

註)

- 1) 佐々木稔「浜松市天王中野遺跡出土の鉄塊と奈良時代の鋼精錬法」『浜松市博物館館報一VII一』浜松市立博物館, p. 5~18, 1995年。
- 2) 青森県百石町に立地する根岸(2)遺跡では、奈良時代末から平安時代初頭に比定可能住居跡から火窟炉が検出された。共伴して出土した鉄塊を分析したところ、銑鉄と鉄滓の界面にTi(C,N)が一様に析出した組織が見いだされた。この組織の発見によって、砂鉄により銑鉄が脱炭される途上のものであることが明らかとなり、火窟炉においても鋼精錬が行われていた可能性の高いことが判明した³⁾。
- 3) 赤沼英男「根岸(2)遺跡出土小札および鉄滓の金属学的解析」『根岸(2)遺跡発掘調査報告書』青森県百石町教育委員会, 1995年, p.104-112。
- 4) 佐々木稔, 伊藤薫「川合遺跡出土の鉄斧・鉄鎌ならびに鋤先の金属学的調査」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』静岡県埋蔵文化財調査研究所, 1987年, p.63-80。
- 5) 佐々木稔, 村田朋美「古墳出土鉄器の材質と製法」『季刊考古学』1984年, p.27-33。
- 6) 大澤正巳「古墳供献鉄滓からみた製鉄の開始」『季刊考古学8』雄山閣出版, 1984年, p.36-46。
- 7) 少なくとも精錬鍛冶には脱炭, 滲炭, 鋳滓の絞り出しという工程が含まれていることが大澤正巳氏によって指摘されている。これら3つの操作を同時に行うことは困難であるから、精錬鍛冶には最低3つの操作が存在したことになる。当然、それぞれの操作に対応する3種類の鉄滓が排出されることになるが、その点に関する検討が不十分であることが佐々木稔氏によって指摘されている⁴⁾。
- 8) 佐々木稔「遺構をはなれて製錬滓と断定できるか—潤崎遺跡出土鉄滓の場合—」『たたら研究34号』たたら研究会, 1993年, p.43-52。
- 9) 赤沼英男「いわゆる半地下式堅型炉の性格の再検討—杣沢・北沢両遺跡遺物の金属学的解析結果から—」『たたら研究35号』たたら研究会, 1995年, p.11-28。
- 10) 3)に同じ。
- 11) 1)に同じ。

写 真 图 版



1. 1区1号住居全景 (西から)



2. 同 遺物出土状態 (S91・西から)



3. 同 遺物出土状態 (936・西から)



1区1住936



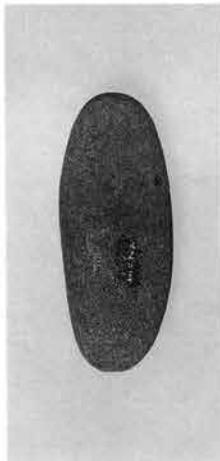
1区1住935



1区1住S94



1区1住S92



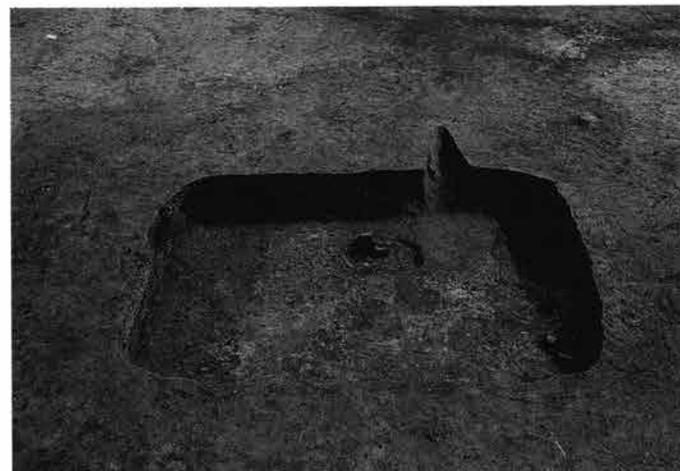
1区1住S93



1区1住S95



4. 同 出土遺物



5. 1区2号住居全景 (西から)



6. 同 竈全景 (西から)



1. 1区2号住居遺物出土状態 (1208)



1区2住1208



1区6住1216



2. 1区6号住居全景 (西から)



1区6住1214



1区6住1213

3. 1区2号・6号住居出土遺物



4. 1区6号住居竈全景 (西から)



5. 同 遺物出土状態



6. 1区7号住居全景 (北西から)



7. 同 竈全景 (西から)



1. 1区7号住居遺物出土状態 (S96)



1区7住939



1区7住940



1区7住S96



1区7住941

2. 同 出土遺物



3. 1区13号住居全景 (西から)



4. 同 竈・貯蔵穴全景 (西から)



5. 同 貯蔵穴土層断面 (西から)



6. 同 遺物出土状態 (左945・右944)



1区13住944



1区13住945



1区13住943



1区13住S98



1. 1区13号住居出土遺物



2. 1区20号住居全景 (西から)



3. 同 遺物出土状態 (1242・西から)



4. 同 遺物出土状態 (S124)



5. 同 遺物出土状態 (M7)



1区20住1244



1区20住1242



1区20住S124



1区20住M7



6. 同 出土遺物



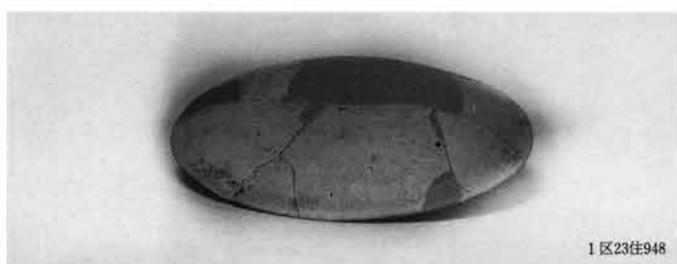
1. 1区23号住居全景（南西から）



2. 同 竈全景（南西から）

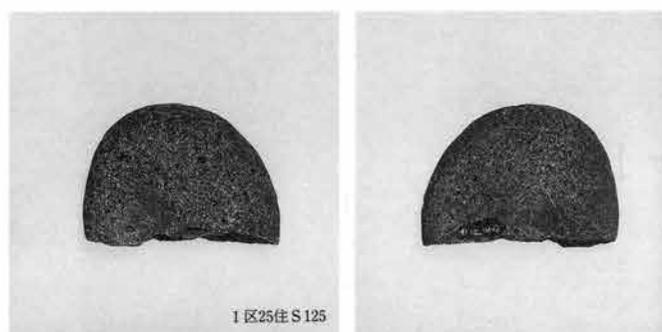


1区23住949



1区23住948

3. 同 出土遺物



1区25住S125

4. 1区25号住居出土遺物



5. 同 全景（西から）



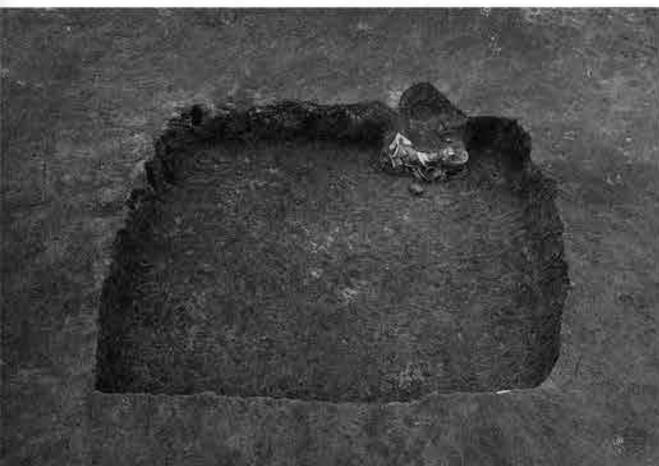
6. 同 土層断面A-A'（西から）



7. 1区27号住居全景（北西から）



8. 同 竈全景（北西から）



1. 1区29号住居全景（西から）



2. 同 竈全景（西から）



3. 同 竈遺物出土状態（463～467）



1区29住467



1区29住465



1区29住466



1区29住464



1区29住463

4. 同 出土遺物



5. 1区30号住居全景（西から）



6. 同 土層断面A-A'（南から）



1. 1区30号住居竈全景 (西から)



1区30住956



1区30住955



1区30住953



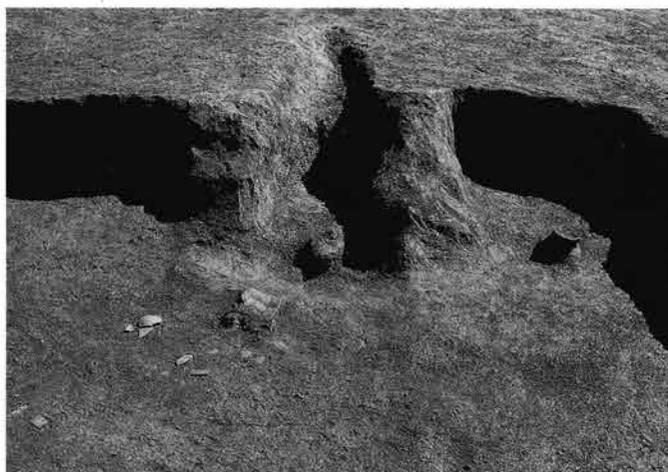
1区30住 S 100



2. 同 出土遺物



3. 1区34号住居全景 (西から)



4. 同 竈全景 (西から)



1区34住960



1区34住959



1区34住962



1区34住958



1区34住957



1区34住 S 102



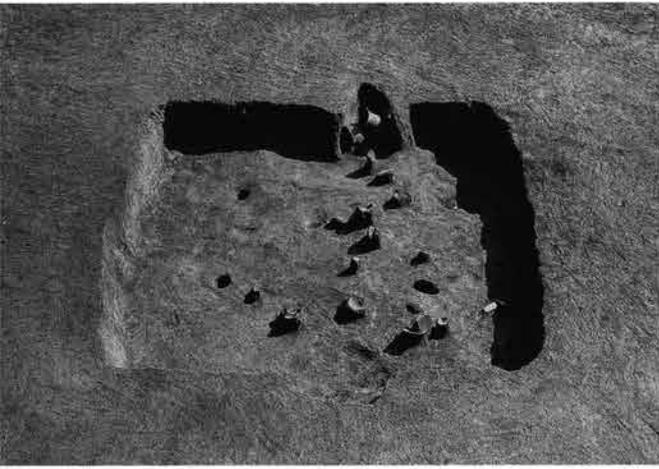
1区34住 S 103



1区34住 S 101



5. 同 出土遺物



1. 1区44号住居全景（西から）



2. 同 竈全景（西から）



3. 同 遺物出土状態（西から）



4. 同 竈遺物出土状態（762・763）



5. 同 遺物出土状態（765）



1区44住765



1区44住773



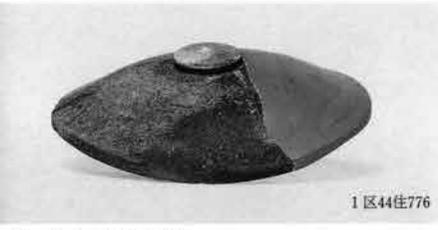
1区44住762



1区44住779



1区44住775



1区44住776



1区44住772



1区44住763

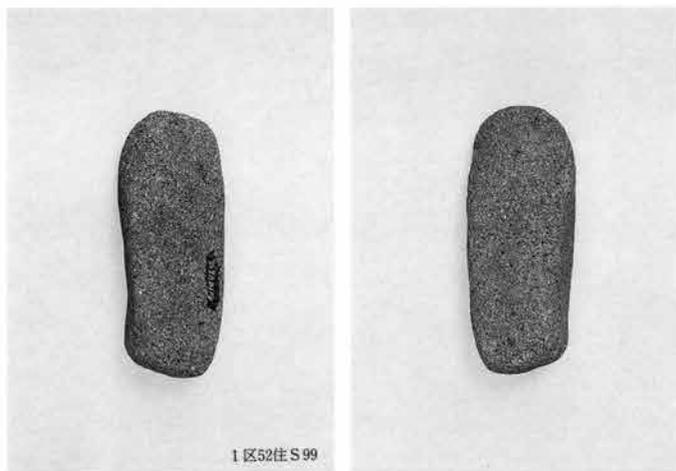
6. 同 出土遺物



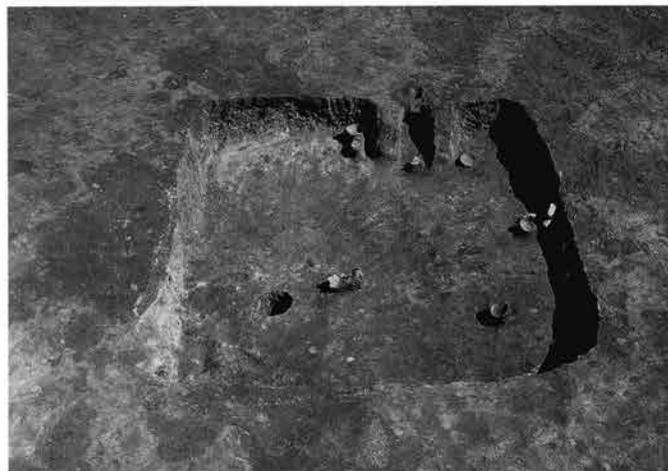
1. 1区全景 (東から)



2. 1区52号住居全景 (北西から)



3. 同 出土遺物



4. 1区47号住居全景 (南西から)



5. 同 竈全景 (南西から)



6. 同 遺物出土状態 (967・西から)



7. 同 遺物出土状態 (970)



8. 同 遺物出土状態 (968)



1区47住965



1区47住969



1区47住968



1区47住967



1区47住966



1区47住970



1区47住S104



2. 1区49号住居全景 (西から)



3. 1区55号住居全景 (西から)



4. 同 土層断面 (西から)



5. 同 竈全景 (西から)



6. 同 遺物出土状態 (1258・1261)



1区55住1261



1区55住1258



1区55住1259



1区55住S127

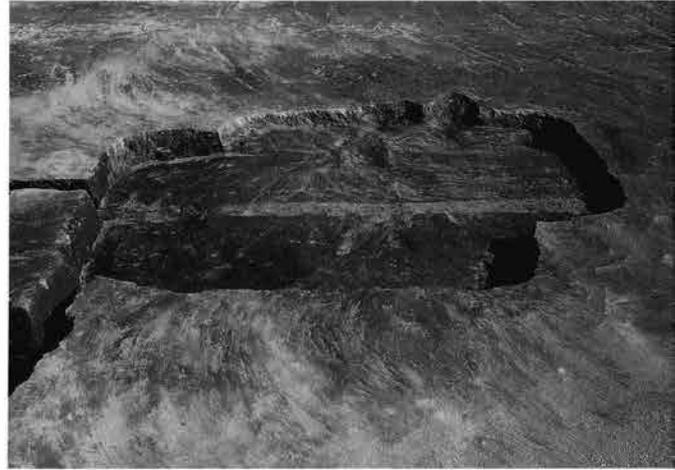


1区55住S126

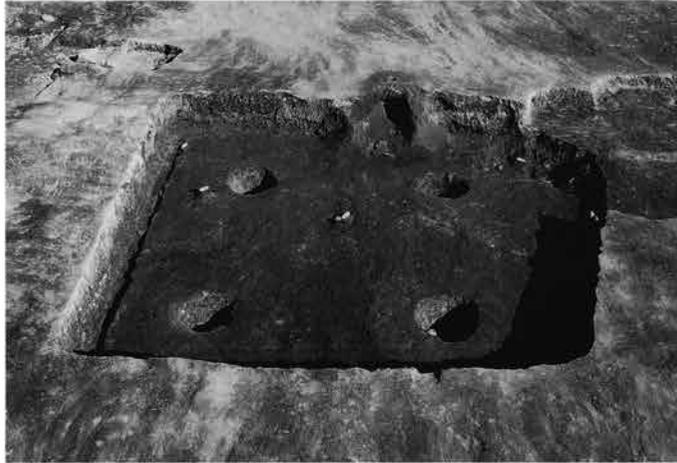


1区55住1257

1. 1区55号住居出土遺物



2. 1区57号住居全景 (西から)



3. 1区58号住居全景 (西から)



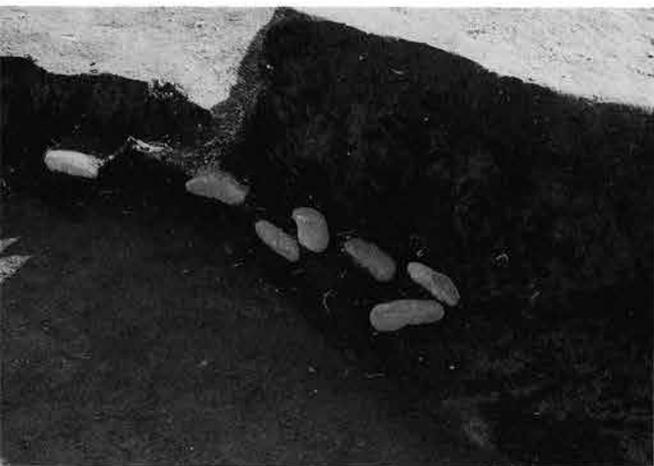
4. 同 土層断面A-A' (西から)



5. 同 竈全景 (西から)



6. 同 遺物出土状態 (807・825)



1. 1区58号住居遺物出土状態

2. 同 遺物出土状態 (806)



3. 同 出土遺物



1. 1区61号住居全景（西から）



2. 同 竈全景（西から）



3. 同 遺物出土状態（1272・1273）



4. 同 遺物出土状態（1274）



5. 同 遺物出土状態（1266）



1区61住1271



1区61住1274



1区61住1272



1区61住S128

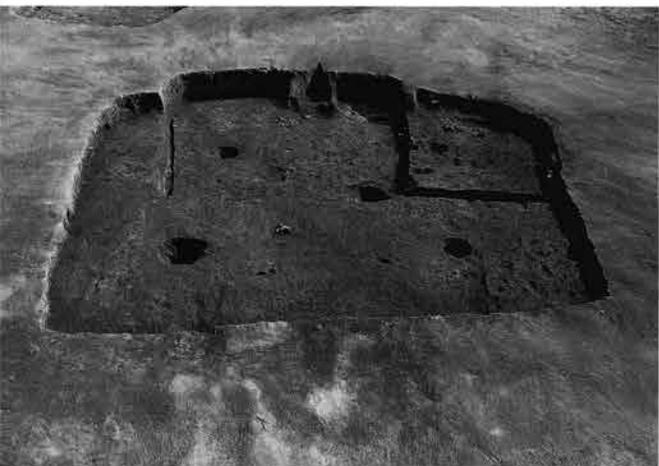


1区61住S129



1区61住1266

6. 同 出土遺物



1. 1区69号住居全景（西から）



2. 同 遺物出土状態（974・984）



3. 同 遺物出土状態（976・979・980）



4. 同 遺物出土状態（982）



1区69住1153



1区69住983



1区69住982



1区69住985



1区69住979



1区69住978



1区69住980



1区69住984



1区69住975



1区69住974



1区69住S106



5. 同 出土遺物



1. 1区63号住居全景（西から）



1区63住971



1区64住1281



1区63住972



1区64住1282

2. 1区63号・64号住居出土遺物



3. 1区64号住居全景（西から）



4. 1区60号土坑全景（西から）



1区60坑991



1区60坑993



1区60坑990



1区71住989

5. 同 出土遺物



6. 1区71号住居・60号土坑土層断面A-A'（南から）



7. 1区75号住居全景（西から）



1. 1区8号土坑全景（西から）



2. 同 土層断面A-A'（西から）



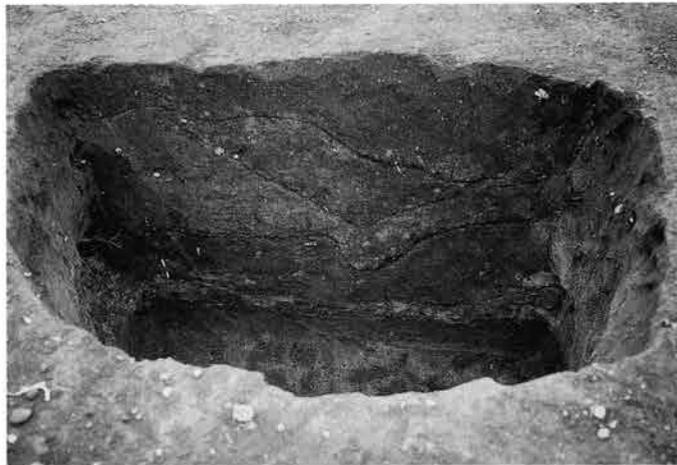
3. 1区9号土坑全景（南から）



4. 同 土層断面A-A'（南から）



5. 1区34号土坑全景（南から）



6. 同 土層断面A-A'（南から）



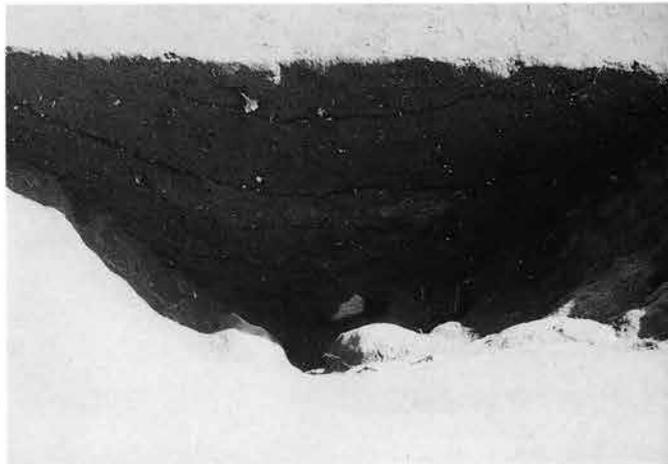
7. 1区35号土坑全景



8. 同 土層断面A-A'（西から）



1. 1区36号土坑 (東から)



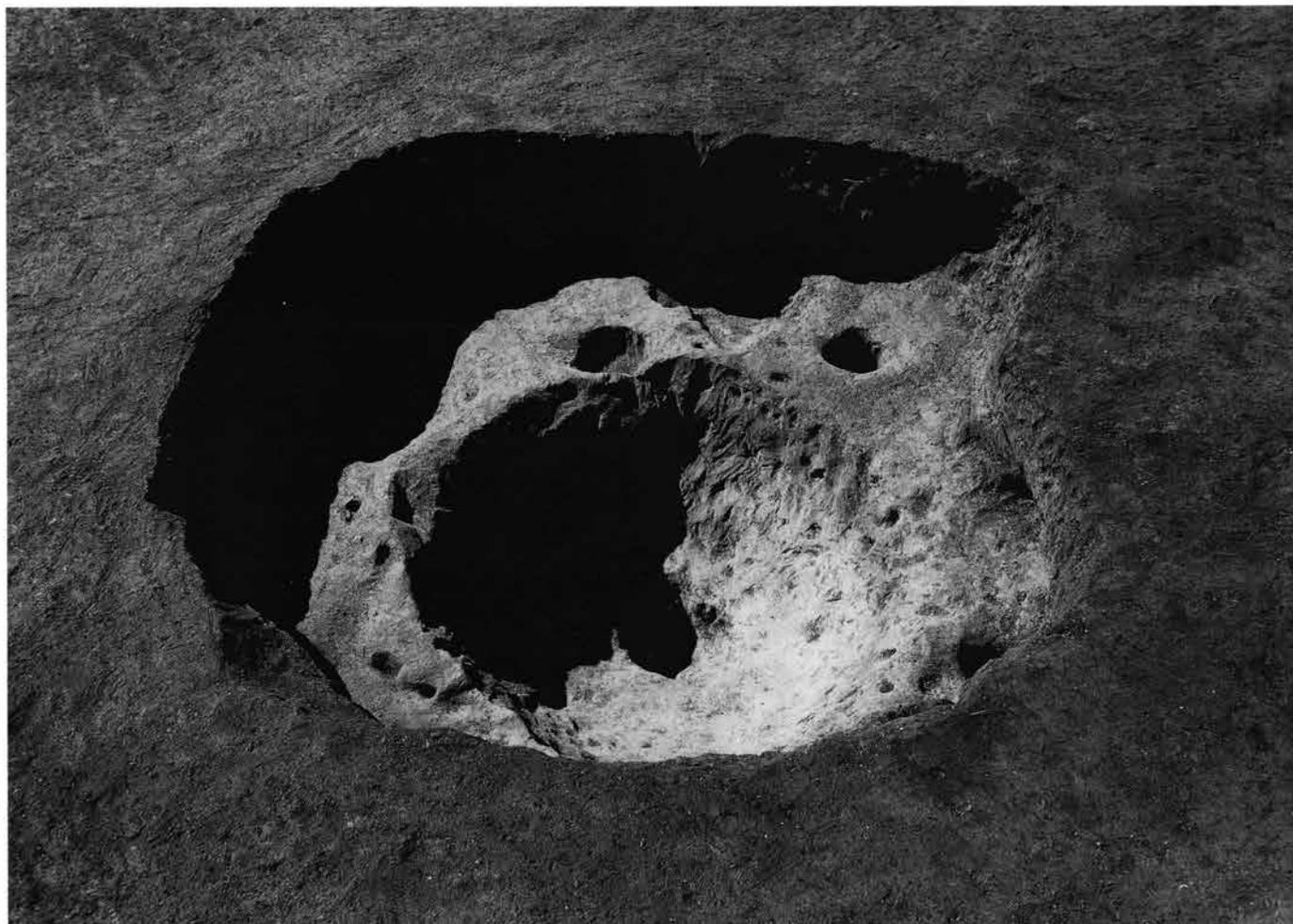
2. 同 土層断面A-A' (西から)



3. 1区37号土坑全景 (東から)



4. 1区38号土坑と50号住居 (西から)



5. 1区38号土坑全景 (北東から)



1. 1区35号·36号·45号土坑出土遺物



1. 1区45号土坑全景（南東から）



2. 同 土層断面A-A'（南東から）



3. 1区52号土坑全景（西から）



4. 同 土層断面A-A'（西から）



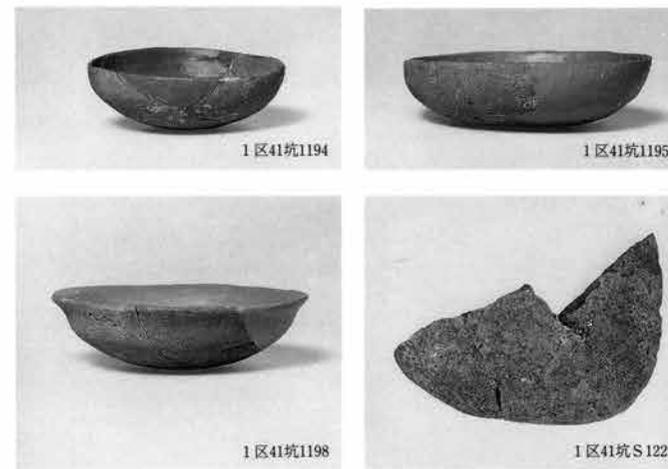
5. 1区17号・32号土坑全景（南から）



6. 1区41号土坑全景（西から）



7. 同 土層断面A-A'（南から）



8. 同 出土遺物



1. 1区44号土坑全景



2. 同 土層断面 (南から)



1区44坑609



1区52坑1431

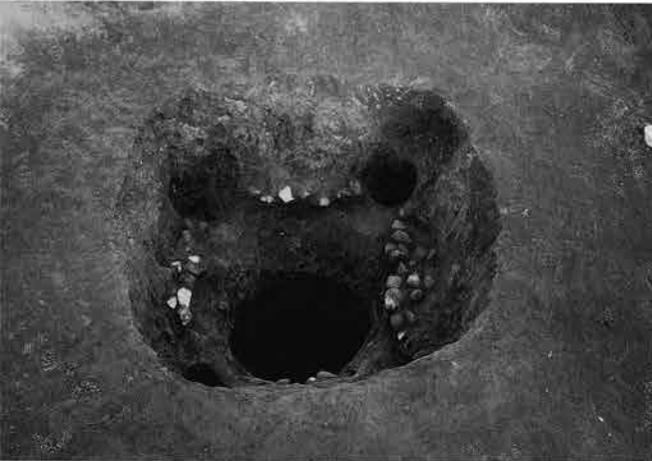


1区52坑1430

3. 1区44号・52号土坑出土遺物



4. 1区47号土坑 (井戸) 全景 (北から)



5. 1区48号土坑 (井戸) 全景 (南から)



6. 同 土層断面 A-A' (南から)



7. 同 石積みの状況 (西から)



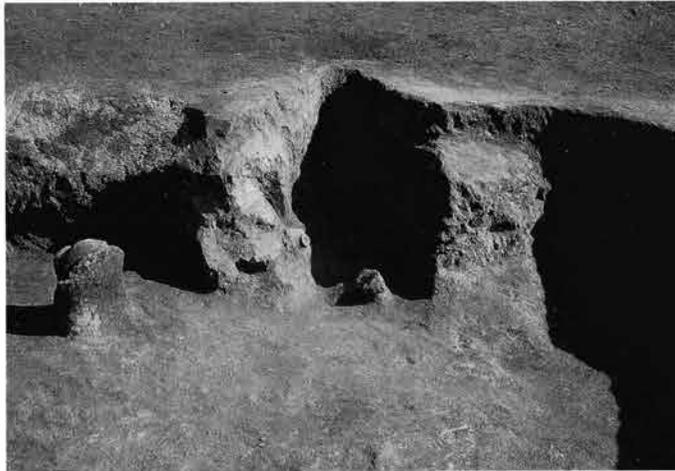
8. 1区調査風景 (北西から)



1. 2区6号住居全景（西から）



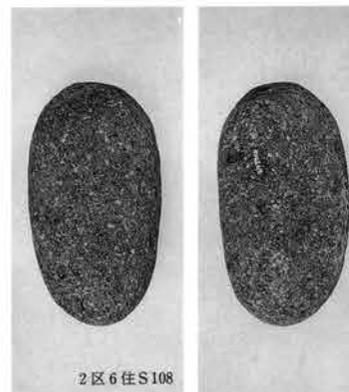
2. 同 土層断面A-A'（南から）



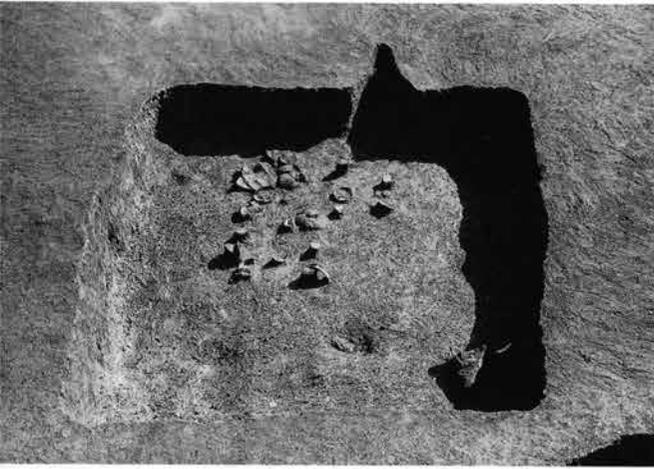
3. 同 竈全景（西から）



4. 同 遺物出土状態（998）



5. 同 出土遺物



1. 2区17号住居全景（西から）



2. 同 竈全景（西から）



3. 同 遺物出土状態



4. 同 遺物出土状態（左1010・右1000）



2区17住1004



2区17住1008



2区17住1009



2区17住1007



2区17住1006



2区17住1010



2区17住1000



2区17住1001



2区17住1005



2区17住1011



5. 同 出土遺物



2区17住1003



2区17住1002



1. 2区22号住居全景（西から）

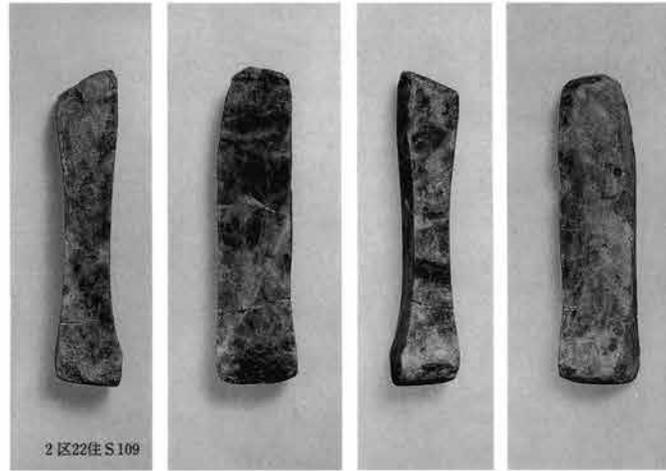


2. 同 遺物出土状態（1012）

2区22住1012



3. 同 遺物出土状態（S109・西から）



2区22住S109

4. 同 出土遺物



5. 2区24号住居全景（西から）



2区24住633



2区24住635

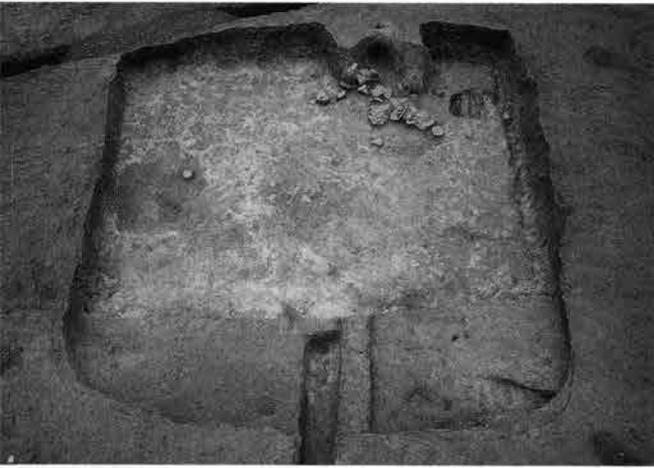
6. 同 出土遺物



7. 2区26号住居全景（西から）



8. 同 竈全景（西から）



1. 2区23号住居全景（西から）



2. 同 竈全景（西から）



3. 同 遺物出土状態（1020）



4. 同 竈遺物出土状態（南から）



5. 同 竈遺物出土状態（東から）



2区23住1022



2区23住1023



2区23住1020



2区23住1018



2区23住1017



2区23住1014



2区23住1015



2区23住1016

6. 同 出土遺物



1. 2区30号住居全景（西から）



2. 同 竈全景（西から）



3. 同 貯蔵穴全景（西から）



4. 同 遺物出土状態（1031）



2区30住1029



2区30住1030



2区30住1032



2区30住1031

5. 同 出土遺物



6. 2区31号住居全景（西から）



7. 同 竈全景（西から）



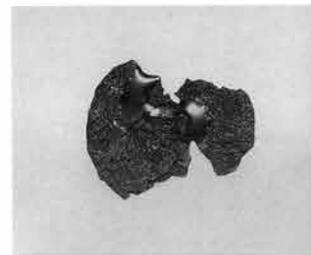
2区31住1036



2区31住1035



2区31住M14



8. 同 出土遺物



1. 2区34号住居全景 (南西から)



2. 同 竈全景 (南西から)



2区34住636

3. 同 出土遺物



4. 2区38号住居全景 (西から)



5. 同 竈全景 (西から)



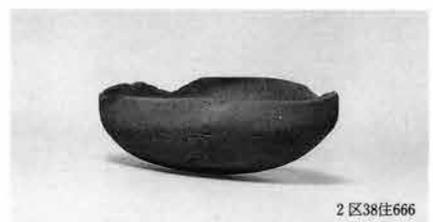
6. 同 竈遺物出土状態 (659~664・666)



2区38住665



2区38住671



2区38住666



2区38住664



2区38住672



2区38住673

7. 同 出土遺物 (1)



1. 2区38号住居出土遺物(2)



2. 2区39号住居全景(南西から)



3. 同 竈全景(南西から)

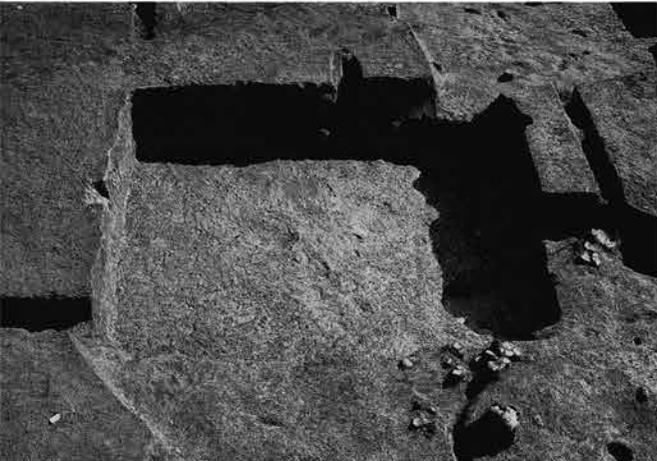


1. 2区39号住居出土遺物



2. 2区41号住居出土遺物

3. 同 遺物出土状態 (1290)



4. 同 全景 (北西から)



5. 同 土層断面A-A' (南東から)



6. 同 竈全景 (北西から)



7. 同 遺物出土状態 (1289)



1. 2区45号住居全景（南西から）



2. 同 竈全景（南西から）



2区45住S113



2区45住S111



2区45住S112



2区45住1039

3. 同 出土遺物



4. 2区53号住居全景（西から）



5. 同 竈全景（西から）

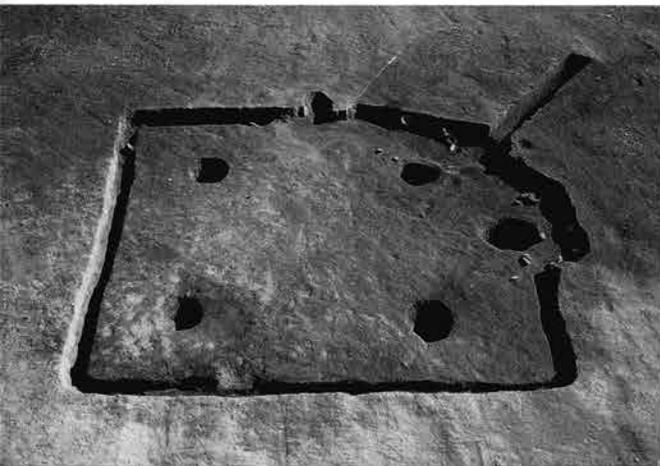


2区53住682



2区53住683

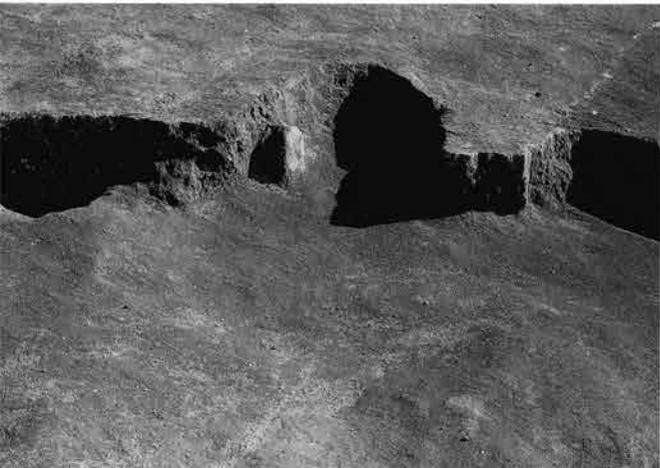
6. 同 出土遺物



1. 2区54号住居全景（西から）



2. 同 土層断面A-A'（南から）



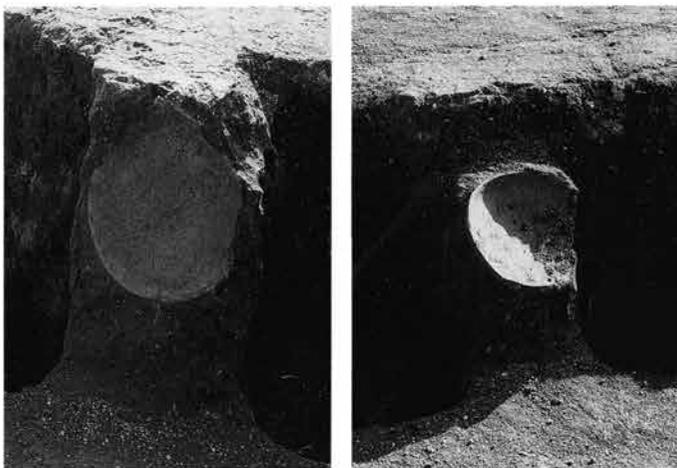
3. 同 竈全景（西から）



4. 同 遺物出土状態（北から）



5. 同 遺物出土状態（699）



6. 同 遺物出土状態（左700・右701）



2区54住701



2区54住700



2区54住699



2区54住702



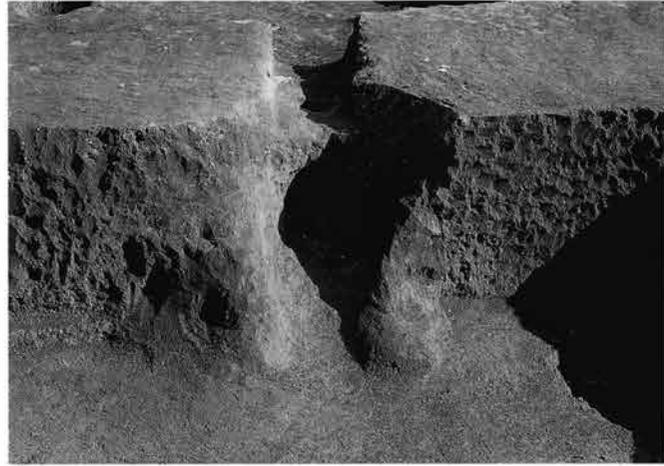
2区54住S69



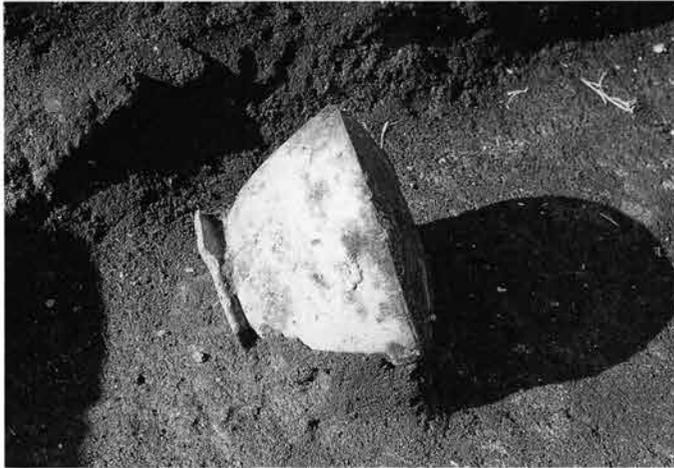
7. 同 出土遺物



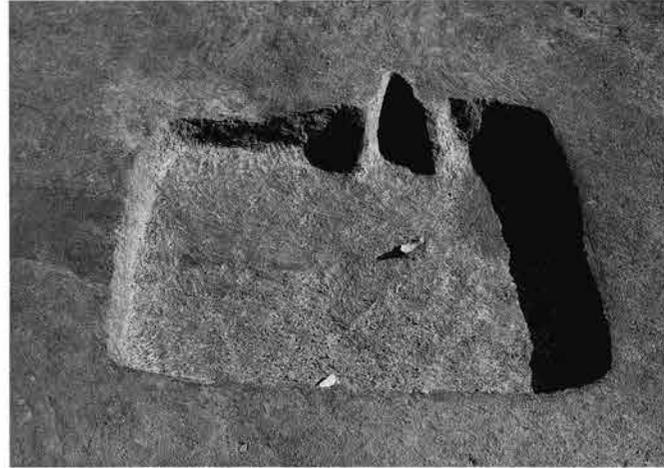
1. 2区56号住居全景（西から）



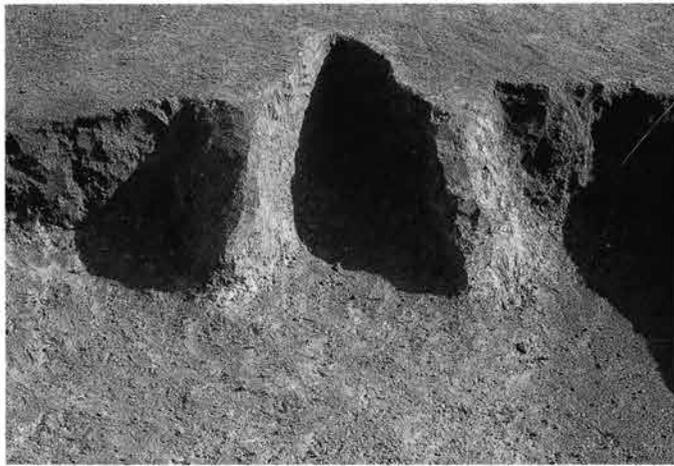
2. 同 竈全景（西から）



3. 同 遺物出土状態



4. 2区62号住居全景（西から）



5. 同 竈全景（西から）



6. 2区63号住居全景（南西から）



7. 同 竈全景（南西から）



2区63住704

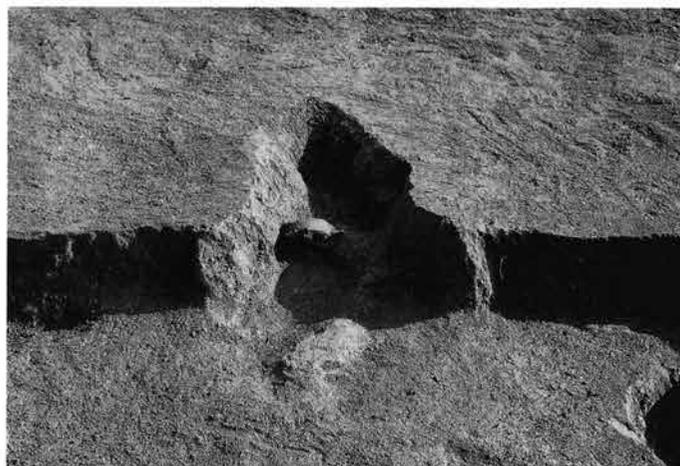


2区63住703

8. 同 出土遺物



1. 2区68号住居全景（南西から）



2. 同 竈全景（南西から）



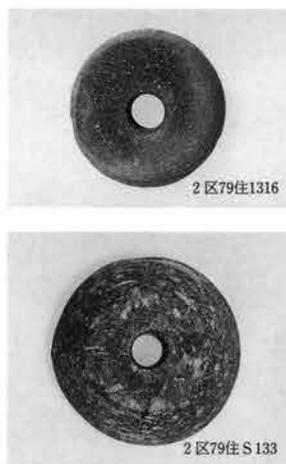
3. 2区69号住居全景（南西から）



4. 同 竈全景（南西から）



2区69住S115



2区79住1316

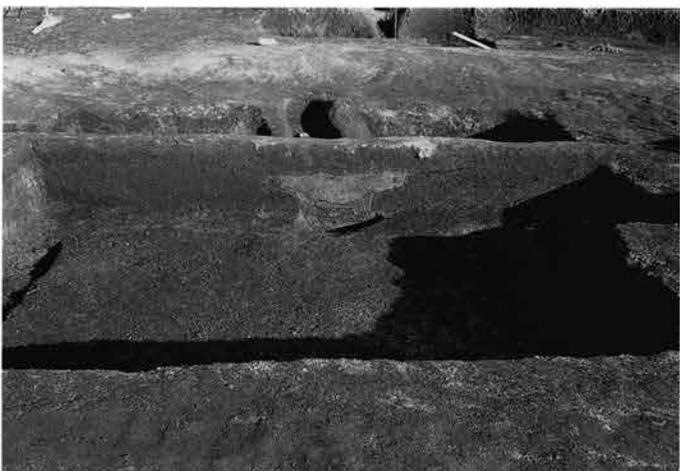


2区79住S133

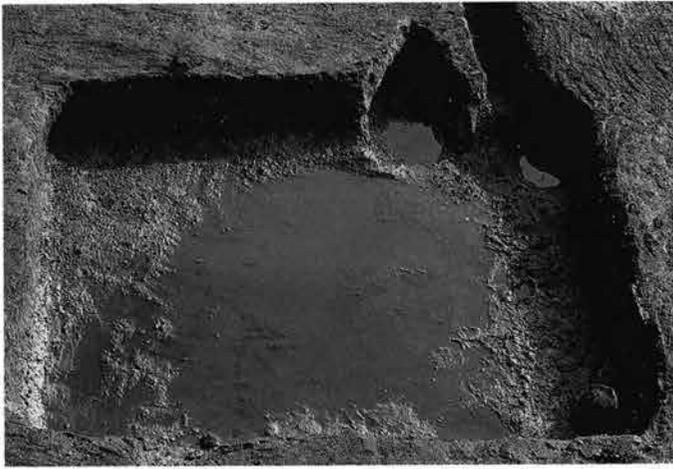
5. 2区69号・79号住居出土遺物



6. 2区79号住居全景（西から）



7. 同 土層断面A-A'（西から）



1. 2区82号住居全景（西から）



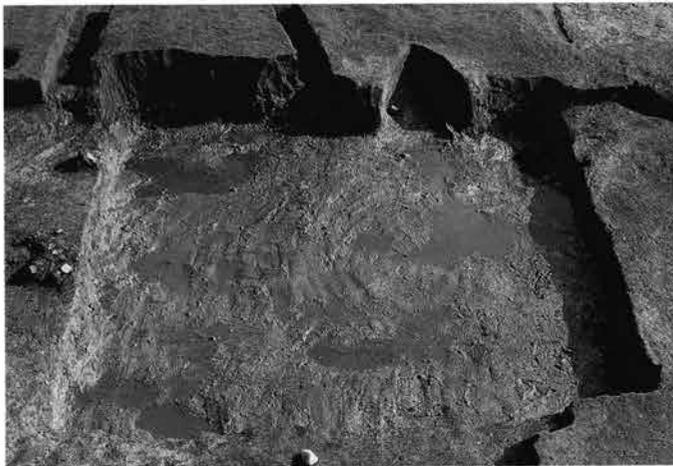
2. 同 土層断面B-B'（南東から）



3. 同 竈全景（西から）



4. 同 遺物出土状態（1054）



5. 2区88号住居全景（西から）



6. 同 竈全景（西から）



2区88住713



2区88住711



2区88住761



2区97住1058



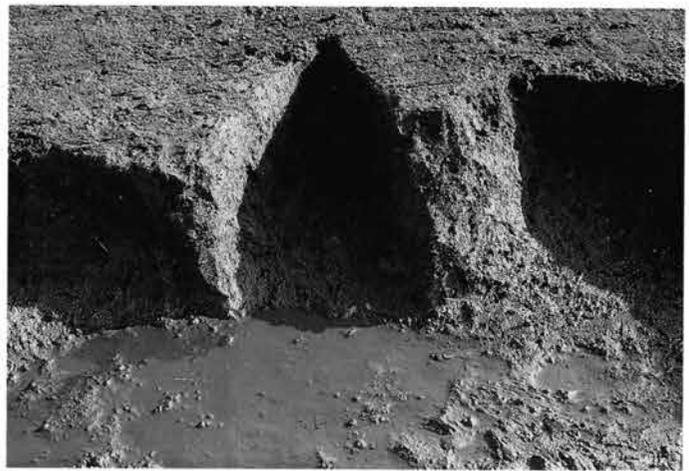
2区97住S117



7. 2区88号・97号住居出土遺物



1. 2区97号住居全景 (南西から)



2. 同 竈全景 (南西から)



3. 2区104号・105号住居全景 (南西から)



4. 2区104号住居竈全景 (南西から)



2区104住1068



2区104住1070



2区104住1075



2区104住1064



2区104住1063



2区104住1076



2区104住1077



2区104住1078

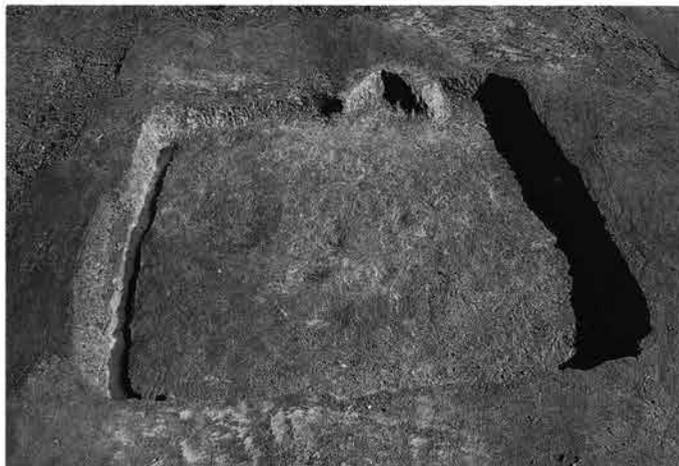


2区104住1080

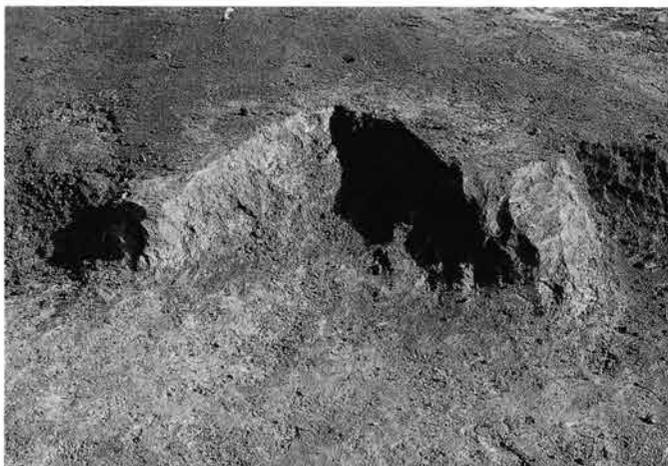
5. 同 出土遺物



6. 2区105号住居土層断面 A-A' (南から)



1. 2区106号住居全景（西から）



2. 同 竈全景（西から）



3. 2区107号住居全景（南西から）



4. 同 竈全景（南西から）



2区107住1322



2区107住1320



2区107住1323



2区107住1325



2区107住S134



5. 同 遺物出土状態（1320・1322）



7. 2区108号住居全景（南西から）

6. 同 出土遺物



1. 2区110号住居全景（西から）



2. 同 土層断面A-A'（南西から）



3. 同 周辺遺物出土状態（1328）



2区110住1328



2区8坑1437

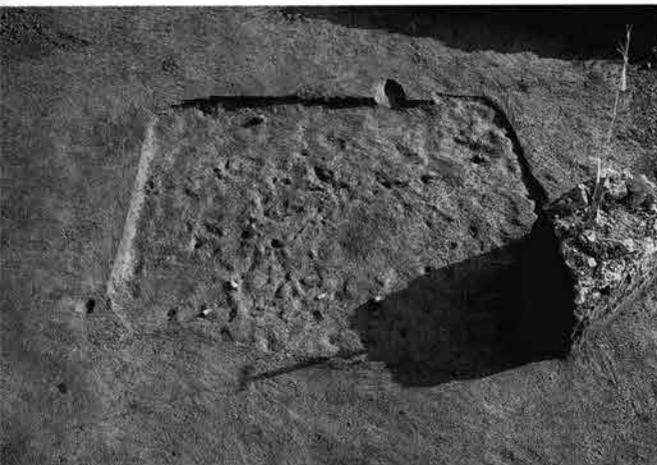


2区8坑1438

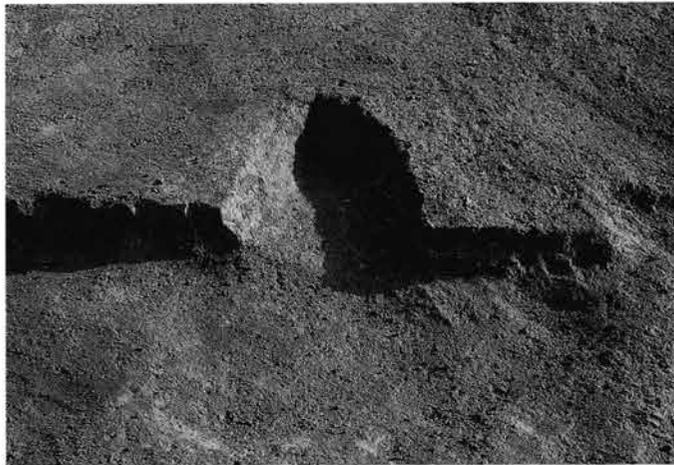


2区8坑1439

4. 2区110号住居周辺・2区8号土坑出土遺物



5. 2区111号住居全景（西から）



6. 同 竈全景（西から）



2区111住S135



2区111住S136



2区111住S137



2区111住S138



2区111住S137



2区111住S137

7. 同 出土遺物



1. 2区8号土坑全景



2. 同 土層断面A-A' (南東から)



3. 2区調査風景 (東から)



4. 2区調査前の状況



5. 2区北東部調査風景 (東から)



1. 3区1号住居全景（西から）



2. 同 土層断面A-A'（南東から）



3. 同 竈全景（西から）



4. 同 遺物出土状態 (1331)



3区1住1331



3区1住1332

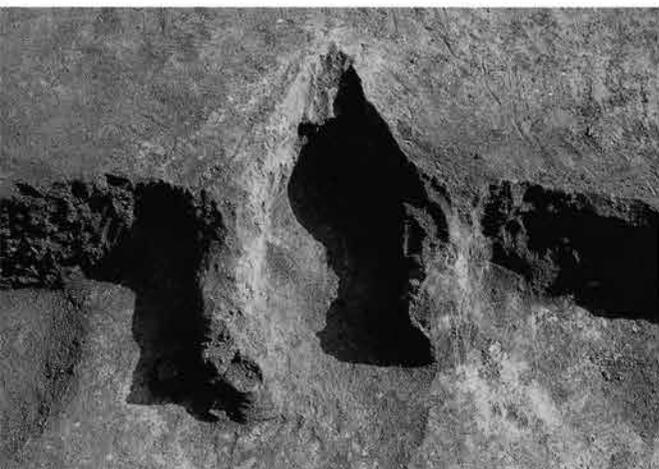
5. 同 出土遺物



6. 3区3号住居全景（西から）



7. 同 土層断面A-A'（東から）



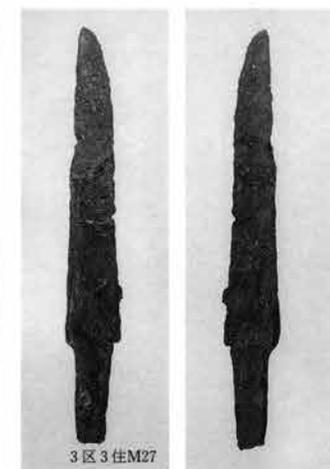
8. 同 竈全景（西から）



3区3住1089



3区3住1083



3区3住M27

9. 同 出土遺物



1. 3区5号住居全景（西から）



2. 同 竈全景（西から）



3. 同 北竈全景（西から）



4. 同 南竈全景（西から）



3区5住384



3区5住393



3区5住385



3区5住386



3区5住387



3区5住390



3区5住383

5. 同 出土遺物



6. 3区6号住居全景（西から）



7. 同 竈全景（西から）



1. 3区6号住居遺物出土状態 (1098・北から)



2. 同 遺物出土状態 (1093・北から)



3区6住1096



3区6住1090



3区6住1092



3区6住1095



3区6住1094



3区6住1427



3区6住M30



3区6住1098



3区6住M31



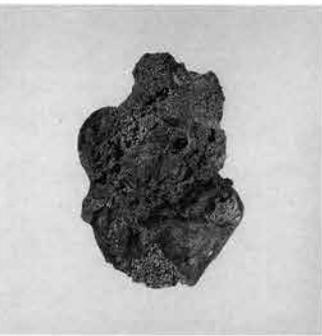
3区6住1428



3区6住1426



3区6住M33



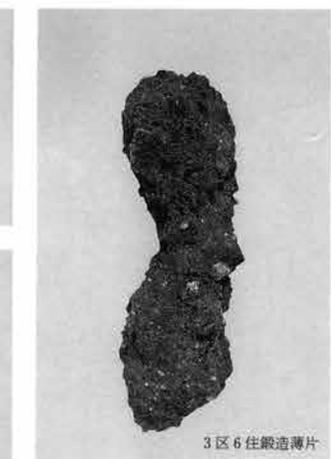
3区6住M34



3区6住M32



3区6住M35



3区6住鍛造薄片

3. 同 出土遺物



1. 3区7号住居全景（西から）



2. 同 土層断面A-A'（東から）



3. 同 竈全景（西から）



5. 3区8号住居全景（北から）



3区7住1104

4. 同 出土遺物



3区7住1103



3区7住1105



3区5溝1345

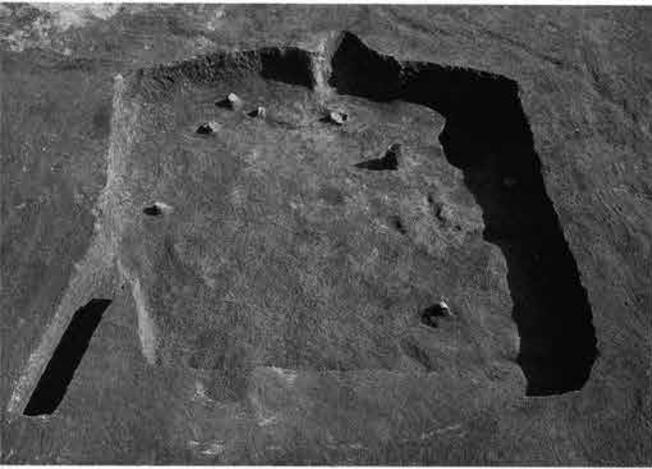
6. 3区5号溝出土遺物



7. 同 全景（北から）



8. 3区全景（南から）



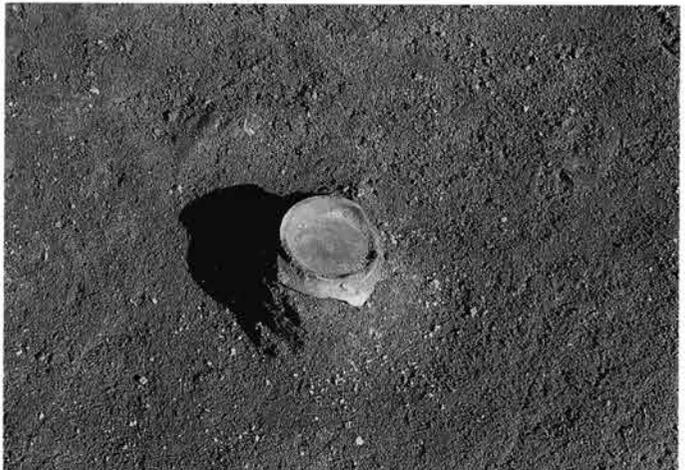
1. 5区2号住居全景（西から）



2. 同 土層断面（南から）



3. 同 竈全景（西から）



4. 同 遺物出土状態（1358）



5. 同 遺物出土状態（1357）



6. 5区4号住居全景（西から）



7. 5区2～4号住居全景（西から）



8. 5区3号住居全景（西から）



1. 5区3号住居土層断面A-A' (南西から)



2. 同 竈全景 (西から)



3. 5区5号住居全景 (西から)



4. 同 竈全景 (西から)



5. 5区8号住居全景 (南西から)



6. 同 竈全景 (南西から)



7. 同 遺物出土状態 (1423)



8. 遺物出土状態 (1420)



1. 5区8号住居遺物出土状態 (1422)



2. 同 遺物出土状態



5区8住1422



5区8住1423



5区8住1418



5区8住1419



5区8住1420

3. 同 出土遺物



4. 5区10号住居全景 (西から)



5. 5区全景 (南西から)



6. 5区調査風景



7. 5区から赤城山を望む



1. 6区1号住居全景（南から）



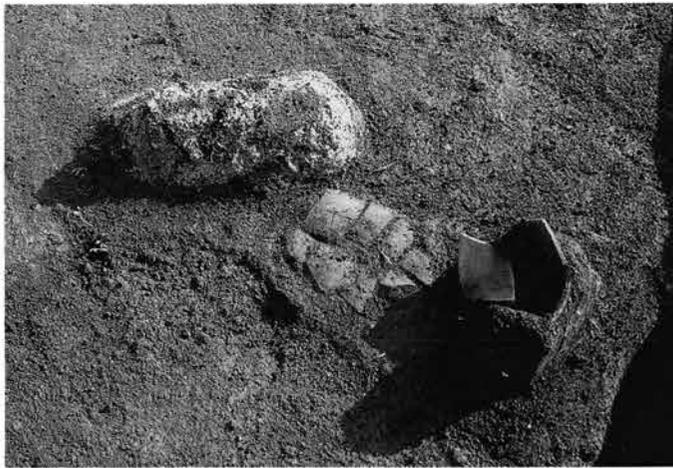
2. 同 竈全景（南から）



3. 6区4号住居全景（西から）



4. 同 竈全景（西から）



5. 同 遺物出土状態（1366）



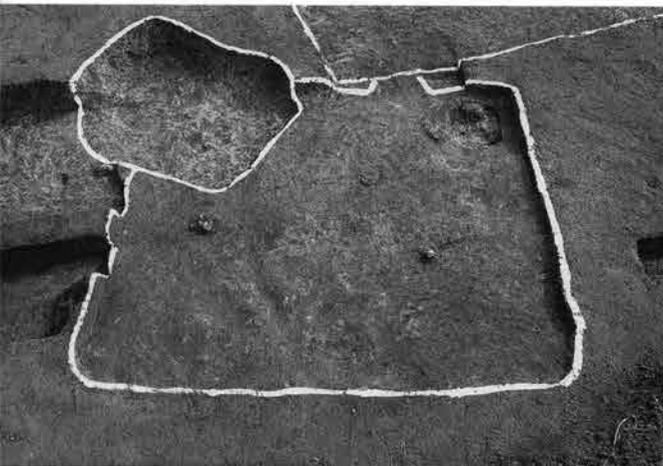
6. 同 遺物出土状態（1366・1367）



7. 同 遺物出土状態（1365）



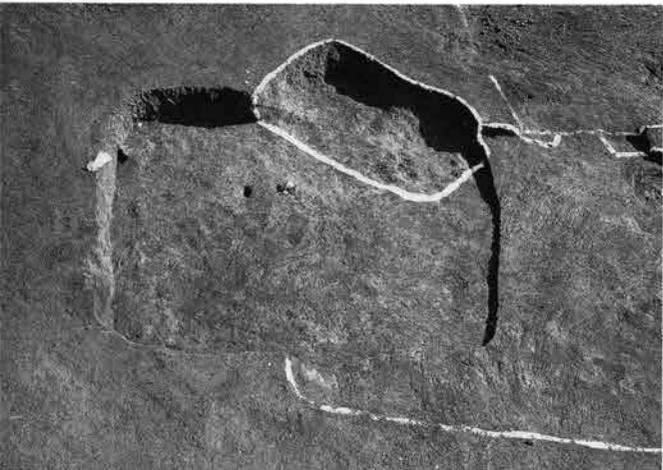
8. 同 出土遺物



1. 6区5号住居全景 (西から)



2. 同 竈全景 (西から)



3. 6区6号住居全景 (西から)



4. 6区5号・6号住居土層断面A-A' (西から)



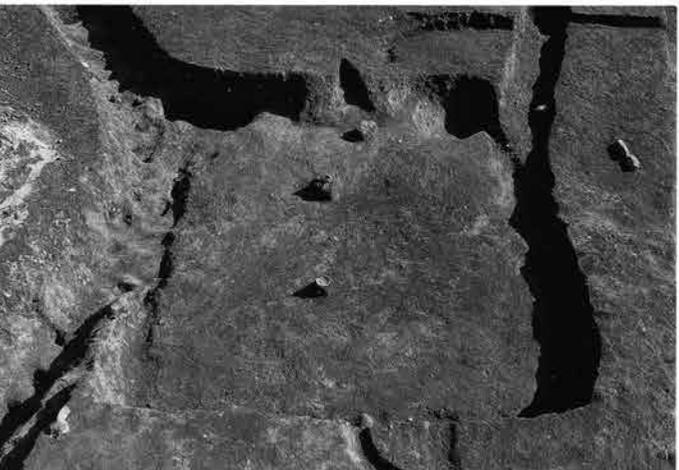
5. 6区7号住居全景 (西から)



6. 同 土層断面A-A' (東から)



7. 同 竈全景 (西から)



8. 6区11号住居全景 (西から)



1. 6区11号住居土層断面A-A' (南西から)



2. 同 竈全景 (西から)



6区11住1113



6区11住1111



6区13住1116



6区11住1114



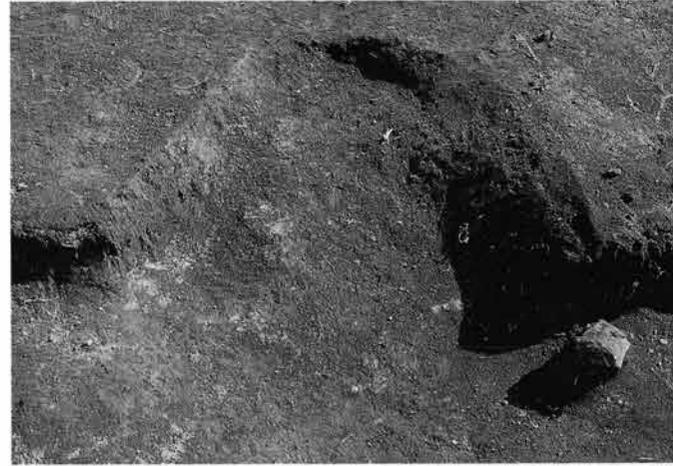
6区13住1115

3. 同 出土遺物

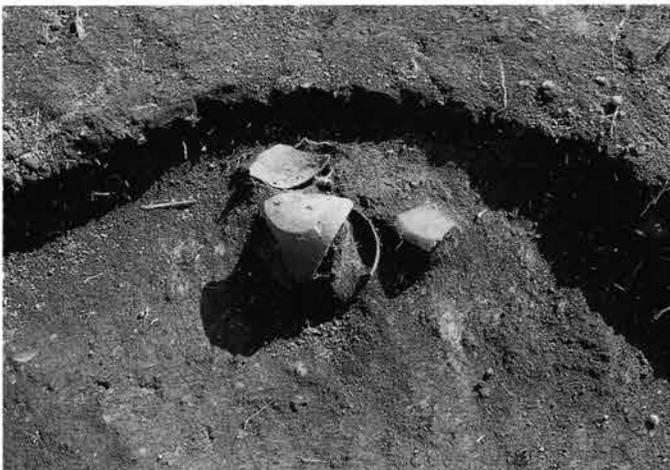
4. 6区13号住居出土遺物



5. 同 全景 (西から)



6. 同 竈全景 (西から)



7. 同 遺物出土状態 (1115・1116・北西から)



8. 6区調査風景



1. 7区(南半)全景



2. 7区3号住居全景(西から)



3. 7区4号住居全景(西から)



4. 7区6号住居全景(西から)



5. 同 土層断面A-A'・B-B'・C-C'(東から)



6. 同 遺物出土状態(1119・1122・西から)



7区6住1126



7区6住1125



7区6住1134



7区6住S119



7区6住1123



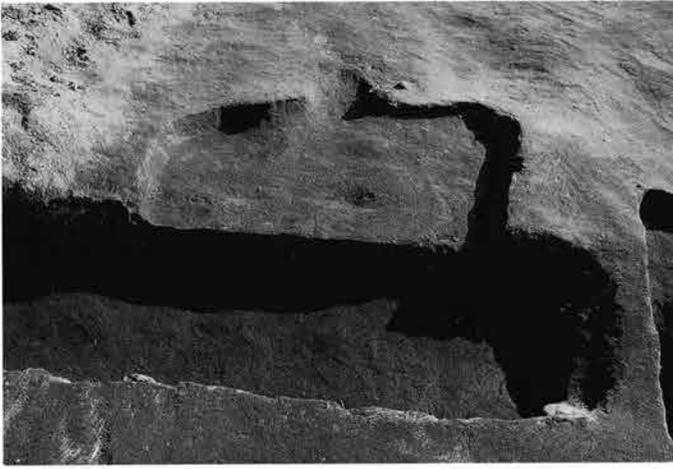
7区6住1119



7区6住1131



7. 同 出土遺物



1. 7区7号住居全景（西から）



7区7住1381



7区7住S140



2. 同 出土遺物



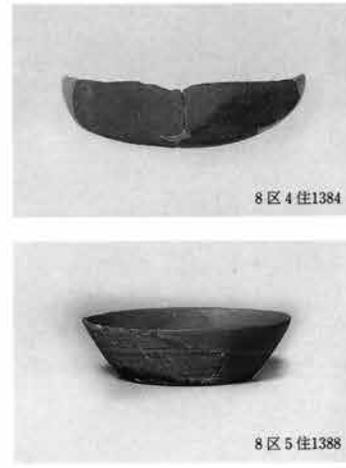
3. 7区8号住居全景（西から）



4. 8区4号住居全景（西から）



5. 同 竈全景（西から）



8区4住1384



8区5住1388



8区5住1386

6. 8区4号・5号住居出土遺物



7. 8区5号住居全景（西から）



8. 同 竈全景（西から）



1. 8区6号住居全景（西から）



2. 同 竈全景（西から）



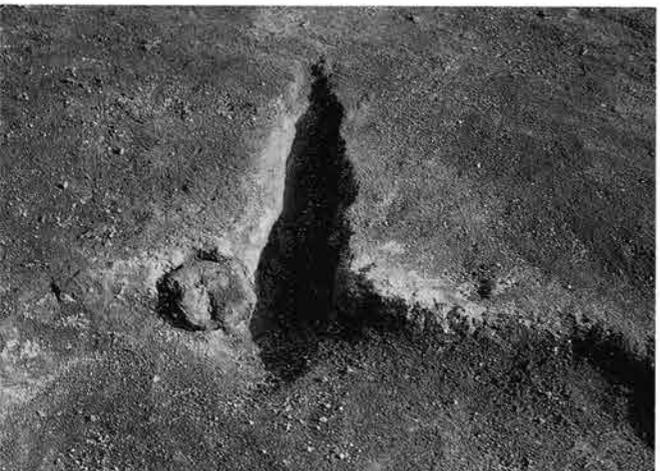
3. 同 竈・貯蔵穴全景（南西から）



4. 同 貯蔵穴全景（北から）



5. 8区13号住居全景（西から）



6. 同 竈全景（西から）



7. 8区を縦断する地割れ（北から）



1. 9区3号住居全景（西から）



2. 同 竈全景（西から）



9区3住1401



10区2住1144

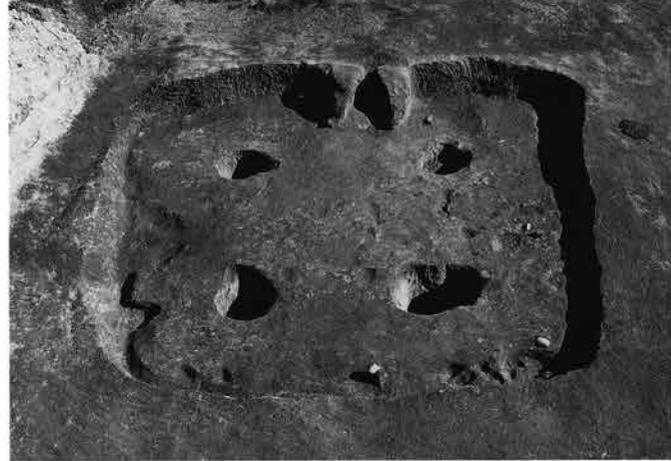
3. 9区3号・10区2号住居出土遺物



4. 9区全景（北から）



5. 10区調査風景



6. 10区2号住居全景（西から）



7. 同 竈全景（西から）



8. 同 遺物出土状態（1144）



1. 10区1号住居全景（西から）



2. 同 竈全景（西から）



3. 10区3号住居全景（西から）



4. 同 竈全景（西から）



5. 同 遺物出土状態（1148・1150）



6. 同 遺物出土状態（1150）



7. 同 遺物出土状態（1147）



10区3住1150



10区3住1147



10区3住1152

8. 同 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	あらとかみのぼういせきⅡ
書名	荒砥上ノ坊遺跡Ⅱ
副書名	歴史時代前半期の調査
巻次	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第203集
シリーズ名	県営ほ場整備事業荒砥北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	小島敦子 赤沼英男
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	377 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2 ☎0279-52-2511
発行年月日	1996年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡					
あらとかみのぼう 荒砥上ノ坊	ぐんまけんまえはしにの 群馬県前橋市二之 宮町・荒子町	102016	10005 -00061	36度 22分 10秒	139度 10分 20秒	19820701～ 19830125	42000	県営ほ場整備事業荒砥北部地区にともなう事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
荒砥上ノ坊遺跡	集落遺跡	奈良時代 平安時代	竪穴住居 86軒 土坑 14基 井戸 2基 溝 1条	土師器・須恵器 棒状礫・敲石 鉄塊・鉄製品	赤城山南麓地域の農耕集落遺跡。弥生時代末から集落が定着し、開析谷の水田耕作が始まった。以降、歴史時代にも継続して集落が営まれた。8世紀後半と考えられる住居からは鉄塊・鉄滓・鍛造薄片とともに鉄鏃が出土した。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第203集

荒砥上ノ坊遺跡Ⅱ
歴史時代前半期の調査
《本文・図版編》

昭和57年度県営圃場整備事業荒砥北部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

平成8年3月20日 印刷
平成8年3月25日 発行

編集・発行／群馬県教育委員会
〒371 前橋市大手町1丁目1番1号
電話 (0272) 23-1111(代表)

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

© 1996